

# 多摩川流域の段丘形成と 考古学的遺跡の立地環境

2000年

代表研究者  
比田井民子

東京都埋蔵文化財センター主任調査研究員

## 例 言

1. 本書は、財団法人とうきゅう環境財団の研究助成「多摩川流域の段丘形成と考古学的遺跡の立地環境」の報告書である。
2. 本報告には松田隆夫、羽鳥謙三、伊藤 健が執筆に加わった。
3. 本研究の実施にあたり、地形・地質学では多摩川本流の調査について向山崇久氏、黒目川流域の調査について加藤定男氏の協力を得、玉稿を賜った。また、考古学では武蔵野台地北西部の遺跡の調査について西井幸雄氏、武蔵野台地北東部の遺跡の調査について国武貞克氏の協力を得、これらについても玉稿を賜った。
4. 「第Ⅱ章第1節多摩川の変遷と地形発達」については、羽鳥が総括し、向山、加藤の原稿をまとめた。
5. 各遺跡に関わる調査報告書等の文献は、一部を除き省略した。
6. 本研究を実施するにあたり、下記の方々（敬称略）にご指導、ご助言を賜った。記して謝したい。

青木秀雄、磯野治司、小野 昭、金子直行、亀田直美、久保純子、小林 裕、坂上寛一、佐藤 攻、佐藤宏之、鈴木忠司、立石 健、田代 治、富樫 均、中山真治、沼田智哉、村田香澄、吉田 格、吉田 望、渡辺清志、石器文化研究会、東京都埋蔵文化財センター、府中市遺跡調査会。

# 目 次

## 例 言

### 第 I 章 多摩川流域と武蔵野台地の遺跡とその基礎資料

#### 第 1 節 景観復元から遺跡の形成を考える

意義について ..... 比田井民子 ..... 1

第 2 節 遺跡資料の集計 ..... 伊藤 健・西井幸雄・国武貞克 ..... 5

### 第 II 章 多摩川流域と武蔵野台地の地形

第 1 節 多摩川の変遷と武蔵野の地形発達 ..... 羽鳥謙三・加藤定男・向山崇久 ..... 25

#### 第 2 節 多摩川左岸における立川段丘の凹地地形

～武蔵野台地南西部を中心として～ ..... 松田隆夫 ..... 72

### 第 III 章 多摩川流域と武蔵野台地の遺跡立地と地形環境

#### 第 1 節 武蔵野台地南西部

～野川を中心とする多摩川水系の遺跡～ ..... 比田井民子 ..... 107

第 2 節 武蔵野台地南東部 ..... 伊藤 健 ..... 123

#### 第 3 節 武蔵野台地北東部

～遺跡と古地形・水環境～ ..... 国武貞克 ..... 140

第 4 節 武蔵野台地北西部 ..... 西井幸雄 ..... 152

第 5 節 まとめ ..... 比田井民子 ..... 164

執筆者紹介（五十音順）

伊藤 健	東京都埋蔵文化財センター
加藤 定男	日本第四紀学会会員
国武 貞克	東京大学大学院
西井 幸雄	(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
羽鳥 謙三	前橋工科大学
比田井民子	東京都埋蔵文化財センター
松田 隆夫	府中市教育委員会
向山 崇久	東京都立狛江高等学校



# 第I章 多摩川流域と武蔵野台地の遺跡とその基礎資料

## 第1節 景観復元から遺跡の形成を考える意義について

比田井 民子

### 1. 歴史学における景観

近年、景観のなかにこそそれを作りあげた人々の歴史が残されているものであり、景観から歴史を読み取ることに歴史学研究の意義があることが近年の日本歴史学において強調されるようになっていく。その方法は中世史の分野を中心として斬新な議論を展開し多くの興味深い成果を残している。遺跡立地から景観復元を趣旨とする本研究の目的とするところとも重なり、学ぶべき点も多々あるため、それら代表する歴史学者の方法と視点を紹介していくなかで、本研究の意義を明確にしていきたい。

木村礎氏は村落景観の研究の原点とその意義についてつぎのように述べている（木村1978）。

従来、村落景観の観察と復元は地理学の分野で行われてきており、歴史地理学として位置づけられていたものであるという。村落史研究において景観を重んずる意義とは長期にわたり、人間労働の所産として残された、耕地、集落、水路、林野など村を構成する諸要素を対象として、その時代時代の村が作り上げた歴史であり、農民の生活の場がそのものとして残されたものであると位置づけている。また、村落景観は長期にわたり、営まれ、引き継がれてきたものであり、農耕社会の成立から現代に至るまでのものであるとし、集落や、住居跡を取り扱う考古学者がこうした研究に分野をこえて、関心を払う必要があると指摘している。

石井進氏も同じような立場からの歴史学による景観研究の実践を提唱するがその対象は木村氏と異なり、村落のみではなく、鎌倉を中心とする中世都市の形成など広く多様な領域を対象とする（石井2000a,b）。日本列島に生きた人々の様々な生活をあきらかにしようとするとき主に景観を手がかりとし、景観とは人間の歴史の舞台であったため人の手の加わった、自然景観から変化した文化景観であると位置づける。また現在から最も遠い時代の景観については、その変化が大きいことから場所や土地に応じた精密な研究法を必要とすることも述べている。石井氏による「日本列島に生きた人たち10景観」（石井2000a）のなかで、こうした方向性に基づいた実践的研究の一部が日下雅義氏により、古代をテーマとして論述されている（日下2000）。

日下氏の研究はおもに関西地方を対象とし、古代と現代での汀線の変化や、河川蛇行の変化などを現在の地形図、地質資料で調査し、古文書、古地図と照合しながら古代の景観の復元を試みるものであるが、本研究がやはり、地形学、地質学による調査をおこないながら、考古学的情報と照合していく点でその方法はよく共通している。

歴史学における景観復元の研究のあり方をほんの垣間見たに過ぎないのではあるが、景観復元自体が意識されることの少ない考古学の分野にあるものとしては、啓発されることの多い研究であるとい

える。特に景観を復元し、より生き生きとしたそこに暮らした人々の歴史を明らかにすることを目指す点では本研究の意図するところと一致する。特に旧石器時代の研究においては過去と現代の景観の差が大きく、現代の遺跡景観の姿をみても何故、そこに遺跡が残され、どのような景観のなかで人々が生活を送っていったかという問題には簡単に迫ることはできないはずである。しかし、現在、考古学の分野で行われている集落や集団の移動をテーマとする研究の殆どが現在の景観にある遺跡以上のものを意識してはいない。歴史学者もすべてにこの研究には歴史学、地理学を主軸とする複数の分野からの視点を必要とする。それぞれの分野に対する高度な理解も必要とされる難しさもある。この研究はそのため初めての試みということもあり、精密な地形、地質学的検討を要するという点で、研究の対象地域は武蔵野台地に絞っている。本研究が対象とする旧石器時代のような時代においては、文化的景観が殆ど望めず、現代と過去の自然景観の差のなかに人々の暮らした歴史を読み取っていかねばならないという制約はあるが歴史学の舞台上で活躍する古文献を遺跡、遺物に置き換え、地形、地質学的検討を加えたならば、一体どの位、当時の人々が生活を営んでいた原風景に迫ることができるのか、この研究の課題である。

## 2. 考古学的遺跡における景観

近年になり決して多くはないが景観を意識した研究の試みが考古学のなかでも散見されるようになってきている。それらのいくつかをここでとりあげ、考古学的遺跡における景観に関わる方向性についてまとめてみたい。

日本村落史講座の景観（木村1990）では考古学による景観に関する論考のいくつかがまとめられており、いずれも正統な考古学的手法をふまえて景観を論じようとしてはいるが、多くの論考が地形環境のなかで、何故そこに集落が営まれるようになったのかというような歴史的経過やその遺跡が置かれていた当時の景観を読み取り、その集落の歴史を考えていくということを行わずに、検出された遺構、出土している遺物に基づき、集落形態を論じている。遺跡があるという事実関係から出発し、そこから出土した遺構、遺物の歴史を語ることの多い考古学において、遺跡が成立した歴史を明らかにすることが疎かになりがちである。これらの考古学の景観にかかわる遺跡論がもつ問題点については、細石刃文化の地理的背景を論じた鈴木忠司氏も現在の集落論が本来、同格にあるべき遺物群の解釈の延長である傾向にあると指摘している（鈴木1983）。景観を論じるには個々の遺物出土の記載や住居跡の新旧関係の記載に焦点を置くのではなく、景観のなかに読み取られる遺跡の成立の過程が重要である。

貝塚爽平氏による武蔵野台地周辺の地形景観の変遷模式図（貝塚1992）によると、十数万年前の模式図に現在の荒川、多摩川に挟まれた地域に台地らしきものは全く見当たらない。認められる台地状のものは、現在の三浦半島から多摩丘陵、秩父山地にあたるものであろう。現在の武蔵野台地のあたるものは殆どない。2万年前の図になると荒川は閉塞した谷になっており、東京湾もその谷の延長に

なって陸化し、武蔵野台地はすでに形成されている。縄文時代の6000年前の図になると荒川へ深く海が入り込む。縄文海進の影響により、現在の大宮台地周辺までが奥東京湾と呼ばれる海が広がっていたことが解っている。

このように武蔵野台地を中心とする南関東地方では繰り返される氷期による海水面の変化や地形の隆起などを経て地形景観は大きな変遷を遂げてきた。地形景観の大きな変化は当然その時代ごとの生活空間と行動領域に制限を与え、そこに住む人々の社会構造にも大きな影響を与えることになる。こうした地形景観の変遷によってその時代ごとの特色づけられた生活様式が展開されてきたものと思われる。

近年の仮説においては旧石器時代、縄文時代にあつてはその生活形態が狩猟採集によるといわれ、必要に応じた移動生活を送っていたものとして理解されている。これが古代以降の時代になっていくと灌漑、開墾、沖積地の利用、低地の埋め立てなど自然を克服し生活を安定させていく開発方法の確立により、まさに歴史学者の言う文化景観が展開する。ここで取り上げていく旧石器時代はそうした文化景観の薄い時代ではあるが自然環境の影響とそれに伴った自然の地形景観に制約された人々の生活史があったものと思われる。

旧石器時代における景観についてはあまり取り上げられることが少なかったが鈴木忠司氏は旧石器時代終末期の細石器遺跡の立地を現在の標高のなかで地形的にどのような位置に属するかを明らかにし、細石器遺跡の立地環境について場所としての必然性を明らかにしようとした(鈴木1983)。敢えて、自然科学的手法を採らず、考古学的観点のみを駆使したその独創性は近年の論考では見ることの無い優れたものであり、こうした立体的に立地景観を把握していこうとする方法をとる論考は少ない。いずれの景観に係わる論考は考古学としての正統な手法をとり現状で得られる遺跡、遺物から得られる情報に基づいて、可能な限りの景観を読み取ろうとしているのだが、地形、地質学的には当時の景観そのものが現在とはあまりにも懸け離れている。当時の景観に適応した生活の場面を正確に復元するには考古学に加えた自然科学的観点が重要な役割を担うことになる。また、そこに遺跡が残された背景にまで踏み込んで歴史的説明するまでになかなか至らない。こうした流れのなかで、当時の地形景観を勘案したうえで、遺跡の立地を捉える研究も少しずつみられるようになってきている。既成の地形、地質学的成果を援用することで当時の景観から社会構造を読み取ろうとする論考の例についても少々紹介をしておきたい。高倉純氏は旧海岸線の位置を明らかにしていくなかで、石刃鏃石器群の立地の問題を論じている(高倉1998a,b)。高倉氏は旧海岸線の位置により「遺跡の分布や立地に関する解釈に大きな異なりが生じてしまうおそれがある」とし、従来の遺跡立地論の問題点を鋭くついている。正統な考古学的手法を踏まえたとしても一面的に景観の問題を議論しては本来の景観により近い風景の復元をおこなうことは難しい。景観という観点で遺跡を考えていくためには当時の立地の風景、植生、水環境などの情報が必要不可欠となる。そうした現在と過去のギャップを克服し、当時の人々が生き生きと暮らした原風景を復元していくために地形、地質学的観点を十分に取り入れ

たうえでの景観考古学を志向していくことがこれからは大変意義のあることなのである。

武蔵野台地は広さ約700平方キロメートルの多摩川、荒川に挟まれた扇状地形である。ここには扇状地の傾斜に沿って縦断する多くの小河川があり、旧石器時代から古代までの様々な遺跡がこうした小河川に沿って残されていった。武蔵野台地という広い扇状地形に制約された地域を対象とし遺跡立地ありかたが総合的に問われることは今回の試みがほとんど初めてのものともいえる。こうした場所になぜ遺跡が残されるようになったのか、特に古い時代においてひとつとはどのように地形環境を利用しながら生活を営んでいたかを本研究を通して明らかにしていきたい。

#### 参考文献

- 石井 進編 2000 ものがたり 日本列島に生きた人たち 10景観 岩波書店  
石井 進 2000 中世の村を歩く 朝日選書  
貝塚爽平 1992 平野と海岸を読む 岩波書店  
木村 礎 1978 日本村落史 弘文堂  
木村 礎編 1990 日本村落史講座2 景観 雄山閣  
鈴木忠司 1983 日本細石刃文化の地理的背景 古代学叢論  
高倉 純 1998a 石刃族石器群の遺跡立地とその背景 北大史学第38号  
高倉 純 1998b 北海道における石刃族石器群の研究 考古学研究第44巻第4号

## 第2節 遺跡資料の集計

伊藤 健・西井 幸雄・国武 貞克

### 1. 本書の構成

本書は、多摩川流域、武蔵野台地における後期旧石器時代の遺跡の景観復元を目指そうというものである。そしてそのために武蔵野台地の地質・地形を解明し、また遺跡立地の考古学的情報を明らかにし、その両者を有機的につなぎあわせようというものである。

そうした趣旨のもと、本書は次の三章から構成される。本章は、第1節の趣旨説明と本節の後期旧石器時代遺跡の資料提示である。

第II章は、まず羽鳥謙三、加藤定男、向山崇久が多摩川と武蔵野台地の地形について概観する。武蔵野台地は河岸段丘としての側面と扇状地としての側面があるが、その点をわかりやすく概説する。また、水環境について触れる。水環境、特に湧水環境は遺跡立地を考える際の重要な要因になると考えられ、今後充分膨らませていくべき課題である。それを受けた形で、松田隆夫は、武蔵野台地のうち特に立川段丘を取り上げて凹地地形について検討している。中間報告で触れたように、野川流域と立川段丘は最も密に遺跡が分布し遺跡立地を考える上での基礎になりうるに地域である（比田井・松田他1999）。そうした意味で重要な検討結果を得られるであろう。

第III章は、第II章を受け遺跡立地を地形的特徴とつき合わせながら、その要因について考えるものである。武蔵野台地を4つに地域区分し、それぞれに検討を加えている。その区分と分担は、台地南西部－多摩川に注ぐ小河川流域を比田井民子が、南東部－多摩川水系にも荒川水系にも属さない小河川流域を伊藤 健が、北東部－荒川水系のうち黒目川以東の小河川流域を国武貞克が、北西部－荒川水系のうち柳瀬川以西の小河川流域を西井幸雄が担当している。南西部は最も密に遺跡が分布している野川流域を含む地域で、地形との関係が最も良く表れていると考えられる。南東部は、遺跡数は多いものの密度は薄く小規模遺跡が目立つ。なぜ小規模遺跡が多いかを考える恰好の地域である。北東部には野川流域に続いて遺跡が密集する石神井川流域を含んでいる。小河川の上下流域で遺跡の密度が変化し、大変複雑な要因をもつ地域である。北西部は、南東部同様に遺跡密度は薄い。しかし分布域が偏っており、粗密の差とその意味が地形環境との関係で興味深い地域である。

### 2. 遺跡資料集成の意義

後期旧石器時代の遺跡（居住地など）は、地形特に水環境と深い関わりがあるというのが本書の仮説の最も重要な一つである。それを証明するには、基礎資料の提示が不可欠である。それは、遺跡の位置とその性格に関する資料である。

遺跡分布とその立地を検討する際、各都県教育委員会発行の遺跡台帳の情報をそのまま援用したものがあ。例えば、遺跡台帳の情報をを用いて統計処理とGISによって東北地方の遺跡立地を研究す

るものがそれにあたる(千葉・横山1999)。その研究自体は評価に値するが、我々は遺跡台帳が完全なものではないこと、より多くの属性を得ることで遺跡の性格を的確に把握できることを知っている。そこで、本書では統計処理などは行わないが、統計処理ではカバーすることができない細かな検討を繰り返すことによって理解できることを大切に、そのための資料集成を行うこととした。

実際には、遺跡における石器類出土点数、礫出土点数を抽出することによって遺跡の性格を明らかにすることとした。この遺跡資料集成は、地形環境との対比のためだけでなくとも有用なものとなる。

### 3. 遺跡資料集成の方法

資料の集成は、比田井、伊藤、西井、国武が分担して行った。野川流域については中間報告の際に比田井と伊藤が集成したものを活用した(比田井・松田ほか1999)。それ以外の多摩地区を国武が、23区のうち板橋・練馬・北区を比田井が、残りの区部を伊藤が、埼玉県内を西井が担当した。それをまとめて遺跡一覧(第I-1表)とする作業は国武が担当した。また遺跡分布地図(第I-1図)は西井が作成した。

遺跡資料は、既刊の遺跡報告書、一部の概報から抽出した。また、立川ローム層中から出土したものを対象とし、例え後期石器時代の所産と考えられても、後世の層序、遺構から出土したものは除いた。

第I-1表の属性は12の項目から構成される。遺跡番号は遺跡を単位として通し番号を付したものである。野川流域から左廻りに、上流から下流に振っている。一部順番を違えているものがある。遺跡名、地点・地区名は報告書の明記に従っている。遺跡には地点・地区があるが、同じ遺跡でも地点が遠く離れていることもあるし、違う遺跡に接していることもある。行政単位で遺跡と地区・地点の関係の捉え方が異なっているのが原因で、遺跡件数で集計しても地点件数で集計しても本来の遺跡空間の実態を表さない可能性がある。出土層位は、報告書の記載に従って武蔵野台地標準層序を記載している。純粋な出土層位を記述している場合と文化層として把握している場合があるが、そのいずれもそのまま用いている。層序に上層・下層を付記したものもある。所在は、報告書に書かれている住所である。

河川は最も近くに位置する小河川を、立地面は武蔵野台地の段丘面を記載している。発掘面積は報告書に記載されているものを用いている。概数のものと実面積のものがある。記載のないものはそのままにしてある。石器集中、石器数、礫群、礫数は、それぞれ石器集中・ブロック、石器類出土点数、礫群、礫出土点数である。それらは報告書に従っているが、報告書によってデータに精粗が認められ、点数、件数の記載されていないケースもあり、その場合は実測図、分布図から集計している。どうしてもわからない場合は空欄などとしている。

いずれにしても完璧なデータになりえない性格のものであるが、極力完全なものになるように努め、

細かい点は第Ⅲ章でフォローしている。

第Ⅰ-1図は、地形区分図に、第Ⅰ-1表を元に遺跡を示すドットを落とし込んで作成した。ドットは遺跡番号に対応しているが、一部に複数地点からなる複数のドットにひとつの遺跡番号が付されているものがある。

遺跡一覧と遺跡分布図に表された情報には、この研究に有効なものが詰められている。それについては第Ⅲ章で詳述していきたい。

#### 参考文献

千葉 史・横山隆三 1999 「遺跡立地の地形特徴」『情報考古学』5-1

比田井民子・松田隆夫他 1999 「野川流域の遺跡と水環境」『日本第四紀学会講演要旨集』29

第一一表 遺跡一覽

遺跡番号	遺跡名	地点・地区	所在	河川	立地面	出土層位	調査面積	集中	石器数	碳屑	碳数
1	向郷		立川市錦町	矢川	立川面	Ⅲ下~Ⅳ上	300	?	784	?	1098
2	府中市No.29		府中市朝日町	野川	立川面	Ⅳ中	1220	8	736	7	1937
2	府中市No.29		府中市朝日町	野川	立川面	ⅣV	1220	5	22	5	404
3	飛田給北		府中市朝日町	野川	立川面	Ⅴ	1220	0	1	3	55
3	飛田給北		府中市西町	野川	立川面	Ⅲ			3		1
3	飛田給北		府中市西町	野川	立川面	Ⅳ下			2		
4	飛田給北		府中市西町	野川	立川面	Ⅴ		1	48	1	333
4	飛田給北		府中市西町	野川	立川面	Ⅲ		2			
5	多摩園坂	1次	府中市調布基地内	野川	立川面	Ⅲ		17	1030	32	3676
5	多摩園坂	1次	国分寺市内藤町	野川	武蔵野面	Ⅳ下	1000	1	10		
5	多摩園坂	1次	国分寺市内藤町	野川	武蔵野面	Ⅴ	1000	6	165	4	52
6	多摩園坂	第4地点	国分寺市内藤町	野川	武蔵野面	X	1000	0	9	0	5
6	多摩園坂	第4地点	国分寺市内藤町	野川	武蔵野面	Ⅲ	1000	9	399	12	984
6	多摩園坂	第4地点	国分寺市内藤町	野川	武蔵野面	Ⅳ上	1000	8	122	7	176
6	多摩園坂	第4地点	国分寺市内藤町	野川	武蔵野面	Ⅳ下	1000	4	155	4	64
6	多摩園坂	第4地点	国分寺市内藤町	野川	武蔵野面	V	1000	2	82	0	5
6	多摩園坂	第4地点	国分寺市内藤町	野川	武蔵野面	Ⅵ上	1000	0	4	0	0
6	多摩園坂	第4地点	国分寺市内藤町	野川	武蔵野面	Ⅸ	1000	1	33	0	0
6	多摩園坂	第4地点	国分寺市内藤町	野川	武蔵野面	X	1000	0	2	0	0
7	武蔵台	I	府中市武蔵台	野川	武蔵野面	Ⅲ中	1966	0	2	0	0
7	武蔵台	I	府中市武蔵台	野川	武蔵野面	Ⅳ上	1966	0	5	1	14
7	武蔵台	I	府中市武蔵台	野川	武蔵野面	Ⅳ中	1966	2	1480	2	226
7	武蔵台	I	府中市武蔵台	野川	武蔵野面	Ⅴ上	1966	2	89	2	57
7	武蔵台	I	府中市武蔵台	野川	武蔵野面	Ⅴ上	1966	1	33	1	736
7	武蔵台	I	府中市武蔵台	野川	武蔵野面	Ⅴa	1966	2	99	0	1
7	武蔵台	I	府中市武蔵台	野川	武蔵野面	Ⅸ	1966	6	150~200	0	
7	武蔵台	I	府中市武蔵台	野川	武蔵野面	Xa	1966	15	1700以上	0	備办
8	日影山		府中市武蔵台	野川	武蔵野面	Xb	67562	3	27	3	59
8	日影山		国分寺市泉町	野川	武蔵野面	Ⅲ	67562	22	1039	20	1429
8	日影山		国分寺市泉町	野川	武蔵野面	Ⅳ上	67562	2	19	0	9
8	日影山		国分寺市泉町	野川	武蔵野面	Ⅳ下	67562	2	19	0	0
8	日影山		国分寺市泉町	野川	武蔵野面	Ⅴ上	67562	0	3	0	0
8	日影山		国分寺市泉町	野川	武蔵野面	Ⅴ下	67562	0	4	0	4
8	日影山		国分寺市泉町	野川	武蔵野面	Xa	67562	0	4	0	0
9	武蔵国分寺跡北方地区	第51次調査区	国分寺市西元町	野川	武蔵野面	Ⅳ上	537	1	11	0	2
9	武蔵国分寺跡北方地区	第51次調査区	国分寺市西元町	野川	武蔵野面	Ⅳ下	537	1	16	0	1
9	武蔵国分寺跡北方地区	第51次調査区	国分寺市西元町	野川	武蔵野面	Ⅸ	537	1	14	0	0
9	武蔵国分寺跡北方地区	X	国分寺市西元町	野川	武蔵野面	Ⅳ~Ⅴ	1597	3	46	0	0
9	武蔵国分寺跡北方地区	Ⅵ	国分寺市西元町	野川	武蔵野面	Ⅳ	613	2	110	1	57
9	武蔵国分寺跡北方地区	Ⅶ	国分寺市西元町	野川	武蔵野面	Ⅲ	3000	1	30		



10	花沢東		国分寺市南町	野川	武蔵野面	Ⅲ	5817	0	4	0	4
10	花沢東		国分寺市南町	野川	武蔵野面	Ⅲa	5817	2	119	6	204
10	花沢東		国分寺市南町	野川	武蔵野面	Ⅲb	5817	3	484	4	1207
10	花沢東		国分寺市南町	野川	武蔵野面	V	5817	6	209	6	321
10	花沢東		国分寺市南町	野川	武蔵野面	Ⅵ	5817	2	68	0	8
10	花沢東		国分寺市南町	野川	武蔵野面	Ⅶ	5817	0	7	1	22
10	花沢東		国分寺市南町	野川	武蔵野面	X	5817	0	1	4	0
11	黄井		小金井市黄井町	野川	武蔵野面	Ⅳ下	2000	4	10	0	0
12	はげうえ		小金井市黄井町	野川	武蔵野面	Ⅲ上	2000	2	294	1	281
12	はげうえ		小金井市黄井町	野川	武蔵野面	Ⅲ下	2000	2	262	3	240
12	はげうえ		小金井市黄井町	野川	武蔵野面	Ⅳ上	2000	0	65	2	291
12	はげうえ		小金井市黄井町	野川	武蔵野面	Ⅳ中	2000	9	533	15	2611
12	はげうえ		小金井市黄井町	野川	武蔵野面	Ⅳ下	2000	13	218	28	3059
12	はげうえ		小金井市黄井町	野川	武蔵野面	V	2000	6	153	18	631
12	はげうえ		小金井市黄井町	野川	武蔵野面	Ⅵ	2000	2	45	1	55
12	はげうえ		小金井市黄井町	野川	武蔵野面	Ⅶ	2000	4	99	6	117
12	はげうえ		小金井市黄井町	野川	武蔵野面	Ⅸ上	2000	6	78	5	87
12	はげうえ		小金井市黄井町	野川	武蔵野面	Ⅸ下	2000	2	37	2	58
12	はげうえ		小金井市黄井町	野川	武蔵野面	X	2000	2	79	2	63
13	平代坂		小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅲ	348	3	55	2	68
13	平代坂		小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅳ上	348	1	234	1	33
13	平代坂		小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅳ中	348	2	54	0	5
13	平代坂		小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅳ下	348	1	51	2	49
13	平代坂		小金井市前原町	野川	武蔵野面	V	348	0	3	0	2
13	平代坂		小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅶ	348	0	4	0	1
13	平代坂		小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅸ	348	2	30	0	8
13	平代坂		小金井市前原町	野川	武蔵野面	X	348	0	1	0	2
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅲ上	2000	4	94	2	224
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅲ中	2000	1	600	1	93
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅲ下	2000	2	116	1	149
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅳ上	2000	10	1450	1	172
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅳ中	2000	4	232	3	492
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅳ下	2000	8	945	18	731
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	V上	2000	1	9	2	0
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	V下	2000	0	21	1	176
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅵ	2000	3	92	1	217
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅶ	2000	3	90		84
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	Ⅸ	2000	1	64	2	200
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	X上	2000	2	227		20
14	西之台	B地点	小金井市前原町	野川	武蔵野面	X中	2000	0	1		218
15	前原		小金井市前原町	野川	立川面	Ⅲ	2700	2	69	1	45
15	前原		小金井市前原町	野川	立川面	Ⅳ上	2700	5	145	2	58
15	前原		小金井市前原町	野川	立川面	Ⅳ中1	2700	14	299	11	918
15	前原		小金井市前原町	野川	立川面	Ⅳ中2	2700	11	705	13	4677

第 I - 1 表 - 2

道路番号	通称名	地点・地区	所在	河川	立地圏	出土層位	調査面積	集中	石器数	磁片	磁数
15	新原		野川	野川	IV下	2700	7	285	13		1309
15	新原		小金井市新原町	野川	IV	2700	1	7	0		2
15	新原		小金井市新原町	野川	IV	2700	0	0	0		7
16	新橋		小金井市中町	野川	III	380	1	73			
16	新橋		小金井市中町	野川	IV上	380	1	57	1		10
16	新橋		小金井市中町	野川	IV中	380	1	28			
16	新橋		小金井市中町	野川	IV下	380	3	129	7		750
16	新橋		小金井市中町	野川	V中	380	1	1	2		252
17	中山谷		小金井市中町	野川	III	830		18			2
17	中山谷		小金井市中町	野川	武蔵野面	830		4			3
17	中山谷		小金井市中町	野川	武蔵野面	830		4			5
17	中山谷		小金井市中町	野川	武蔵野面	830		736			0
18	野川中州北	東区	小金井市中町	野川	III	8000	2	83	3		144
18	野川中州北	東区	小金井市中町	野川	IV上	8000	4	262	8		897
18	野川中州北	東区	小金井市中町	野川	IV中~下	8000	11	3353	0		7561
18	野川中州北	東区	小金井市中町	野川	V	8000	0	5	6		1421
18	野川中州北	東区	小金井市中町	野川	IV	8000	0	3	1		30
18	野川中州北	東区	小金井市中町	野川	IV	8000	0	0	1		71
18	野川中州北	東区	小金井市中町	野川	IX	8000	2	98	2		377
18	野川中州北	東区	小金井市中町	野川	X	8000	1	32	0		0
18	野川中州北	西区	小金井市中町	野川	III	8000	4	4270	6		233
18	野川中州北	西区	小金井市中町	野川	IV中	8000	1	29	2		445
18	野川中州北	西区	小金井市中町	野川	IV下	8000	3	362	6		690
19	武蔵野公園		府中市多摩町	野川	III		1	27	0		3
19	武蔵野公園		府中市多摩町	野川	IV上		1	20	1		17
19	武蔵野公園		府中市多摩町	野川	IV下		3	23	4		86
19	武蔵野公園		府中市多摩町	野川	V		0	1	1		19
20	国慶基督教大学構内	Loc 1 5	小金井市東町	野川	武蔵野面	88		121			47
20	国慶基督教大学構内	Loc 1 5	小金井市東町	野川	武蔵野面	88		112	5		326
20	国慶基督教大学構内	Loc 1 5	小金井市東町	野川	武蔵野面	88		5	3		3
20	国慶基督教大学構内	Loc 1 5	小金井市東町	野川	武蔵野面	88		30	1		26
21	野川	S 4 5	調布市上石原	野川	III	632	6	35	1		
21	野川	S 4 5	調布市上石原	野川	IV1	632	7	643	5		
21	野川	S 4 5	調布市上石原	野川	IV2	632	8	495	15		
21	野川	S 4 5	調布市上石原	野川	IV3a	632	12	409	25		
21	野川	S 4 5	調布市上石原	野川	IV3b	632	12	288	16		
21	野川	S 4 5	調布市上石原	野川	IV4	632	10	303	12		
21	野川	S 4 5	調布市上石原	野川	V	632		53			
21	野川	S 4 5	調布市上石原	野川	VI	632	1	3			
21	野川	S 4 5	調布市上石原	野川	VI	632	4	58			

21	野川	S 4 5	野川	野川	立川面	Ⅲ	632	1	5	1	5
21	野川	S 6 1	野川	野川	立川面	Ⅲ	195	1	1	1	5
21	野川	S 6 1	野川	野川	立川面	Ⅲ上	195	1	65		
21	野川	S 6 1	野川	野川	立川面	Ⅲ下	195		13	2	144
21	野川	S 6 1	野川	野川	立川面	ⅢⅩ	195		1	1	15
22	坂上		三鷹市大沢坂上	野川	武蔵野面	Ⅲ	1800	1	29	1	19
22	坂上		三鷹市大沢坂上	野川	武蔵野面	Ⅲ上	1800	2	35		31
22	坂上		三鷹市大沢坂上	野川	武蔵野面	Ⅲ中	1800	2	191	3	999
22	坂上		三鷹市大沢坂上	野川	武蔵野面	Ⅲ下	1800	4	116	2	200
23	出山		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅲ	4800		不明		
23	出山		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅲ上	4800		不明		
23	出山		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅲ下Ⅴ	4800		不明		
24	東京天文台構内		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅲ	2000	2	158		80
24	東京天文台構内		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅲ上	2000	10	1802		109
24	東京天文台構内		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅲ中	2000	1	357	2	248
24	東京天文台構内		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅲ下	2000	1	84	1	211
24	東京天文台構内		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅴ	2000	8	231		55
24	東京天文台構内		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅴ	2000	11	11		6
24	東京天文台構内		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅴ	2000		3		5
24	東京天文台構内		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	ⅤⅩ	2000		1		
25	羽根沢台		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅲ	3989	4	228		186
25	羽根沢台		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅲ下	3989	4	269	14	1797
25	羽根沢台		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅴ	3989		61		58
25	羽根沢台		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	Ⅴ	3989	15	1430	1	297
25	羽根沢台		三鷹市大沢	野川	武蔵野面	ⅤⅩ	3989	2	31	1	90
26	古八幡		三鷹市大沢	野川	立川面	Ⅲ中下	340				
27	城山		三鷹市入間町	野川	武蔵野面	Ⅲ中	1750		43	3	
28	下神明		世田谷区成城	野川	武蔵野面	Ⅲ上	380		5		6
29	中神明・横穴墓群		世田谷区成城	野川	武蔵野面	Ⅴ	400	2	72	14	1
29	中神明・横穴墓群		世田谷区成城	野川	武蔵野面	ⅤⅩ	400	1	9	14	1
29	中神明・横穴墓群		世田谷区成城	野川	武蔵野面	Ⅴ	400		7	21	
30	下山		世田谷区瀬田	野川	武蔵野面	Ⅲ	2000	0	3		
30	下山		世田谷区瀬田	野川	武蔵野面	Ⅲ下	2000	5	170	2	
30	下山		世田谷区瀬田	野川	武蔵野面	Ⅴ	2000	1	19	3	
30	下山		世田谷区瀬田	野川	武蔵野面	ⅤⅩ	2000	2	364		
30	下山	Ⅱ	世田谷区瀬田	野川	武蔵野面	Ⅲ上	1200	1	29	0	0
30	下山	Ⅱ	世田谷区瀬田	野川	武蔵野面	Ⅲ上	1200	0	2	0	0
30	下山	Ⅱ	世田谷区瀬田	野川	武蔵野面	Ⅲ下	1200	0	5	1	531
30	下山	Ⅲ	世田谷区瀬田	野川	武蔵野面	Ⅲ		0	3	9	
30	下山	Ⅲ	世田谷区瀬田	野川	武蔵野面	Ⅲ上		0	6	1	72
31	下山北		世田谷区岡本	野川	武蔵野面	Ⅲ	871	2	45	2	74

第 I - 1 表 - 3

通称番号	通称名	地点・地区	所在	河川	立地面	出土層位	調査面積	集中	石器数	群	總数
31	下山北		世田谷区岡本	野川	武蔵野面	N上	871	1	8	1	19
32	站中学校		世田谷区成城	野川	武蔵野面	III	1136	1	67	0	0
32	站中学校		世田谷区成城	野川	武蔵野面	III	1136	3	254	5	691
33	高留多		世田谷区成城	野川	武蔵野面	III	2419	1	116	0	0
33	高留多		世田谷区成城	野川	武蔵野面	N下	2419	8	474	5	832
33	高留多		世田谷区成城	野川	武蔵野面	V	2419	3	108	2	61
33	高留多		世田谷区成城	野川	武蔵野面	VI	2419	3	262	2	61
33	高留多		世田谷区成城	野川	武蔵野面	X	2419	0	3	0	0
34	不動橋		世田谷区成城	野川	武蔵野面	N中	765		4		
35	滝ヶ谷	(第1次調査区)	世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	III	1514	1	9	169	1
35	滝ヶ谷	(第1次調査区)	世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	N下	1514	0	20	465	3
35	滝ヶ谷	(第1次調査区)	世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	VI	1514	1	27	170	0
35	滝ヶ谷	(第1次調査区)	世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	IX	1514	1	17	10	0
35	滝ヶ谷	(第3次調査区)	世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	VI	約20	0	2		
36	瀨田		世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	N上	1131	0	1	1	83
36	瀨田		世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	N上	1131	2	17	2	97
36	瀨田		世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	N下	1131	3	119	4	591
36	瀨田		世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	N下V	1131	10	236	8	1303
36	瀨田		世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	V中	1131	4	43	2	391
36	瀨田		世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	VI	1131	3	223	1	186
36	瀨田		世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	IX上	1131	2	86	0	10
36	瀨田		世田谷区瀨田	野川	武蔵野面	X上	1131	4	437	0	17
37	下野毛		世田谷区野毛	野川	武蔵野面	N上	1630	0	1	0	
37	下野毛		世田谷区野毛	野川	武蔵野面	N下	1630	15	409	13	3435
37	下野毛		世田谷区野毛	野川	武蔵野面	VI	1630	0	13	0	40
38	喜多見陣屋	III	世田谷区喜多見	野川	立川面	III	6802	2	34	0	17
38	喜多見陣屋	III	世田谷区喜多見	野川	立川面	N上	6802	1	117	0	5
38	喜多見陣屋	III	世田谷区喜多見	野川	立川面	N上	6802	1	222	0	4
38	喜多見陣屋	III	世田谷区喜多見	野川	立川面	N下	6802	10	1005	8	545
39	狛江駅北		狛江市元和泉	野川	立川面	N下	1331		1		
40	狛江市立第三小学校南側		狛江市元和泉	野川	立川面	N中	738		1		
41	鳥屋敷	I	三鷹市新川	仙川	武蔵野面	N上	13800	2	131	1	0
41	鳥屋敷	I	三鷹市新川	仙川	武蔵野面	III	13800	0	6	0	195
41	鳥屋敷	I	三鷹市新川	仙川	武蔵野面	N上	21100	0	4	0	5324
41	鳥屋敷	I	三鷹市新川	仙川	武蔵野面	V	13800	1	11	0	0
42	三鷹市立第五中学校		三鷹市新川	仙川	武蔵野面	III~IV上		6	?	3	6268
43	仙川		調布市仙川町	仙川	武蔵野面	V	364	0	2	0	484
43	仙川		調布市仙川町	仙川	武蔵野面	N	364	0	1	0	272

43	仙川		關布市仙川町	仙川	武藏野面	Ⅲ	364	1	2074	1	4
44	祖師谷大臺北		世田谷区上祖師谷	仙川	武藏野面	V上		1	39	1	
44	祖師谷大臺北		世田谷区上祖師谷	仙川	武藏野面	Ⅳ				1	
45	上之台	(住商成城ハイ△)	世田谷区祖師谷	仙川	武藏野面	Ⅳa	約530	1	45	78	1
45	上之台	(住商成城ハイ△)	世田谷区祖師谷	仙川	武藏野面	Ⅳb	約530	1	6	195	3
46	西谷戸		世田谷区岡本	仙川	武藏野面	Ⅲ	約800	1		約231	7
46	西谷戸		世田谷区岡本	仙川	武藏野面	Ⅳ下	約800	1		約458	6
46	西谷戸		世田谷区岡本	仙川	武藏野面	Ⅴ	約800				1
46	西谷戸		世田谷区岡本	仙川	武藏野面	Ⅵ	約800	1	49		
47	堂ヶ谷戸	(第24次調査区)	世田谷区岡本	砧川	武藏野面	Ⅳ下	2435	0	1		
48	東光寺裏山		目黒区八雲	香川	下末吉面	Ⅲ上		2	14	11	1
48	東光寺裏山		目黒区八雲	香川	下末吉面	Ⅳ下		5	166	34	3
48	東光寺裏山		目黒区八雲	香川	下末吉面	Ⅳ下			1	5	
49	久原小学校内		大田区久が原	香川	下末吉面	Ⅳ	900		20		
49	久原小学校内		大田区久が原	香川	下末吉面	V	900		11		
49	久原小学校内		大田区久が原	香川	下末吉面	Ⅵ	900		10		
49	久原小学校内		大田区久が原	香川	下末吉面	Ⅶ	900		64		
49	久原小学校内		大田区久が原	香川	下末吉面	Ⅷ	900		98		
50	高瀬荷		練馬区桜台	石神井川	武藏野面	Ⅵ	4590	4	612	3	520
50	高瀬荷		練馬区桜台	石神井川	武藏野面	Ⅲ	4590	0	1	0	0
50	高瀬荷		練馬区桜台	石神井川	武藏野面	Ⅳ下	4590	0	5	0	
51	綱島園		大田区仲池上	内川	下末吉面	Ⅸ~Ⅹ	40	0	6	1	100~150
52	山王三丁目		大田区山王	内川	下末吉面	Ⅳ下	25/2808	0	1	0	0
53	鳥山南原	第1次調査	世田谷区南鳥山	鳥山川	武藏野面	Ⅳ上		1	103	1	12
53	鳥山南原	第2.3次調査	世田谷区南鳥山	鳥山川	武藏野面	Ⅲ	約480	5	373	3	約204
53	鳥山南原	第2.3次調査	世田谷区南鳥山	鳥山川	武藏野面	V	約480	1	8		
54	廻沢北	第2.3次調査区	世田谷区千歳台	鳥山川	武藏野面	Ⅲ	2972	5	2050		61
54	廻沢北	第2.3次調査区	世田谷区千歳台	鳥山川	武藏野面	V	2972	1	28		
54	廻沢北	第2.3次調査区	世田谷区千歳台	鳥山川	武藏野面	Ⅵ	2972	1	24		
54	廻沢北	第4・5次調査区	世田谷区千歳台	鳥山川	武藏野面	Ⅲ上	1877	1	49		12
54	廻沢北	第4・5次調査区	世田谷区千歳台	鳥山川	武藏野面	Ⅲ下	1877	3	269		6
54	廻沢北	第4・5次調査区	世田谷区千歳台	鳥山川	武藏野面	V	1877	2	130	3	63
54	廻沢北	第4・5次調査区	世田谷区千歳台	鳥山川	武藏野面	Ⅸ	1877	3	419		27
54	廻沢北	第6次調査区	世田谷区船橋	鳥山川	武藏野面	Ⅳ上2	2975	4	777		10
54	廻沢北	第6次調査区	世田谷区船橋	鳥山川	武藏野面	Ⅳ上1	2975	1	561		0

第 I - 1 表 - 4

通称番号	通称名	地点・地区	所在	河川	立地面	出土層位	調査面積	集中	石器数	線群	棟数
54	堀沢北	第6次調査区	世田谷区船橋	烏山川	武蔵野面	IV中	2975	3	322		3
54	堀沢北	第6次調査区	世田谷区船橋	烏山川	武蔵野面	N下1	2975	2	448		1
54	堀沢北	第6次調査区	世田谷区船橋	烏山川	武蔵野面	N下2	2975	3	337		5
54	堀沢北	第6次調査区	世田谷区船橋	烏山川	武蔵野面	N	2975		71		6
54	堀沢北	第6次調査区	世田谷区船橋	烏山川	武蔵野面	V	2975	1	18		5
55	根津山群根津山・六郎次山	第4・5・6次調査	世田谷区代田	北沢川	下末吉面	III~IV	738		11		
56	大橋		目黒区大橋	目黒川	下末吉面	VI~IX	11432	3	63		2
56	大橋		目黒区大橋	目黒川	下末吉面	IV~V	11432	10	672	1	21
57	鉢山町	第1+2次調査区	渋谷区鉢山町	目黒川	下末吉面	V	11000		1		
57	鉢山町	第1+2次調査区	渋谷区鉢山町	目黒川	下末吉面	III	11000	1	12		2
57	鉢山町	第1+2次調査区	渋谷区鉢山町	目黒川	下末吉面	IV下	11000	3	641		7
58	麹菜17番		渋谷区麹菜	目黒川	下末吉面	IV上	1150		1		
58	麹菜17番		渋谷区麹菜	目黒川	下末吉面	VI上	1150		1		
59	茶屋坂		目黒区中目黒	目黒川	下末吉面	IV	1650		4	1	32
60	中目黒	A地点	目黒区中目黒	目黒川	武蔵野面	N		3	287	8	1047
60	中目黒	B地点I区	目黒区中目黒	目黒川	武蔵野面	N下		4	54	10	1036
60	中目黒	B地点I区	目黒区中目黒	目黒川	武蔵野面	V		3	235	3	201
60	中目黒	C地点	目黒区中目黒	目黒川	武蔵野面	VI	1050	1	17		1
61	恵比寿旧「カボ」小工場地区		渋谷区恵比寿	渋谷川	下末吉面	V上	約9090		2		
62	千駄ヶ谷五丁目	1次調査区	渋谷区千駄ヶ谷	代々木川(渋谷川)	下末吉面	N下	16200	7	437		
62	千駄ヶ谷五丁目	2次調査区	渋谷区千駄ヶ谷	代々木川(渋谷川)	下末吉面	V上		0	1	0	0
63	白金鎮址	(特別業績老人ホーム建設用地)	港区白金	渋谷川	下末吉面	N		11	1	1	656
64	井の頭	A地点	三鷹市井の頭	井の頭池	武蔵野面	III~IV上		7		2	28
65	御殿山	1D	武蔵野市御殿山	井の頭池	武蔵野面	III中		4	6148	3	457
65	御殿山	1D	武蔵野市御殿山	井の頭池	武蔵野面	IV上		1	1669	2	1222
65	御殿山	1D	武蔵野市御殿山	井の頭池	武蔵野面	V上		3	146	3	884
65	御殿山	2J	武蔵野市御殿山	井の頭池	武蔵野面	III中	145	1	32	1	531
65	御殿山	2J	武蔵野市御殿山	井の頭池	武蔵野面	IV	145	0	0	0	45
66	吉祥寺南町1丁目	H地点	武蔵野市南町	井の頭池	武蔵野面	III~IV上	170	0		1	349
66	吉祥寺南町1丁目	E地点	武蔵野市南町	井の頭池	武蔵野面	IV上	1400		3730	5	3004
66	吉祥寺南町1丁目	E地点	武蔵野市南町	井の頭池	武蔵野面	N下	1400		149	5	1053
66	吉祥寺南町1丁目	J地点	武蔵野市南町	井の頭池	武蔵野面	III~IV上	38	0	23	0	77

67	吉祥寺南町3丁目	B地点	武蔵野市南町	神田川	武蔵野面	Ⅲ~Ⅳ	760	5	646	5	12
68	向ノ原	B地点	杉並区久我山	神田川	武蔵野面	Ⅳ上	約150	0	1	0	0
68	向ノ原	B地点	杉並区久我山	神田川	武蔵野面	Ⅳ下	約150	0	12	7	約230
68	向ノ原	B地点	杉並区久我山	神田川	武蔵野面	Ⅴ上	約150	0	1	1	約80
68	向ノ原	(近隣第一)	杉並区久我山	神田川	武蔵野面	Ⅳ上		2	36		
69	高井戸東	(駐車場西)	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅰ	約600	1	6	0	2
69	高井戸東	(駐車場西)	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅰ	440	1	25	1	22
69	高井戸東	(駐車場西)	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅰ	440	0	8	1	13
69	高井戸東	西台地	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅲ	約5000	0	2	0	0
69	高井戸東	西台地	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅳ上	約5000	1	158	6	549
69	高井戸東	西台地	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅳ下	約5000	3	85	1	18
69	高井戸東	西台地	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅴ	約5000	1	13		12
69	高井戸東	西台地	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅰ	約5000	約12	1064	約16	1029
69	高井戸東	西台地	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅰ	約5000	約7	204	1	61
69	高井戸東	東台地	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅳ下	500位	3	60	5	214
69	高井戸東	東台地	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅴ	500位	3	43	1	206
69	高井戸東	東台地	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅰ	500位	4	109		25
69	高井戸東	東台地	杉並区高井戸東	神田川	武蔵野面	Ⅰ	500位	5	5		8
70	下高井戸塚山		杉並区下高井戸	神田川	武蔵野面	Ⅰ	700位	0	3	0	0
71	明治大学和泉校地		杉並区赤穂	神田川	武蔵野面	Ⅲ	3500位	4	695	1	194
72	富士見台		中野区弥生町	神田川	武蔵野面	Ⅲ下	6000	3	686	1	98
72	富士見台		中野区弥生町	神田川	武蔵野面	Ⅴ上	6000	0	4	1	19
72	富士見台		中野区弥生町	神田川	武蔵野面	Ⅶ上	6000	8	386	6	482
72	富士見台		中野区弥生町	神田川	武蔵野面	Ⅰ	6000	0	3	0	7
73	高田馬場三丁目	(戸塚四丁目了 八一卜)	新宿区高田馬場	神田川	武蔵野面	Ⅳ上	3500	0	10		
74	百人町三丁目西	(第1次調査区)	新宿区百人町	神田川	武蔵野面	Ⅳ下	1100	1	56	1	268
74	百人町三丁目西	(第2次調査区)	新宿区百人町	神田川	武蔵野面	Ⅳ下~Ⅴ上	2300	4	157	12	2393
74	百人町三丁目西	(第3次調査区)	新宿区百人町	神田川	武蔵野面	Ⅵ~Ⅶ		5	140		4
74	百人町三丁目西	(第3次調査区)	新宿区百人町	神田川	武蔵野面	Ⅴ上		8	342	7	515
75	百人町三丁目	(第3次調査区)	新宿区大久保	神田川	武蔵野面	Ⅲ	8398	0	1		
75	百人町三丁目	(第3次調査区)	新宿区大久保	神田川	武蔵野面	Ⅴ~Ⅵ上	8398	0	3		
75	百人町三丁目	(第3次調査区)	新宿区大久保	神田川	武蔵野面	Ⅶ下	8398	0	4		
75	百人町三丁目	(第3次調査区)	新宿区大久保	神田川	武蔵野面	Ⅰ	8398	0	1		
76	西早稲田三丁目	(第2次調査地 点)	新宿区西早稲田	神田川	立川面	Ⅵ	1300	0	1		
77	下戸塚	(安倍球場)	新宿区西早稲田	神田川	立川面	Ⅲ		1	37		68
77	下戸塚	(安倍球場)	新宿区西早稲田	神田川	立川面	Ⅳ上~Ⅲ		10	107	10	274

第 I - 1 表 - 5

通達番号	通達名	地点・地区	所在	河川	立地面	出土層位	調査面積	集中	石器数	碳群	噸数
77	下戸塚	(安倍球場)	新北区西早稲田	神田川	立川面	N・V	16	16	802	53	9586
77	下戸塚	(安倍球場)	新北区西早稲田	神田川	立川面	V上~N下	13	13	519	2	104
77	下戸塚	(西早稲田再開発事業)	新北区西早稲田	神田川	立川面	V	約15000	1	41		11
77	下戸塚	(西早稲田再開発事業)	新北区西早稲田	神田川	立川面	IV	約15000	6	297	6	2663
77	下戸塚	(西早稲田再開発事業)	新北区西早稲田	神田川	立川面	III	約15000	2	22	2	499
77	下戸塚	(西早稲田再開発事業)	新北区西早稲田	神田川	立川面	VI	約15000	0	1		
78	住吉町西	(住吉町コ-1ホ ラズ)	新北区住吉町	紅葉川	下末吉面		1064	0	3		
79	荒木町	(解散会本部新築)	新北区荒木町	紅葉川	下末吉面	IV下~V上	1150		4	1	70
80	市谷本村町		新北区市谷本村町	紅葉川	下末吉面	III・IV	約3000		5		
81	尾張瀬上屋敷	第12地点	新北区市谷本村町	紅葉川	下末吉面	VI		3	532		
82	市谷加賀町二丁目	(大阪互助会館)	新北区市谷加賀町	紅葉川	下末吉面	III・IV	1234	0	1	0	0
83	市谷加賀町一丁目	(NTT社宅)	新北区市谷加賀町	紅葉川	下末吉面	N・V	500	0	2	0	0
84	江戸城北丸竹橋門地区		千代田区北の丸公園	神田川	下末吉面	IV	550	1	608	1	270
85	地藏坂		杉並区善福寺	善福寺川	武蔵野面	III	約336	1	72		
85	地藏坂		杉並区善福寺	善福寺川	武蔵野面	IV	約336	1	62	2	175
86	川南		杉並区依違	善福寺川	武蔵野面	IV~III	約300	3	444	0	133
87	日性寺B		杉並区成田東	善福寺川	武蔵野面	III中	2380		6	0	0
87	日性寺B		杉並区成田東	善福寺川	武蔵野面	IV	2380		0	3	0
87	日性寺B		杉並区成田東	善福寺川	武蔵野面	VI	2380		0	2	113
87	日性寺B		杉並区成田東	善福寺川	武蔵野面	VII	2380		0		
88	都立和田堀公園・大宮		杉並区大宮	善福寺川	武蔵野面				約8		
89	方南峰		杉並区堀ノ内	善福寺川	武蔵野面	III	1200位		1		
89	方南峰		杉並区堀ノ内	善福寺川	武蔵野面	X上	1200位		1		
90	新井三丁目		杉並区新井	妙正寺川	武蔵野面	III下~IV上	5350	3	259	1	20
91	江古田		中野区江古田	妙正寺川	武蔵野面	V上	3537		2		
91	江古田		中野区江古田	妙正寺川	武蔵野面	VI下~IX上	3537	1	6		
92	片山	第2次調査区	中野区松ヶ丘	妙正寺川	武蔵野面	III	1022				8
92	片山	第2次調査区	中野区松ヶ丘	妙正寺川	武蔵野面	IV	1022		1		6
92	片山	第2次調査区	中野区松ヶ丘	妙正寺川	武蔵野面	V	1022		2		2
92	片山	第2次調査区	中野区松ヶ丘	妙正寺川	武蔵野面	VI	1022		1		3
92	片山	第2次調査区	中野区松ヶ丘	妙正寺川	武蔵野面	VII	1022				5
93	妙正寺川No.1		新北区西盛合	妙正寺川	武蔵野面		11000	0	15	0	507
94	箕輪町	科研院築地地区	文京区本駒込	谷堀川	武蔵野面	III	約1000		2		



95	真砂		文京区本部		武蔵野面	VI		5	201	20	459
95	真砂		文京区本部		武蔵野面	V下		2	41		1
96	神明町		文京区本駒込		武蔵野面	III	268		22		
97	千駄木		文京区千駄木		武蔵野面	III	約380	0	1	0	0
97	千駄木		文京区千駄木		武蔵野面	N下	約380	1	22	0	7
97	千駄木		文京区千駄木		武蔵野面	IX	約380	3	107	1	39
97	千駄木		文京区千駄木		武蔵野面	X	約380	0	1	0	0
98	東京大学本部構内法学部4号館・文学部3号館 講堂地		文京区本部		武蔵野面	III中			2		
98	東京大学本部構内法学部4号館・文学部3号館 講堂地		文京区本部		武蔵野面	N~V		2	137	1	38
99	上野忍ヶ岡	国立西洋美術館 地点	台東区上野公園		武蔵野面	III上	2400	0	1		
99	上野忍ヶ岡	国立西洋美術館 地点	台東区上野公園		武蔵野面	V	2400	0	2		
100	田端町		北区田端		武蔵野面	III	300		10	2	90
101	鈴木		小平市鈴木町		武蔵野面	III	14000		5865		
101	鈴木		小平市鈴木町		武蔵野面	IV	14000		25070		
101	鈴木		小平市鈴木町		武蔵野面	V	14000		1600		
101	鈴木		小平市鈴木町		武蔵野面	VI	14000		1058		
101	鈴木		小平市鈴木町		武蔵野面	VII	14000		1208		
101	鈴木		小平市鈴木町		武蔵野面	IX	14000		2095		
101	鈴木		小平市鈴木町		武蔵野面	X	14000		245		
102	坂下		保谷市東伏見		武蔵野面	III下	2500	11	934	5	0
102	坂下		保谷市東伏見		武蔵野面	V上	2500	3	217	15	230
102	坂下		保谷市東伏見		武蔵野面	N下	2500	4	162	4	13
102	坂下		保谷市東伏見		武蔵野面	N上	2500	2	143	4	93
102	坂下		保谷市東伏見		武蔵野面	V下	2500	1	27	1	0
103	下野谷		保谷市東伏見		武蔵野面	IX	1455	0	4	0	0
104	早大東伏見総合グラウンド	B地区	保谷市東伏見		武蔵野面	N下~V上	1500	8	607	5	123
105	淵淵	4次	練馬区関町		武蔵野面	N上	200	2	33	2	
105	淵淵	4次	練馬区関町		武蔵野面	III下	200	0	7	1	447
106	天沼神社東		練馬区関町北		武蔵野面	III下	2550	14	2792	0	97
106	天沼神社東		練馬区関町北		武蔵野面	III下	2550	1	37	1	2
106	天沼神社東		練馬区関町北		武蔵野面	III下	2550	2	33	2	39
107	葛原	B	練馬区関町北		武蔵野面	III下	1543	13	1084	17	1375
107	葛原	B	練馬区関町北		武蔵野面	N上	1543	5	250	20	88
107	葛原	B	練馬区関町北		武蔵野面	V上	1543	7	1106	0	
108	武蔵園北		練馬区関町北		武蔵野面	N	965	4	158		1

第 I - 1 表 - 6

遺跡番号	遺跡名	地点・地区	所在	河川	立地面	出土層位	調査面積	集中	石器数	礎群	礎数
108	武蔵國北		練馬区関町北	石神井川	武蔵野面	IX	965	0	43	0	2420
108	武蔵國北		練馬区関町北	石神井川	武蔵野面	IV下	965	2	62	2	2658
108	武蔵國北		練馬区関町北	石神井川	武蔵野面	IV上	965	7	173	9	0
109	關山		練馬区石神井台	石神井川	武蔵野面	III	1759	1	70	6	
109	關山		練馬区石神井台	石神井川	武蔵野面	IV上	1759	5	605	0	110
110	關山		練馬区石神井台	石神井川	武蔵野面	V下	1759	2	68	0	94
111	城山	A	練馬区関町北	石神井川	武蔵野面	VIIX	1800	6	270	1	74
111	城山	A	練馬区上石神井	石神井川	武蔵野面	III	800	0	4	0	2565
111	城山	C	練馬区上石神井	石神井川	武蔵野面	IV	800	4	867	4	0
111	城山	C	練馬区上石神井	石神井川	武蔵野面	III	350	2	24	2	0
112	尾崎		練馬区上石神井	石神井川	武蔵野面	IV	350	3	139	1	12
112	尾崎		練馬区春日町	石神井川	武蔵野面	IV	800	0	4	0	0
112	尾崎		練馬区春日町	石神井川	武蔵野面	V	800	0	6	0	0
112	尾崎		練馬区春日町	石神井川	武蔵野面	VI	800	0	7	0	0
112	尾崎		練馬区春日町	石神井川	武蔵野面	VIIX	800		116	1	0
113	東早淵		練馬区春日町	石神井川	武蔵野面	X	800		90	0	446
113	東早淵		練馬区早宮	石神井川	武蔵野面	IV上	2220	4	130	0	7
113	東早淵		練馬区早宮	石神井川	武蔵野面	V	2220	26	1445	3	17
113	東早淵		練馬区早宮	石神井川	武蔵野面	IX上	2220	6	110	0	3
113	東早淵		練馬区早宮	石神井川	武蔵野面	IX中	2220	14	402	0	12
113	東早淵		練馬区早宮	石神井川	武蔵野面	IX下	2220	8	177	0	26
113	東早淵		練馬区早宮	石神井川	武蔵野面	X	2220	1	23	0	3
114	栗原		板橋区板川	田柄川	武蔵野面	X	約90	0	13	0	12
114	栗原		板橋区板川	田柄川	武蔵野面	IX	約90	0	6	0	3720
115	茂呂		板橋区小茂根	石神井川	武蔵野面	IV	204		83	16	39
115	茂呂	C	板橋区小茂根	石神井川	武蔵野面		45	1	79	2	261
116	小茂根小山		板橋区小茂根	石神井川	武蔵野面	IV下	508	0	5	0	
117	根ノ上		板橋区小茂根	石神井川	武蔵野面	IV	900	0	5	0	3
117	根ノ上		板橋区小茂根	石神井川	武蔵野面	IX	900	2	81	0	17
118	西原		板橋区双葉町	石神井川	武蔵野面	VI	3000	1	22	1	676
118	西原		板橋区双葉町	石神井川	武蔵野面	VII	3000	4	189	5	0
119	加賀一丁目		板橋区加賀	石神井川	武蔵野面	IV下	406	4	1220	0	
120	箱		北区王子本町	石神井川	武蔵野面	IV下	500	1	11	1	0
121	御殿前		北区西ヶ原	荒川	武蔵野面	III	1500	0	4	2	0
121	御殿前		北区西ヶ原	荒川	武蔵野面	IV下	3000	1	166	1	0
121	御殿前		北区西ヶ原	荒川	武蔵野面	V	3000	1	64	0	2
121	御殿前		北区西ヶ原	荒川	武蔵野面	VI	3000	1	25	0	0
121	御殿前		北区西ヶ原	荒川	武蔵野面	X	3000	0	1	0	
122	赤羽台		北区赤羽台	荒川	武蔵野面	III	720	1	1	0	57
122	赤羽台		北区赤羽台	荒川	武蔵野面	IV上	720	5	73	5	0

122	赤羽台		北区赤羽台	荒川	武蔵野面	IX	720	0	1	0	155
122	赤羽台		北区赤羽台	荒川	武蔵野面	X	720	0	1	0	
123	小豆沢裏原		板橋区小豆沢	荒川	武蔵野面	IV下	3100	0	3	0	
124	志村城山		板橋区志村	出井川	武蔵野面	IV下	340	1	20	2	
124	志村城山		板橋区志村	出井川	武蔵野面	VII	340	2	125	4	
124	志村城山		板橋区志村	出井川	武蔵野面	IXa	340	5	176	4	
124	志村城山		板橋区志村	出井川	武蔵野面	IXb	340	0	2	0	
125	志村坂上	D	板橋区志村	出井川	武蔵野面	III	480	2	276	4	447
125	志村坂上	J	板橋区志村	出井川	武蔵野面	III	330	2	23	0	276
125	志村坂上	J	板橋区志村	出井川	武蔵野面	IV下	330	1	180	2	0
126	中台裏谷		板橋区中台	出井川	武蔵野面	IV下	96	1	58	1	0
127	中台島中		板橋区中台	出井川	武蔵野面	IV上	4300		16	34	
128	四葉		板橋区四葉	—	武蔵野面	V	約15000	3		0	
128	四葉		板橋区四葉	—	武蔵野面	VII	約15000	4		147	
128	四葉		板橋区四葉	—	武蔵野面	IX	約15000	2		3279	
129	大門		板橋区大門	前谷津川	武蔵野面	IV	2200	3	202	1	
129	大門		板橋区大門	前谷津川	武蔵野面	IX	2200	3	164	2	
130	牛王山	(6次)	和光市新倉	—	武蔵野面	IV	1119	7	125	0	12
131	愛宕下		練馬区大泉町	白子川	立川面	VIIIX	15000	0	84	0	240
131	愛宕下		練馬区大泉町	白子川	立川面	IVV	15000	2	34	2	0
131	愛宕下		練馬区大泉町	白子川	立川面	IX	15000	0	85	0	
131	愛宕下		練馬区大泉町	白子川	立川面	IV下	15000	2	43	2	
131	愛宕下		練馬区大泉町	白子川	立川面	IV上	15000	7	416	9	0
131	愛宕下		練馬区大泉町	白子川	立川面	III上	15000	0	5	1	1163
132	外山		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	III	1051	1	36	0	8
132	外山		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	IV上	1051	1	94	1	30
132	外山		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	VI	1051	3	630	1	4
132	外山		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	IX	1051	1	21	0	305
133	比丘尼橋		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	IV	800	13	780	77	542
133	比丘尼橋		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	IX上	800	0	3	0	122
133	比丘尼橋		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	IX中	800	3	46	0	3515
133	比丘尼橋		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	IX下	800	0	11	0	0
134	もみじ山		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	IX	15000	4	209	5	0
134	もみじ山		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	IV	15000	9	309	7	11
134	もみじ山		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	X	15000	0	16	0	12
134	もみじ山		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	VII	15000	13	292	2	
134	もみじ山		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	V	15000	6	283	5	0
134	もみじ山		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	III下	15000	3	299	0	0
134	もみじ山		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	III中	15000	8	154	2	1199
134	もみじ山		練馬区東大泉	白子川	武蔵野面	III上	15000	3	78	1	14197
135	丸山裏		練馬区東大泉	白子川	立川面	VII	約3000	0	1	3	158

第 I - 1 表 - 7

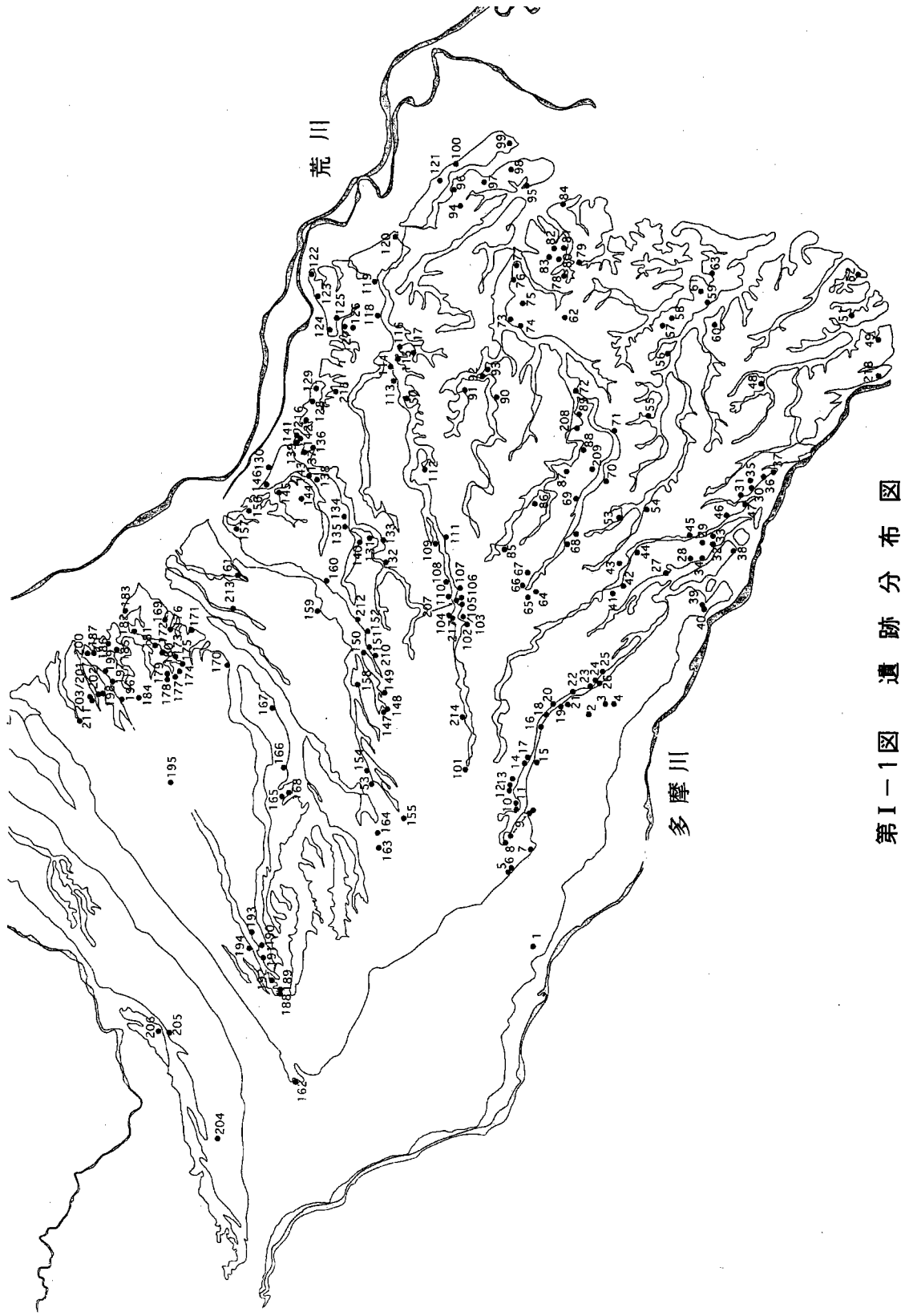
遺跡番号	遺跡名	地点・地区	所在	河川	立地面	出土層位	調査面積	集中	石器数	漆群	漆数
135	丸山東		練馬区大泉町	白子川	立川面	VI	約3000	0	2	0	172
135	丸山東		練馬区大泉町	白子川	立川面	V	約3000	1	280	0	220
135	丸山東		練馬区大泉町	白子川	立川面	III	約3000	11	847	1	0
135	丸山東		練馬区大泉町	白子川	立川面	IV	約3000	14	3569	22	53
136	成増百向		板橋区成増	白子川	武蔵野面		44	0		0	
137	成増との山		板橋区成増	白子川	武蔵野面	IV	635	2	4	2	32
137	成増との山		板橋区成増	白子川	武蔵野面	V	635	1	8	0	5
137	成増との山		板橋区成増	白子川	武蔵野面	VI	635	1	60	0	14
137	成増との山		板橋区成増	白子川	武蔵野面	IX	635	8	842	0	0
138	城山南	(1次)	和光市白子	谷中川	武蔵野面	IV	2233	0	12	5	907
138	城山南	(1次)	和光市白子	谷中川	武蔵野面	VII	2233	2	16	0	0
139	曹原神社台地上		板橋区成増	白子川	武蔵野面	III	6400	3	164	0	12
139	曹原神社台地上		板橋区成増	白子川	武蔵野面	V	6400	19	2287	13	3720
139	曹原神社台地上		板橋区成増	白子川	武蔵野面	VI	6400	9	676	2	101
140	宮ヶ谷戸		練馬区大泉町	白子川	武蔵野面	IV	約12000	2	128	4	1334
141	成増天神脇		板橋区成増	白子川	武蔵野面	VII	1360	0	3	0	0
141	成増天神脇		板橋区成増	白子川	武蔵野面	IV下	1360	0	2	0	0
142	氷川神社北方		板橋区赤塚	白子川	武蔵野面	IX	289	2	124		0
143	妙蓮寺		和光市下新倉茅草蓮寺	谷中川	武蔵野面	IV	4000	2	373	2	
144	丸山台		和光市下新倉	谷中川	武蔵野面	IV	27800	2	111	0	
145	柿ノ木坂		和光市下新倉	谷中川	武蔵野面		11500	15	565	0	18
146	花ノ木		和光市下新倉	谷中川	武蔵野面		18250	12	630	22	
146	花ノ木		和光市下新倉	谷中川	武蔵野面	VI	18250	13	196	0	0
146	花ノ木		和光市下新倉	谷中川	武蔵野面	VI	18250	7	73	0	0
147	第一小学校		東久留米市中央町	落合川	武蔵野面	IV下	1200	1	48	0	50
148	神明山南		東久留米市中央町	落合川	武蔵野面	IV下		0	2	0	4
148	神明山南		東久留米市中央町	落合川	武蔵野面	V		0	0	1	386
149	六仙	1次	東久留米市中央町	落合川	武蔵野面	III下IV上	944	0	12	4	0
149	六仙	2次	東久留米市中央町	落合川	武蔵野面	IV下	300	0	6	1	2739
150	多聞寺前		東久留米市南沢	黒目川	武蔵野面	III	4000	1	5	0	4
150	多聞寺前		東久留米市南沢	黒目川	武蔵野面	IV上	4000	15	7582	6	0
150	多聞寺前		東久留米市南沢	黒目川	武蔵野面	IV中	4000	12	562	5	1
150	多聞寺前		東久留米市南沢	黒目川	武蔵野面	IV下	4000	2	40	3	0
150	多聞寺前		東久留米市南沢	黒目川	武蔵野面	V上	4000	0	9	0	0
150	多聞寺前		東久留米市南沢	黒目川	武蔵野面	VII	4000	6	349	5	525
150	多聞寺前		東久留米市南沢	黒目川	武蔵野面	IX	4000	18	589	0	303
151	自由学園南	(1987調査)	東久留米市学園町	黒目川	武蔵野面	III	600	1	113	0	4
151	自由学園南	(1987調査)	東久留米市学園町	黒目川	武蔵野面	III~V上	600	14	2639	35	
152	池田		新座市池田	黒目川	武蔵野面	IV上	4200	1	77	0	85
152	池田		新座市池田	黒目川	武蔵野面	III	4200	1	45	0	1895

152	池田				新座市池田	黒目川	武蔵野面	Ⅳ下	4200	1	219	1	1554
152	池田				新座市池田	黒目川	武蔵野面	Ⅳ	4200	2	451	1	
153	西下里				東久留米市下里	黒目川	武蔵野面	Ⅳ下	500	1	6	63	1937
153	西下里				東久留米市下里	黒目川	武蔵野面	Ⅲ	500	0	1	0	404
153	西下里				東久留米市下里	黒目川	武蔵野面	Ⅳ上	500	0	0	6	
154	下里本邑	1982			東久留米市野火止	黒目川	武蔵野面	Ⅴ	16000	1	157	4	32
154	下里本邑	1979			東久留米市野火止	黒目川	武蔵野面	Ⅲ	65	0	36	0	0
155	新山	Ⅵ			東久留米市下里	黒目川	武蔵野面	Ⅲ~Ⅳ上	65	1	10	0	1973
156	宮台・宮原				朝霞市本町	黒目川	武蔵野面	Ⅳ	1463	0	1	3	
156	宮台・宮原				朝霞市本町	黒目川	武蔵野面	Ⅳ~Ⅴ		4	99	0	
157	蓮合・立出	第1地点			朝霞市高戸	黒目川	武蔵野面	Ⅲ	216	1	140	0	
157	蓮合・立出	第1地点			朝霞市高戸	黒目川	武蔵野面	Ⅲ	216	1	140	0	
158	蓮場				新座市蓮場	黒目川	武蔵野面				35		11
159	嵯峨山				新座市蓮場之内	黒目川	武蔵野面						378
159	嵯峨山				新座市蓮場之内	黒目川	武蔵野面	Ⅵ下~Ⅶ上		0	1	0	1
159	嵯峨山				新座市蓮場之内	黒目川	武蔵野面	Ⅴ		0	1	0	5875
159	嵯峨山				新座市蓮場之内	黒目川	武蔵野面	Ⅶ		0	3	0	0
160	市塚坂	A1			新座市片山	黒目川	武蔵野面	Ⅲ~Ⅴ	2800	28			0
161	泉水山・富士谷	第47区			朝霞市泉水	黒目川	武蔵野面	Ⅲ~Ⅴ	120	1	109	0	179
161	泉水山・富士谷	第48区			朝霞市泉水	黒目川	武蔵野面	Ⅲ~Ⅴ	450	2	45	2	0
161	泉水山・富士谷	第48区			朝霞市泉水	黒目川	武蔵野面	Ⅶ	450	0	0	0	3190
161	泉水山・富士谷				朝霞市泉水	黒目川	武蔵野面		7981	15	2219		
162	狹山B				瑞穂町富士山	狹瀬川	立川面	Ⅲ	150	0	110	0	0
163	念仏塚	第1			武蔵村山市神明	空堀川	武蔵野面	Ⅲ	128	1	17	0	39
164	御伊勢地				武蔵村山市中央	空堀川	武蔵野面	Ⅳ	128	0	2	0	1043
165	山下後	(1次)			所沢市山口	柳瀬川	下末吉面	Ⅳ中	380	2			0
166	大塚山麓跡				所沢市北秋津	柳瀬川	下末吉面		3701	1	227	0	0
167	和田				所沢市東所沢和田	柳瀬川	下末吉面	Ⅳ	4690	6	1071		
168	本郷東上				所沢市本郷	柳瀬川	下末吉面			3		2	
169	菓谷ツ	(15・16地点)			富士見市針ヶ谷	柳瀬川	武蔵野面	Ⅵ		3	152	0	0
170	甲館出	(第1・2次)			所沢市坂之下	柳瀬川	下末吉面	Ⅲ~Ⅳ上	7000	5	797	0	0
171	古井戸山				三芳町藤久保	柳瀬川	武蔵野面	Ⅳ下・中		2	92	0	0
172	北通				富士見市針ヶ谷	柳瀬川	武蔵野面	Ⅲ・Ⅳ		5	51	1	
173	松ノ木				富士見市西分ずほ台	麩沢	武蔵野面	Ⅲ下		3	162	1	56
173	松ノ木				富士見市西分ずほ台	麩沢	武蔵野面	Ⅳ		4	73	0	0
173	松ノ木				富士見市西分ずほ台	麩沢	武蔵野面	Ⅵ					
174	新開				三芳町竹間沢	麩沢	武蔵野面	Ⅳ	25,000以上	41	1112	70	
175	三芳麩沢				三芳町藤久保	麩沢	武蔵野面	Ⅴ		5	27	0	0
176	麩沢				富士見市分ずほ台	麩沢	武蔵野面	Ⅲ		5	135	1	約40
176	麩沢				富士見市分ずほ台	麩沢	武蔵野面	Ⅳ		1	16	1	約80

第 I - 1 表 - 8

通称番号	通称名	地点・地区	所在	河川	立地画	出土層位	調査面積	集中	石器数	磁群	曜数
177	保墓	C地点	三芳町藤久保	江川	武蔵野面	4~7	992	1	18	0	0
178	藤久保東		三芳町藤久保字東	江川	武蔵野面	IV下		5	193	6	880
179	藤久保東三		三芳町藤久保字保墓	江川	武蔵野面	IV		0	0	1	20
179	藤久保東三		三芳町藤久保字保墓	江川	武蔵野面	VI		2	74	0	0
179	藤久保東三		三芳町藤久保字保墓	江川	武蔵野面	VII		2	93	0	0
179	藤久保東三		三芳町藤久保字保墓	江川	武蔵野面	IX		9	109	0	0
180	本目	第4地点	富士見市岡沢	江川	武蔵野面	IV下	428	1	8	0	0
181	八ヶ上		富士見市岡沢	江川	武蔵野面	IV		1	20	0	0
182	打越	3地点	富士見市東砂子保台	江川	武蔵野面	IV		1	274	0	0
182	打越	AL区	富士見市東砂子保台	江川	武蔵野面	VII		1	211	0	0
182	打越	KA区	富士見市東砂子保台	江川	武蔵野面	IX		1	20	0	0
182	打越	KB区	富士見市東砂子保台	江川	武蔵野面	VII	858	1	3		
182	打越	KC区	富士見市東砂子保台	江川	武蔵野面	VII	631	1	12		
182	打越	NA	富士見市東砂子保台	江川	武蔵野面	IV		3	40		
182	打越	LC	富士見市東砂子保台	江川	武蔵野面	III		1	187		
183	米川前		富士見市水子	荒川	武蔵野面	III		1	76	0	0
184	酒前後	B地点	三芳町藤久保	樺平川	武蔵野面	IV	847	2	41	2	
185	谷津		富士見市鶴馬	樺平川	武蔵野面	IV		1	37		
185	谷津		富士見市鶴馬	樺平川	武蔵野面	VI		1	8	1	
185	谷津		富士見市鶴馬	樺平川	武蔵野面	VII・IX		3	42		
185	谷津		富士見市鶴馬	樺平川	武蔵野面	X		1	8		
186	山窪	第2地点	富士見市山窪	荒川	武蔵野面	IV	531	5	367	7	
187	羽沢		富士見市羽沢	荒川	武蔵野面	IV	291	1	8	0	0
188	志伊勢山		所沢市三ヶ島	砂川堀	下末吉面	IV		2	14	1	71
188	志伊勢山		所沢市三ヶ島	砂川堀	下末吉面	VII		21	389	1	11
189	宮林		所沢市三ヶ島	砂川堀	下末吉面	N~V	147	6	446	2	0
190	白旗塚	(2次)	所沢市北野	砂川堀	下末吉面	III下~IV	23000	5		0	0
191	後内手		所沢市北野	砂川堀	下末吉面			4	440	2	
192	砂川	明治大学調査	所沢市北野	砂川堀	下末吉面	IV	280	6	766	2	
192	砂川	市調査	所沢市北野	砂川堀	下末吉面	III		1	83	1	
193	中砂		所沢市北野字中砂	砂川堀	下末吉面	III~IV	6000	24	1579	39	
194	清橋		所沢市北野	砂川堀	立川面	4	7000	1	113	0	0
195	駿河台		所沢市中富	砂川堀	武蔵野面				約160		
196	西台		大井町大井	砂川堀	武蔵野面	IV	19557	4	15	2	16
197	東台		大井町大井	砂川堀	武蔵野面	IV		2	567	1	20
198	本村	17地点	大井町大井	砂川堀	武蔵野面	N~VI	13161	2	121	2	321
198	本村	17地点	大井町大井	砂川堀	武蔵野面	VII~IX	13161	4	99	0	0
198	本村	8地点	大井町大井	砂川堀	武蔵野面	IV	13161	7	314	11	2869
199	上沢		富士見市上沢	砂川堀	武蔵野面		128	1	5	1	
200	貝塚山		富士見市渡戸	砂川堀	武蔵野面	III		2	68		





第I-1図 遺跡分布図



## 第Ⅱ章 多摩川流域と武蔵野台地の地形

### 第1節 多摩川の変遷と武蔵野の地形発達

羽鳥 謙三・加藤 定男・向山 崇久

#### 1. 多摩川・武蔵野地域の地形概観

武蔵野という地域名は南は多摩川、北は埼玉県下の入間川・荒川にまで及ぶが、現在の河川沿いの低地より高い台地はすべて武蔵野台地と総称される。それらの大部分が過去の多摩川堆積物、すなわち河川性の砂礫層のような堆積物で作られている。そしてこの武蔵野の台地面は幾段かの段丘面に分かち、それらの分布は古多摩川流路の変遷を示している。現在の流れはその武蔵野の南縁を限るようにして流れているが、過去の多摩川ははるか北方に流路を持った時期があり、現在の狭山丘陵の北側を通して埼玉県川越市の方に向かって流路を設けたこともある。それは第四紀更新世の時代であるが、現在の多摩川流路が1万年この方の完新世になってからのことであると較べれば、多摩川が現在の流路より北側を流れていた期間の方がはるかに長く、更新世中期以来の数十万年の間における流路は武蔵野地域の北部を主に、やがて南部に至る間くまなく武蔵野を洗っていたもので、実は武蔵野台地そのものがすべて古多摩川の河川堆積物表面なのである。その意味で武蔵野地域は東京都の部分のみならず埼玉県の領域に至るまで多摩川が生み出した土地であり、多摩川がもたらした地形発達の歴史が刻まれている。

武蔵野台地の地表形態に表れる段丘は、古い、また高位面をなすものから順に下末吉面（S面）、武蔵野面（M面、M<sub>1</sub>M<sub>2</sub>M<sub>3</sub>に細分される）、立川面（Tc面、Tc<sub>1</sub>Tc<sub>2</sub>Tc<sub>3</sub>に細分される）、およびその他のより下位の面に分けられる。S面からTc面に至る各面は、東部のS面が海成面であることを除けば、他はすべて河川性の堆積物、すなわち段丘礫層からなり、これらの地形面の上を関東ローム層が覆っている。Tc面より下位の面は多くが完新世になって作られたもので、ローム層は発達しない。

#### 2. 多摩川

多摩川は山梨県笠取山に水源を發し、関東山地の奥多摩地域を東流して青梅から関東平野部に出る。青梅から東は武蔵野台地が広がり、多摩川はその武蔵野の南端を東南東に向かって流れ、羽田付近で東京湾に注ぐ。総延長は138km、流域面積約1,240km<sup>2</sup>に及ぶ。その総延長のおよそ半分は関東山地の中を流れ、深く切り込んだ溪谷をなしている。延長の半ばに当たる青梅から下流の平野部では、武蔵野の台地をなす段丘の崖線によって限られた低地部を次第に緩やかになりながら河口に向かう。青梅の溪口部から平野部に向かって流れ出た多摩川は、しばらくは谷幅が狭く峡谷状をなしているが、羽村市羽中地先付近から河原の幅を増して河沿い氾濫原の低地を発達させるようになる。氾濫原の幅は

羽村市付近で0.87km、下流では2.87kmに及ぶが、途中の支流合流点などで部分的に広がるなど膨縮がある。ここでは河に沿う多摩川低地の発達する中流域の羽村市から下流に関しての地形的な状況を取り上げる。

現在、氾濫原は人工改変が大きく進み、原地形を復元するのは難しい。堤防の内外ともに砂利採掘や構造物・土盛りなどによる改変が進んでいる状況なので、ここに述べる多摩川の状況は多分に人工の影響を受けた結果であることをあらかじめお断りしたい。

### 1) 多摩川中流域の地形

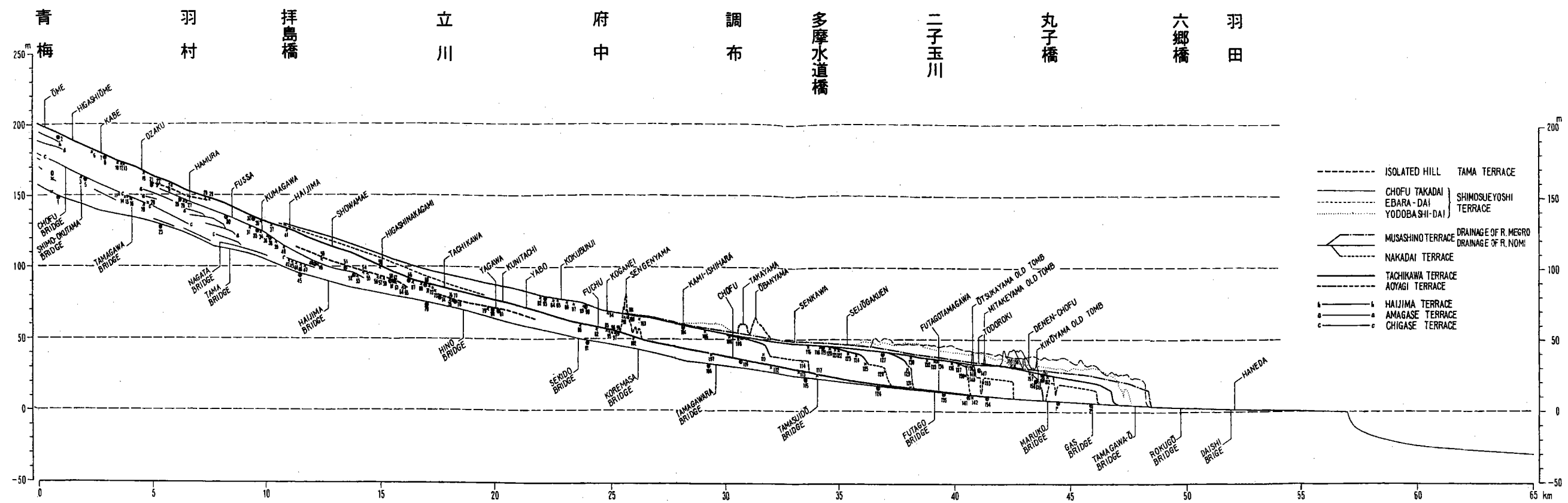
現河床の標高は拝島橋の86mから二子橋の6m付近にいたるまでがおおよそ距離にして28.1kmである。この間の平均勾配は千分率の2.9、各地点の勾配は第Ⅱ-1表に示す。その縦断面形態は第Ⅱ-1図に示す。

表Ⅱ-1表 河床高度と勾配

地点	標高m	勾配(／1000)
拝島橋	86	4.0
日野橋	63	3.5
是政橋	36	2.8
多摩水道橋	18	2.4

### 2) 表層地質と基盤

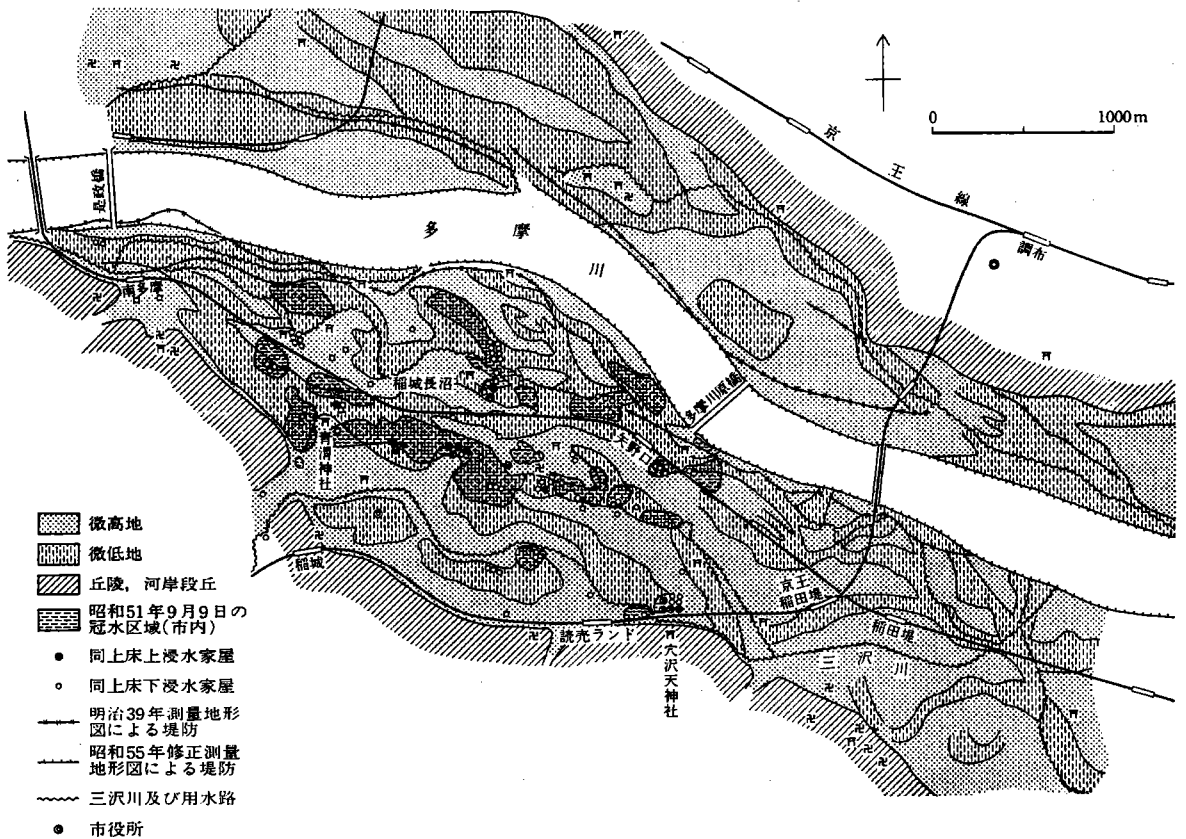
多摩川中流域の沖積層は礫を主として部分的に砂や泥を含む。礫は上流の関東山地の中・古生層に由来する硬砂岩・スレート・チャートを主とし、これに石英閃緑岩を交える。沖積層の礫の厚さは数mから15m、下流に向けて厚くなる傾向がある。基盤地質は最上流の青梅の溪口付近では秩父系の中・古生層スレート・硬砂岩からなるが、羽村市、拝島市一带は上総層群の飯能層の半固結礫層や小宮層の軟質砂岩からなる。さらに下流では上総層群の砂岩泥岩を主としている。基盤の起伏はおおきいところでは10mくらいあるが、二子玉川から下流では過去の海面低下のためにはるかに深く掘りこみ、沖積層下の埋没谷となっている。



第II-1図 多摩川縦断面図 (寿円晋吾 1966による)

### 3) 流域の微地形と流路の変遷

拝島橋から二子橋付近における氾濫原に認められる微高地と微低地の相対高度差は1-2m程度である。微高地は砂礫堆、微低地は旧河道ないし後背湿地である。微低地では礫の上にやや厚い砂、あるいは泥を乗せる傾向がある。稲城市における長沼の地名はこのような微低地が長らく湿地帯や沼地になっていたことによるもので、このあたりの豪雨時浸水区域はこの微低地に一致する（第Ⅱ-2図、向山1991）。江戸時代においてもこのあたりの大丸、長沼、是政の一带では河川の氾濫や流路変遷に応じて村境の移動やこれに伴う土地紛争が起きている（同前）。明治以来の地形図をみてもこの1世紀間における河川敷の変化は相当にある。世田谷区宇奈根から下流においては地形図に読みとられる蛇行の跡がいくつもある。なかでも世田谷区下野毛地区のものは第3京浜国道の橋が通っている地点に顕著な蛇行跡があり、これについての古文書資料（世田谷区文化財保護審議会蔵）によれば、「下野毛村新川のこと 長二百間 横五五間 慶安四年」とある。長二百間とはこの蛇行部を直裁した場合の長さに一致する。多摩川下流の蛇行部は江戸時代初期から直裁河流に開削改修されていったことを示している。



第Ⅱ-2図 稲城市長沼一帯の微地形（向山 1991）

#### 4) 増水氾濫時の現象

##### ■堤防内平野部の冠水状況

明治43年8月の多摩川増水はこの1世紀間を通じて最大のものであった。この増水氾濫時の模様を岩屋隆夫(1986)により抜粋引用する。ここでいう上位面下位面の用語は必ずしも明確ではないがその氾濫ぶりを次のように述べている。「上流部では、当時立川付近から上流がほとんど無堤状態であったので、平野面は上面、下面ともに浸水し、各所で著しい砂礫の堆積侵食があり、田畑の流失埋没が多発した。浸水深は1-1.5mで、湛水期間は0.5-1日であった。」上位面、おそらくそれは微高地を指すものであろうが、平野部が一面冠水して、低所は激しい水流の下に侵食堆積が行われたことになる。第Ⅱ-2表には近年の流水量の変化例を示しておく。

##### ■堤防外河川敷の状況

狛江市多摩川水道橋付近の場合：是政橋-多摩水道橋付近において、本格的連続堤の築堤以前の河床は、現在より幅広く、水流の分岐合流も多く、網状流の様相を呈していたことが明治・大正期の地形図から読みとられる(第Ⅱ-3a、3b図)。現在の堤外地における網状流と砂礫堆の規模は小さく、それらがみられる場所は少なくなった(写真1)。これは両岸の堤防間の幅が狭くなったこと、堤外地に公園、グラウンド等を造成したこと、ダムや取水堰を設けたことなどの人為影響が上げられよう。そういう現状における最近の増水例を次に示す。1999年8月13日、14日の増水は、堤外地の高水敷の一部が冠水するまで水位が上昇した。これにより同水道橋の上流500mから1000m付近の網状流と砂礫堆の様相も一変した(写真2、3、第Ⅱ-4図)。流路の移動と低位の砂礫堆の変形消滅と新たな出現、草本群落の剥離流失、高水敷の側刻による後退などが大きな変化である。93年から98年にかけての増水時には高水敷が冠水したことはなかった。低位の草本群落も倒れることはあっても剥離流失することはなかった。

一方、その前年の98年6月、水道橋付近の造成平坦地が増水に見舞われ(写真4)そのあと、写真5(水道橋より上流50m)のような洗掘と堆積がみられた。水位は写真5の左上の人工平坦面の1m上で、洗掘による崖の段差は1.2mに達した。新しい砂礫堆は右下の水路(下流側)を埋めて前進した。そして99年8月の増水により、写真中のヤナギ属の樹木は倒れ、さらに新しい砂礫が前記段差を埋没させた。砂礫堆の最大礫径は長径22cmである。砂礫堆のうねりの起伏は増し、その前面の角度は26度を示す。

以上のように水道橋付近の河川敷ではこの程度の増水によって侵食の厚さは1.2m、堆積厚さは1.8mぐらいに達することが実際観察された。そして砂礫堆は下流側に10m程度拡大ないし移動している。

表Ⅱ-2 多摩川流量変化(向山 1991)

多摩川原橋地点流況

(単位: m<sup>3</sup>/s)

	最大	豊水	平水	低水	濁水	最小	年平均	河況係数
昭和57年	4,426.76*	21.75	10.75	6.96	4.81	1.98	38.77	2,235
58	1,892.74	17.66	13.59	8.58	5.72	5.06	33.19	374
59	350.93	11.50	8.76	7.68	6.09	3.51	12.29	100
61	1,257.24	22.90	13.54	7.76	4.75	0.43	25.98	2,924
(4か年平均)	1,981.92	18.45	11.66	7.75	5.34	2.75	27.56	720.7
62	248.62	15.62	10.82	7.86	4.12	3.29	14.86	—

\*は8月2日台風10号の影響, 昭和62年は建設省, 石原流量観測所日流量資料. 他は『日本河川水質年鑑』(建設省河川局, 1987年)による. 昭和60年は欠測.



写真1 狛江市元和泉 都立狛江高校より上流をのぞむ(1997.12)



写真2 写真1と同所(1999.8.14)



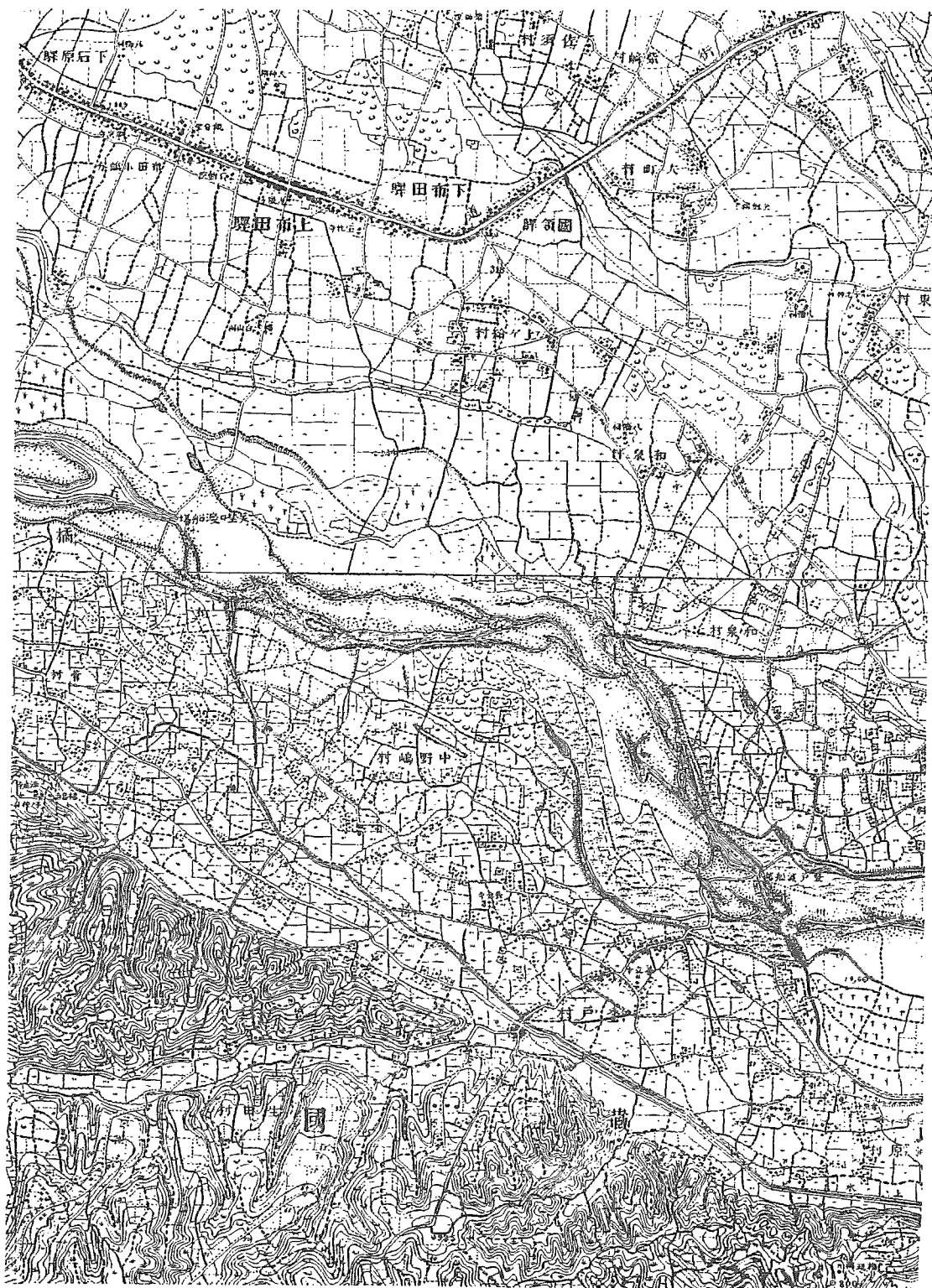
写真3 写真1と同所 (1999.10)



写真4 多摩水道橋上流側50m (1998.6) (左手が左岸)

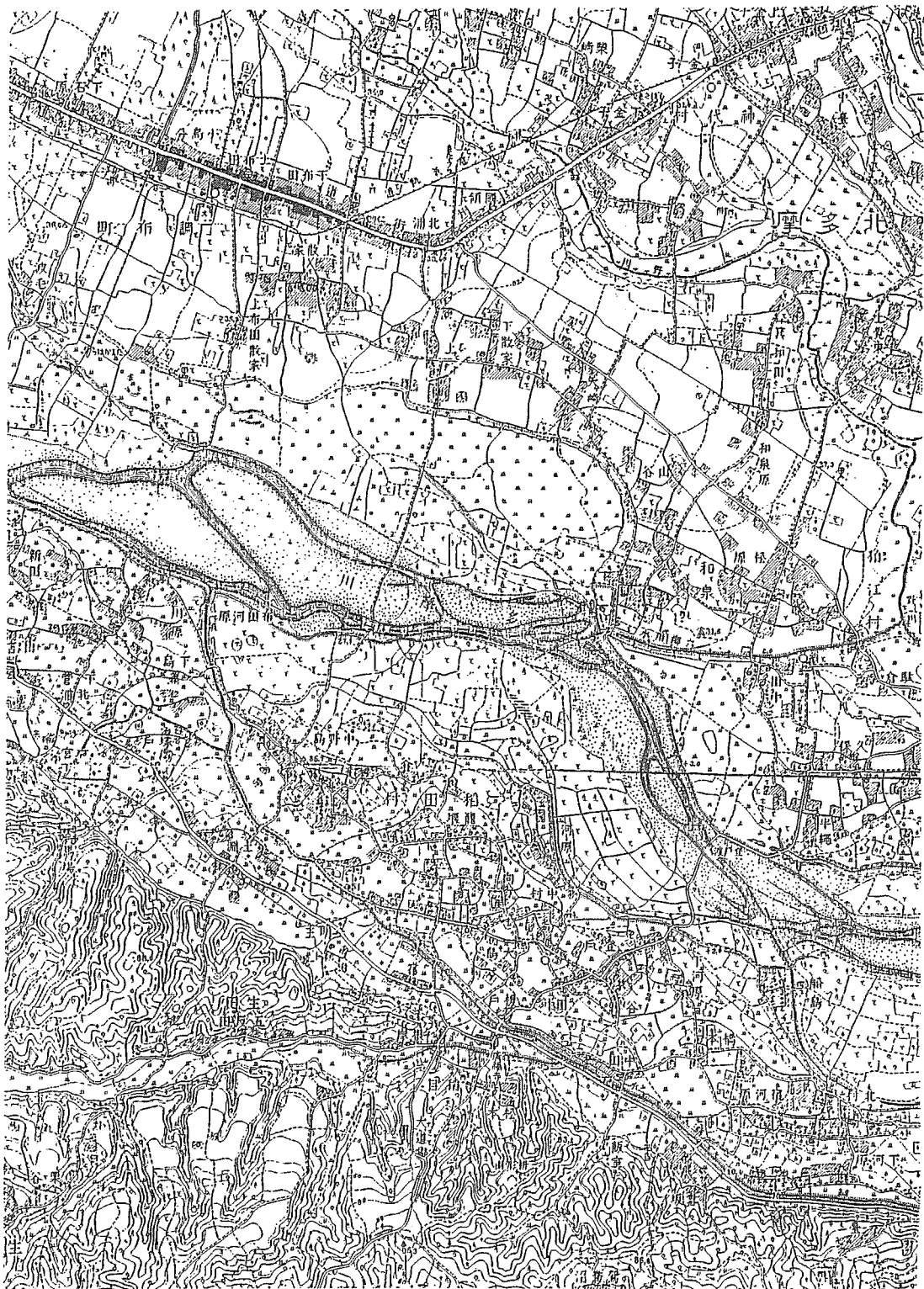


写真5 写真4と同所 (1998.10) (右手が左岸)

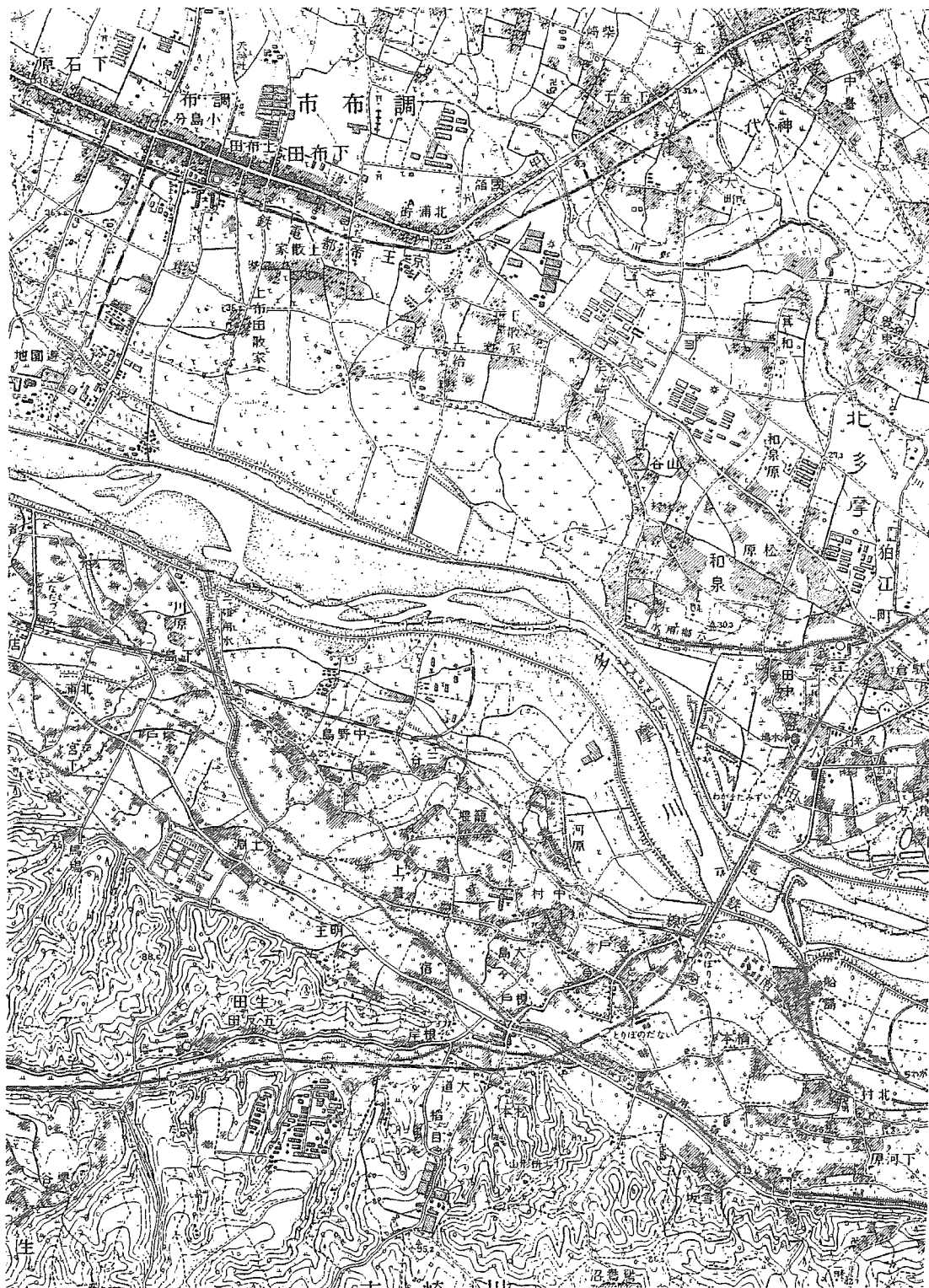


第Ⅱ-3a図 多摩川流路の変遷 参謀本部陸軍部測量局「布田駅」「登戸」  
 明治13、14年測量 20000分の1図を25000分の1図に縮小

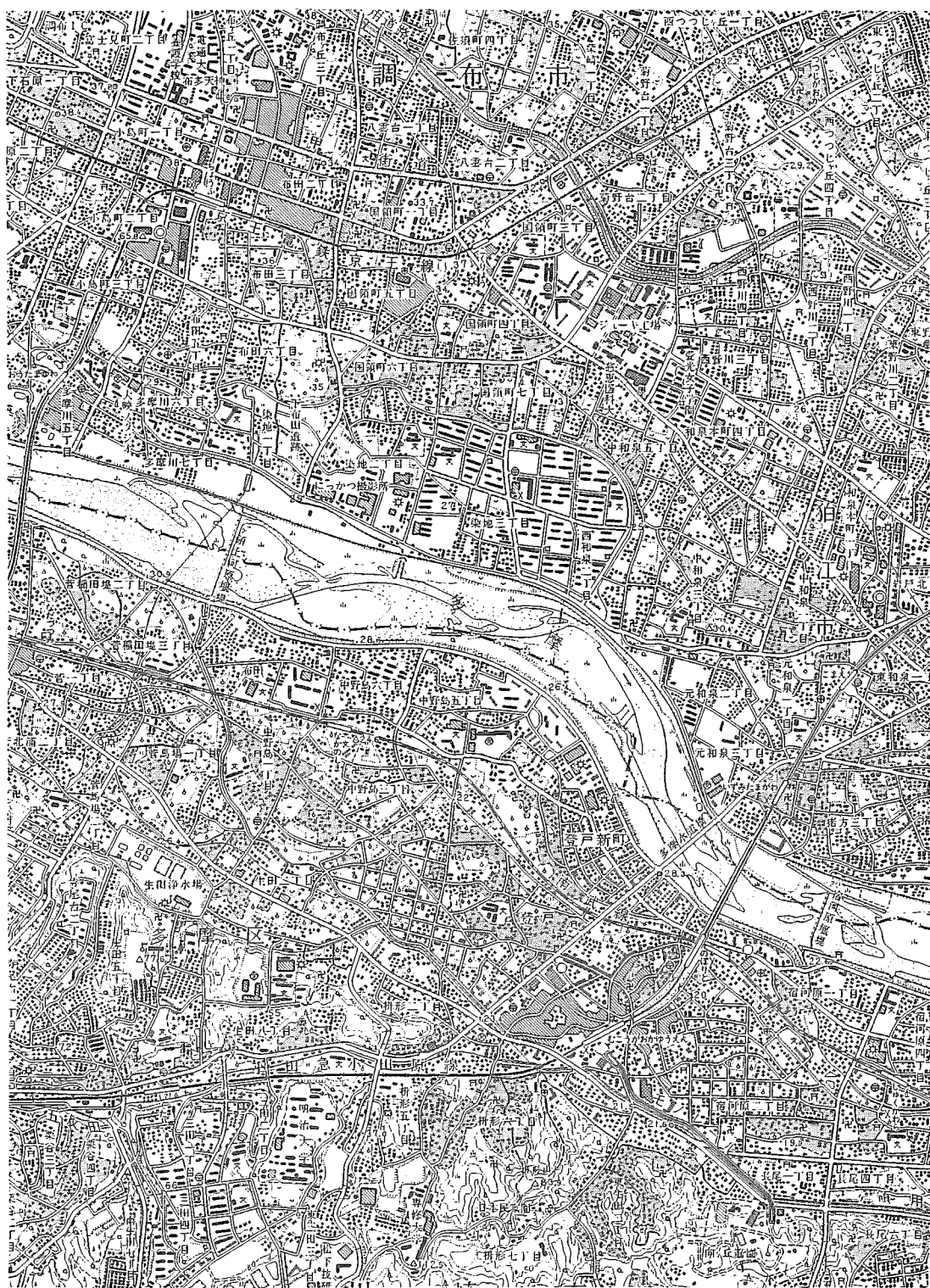




第Ⅱ-3b図 大日本帝国陸地測量部 25000分の1「溝口」大正6年測量

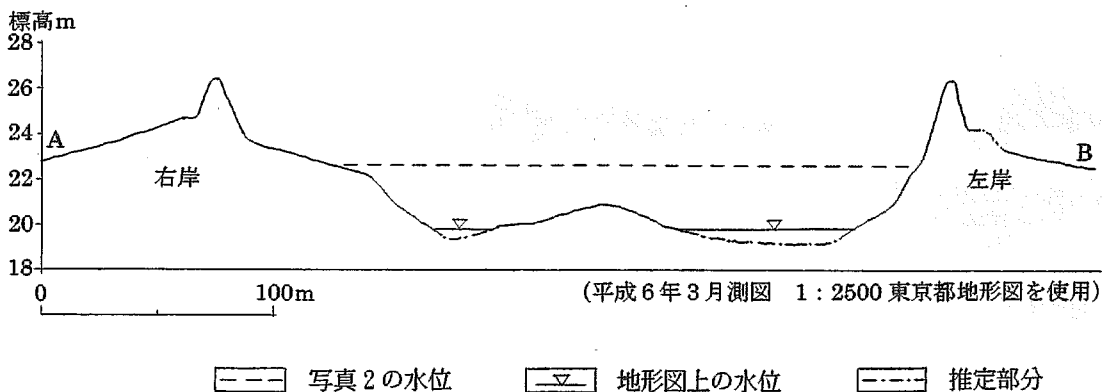


第Ⅱ-3c 図 地理調査所 25000分の1「溝口」昭和12年測量



1:25,000 溝口 0 500 1000 1500

第Ⅱ-3d 図 国土地理院 25000分の1「溝口」平成5年 修正測量



第Ⅱ-4図 多摩水道橋上流620m地点(写真1、2のほぼ中央)の河床横断面  
写真2の増水時(1999.8.14)における河川横断面を示す

### 5) 河床洗掘現象

近年多摩川河床は洗掘が進んでいる。堆積物の砂礫が減少し被覆を失った河床に基盤岩層が露出する面積が増えてきた。この原因については1950年代の建設用骨材としての砂利採取が大きく関係するとみられて、1960年代に入ってから河床の砂利採取が禁止となった。しかしその後数十年たった現今も河床洗掘の傾向が進んでいる。原因として過去の砂利採取の影響が今日まで及んでいるという見方や、奥多摩湖の小河内ダム建設による下流への砂利供給減少の可能性も上げられるが、後述のような流路巾の狭小化が考えられる。

原因はともかく、洗掘による河床低下の状況を捉えてみると、この現象が目立つのは主として立川から上流の地域である。立川付近から上流に向かうと、河床礫が洗い去られて基盤岩層である上総層群の砂質あるいは泥質の地層が露出する場所が随所に見受けられる(写真6)。JR八高線の鉄橋の下流50mの河床で洗い出された上総層群小宮砂層の中からアキシマクヅラが発見されたのは1961年であるが、その後も現在に至るまでこの辺りから上流の拝島市一帯の河川敷でメタセコイア樹根や哺乳動物化石がしばしばのように発見されており、99年にはアケボノゾウの足跡化石も発見された。多摩川支流北浅川でも同様の例がある。その他の支流でもメタセコイア樹根が知られ、多摩川水系全般に上流部では河床低下が生じているとみられる。八高線鉄橋下(写真7、8)も現在一層洗掘が進み、ポットホールを延伸したような深さ2mにも達するグループ状の溝が流れの方向にえぐられて、当時に比べて平均2m程度は河床が低下している。このため鉄橋橋脚部は侵食を防ぐための防御工事が施されている。この種の深いグループは拝島橋下でも顕著である。グループが浅いところでは河床面が平板状をなしており、メタセコイア樹根が多数分布する。拝島付近の多摩川河床に残る中州の表面は厚さ2-3m程度の砂礫に覆われるが、その下の基盤は河床面に露出する上総層群に続く。そしてその基盤表面高度は低水位面より2-3m高い位置にある。取り残された中州に対して現河床は明らか



写真6 八高線鉄橋下から下流をのぞむ(2000.5)  
左右両岸の草付平坦面にある礫は薄い(2m前後)

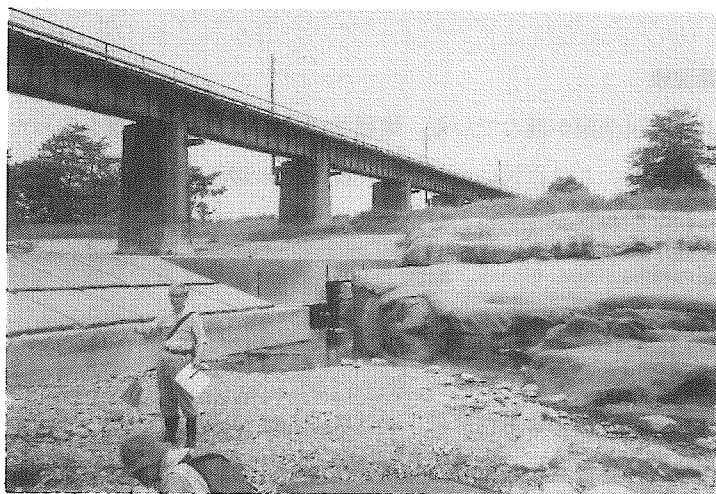


写真7 八高線鉄橋下流側(2000.5)

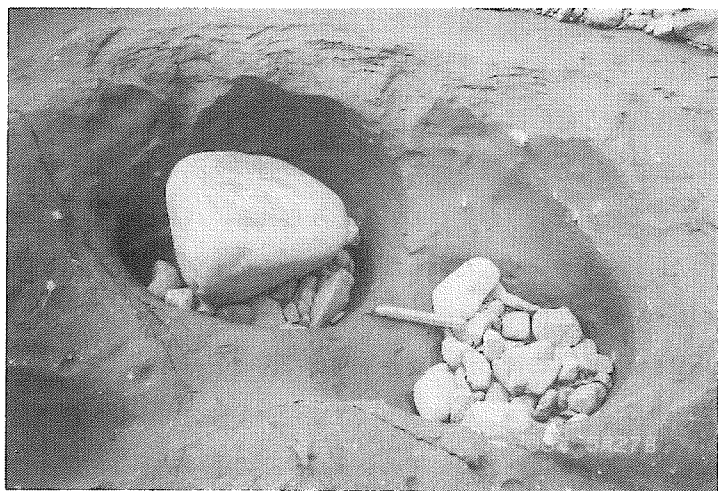


写真8 同所河床(2000.5)(スケールは20cm)



に低下しているのである。このような近年進んでいる下刻の原因の一つに、現河床礫のサイズの著大さが考えられる。立川から上流に向けて礫のサイズはとくに大きく、拝島付近での現河床礫の最大は50cmにも達する。これに対して付近の段丘礫層中の最大粒径は25cm程度である。過去の自然的状態の河川に比べて現河床では際だって大きい。増水時の激流によってこのような巨礫が川底を転動していく場合、河底に与える削磨作用は甚大であろう。このように著大な礫を運搬可能にしたものは増水時の流速増大である。流速増加の原因には近年の連続堤や河川敷内の諸造成工事などによる河川流路の狭隘化が関係していると考えられる。

なお、流路の狭隘化が原因と考えられる洗掘下刻の現象は、自然的河川であった当時の多摩川においても大規模な形で行われてきた。これについては5と6で述べる。

### 3. 河岸段丘としての武蔵野台地

#### 1) 関東ローム層と段丘区分

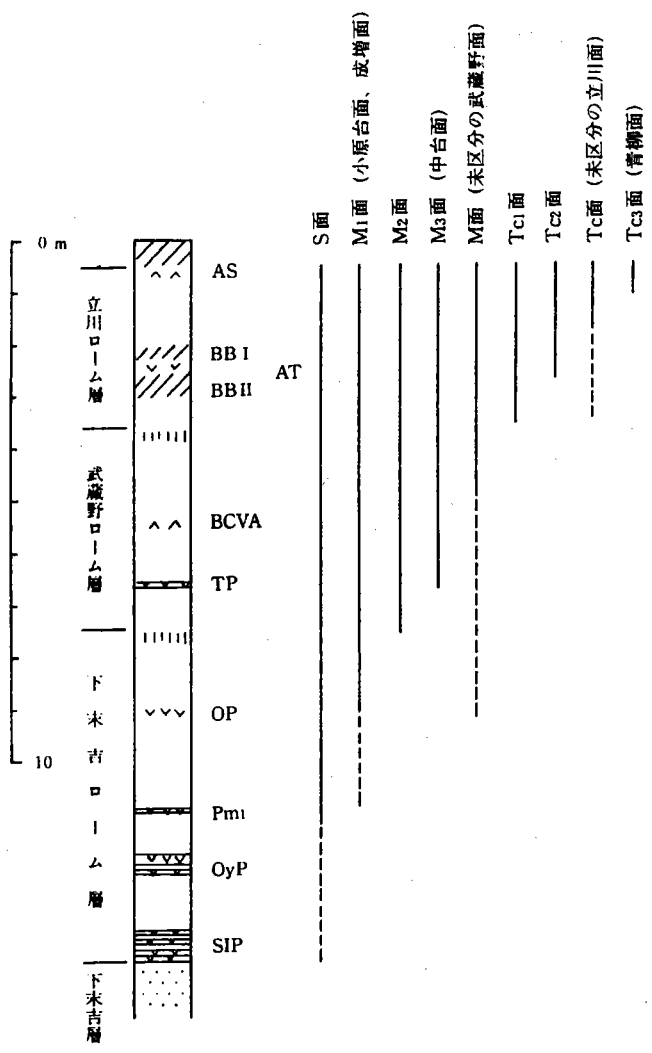
武蔵野地域の地形は主として多摩川が作った河成の段丘である。段丘は高位の古い段丘から多摩(T)・下末吉(S)・武蔵野(M)・立川(Tc)の4段丘面に区分されるが、これらはさらに細分されることがある。これらはすべて第四紀更新世に属するが、多摩川のやや上流部には拝島段丘以下のローム層を伴わない低位の段丘があり、多くは完新世に属する新しい段丘である。それらの段丘区分の仕方は第Ⅱ-3表に示す。下末吉面以下の各地形面とローム層の関係をより詳細に示したものが

表Ⅱ-3 武蔵野地域段丘面一覧表

段丘名	細分地形面	構成堆積物	時代
千ヶ瀬段丘		段丘礫層	完 新 世
天ヶ瀬段丘		段丘礫層	
拝島段丘		段丘礫層	
青柳段丘	Tc3面	青柳礫層・立川ローム層最上部	更新世末期
立川段丘	Tc1, Tc2面	立川礫層・立川ローム層	更
武蔵野段丘	M3面	武蔵野礫層・武蔵野ローム層	新 世
	M2面	武蔵野礫層・武蔵野ローム層	
	M1面	武蔵野礫層・武蔵野ローム層 及び下末吉ローム層最上部	
下末吉段丘	S面	下末吉ローム層・下末吉層、 日野礫層、所沢礫層	後 期
多摩段丘	TⅡ面	多摩2ローム層・おし沼砂礫層・ 青梅礫層・東京礫層・東京層上部	更 新 世 中 期
	TⅠ面	多摩1ローム層・御殿峠礫層・ 芋窪礫層・東京層下部	

第II-5図である。完新世の段丘にはなんらのローム層も乗らないが、Tc面の段丘以上にはその古さに応じて古いローム層が累加する。各地形面の名称とそれに乗る最下位のローム層名は原則として対応するが、M1面の場合は下末吉ローム層の最上部、Pm1パミスから上位の部分が乗ることがある。これは武蔵野礫層とPm1パミスが同時異相であることからそのように扱われるのであって、したがって、Pm1が武蔵野礫層の一部として、水成であることが条件となっている。もしそれが風成であればS面として扱われることになる。

なお、段丘地形の地形面を形成しているのは基本的には風成のローム層ではなく、水成である段丘礫層や海成層であるから、段丘面の時代性はそれに乗る風成ローム層の下限層位によって示されることになる。いいかえれば段丘形成層の離水時期が段丘面形成期であり、段丘面形成層の本体の層準で



第II-5図 地形面とローム層の関係 (東京都 1996より)

はなく、最上位の層準に相当する。段丘面は海面変化や地盤隆起の影響を受けて形成されることが一般であるが、武蔵野西部のように海面変化の影響を受けることから遠く、このために明瞭な段差を生ずることもなく、武蔵野礫層が堆積した表面が立川期前半まで離水することがなければ、武蔵野礫層から構成された地盤でありながら、立川ローム層しか乗せない、すなわち立川面ということになりうる。実際に武蔵野内陸部である立川北部の地域では、武蔵野段丘、立川段丘を分ける国分寺崖線が消滅して両段丘面は高度的に一連となり、ただこれを覆うローム層に武蔵野ローム層があるかないかだけの差となる。各面ともこのような離水フェーズの違いから同一段丘面でもローム層の重なり方の差、いかえれば厚さの差が生じている。またこのようなことから立川礫層と武蔵野礫層が区別つかない、あるいはまた同様にして、武蔵野礫層と下末吉面構成礫層とが区別できない、むしろ両者は一体であるという場合もありうる。このため地形面区分図のほかに参考のために、実際のローム層厚分布図も添えておく（第Ⅱ－6図）。

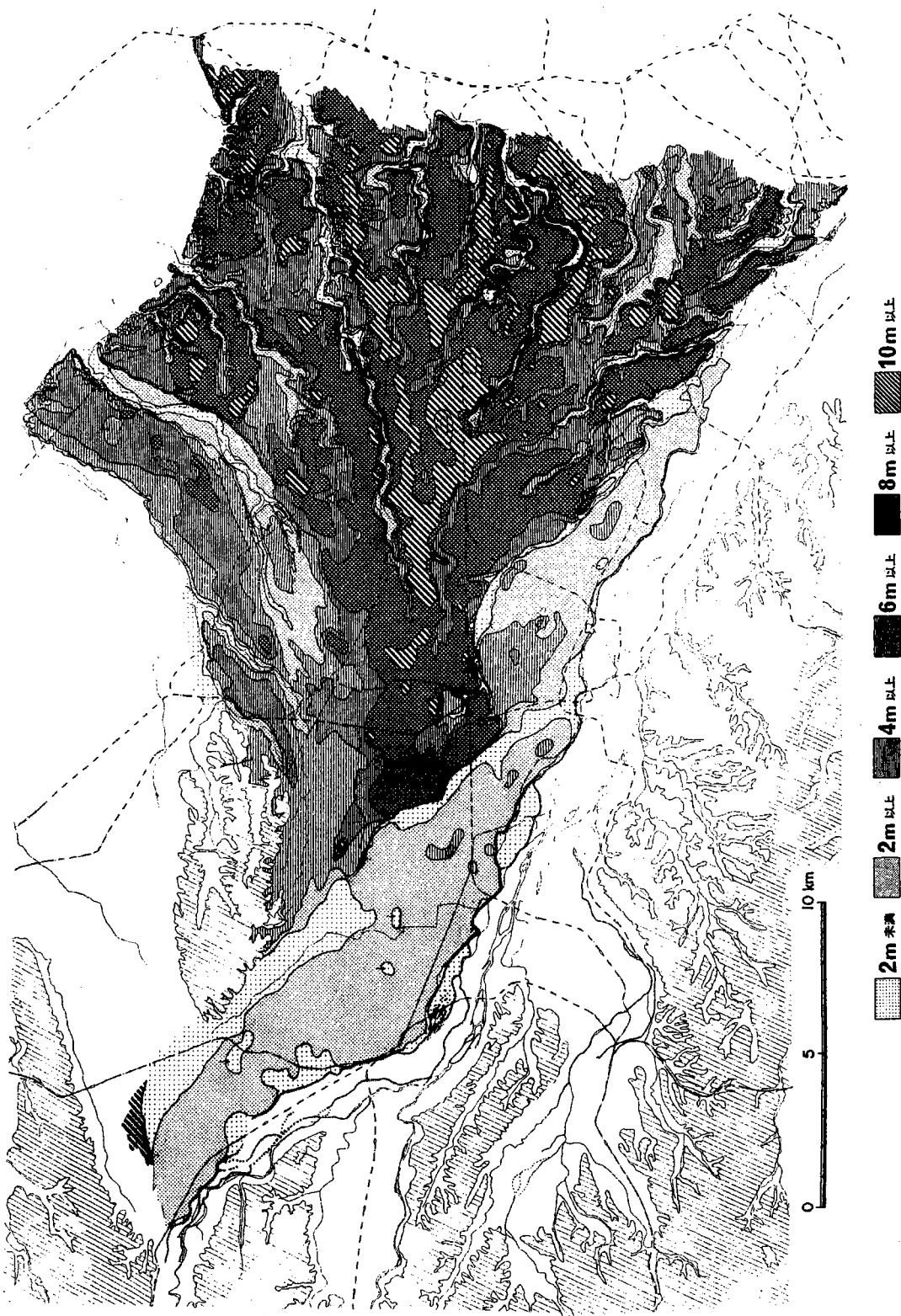
## 2) 各段丘の分布と発達状況（第Ⅱ－7図参照）

**多摩Ⅰ面（TⅠ面）：**本段丘は多摩丘陵西部の稲城市以西、八王子市にかけて発達する。段丘面としての平坦な面は残さず、丘陵尾根に段丘堆積物としての御殿峠礫層を点的に残すのみである。礫層上には厚い多摩ローム層（TⅠローム層）を乗せ、その頂部がほぼ丘陵尾根の頂部であり、失われた段丘平坦面の高度に近いものと考えてよい。この高度は八王子西部の御殿峠では標高200m、稲城市東部で130mを示す。御殿峠礫層の厚さは10m程度、礫層基底高度は地形頂部の高度から約30m減じた値である。構成礫は激しく風化してシャベルで切れるほど軟質となっている特徴がある。また構成礫には丹沢山地起源の火山岩礫が含まれ、これを運んできたルートが相模川系であることを物語っている。

**多摩Ⅱ面（TⅡ面）：**本段丘は多摩丘陵東部の川崎市登戸付近にあり、90m内外の高度を持つ。段丘面はほとんど残らず、緩やかな丘陵頂面によってTⅡ面が表現される。この地形面を構成する地層は浅海性のオンシ沼砂礫層で厚さは約10m、礫層基底は丘陵頂面から約30m減じた高度で過去の波食面の性格を持つ。多摩川との直接関係は示さない。

**下末吉面（S面）：**この地形面の標識的発達には川崎市溝の口付近から南側の下末吉台地一帯である。約50mの平坦面を有し、多数の侵食谷を発達させる。5ないし6mの下末吉ローム層の下に1－5mの砂層ないし泥層からなる海成の下末吉層が発達する。同等の地形面は多摩川北岸の武蔵野台地内における荏原台、淀橋台として発達する。高度は30－40m、地質の状態は川崎市における下末吉台地の場合とほぼ同様である。また、多摩川上流部の日野市における日野台地も同等の地形面であり、完全に河成の段丘である。さらに武蔵野北西部の所沢台、北端の金子台も同等の下末吉面の河成段丘である。これらの河成の段丘面の高度は沖積面からの比高が25ないし30mに及ぶかなり高い段丘であるが、海成のS面地域に比べると谷密度は低い。

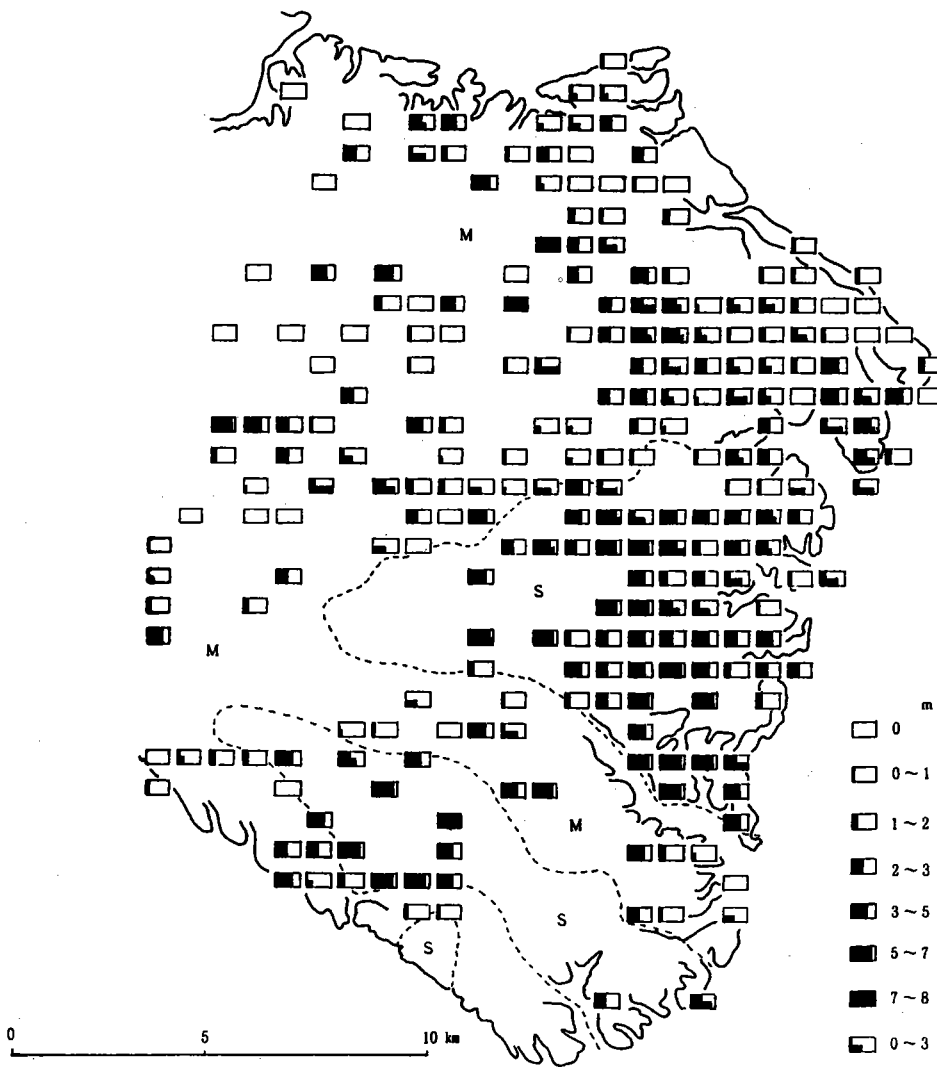




第II-6図 ローム層の厚さ(細野義純原図)



**武蔵野面（M面）**：武蔵野台地の中でもっとも広い分布を占める。武蔵野面は高度と乗せているローム層の層位的厚さによって3面に分けられ（前述）、高い方からM1, M2, M3各面に区分できる。この分布は古多摩川の流路変遷を示すものである。各面ともローム層の下に段丘礫層である武蔵野礫層が3-10mの厚さで横たわる。礫層中には砂あるいは粘土が含有されたり、層状に挟まれることがあるが、とくに上限のローム層に移化するあたりには粘土が顕著に発達することがある。武蔵野東部では特にこれが厚く、7-8mに達する灰白色の粘土層となって板橋粘土層と呼ばれる。これらの粘土はもともと武蔵野礫層を堆積させた古多摩川の河流による氾濫の最終堆積物であるシルト（フラッドローム）に、堆積していた当時降灰した火山灰物質が粘土化して生じた物質が混じた場合が多い（第II-8図）。



第II-8図 武蔵野台地の粘土層層厚分布（羽鳥原図）



武蔵野面の台地上にも水流侵食で生じた小谷が多い。武蔵野面高度はM2面に関していえば沖積面との比高が15-20mであるが、M1面はこれより3mほど高く、M3面は5-7m低く、発達分布は断片的で狭い。多摩川沿岸におけるM面は大部分がM2面に属し、立川面ないし沖積面との間には顕著な段丘崖が発達する。この段丘崖は国分寺崖線と呼ばれる。

**立川面 (Tc面)** : 武蔵野台地の南縁、多摩川北岸の立川市一帯に分布が広い。その他武蔵野北部の狭山丘陵北側を通る発達川越南部に及ぶほか、武蔵野台地内部の小谷沿いにも小規模に見られる。小谷内部のものを除けば顕著な段丘礫層がローム層下に発達して立川礫層と呼ばれる。厚さは3-10m、概して粘土をあまり含まない砂礫層である。多摩川沿岸の立川面はこれに乗る立川ローム層の層位的重なりによってより高位のものからTc1面、Tc2面、Tc3面に分けることができる。このうちTc1と2は上に乗せる立川ローム層の厚さの差だけで地表高度に大差はないから、ともにほぼ一連の立川段丘面をなしている。これに対してTc3面は青柳段丘面とも呼ばれ一般の立川面より10mほど低い小段丘をなしている。この段丘は国立市青柳のほか拝島市付近などに点在的な発達をする。被覆するローム層は立川ローム層の最上部50cm程度で、地点によっては下位の段丘礫層中に混入していて被覆層中に認められないこともある。

多摩川沿いにみられる立川段丘の発達形態の特徴は下流に向かう勾配が強いことである(第II-1図参照)。武蔵野段丘との高度差は国分寺付近で15mほどあってこれが国分寺崖線の呼び方を生んでいるのだが、より西方に向かって高度差は減少し、立川市北部では武蔵野面と立川面の高度差はほとんど無くなる。これは立川段丘面の下流に向かう勾配が強いためである。武蔵野面や下末吉面の段丘面の段丘面における下流への勾配は現多摩川の河床勾配(多摩川の縦断面曲線)と等しく、それぞれ互いに平行しているが、立川段丘面はより強い勾配を持つためにこれらと斜交する傾向を持ち、下流の二子玉川付近で沖積面下に覆没する。これは立川面形成が氷河性の海面低下時に行われたためである。これより下流の東京湾沿岸地帯では立川面は沖積層の下の埋没段丘として、海水準下20-30mのレベルに達している。このような傾向は多摩川沿岸以外でも同様にして沖積層下の埋没段丘につながっていくことが認められる。

**ローム層を伴わない段丘** : 多摩川沿いでは青柳段丘よりさらに下位に拝島段丘があって拝島市、日野市付近に発達する。さらに下位には天ヶ瀬段丘、千ヶ瀬段丘などの小段丘があるが、いずれも多摩川河岸の拝島市よりさらに上流に限られる。

**沖積面低地** : 多摩川沿い沖積地のほか、その他の河川とくに幾つかある小河川沿いの低地、東京湾岸の低地などあるので、これらを分けて示す。

**多摩川沿い沖積地** : 多摩川の両岸に広がる沖積地は西の青梅付近から東方の二子玉川にいたるまで砂礫によって構成されている。その最表層部は概して砂となっているが、二子玉川から下流では砂のほかにシルト質の粘土が表層だけでなく礫層中にも多少介在することがある。礫サイズは当然上流に大きく下流に小さく、付近の立川段丘などの諸段丘の礫とはサイズも形も岩質も類似する。ただ

し諸段丘の場合だとその古さに応じて礫の風化が認められる。多摩川沖積地の礫は現在の河川敷における河原の場合と同様、わずかな微起伏はあるが、礫質の表面を覆う砂により、また耕作等による人為作用によりほとんど平坦である。

**小河川沿いの沖積地：**多摩川から離れた武蔵野地域には野川のような段丘下に生じた小河川や、台地中の支谷中を流れる神田川、石神井川をはじめとする多数の小河川がある。これらは段丘崖下や支谷内の湧水によって函養された流水であるとともに最上流部の谷頭は台地内にあるから、礫の供給は既存の台地構成礫層しか無く、かつその運搬力にも乏しいので、谷底に礫層が発達することは少ない。あるとしてもそれはその場所における台地構成礫層の礫が少量洗い出された程度のものである。したがってこれらの支谷谷底堆積物は台地から洗い出されたローム物質あるいは腐植土からなる泥土であって、しばしば泥炭質となる。それらの中には立川期に生じたものが横たわることがあり、その代表的なものが妙正寺川（神田側の支流）における江古田層である。江古田層は武蔵野台地内支谷中の立川面堆積物であるが、それ以後の完新世沖積層とは高度差がなければ区別が難しい。

#### 4. 扇状地としての武蔵野台地

武蔵野台地は段丘地形であると同時に扇状地地形でもある。武蔵野の地形図を見ると等高線配置は西端の青梅を扇頂部として東に向かって漸次地形が低下し、東端の荒川低地、東京低地で終わる扇形を描くような等高線配置がみられる（第Ⅱ－9図）。これによって武蔵野は扇状地という観念が生まれていた。しかし一方、すでに述べてきたようにそれは古多摩川が作った河成の段丘すなわち河岸段丘であるとも理解されてきた。武蔵野台地は段丘ではあるが単一の段丘ではなく、すでに述べたように時代を追って作られてきた幾段かの段丘に区分されている。それぞれの段丘のどの範囲が、どのような営力で、そしてどのような順序で、どの時代に形成されてきたかの歴史事情が明らかにされている。それに対して武蔵野扇状地という表現にはそれらの歴史的な位置づけや成立事情が明かでない。もっぱら現在の形態について称しているだけなので、武蔵野台地の数ある段丘のどれが扇状地に該当するのか段丘論との対応がなされなかった。本稿では可能な限り諸段丘と扇状地との対応に言及し、武蔵野台地の性状を分析することにしたい。

##### 1) 扇状地としての地形的特徴

武蔵野台地の範囲は青梅を扇頂部として東に広がり、北は入間川及び荒川低地によって囲まれ、東は東京湾岸の低地に、南は多摩川によって限られる東西約45km、南北約28kmの広がりを持つ。標高約200mを示す青梅を扇頂として扇形に等高線が配置して東端では標高約20mで終わる。その広がり全体が扇状地というわけではないが、末端にいたるまで扇形を示す等高線分布の姿からは、ややもすると台地全部が扇状地であるという印象も与えてきたことは否定できない。しかし東部における台地面勾配はきわめて水平に近く、本来扇状地として認識される地表勾配としては緩すぎる。扇状地

範囲は台地中央部に近い50m等高線のあたりから西側と見るという指摘(貝塚1957)は一応妥当と思われるが、後述するように武蔵野扇状地はいくつかの時代にわたる複合体なので、時代ごとに扇状地範囲は異なる。50m線の位置はその最終扇状地における値と理解される。しかしこの値も本来明確に指定しがたい事情がある。というのは武蔵野台地の北部と南部とではかなり地表勾配に違いがあるからである。武蔵野台地を南北に分ける境界として、仮に狭山丘陵から綾瀬川を通る線とすると、地表勾配は北側では1000分の10、南側ではこれよりはるかに小さく、とくに50m線より東ではほとんど水平に近い。南側の特に南半の50m以下の地域は扇状地最終時期の下末吉海進が及んだ地域と推定されるから、その点からも扇状地範囲は南半では50m線以西とされるのである。結局武蔵野の扇状地地形は全体としてみれば南半の50m線の位置を北に延長した線の西側とするのが一応の目安であろう。

## 2) 扇状地に由来する凹地と支谷の分布(第II-9図参照)

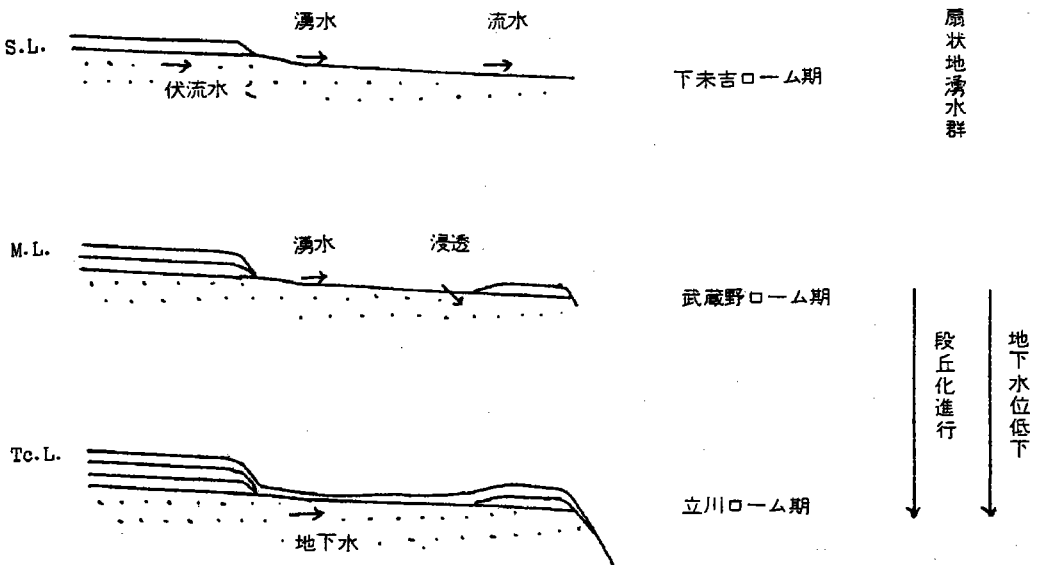
武蔵野台地には多数の侵食で生まれた支谷が発達する。延長の長いものは東西性で、台地面の勾配に応ずる傾向を持つ。またこれらの谷と接続した浅い谷、もしくは孤立した浅い谷で出口の無いような谷もある。出口の無い谷で延長がきわめて短いものは凹地である。ここでいう凹地とは地図上閉曲線で表されるもので、その形状は短径50-100m、長径100-200m程度の不規則な円または楕円ないし不定形で、その深さは台地面から3-5mに及ぶ。かつて吉村信吉(1943)が取り上げた窪地とほぼ同じであるが、吉村の窪地には一端が開けたものも含まれているので、ここでは閉曲線で囲まれたもののみを指すことにする。この凹地について羽鳥はかつて予察的研究(1980)として述べたことがあるが、以下これにしたがって述べる。第II-9図には凹地の分布を示す(図および表における凹地数は、主として1955年版国土地理院1万分地形図に閉曲線で表現されたものによるので、より微弱なものまでとらえればその数は増えるであろう。とくに立川面における凹地は深さ2m以下、その形態も微弱であるから、松田隆夫氏による別稿の立川面凹地数とは数が一致しない)。とくに多い地域は小平市一帯で、大沼という地名はそこが水が溜まりやすく、沼が存在したこともあるような事情に由来する。小平市学園東町の通称坂下商店街となっている凹地はこの一帯でもっとも顕著な凹地であるが、古老の言によれば(市議員小川善一氏)大正から昭和初期にかけてこのあたりは雨水、排水の溜まり場となって常時沼をなしていたという。以上地図上閉曲線から見いだされる凹地数は60以上に及ぶ。それらの特徴を示すと、およそ次のような性格がある(羽鳥1981による)。

- ① 分布は主として台地高度50m以上の範囲、つまり扇状地的範囲内に多い。
- ② 凹地が位置するのは台地支谷の谷頭部の上流延長部とみられる場所である。
- ③ 武蔵野台地の地形面区分の上で古い方、S面、M1面に多く、これより低位面に行くとも頻度が減る。立川面はもっとも少なく、また深さも顕著なものはない。
- ④ 凹地の場所でローム層下の段丘礫層表面高度に変化はない。地形が低い分だけローム層の厚さが薄くなっている。その場合ローム層の下層位が欠如しているために薄くなっているのである。また



そういう場所の薄くなったローム層の下部ほど粘土質である。

以上示した諸特徴の中でもっとも基本的な点は④における地質学的な事実である。かつてこのような凹地の存在は「ダイドラボッチ」の足跡とも俗称され、成因をめぐる「風食」「シンクホール」などの意見もあった。シンクホールとは下に横たわる礫層の隙間に上層のローム物質が流れ込んで生じた凹みではないかという考えである。風食ならばローム層の上層位が欠如するであろうし、シンクホールなら下層位が欠如することになるだろうが、いずれにしても説得力に欠ける。ここで③の問題が注意される。現在の谷頭部の上流延長にあるということはローム降灰で埋められる前、支谷がそこまで延びていたことを意味する。その谷頭部を残して以下の流路が降灰で埋没された結果出口の無い谷、つまり凹地となったと考えることがもっとも妥当である。なぜ谷頭部だけが降灰を排除して凹地として残り得たかといえ、そこは谷頭の湧水点であったことによるであろう。ロームで覆われる以前、礫の堆積表面に地下水が湧出する状態があった、ということになる。扇状地は一般に表面流水に乏しく伏流水に富む。伏流水は扇端部を始めとして湧出点が随所に生ずる。湧出して地表流水となり、以下小河川となる場合もあるが、再び地下に浸透することもある。そこに火山灰が降灰すれば湧水・流水部分には灰は積もらず、流路以外の場所に灰は積もり、高さを増して行く。そのため流路部分は下方侵食を行わなくても相対的に深さを増す。流路の水が下流で地下浸透すればそこで谷は終わりとなり、出口の無い浅い谷となって残される。湧水点から十分な流路をとることなく地下浸透した場合にはそこだけの凹地となる。このプロセスは第Ⅱ-10図に示される。凹地はそれより地形的下方に存在する谷の谷頭部とはきわめて微弱な谷的地形で結ばれている場合が多いのである。かつて武蔵野台地を刻む支谷は雨水などによる地表流水がもたらした侵食による発達だと見られてきた。もし全てそ



第Ⅱ-10図 凹地形成の概念図 (羽鳥 1981)



うならば支谷は時代とともに上流に向かって流路延長を行ってきたはずである。しかし実状は逆である。かつては現在の谷頭部よりさらに上流に谷頭が存在したのである。時代とともに流路延長どころか流路短縮が起きたのである。そして流路自体はローム層の堆積する以前、礫層（扇状地礫）堆積当時から存在していた。現在見る支谷のうち、樹枝状に分かれた小枝谷は雨水等による地表流水の侵食であろうが、本谷である東西性の長い流路は侵食の結果ではなく、原扇状地面に本来的に存在していた流路が降灰を堆積させることなく残り残されたものである。

扇状地礫の表面に伏流水から湧出した水が存在した地理的地形的条件についてみると、まず凹地の分布範囲は①に示したようにおおむね50m線の範囲の中に多い。そして50mの辺が扇状地の末端部に近いものと考えられる。扇端部は一般に伏流水の湧出がとくに多い地帯であるわけだが、これにふさわしく50m線の付近には井の頭池、三宝寺池などの今日まで続く湧水池が並ぶ。次に凹地の分布上注目されるのは武蔵野の地形面区分との対応である。③に示したように多くがS面とM1面にあってM2面になると少ない。このことは武蔵野の地形面の古い段階ほど扇状地的性格が強く、新しくなるほど河成段丘の性格を強めたためと理解される（羽鳥1981）。各面の礫層の厚さを見てもSやM1では10mを超えることが多いのに対し、M2では5m程度となっていて扇状地としてはきわめて薄い。伏流水湧出の兆候が乏しくなっていることと併せて、段丘の性格を強めていることを示すとみられる。

ここで地史的背景を想起すると、S面は13万年前の下末吉海進による高海面期であり、続く8-9万年前のM1面も準高海面期である。さらに続く6-7万年前のM2面の時期からの海面低下はM3面、Tc面に向かって決定的となる。この海面低下によって多摩川などの大河川は下刻に伴う低位の諸段丘面を刻むことによって、既存高位面（S、M1面）礫層中の水は低位面に向かって排出するようになる。こうして段丘化が進むにしたがって、高位面礫層中の地下水位低下、湧水の減少と流路の水の再浸透、降灰による流路埋積、そして取り残された凹地や浅い谷、という現象につながると考えるのである。第II-4表に武蔵野における凹地の存在数を示す。凹地密度は古い地形面に多く新しい面に少ない。武蔵野扇状地の初期段階に凹地が多く出現したことが読みとられる。これに関する地形発達史的意味については6で述べる。

### 3) 武蔵野台地の地下地質（地下に埋もれている扇状地）

武蔵野台地の主要部分であるM面構成の礫層は武蔵野礫層である。この名称はM1、M2両面に用いる。また、S面構成層は海成層なら下末吉層であり、陸成礫層なら下末吉層相当層として扱う。武蔵野台地を作るのはローム層を除けば武蔵野礫層と下末吉層またはその相当層である。野外的識別が困難な場合には下末吉相当礫層も含めて武蔵野礫層と一括して呼ぶ場合がある（加藤・新堀1973）。これは便宜的かつ広義の武蔵野礫層である。

このような用法で呼ぶ広義の武蔵野礫層は、段丘礫層であると同時に扇状地礫層の性格をも持っているが、これより下の層位にも複数の扇状地礫層が存在する。その一つは武蔵野礫層より下方約10な

表Ⅱ-4 武蔵野における凹地分布

(面積比は10km当たりの個数で示す。)

地形面	面積km <sup>2</sup>	扇状面積	凹地数	扇状内数	同面積比
T1	30				
S	123	52	8	7	1.3
M1	215	112	36	33	2.9
M2	199	109	9	6	0.6
Tc	168	143	8	7	0.5
合計	735	416	61	53	1.3

いし30mの深さに伏在する厚さ数mの東京礫層で、西部では厚さ20m以上の青梅礫層とされるものにつながるものと考えられる。さらにこれより下の層位にある礫層で西の延長は多摩丘陵の御殿峠礫層、狭山丘陵の芋窪礫層につながるものである。これらは両丘陵でそれぞれ10m程度の厚さの風化巨礫層で扇状地礫とされるものである。これらが武蔵野台地の地下に伸びて東方の東京低地の地下100mほどの深度にまで達している(東京港地下地質研究グループ1999)。これを武蔵野のもっとも初期の扇状地礫層とすれば、青梅礫層から東京東部の地下に認められている東京礫層(三谷2000)への一連の礫層は第2扇状地礫層、下末吉相当の礫層並びに武蔵野礫層は第3扇状地礫層ということになる。これらの礫層の間には砂層やシルト層が挟まり、武蔵野東半部では海成層となっているから、東に海を控えた武蔵野地域が数次にわたる礫層の発達によって扇状地として形成されてきたことを示している。この中で第1扇状地は更新世中期初頭、およそ50万年以上の古さを持ち(TI期)、第2扇状地は更新世中期の後半、およそ20万年前と推定される(TII期)。そして10万年前を前後する時代(S期-M1期)に第3扇状地、その後段丘化の時代に入り、現在に至った。武蔵野扇状地と呼ぶ場合、表面だけ見れば第3扇状地の部分を指すことになるだろうが、この扇状地を構成の上からとらえれば基層である第1、第2扇状地も含めた総体を指すことになる。

## 5. 武蔵野の地形発達(第Ⅱ-11図参照)

### 1) 初期扇状地から立川段丘へ

武蔵野地域の地形発達を古く遡れば上総層群の時代に至る。しかしここでは武蔵野が多摩川の流れによって作られ、変遷してきた歴史としてとらえるならば、その最も古い記録は更新世中期初頭、お

よそ50ないし60万年ほど前からのこととしてとらえられる。それ以前においては多摩川の存在自体が所在を確かめられないからである。したがってこの地形発達には御殿峠礫層・芋窪礫層の時期すなわち武蔵野第1扇状地の時代から辿るものとする。番号は第Ⅱ-11図と対応する。

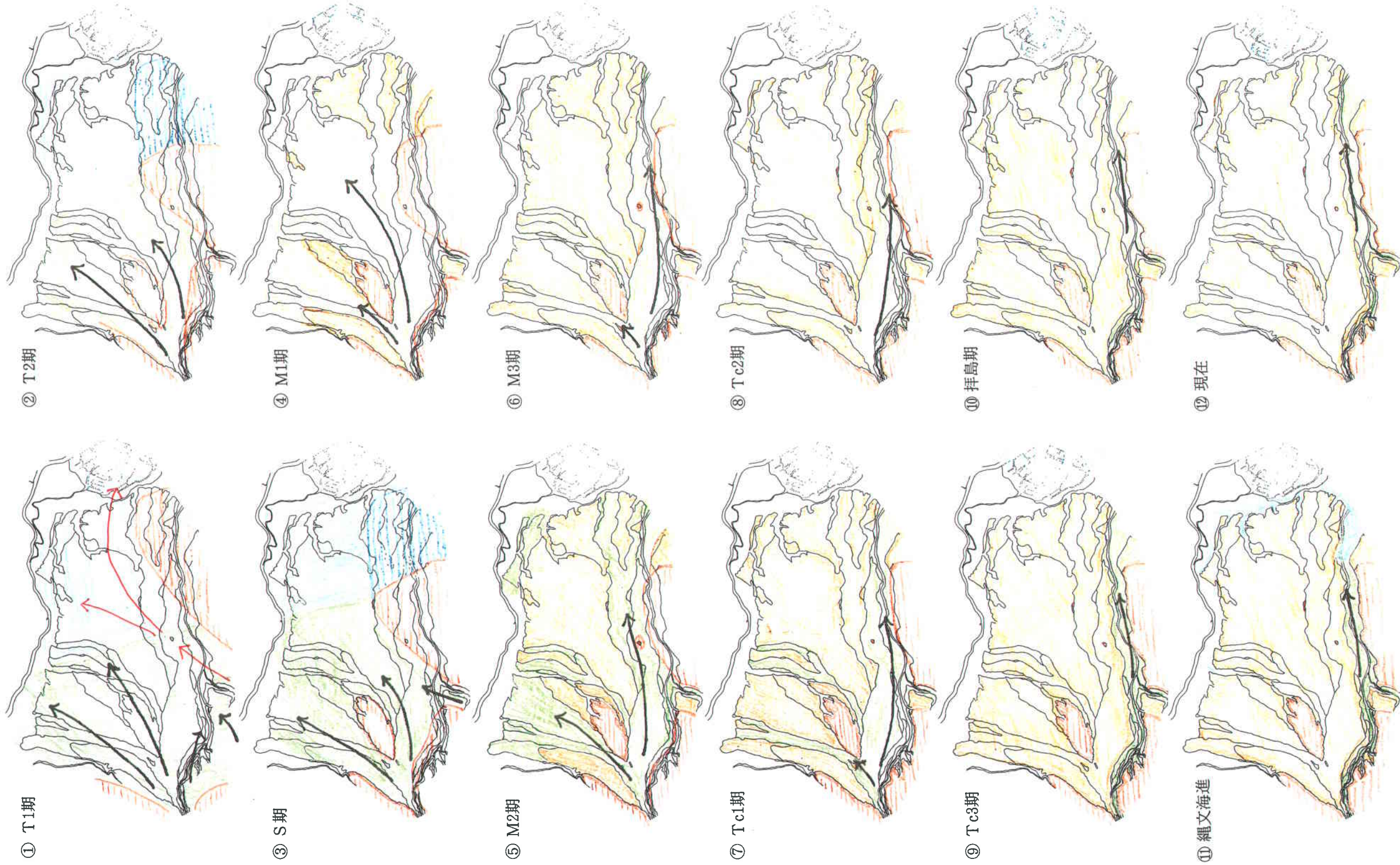
① 武蔵野第1扇状地の時代（T1期） 狭山丘陵に発達する芋窪礫層はさらに北方にある加治丘陵上の豊岡礫層とともに当時の多摩川系河川から供給された扇状地性の礫層である。現在は孤立した丘陵となっている狭山丘陵は多摩I面という地形面として武蔵野地域一帯に扇状地面として形成された。また、多摩丘陵の丘陵尾根に現在残されている御殿峠礫層も扇状地性の巨礫層である。これは岩質から丹沢山地由来の相模川系流路が当時武蔵野地域にまで流入していたもので（羽鳥・寿円1958、羽鳥・向山1990）、これもまた扇状地性の多摩I面をなしている。これら多摩川系相模川系両流路は武蔵野地域内で会合し、両者の礫層堆積面は一連の多摩I面としての平坦な扇状地面となって武蔵野地域に広がっていた。この原武蔵野というべき扇状地に関東山地東麓の青梅付近から東へ向けて原多摩川というべき河川が流れていたことになる。相模川系流路による礫は武蔵野台地地下を通じて東京湾岸有明地区の海面下100mの深さに達している（東京港地下地質研究会礫グループ2000）。

② 武蔵野第2扇状地の時代（T2期） 南西から武蔵野地域に流入していた相模川の流れはこの時期にはすでに閉じ、多摩川系河川のみが武蔵野地域を流れていたが、次第に現在の狭山丘陵の北側と南側に流路を分け、その二股の流路を掘り込んで行った結果、狭山地域は切り残されて孤立丘陵化した。狭山丘陵の成立である。これとともにもと一連の扇状地面は分断され、加治丘陵、多摩丘陵となった。このとき狭山丘陵の南北両側を流れるようになった多摩川は厚さ20mを越える青梅礫層を堆積させた。昭和40年代、箱根崎南西地区で深掘りによって採掘された“おか砂利”はこの青梅礫層の礫である。この厚い礫層の存在はすでに1936年に今村学郎・矢島仁吉によって井戸の深さとして所沢付近とともに捉えられており、最近では角田清美（1999）が羽村市付近で断面図を示している。この時期武蔵野南部には上総層群を基盤とする丘陵が現在の多摩丘陵から北に突出する形で張り出していたので、多摩川系流路はかなり北に寄っていた。

③ 武蔵野第3扇状地の時代（下末吉期） 青梅礫層に続いてこの時期の多摩川はやはり狭山丘陵の両側を流れ、北側では金子台、さらに西では所沢台、平林寺の小丘などのS面の河成礫層を残し、南側では日野台の河成礫層を残した。さらに東の荏原台や淀橋台は当時の下末吉海進による海成層が堆積する環境にあった。当時の多摩川の水の主体は狭山丘陵の北側と、南側では柳瀬川や黒目川などの地帯、つまり現在の多摩川よりかなり北に偏していた。淀橋台、荏原台には厚い礫層は存在せず、流路はこれより北側にあったことを示している。

④ 武蔵野第3扇状地の時代（M1面の時期） この時期の多摩川流路はやはり狭山丘陵で二つに分かれていたが、南側を流れる勢力が増し、現在の玉川用水の位置を中心に広く流れた。東では淀橋台の北側を通して北東に流れる流路が主流であった。しかし、南側から北に向かって突出していた





② T2期

④ M1期

⑥ M3期

⑧ Tc2期

⑩ 拜島期

⑫ 現在

① T1期

③ S期

⑤ M2期

⑦ Tc1期

⑨ Tc3期

⑪ 縄文海進

第II-11図 多摩川流路の変遷と武蔵野の地形発達 (羽鳥原図)



丘陵地形の一部は侵食削平され、三鷹市南部の牟礼の小丘はその際の丘陵地形の切り残しと考えられる。南側に向かった水流は荏原台の南北両側に流路を作ったものと考えられる。またこの時期までの武蔵野はとくに扇状地的性格が強く、伏流水の水量が多かったことが凹地分布の多さに窺われる。したがって地表流水としての多摩川の水量は現在より少なかったと思われる。

- ⑤ M2面の時期 この時期多摩川はやはり狭山の南北両側に流れていた。南側の流れは柳瀬川・黒目川に沿う路線と、さらに南方の現在の多摩川に近い位置にまで南下してきた流れが、おそらく当時まだ多摩丘陵の丘陵地形が張り出していたであろう三鷹市・調布市や世田谷区のあたりを侵食平坦化していたと思われる。
- ⑥ M3面の時期 この時期の段丘面は多摩川沿いではきわめて小面積しか残っていない。その後の立川面形成期に侵食によって失われた部分はあるとしても、当時の多摩川流路の氾濫原の広がりには現在の立川面の広がりとは大差はなかったものと考えられる。そしてM2面の段丘面を侵食して国分寺崖線の概形を作りつつあった。これが完成するのは次の立川期になってからである。このように多摩川が狭山の南側に流路を南下させて現在の多摩川流路に近づきつつあった一方で、狭山北側の流路もまだ存在した。南北両側を同時に流れていたのか、あるいは振子運動のように交互に流れを交代させていたかは明かでない。このことは次の立川期についても同様である。
- ⑦ 立川1期 (Tc1期) この時期の多摩川は現在の多摩川沿いに発達する立川面の地域を流れた。狭山の北側を流れる流路もなお残存したが、南側の流路の方がこの時期には大きくなっていった。Tc1面の分布は現在府中市から東、国分寺崖線に近い側に残されているが、流路自体はTc2面から沖積地の範囲にまで広がっていた模様である。かつて武蔵野地域の南部にまで張り出していた多摩丘陵に向けての側方侵食もこの時期には現在形に近づいていたと思われる。北に突出していた丘陵の切り残しが浅間山である。この時期低下した海面に応じて、下流に向かう強い流路勾配が形成されていった。
- ⑧ 立川2期 (Tc2期) この時期の多摩川流路はTc1時期の流路にはほぼ等しいが、府中市浅間山より南側を流れるようになり、Tc1面とは微弱な高度差で接するようになった。多摩川の水流が南に寄るようになってから多摩丘陵の北縁は侵食を受け、北縁の位置が定まったのはこの時期であろう。また、Tc1期の多摩川水流の主力が狭山丘陵南側に流れるようになって以来、武蔵野台地北部に向かう地表水流は漸次縮小していった模様である。ただ、伏流水からの湧出水流が支谷内の立川面小段丘を残す原因となったことは考えられる。Tc2面の時期は海面の最大低下の時期に近い。東京湾沿岸地域の沖積面下あるいは海水準下20mないし30mの位置に発達する埋没立川段丘は海面が大きく低下したこの時期のものと思われる。
- ⑨ 青柳段丘時期 (Tc3期) この時期の多摩川は立川面を下刻して流路は現在の多摩川に近いものになった。すなわち氾濫原幅がTc2期に比べて激減したことになる。時代は立川ローム層降灰の最終段階、約1万3000年前の段階であるから、海面は最低下時から反転、上昇に向かっていった時



期である。このような時期において上流に向かう下刻が進んだのは、低下海面の影響が次第に上流に及んでいったことのほかに、流路幅がきわめて狭小化したことが関係していると思われる。

- ⑩ 拜島段丘期 この段丘形成はローム層堆積後であるが、それ以上に詳しい時代が不明なので更新世末期か完新世初期なのか決定できない。両時期の境界付近、つまり1万年前程度の時代と思われる。立川、拜島から上流の地域では青柳面の時代に引き続いて流路の下刻が活発に進行していた。
- ⑪ 完新世（縄文海進期） 多摩川上流の青梅に近い地域には拜島段丘よりさらに下位の天ヶ瀬段丘、千ヶ瀬段丘、さらに下位にも小規模に残る段丘がある。それらの沖積段丘と総称する小段丘は面積も幅もきわめて小さい。多摩川流路の位置はほとんど現在に近く固定され、また流路幅はきわめて狭くなって羽村までは氾濫原の広がりほとんどない。これらの小段丘群のどれかに該当する6000年前の段階には海水面が最も上昇し、二子玉川のやや下流の位置まで海水が入り込んだ。荒川低地は東京低地とともに海域となり、台地支谷にも海が入り込んだ。
- ⑫ 現在 縄文海進後の小海退と河川による堆積作用によって、多摩川河口部は荒川低地や東京低地とともに陸化した。多摩川上流部（羽村市から上流）では群小沖積段丘を形成しながら流路の狭小化を進めた。

## 2) 多摩川の縦断面形の変化

多摩川の地理的変遷すなわち平面的変化は上述のようであるが、これとともに垂直的变化についても見ておきたい。垂直的形態変化すなわち縦断面形態の変化には各時代の海面レベルの位置と地域一帯における隆起沈降といった地盤変位が大きく関わっているはずである。ここでは地盤変位の問題までは扱えないので、海面レベルの面からのみ論ずることにする。また、それがある程度見通せる下末吉期以降の推移と、それに応ずる多摩川の垂直的変遷、つまり縦断面的発達について論じておく。

下末吉期は海進期である。海面高度は現在より高かったことは確かだが、何mと明確に指定はできない。以後の地盤変動が存在するからである。多摩川南岸に発達する下末吉台地は下末吉海進時の波食面である。台地表面高度は50ないし55m、諸ローム層と下末吉層の厚さを差し引いた高度35mがここでの海面高度となり（羽鳥・寿円1958）、この値が武蔵野地域南部にも通用するものとする。すると武蔵野地域南部では当時の汀線位置は現在の50m線のあたりとなる。武蔵野台地北部では荒川低地に向かう傾動的沈降が予想されるので、これよりも低い値、例えば30m程度の線の位置となるであろうが厳密なことは言えない。そこで論議は武蔵野地域南部、すなわち現在の多摩川流路の地帯に限ることにする。

多摩川縦断面をみると（第Ⅱ-1図）武蔵野面（下末吉面高度はこれに近いので同面も含めて論じる）の縦断面は現在の多摩川河床縦断面にきわめて平行である。現在すなわち完新世後期は一応高海面の海面安定期である。武蔵野1面の時期は下末吉海進後の海退に移り始めた時期であるが、それ以後のM2、M3、Tcと続く海面低下までは比較的安定していた時期である。比較的安定した高海面

期という点ではM1面はS面と類似する。また、現在の多摩川河床の示す縦断面は完新世になってからの比較的高海面になってから形成されたものとするれば、S面、M1面などの縦断面曲線とはほぼ平行する理由は、どちらも高海面期によってできたものだからということで説明される。これに対して立川面は勾配が強く、その縦断面曲線は高海面期形成の両者に斜交して、下流では沖積面下に覆没し、東京湾岸の海面下-20ないし-30mの埋没段丘につながる。立川面は海退期の段丘として下流に向かう勾配が強い。したがって武蔵野面との高度差は下流に大きく上流に小さい。立川市北部では両者の差はほとんど無くなり、武蔵野面、立川面は一連の台地面となる。

海面高度と形成される段丘の縦断面形態の関係は以上のように理解されているが、ここに一つ問題がある。それは段丘面の縦断面曲線の形態がそのときの海面に応じて確定するにはかなりの時間が必要だということである。下末吉-武蔵野1面の高海面の期間は数万年間が見込まれるし、立川期の低海面の期間もこれに準ずるほどの期間が見込まれる。それならば縄文海進によって代表される完新世の海面位置についてはどうであろうか。この期間の多摩川は青柳段丘形成後も上流部の急速な下刻が進み、拜島段丘、天ヶ瀬、千ヶ瀬、さらに下位にも小段丘が形成されている。1万年程度の期間内に30m近い下刻が進んだことになる。この上流へ向けての急速な下刻現象はかつての立川期における低海面期の下刻が、より高海面になった完新世-現在に至ってもなお上流に遡行して続行している、ということで説明できるであろうかという疑問が生じる。しかし、それ以外の原因として、この上流域が最近になって地盤が隆起したという事実も証拠も存在しない。この急速な下刻現象を考える場合、一つだけ確かなこととして、青柳期以降多摩川氾濫原の幅が著しく狭くなったことが上げられる（前節参照）。それ以前の多摩川は立川期も含めて幅の広い氾濫原があった。増水時多摩川はこの氾濫原の端から端まで至るところを乱流して流れ得たはずである。しかし立川期末、青柳期から多摩川流路は武蔵野南縁の現多摩川流路の位置に狭く限定されるようになった。狭い幅の中を固定的に流路がおかれた場合、下方侵食は以前の広い氾濫原時期と比べてはるかに速度を増した、と考えられる。つまり、青柳期に始まる上流域の下刻の進行は、立川期後半期の海面低下の影響が次第に上流域に及んだ結果ではあろうが、その下刻が招来したものは上流部の峡谷化であり、それまでの溪口から出て扇状に広がる氾濫原の幅を失わせることでもあった。失われた扇状地に代わるものが羽村から下流に向けてやや幅を広げた多摩川沖積地ということになるだろうが、過去の立川期や武蔵野期に見られた幅広い典型的な扇状地氾濫原とは比較にならない。もしもこのような広範な広がり扇状地状氾濫原に戻る条件があるとすれば、それは大幅な海面上昇、海進の時代を迎えるしかない。そうなれば上流域の峡谷は埋積され、堆積物表面は再び扇状地の形態に復することになるであろう。このような局面を迎えるような事態は長い武蔵野の歴史の中でも起きていたかも知れない。たとえば下末吉海進直前の海面低下時に、同様な上流部の峡谷化と、そして下末吉面海進期にその埋積が行われたとすれば、その際の谷埋め堆積物が現在の武蔵野地下に横たわっている可能性は十分にある。海面変動は第四紀の間何度となく繰り返した現象である。現在見る多摩川の形態は氷河性海面変動がもたらした歴史的進行

の一局面を示しているといえるかも知れない。

## 6. 水環境と武蔵野台地

### 1) 武蔵野台地の水文的環境変遷概観

武蔵野台地は河岸段丘であると同時に扇状地的台地である。初期段階ほど扇状地的性格が強い。それゆえ4-2)で述べたように凹地が台地地表に残されているのもそのひとつの表れである。凹地は扇状地当時に存在した伏流水の産物である。伏流水は扇状地初期段階ほど豊富であったと考えられる。現在の武蔵野台地において初期に形成された地形面ほど凹地の密度が多いことは第II-4表で示された通りであって、地形面の新旧に応じていることが表現されている。もちろん後述のように礫層下底の地層の透水性の如何も関係するが、傾向としては新期の面ほど伏流水が弱くなっていることを示す。これは当初のS面扇状地の時期(13万年前)に比べて海面高度が漸次低下し、武蔵野台地が扇状地的性格から次第に段丘的性格を強めていくことに関係するであろう。M1面(9万年前の頃)の時期には海面高度はS面時期に比べてまだ大きくは低下していない。したがってこの時期にはまだ初期扇状地の性格を持っていた。したがって扇状地の伏流水は豊富であり、凹地も多数形成されていた。しかし次のM2面(6ないし7万年前)の時期から海面の低下はより明瞭となり、M3面(約6万年前)からTc1面(3ないし4万年前)にかけて低下が進行した。この海面低下はM2面以下の段丘がそれぞれかなり大きい面高度差をもって配置していることに示されている(S面-M1面:3~4m、M1面-M2面:3~4m、M2面-M3面:7m、M3面-Tc1面:8m)。このような段丘化によって武蔵野台地の地下水は段丘崖(支谷谷壁も含む)から排出することにより、台地地下水位の一般的低下をもたらし、伏流水の減少によって凹地の形成も減少したと考えられる。Tc1面を含む立川段丘面は下流に向けて著しく低下しているが、さらにTc2面の段階(約2万年前)において海面の最大低下期を迎えた。武蔵野台地東ないし北東側の東京湾岸低地や荒川低地の沖積面下20ないし30mに伏在するロームを乗せた埋没段丘面はこの海面低下時の立川段丘、おそらくTc2面の段丘と考えられる。武蔵野台地東部を刻む神田川その他の支谷小河川もまた下方侵食を盛んにして、とくにその下流部が深く掘り込まれた。この時期武蔵野台地東部はいっそう地下水位が低下したであろう。完新世に入ったとき縄文海進の海面はこれらの谷を溺れ谷となし、荒川や多摩川下流域も入り江となした。多摩川では二子玉川のやや下流、第3京浜国道の橋の地点まで海水が及び、海成沖積層が谷を埋積した。しかし多摩川の中・上流部に向かう下方侵食は立川期以降、海面上昇期の以後にも続行し、とくに立川より上流では拝島段丘、諸沖積段丘と下刻が進み、多摩川河床は立川面に比べて40mも低い位置に峡谷性の谷底を形成するに至った。立川期に形成されていた当時の立川面は扇頂部付近に関しては扇状地的性格を有し、伏流水の供給も青梅溪口部から受けていたはずである。ところがこのような河谷の形態発達によって伏流水供給の条件は失われ、武蔵野台地東部の地下水位は決定的に低下することになった。それまでの武蔵野台地は多かれ少なかれ伏流水の存在があったはずであるから、多摩



川の水量はこれに多くをとられ、地表を流れる水量は現在ほど多くはなかったであろう。おそらくは増水期にのみ地表を河が流れて扇状地表面に砂礫を堆積させ、それ以外の時期は地表流水は減少もしくは消滅して、もっぱら伏流水として下流に水を供給していたものであろう。

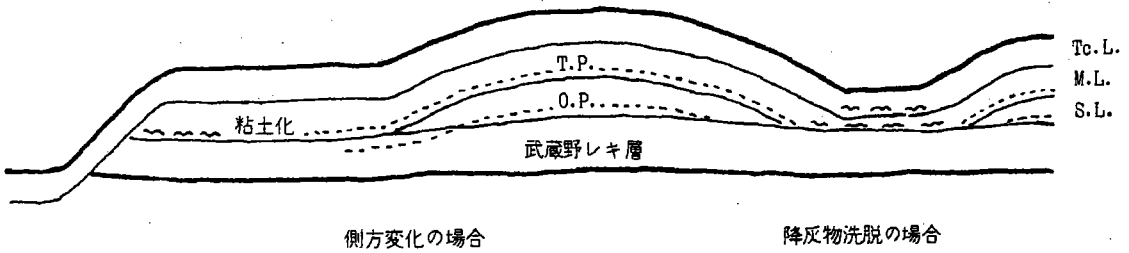
このような扇状地であった当時の趣を現在もある程度残しているのは狭山丘陵北側を伝う武蔵野面、立川面である。この地帯の地表勾配は多摩川沿岸に比べて強く、扇状地としての形態をより強く示している。埼玉県大井台地の北東末端部の地形は流水によって切り込まれた小谷が入り込んでいるのは、ここが扇状地末端の伏流水湧出箇所だったことを考えさせる。この狭山北側の地帯は立川期後半以降多摩川水流が移転してしまった地域である。地下水函養は主として地表からの浸透供給による。しかも、かつて多摩川本流であった地域として堆積した砂礫層の厚さはきわめて大きい。このため地下水位は深く、たとえば所沢北部では井戸の深さが25m以上に達するという。この地帯に流れる河川は不老川以外にみられない。この川は年間を通じての流れはなく、雨期にだけ現れて年を越さずに消滅する川である。不老川の南側にある砂川堀も全く同様で、数年に一度現れる水流の箇所が現在は人工の水路となって定着している。このように地下水位の増減によって出現消滅を繰り返す水流がいわゆる“武蔵野の逃げ水”のこぼれを生んだ一因であろうが、このような現象は狭山南側の武蔵野面にもある。その例は小平市都立小平霊園域内凹地をはじめとする若干の場所にある。1991年10月の降雨によってこれらの凹地から湧水があった。小平霊園の場合この出水は小川を出現させて4m /分もの流量を見たが(羽鳥1992) 約一ヶ月で消滅した。こんにちではよほど異常の地下水位上昇がなければ出現しない“野水”の現象がより扇状地的であった時代、武蔵野面、立川面の時代にもより広範に、かつまた、現在にくらべて季節的消滅が少ない状態で存在していたように考えられるのである。

## 2) 地表の流水環境とローム層

地形面とそれを覆う関東ローム層との関係はすでに3-1) に述べたように、古い地形面ほど古いローム層を累加していくということが大区分の原理である。しかし一連の台地面を扱う場合、ローム層の重なりが必ずしも一定でないことがある。これには台地面を作る段丘堆積物(主に段丘礫層)堆積時の水流や堆積後の水環境が関係する。段丘堆積物が堆積し終わっても水の環境が残る場合には、降灰した火山灰が粘土化したり、段丘堆積物と混在したり、あるいは火山灰が流し去られて堆積しないことがある。このため一定の地形面であってもこれに必ずしも伴わない火山灰層位が伴わず、これより上位の層位しか乗らない場合が生ずる(第II-12図)。これに相当する例がすでに述べた凹地の成因であるが、凹地以外でもある相当の広がりがある水の影響で下層位を欠如するという形で現れる場合がある。この種の例を次のいくつかに上げてみたい。

### ■野川中洲北遺跡

本遺跡は小金井市南部の国分寺崖線直下を流れる野川沿いに位置する。崖線の上は武蔵野面であり、下の野川沿いの面は広がりとしては立川面で、標準的にはTc1面相当の立川ローム層が発達する。



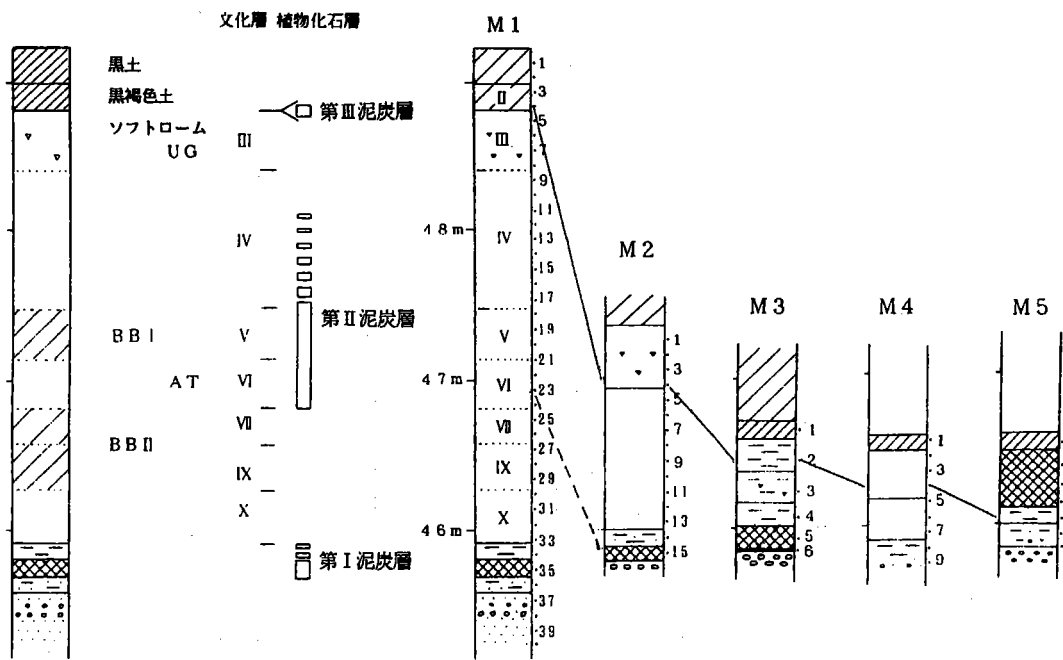
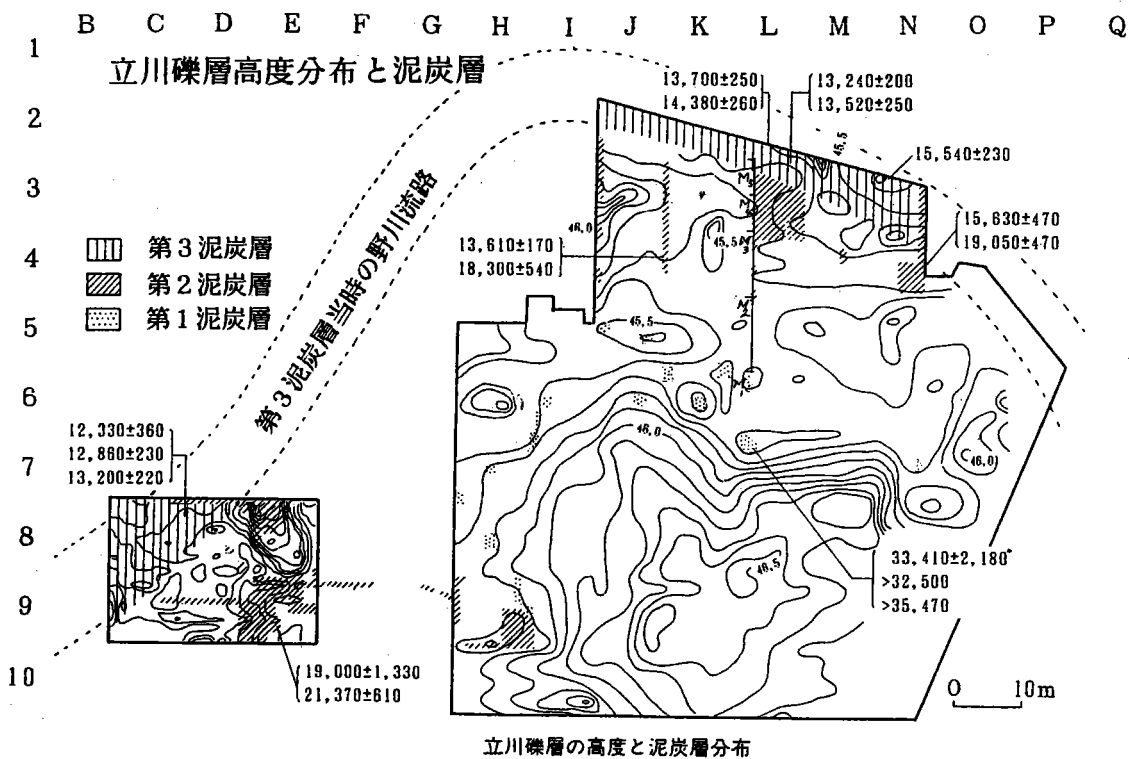
## 第II-12図 武蔵野礫層とローム層の関係 (羽鳥1981)

この遺跡のトレンチ調査の結果 (関東第四紀研究会1989) を簡略に示せば次のようである。この地域の野川流路は崖線と平行してほぼ東西に伸びている。これをほぼ直角に切る南北60mのトレンチに沿ってローム層の厚さと岩相に関して連続的な変化が捉えられた。この断面図を簡略化して示したのが第II-13図である。南半分では立川ローム層は厚さ3m、下部には第2黒色帯 (第9文化層)、そしてローム層はその下位の第10文化層から始まっている。その直下は立川段丘の砂礫質堆積物で、ローム層との境界には泥炭質粘土層が発達する。しかしトレンチ壁面を北に追うと、ローム層は下位の方から著しく粘土化し、また厚さを減じて、下位の砂礫層の上に直接A Tテフラが接してローム層が始まるようになる。さらに北、野川の水際付近では段丘砂礫層の直上にローム層はなく、火山砂混じりの泥炭質粘土層 (第3泥炭層、約1万年前) と、その上に厚い合計2.5mに及ぶ黒粘土層、黒土層、黒ボク土層が乗るようになる。これで明らかなように立川面の離水したところでは立川ローム層すべてを風成堆積物として乗せているが、離水の遅れたところ、とくに野川の水が存在したところではローム層が最後まで堆積せず、これによって低所として残されたところは黒粘土や黒土層によって厚く埋積されるところとなったわけである。この状況は国分寺崖線下の野川沿いにはいたるところに見られるものであり、武蔵野台地内の小河川沿いにも一般的に存在する。

### ■砂川堀と砂川の地名

埼玉県所沢市の北方に広がる大井台地はM2面と推定される武蔵野面の台地である。この台地中を流れる定常的な河川はないが、多量の降雨に応じて一時的な地表水流が現れることがある。このような地帯は前述してきたようにローム層が薄くなり、上位層しか被覆していないため立川面と見られるような状態にある。この中でとくに地形的にも僅か低い状態にあれば、いっそう水の流路は継続化していっそうローム層は薄くなる。このように薄くなったローム層は同時に下層ほど粘土化が進んでいる。近年はこの流路が人工的に固定化されて排水用の堀割りになっており、これを称して砂川堀というようになっている。

これと全く同様の流路がさらに北側にある不老川である。この場合は武蔵野面を数m切り込んだ立川面が発達し、その立川面内に流路があるが、砂川堀と同様に固定化した流路部分に向かってローム



第II-13図 野川中州北遺跡

関東第四紀研究会1989の図を一部改変

下図の柱状図を結ぶ線は実践がUG型ガラスのピーク層準、破線がATガラスのピーク層準

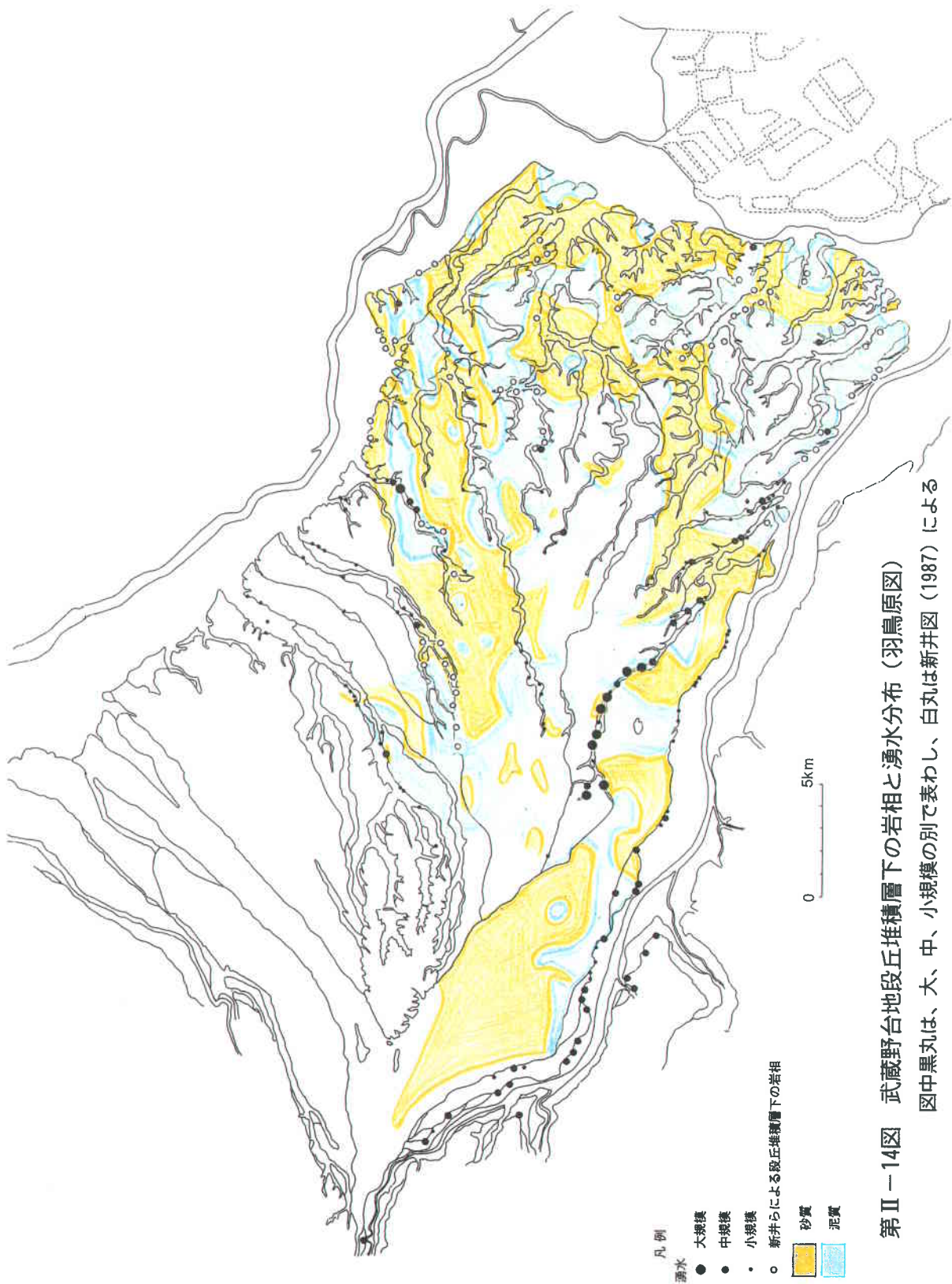
層が薄くなっている。薄くなった部分をみればTc3面と判断されがちであるが、本来的にはTc2面から移行しているものと考えられる。

また、砂川という地名は東京都立川市北部の西武線玉川上水駅付近にもある。このあたりは国分寺崖線が消滅していく地域で、武蔵野面と立川面の段差が小さく、かつ段が緩やかになっている。この段の下が降雨時地表に水流が出現して一時的な流れが現れる。またこれとは別に東村山市を流れる空堀川は別名砂川という。これも緩やかな谷地形を示す武蔵野面上の川で、本来排水処理の川として改修されてきたものである。

以上のように砂川という地名を持つ場所はすべて谷とはいえないほどの緩やかな浅い谷状の地形であり、また降雨（豪雨）時や雨期に限って出現する流れがある。そして流路に当たる場所はローム層が薄くなり、またしばしば下層ほど粘土化していることも共通している。したがって基本的には段丘面高度とローム層の厚さによって地形面区分がなされてきたが、このような事情からローム層厚は同一地形面上でもかなりの変化が伴うものである（ローム層厚分布を示す第Ⅱ-6図を参照）。

### 3) 武蔵野台地の湧水環境

武蔵野台地の地下水位はおおむね地表下10m前後の深さにある。概してそれはローム層の下限付近あるいはその下にある。武蔵野台地でもっとも面積的に多くを占めるM面の場合、ローム層下には武蔵野礫層があって良好な滞水層となっている。立川面も下位に立川礫層が発達していて同様に滞水層になっている。これらの段丘礫層が滞水層になっている場合、その下盤すなわち基盤が不透水性のシルト層や粘土質の地層からなっていれば、そこに段丘崖が切られれば地下水湧出の好条件が生まれる。国分寺崖線のような段丘崖や台地内支谷の谷壁・谷頭からの湧水がその例である。ただし、基盤面並びに地下水面のレベルが段丘崖や谷壁の下の低地地表より下にあれば、崖からの流出は見られなくなる。基盤面が低地地表より高い位置にあっても基盤構成層が砂質などの透水層で、かつ地下水位が低ければ湧水は起きない。第Ⅱ-14図は武蔵野台地における段丘礫層、主として武蔵野礫層直下の基盤地質が透水性か否かをシルト質か砂質かの岩質によって示したものである。ただし武蔵野台地の中でも武蔵野礫層を伴わない淀橋台、江原台などのS面台地の場合、下末吉ローム層より下、地表から15m以上下の岩質分布によって示した。これらのS面台地においてはローム層の最下位下末吉ローム層、あるいはその直下の下末吉層の上半部が著しく粘土質の場合が多いので、このような粘土質層の上に小規模の宙水が生じていることがある。しかし武蔵野礫層のような良好な滞水層を持たないため、これらのS面台地においては宙水による小規模の湧水以外は見られない。S面の淀橋台、荏原台においては樹枝状に分岐した多数の小谷の発達はあるが、湧水環境は良くない。図中に示した湧水点は細野義純氏に東京都内の資料提供を頂いて作成したものに、新井正ほか1987に示されている湧水点分布の主要部分を加えたものである。後者の資料では地点ごとの湧水規模は表示されていないが、武蔵野台地東部に関する限りそれらはすべて小規模湧水である。以上によって明らかのように、湧水は基盤



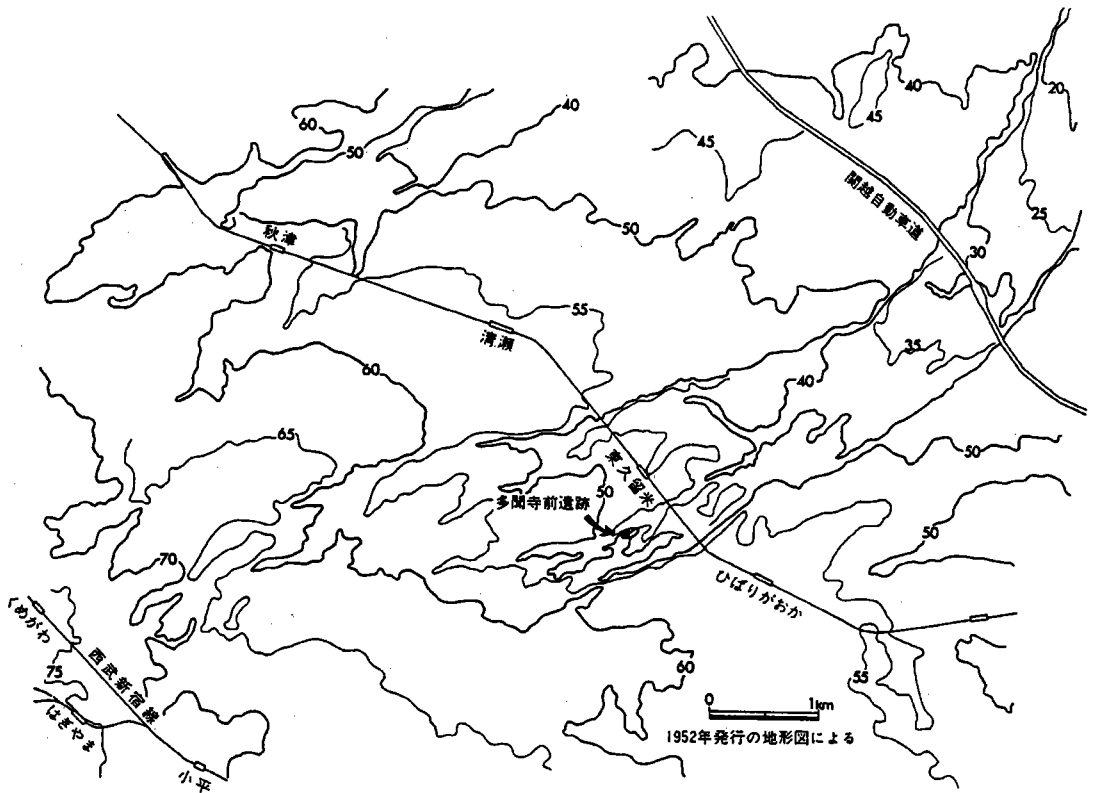
第Ⅱ-14図 武蔵野台地段丘堆積層下の岩相と湧水分布（羽鳥原図）

図中黒丸は、大、中、小規模の別で表わし、白丸は新井図（1987）による

の岩質に大きく関係し、その結果武蔵野台地中屈指の湧水地域は国分寺崖線沿いの小金井－国分寺の  
 一帯であることが分かる。

#### 4) 黒目川における水環境

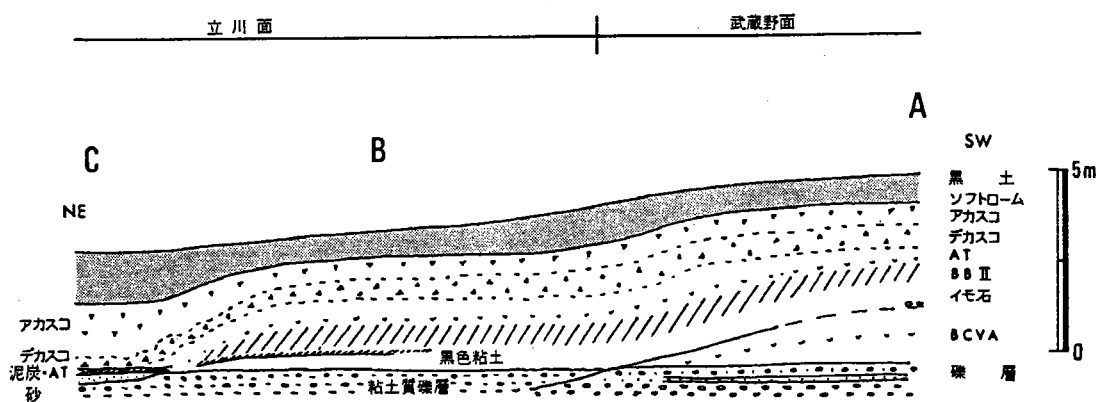
現在の黒目川はかつての多摩川が狭山丘陵南側から北東に向かって流れた後に生じた名残川的な性格  
 を持っている。多聞寺前遺跡はこの上流部、東久留米市に位置する。遺跡はここでの立川面上に位  
 置し（第Ⅱ－15図）立川面相当の黒目川段丘上にある。



表Ⅱ－15図 黒目川に沿う段丘地形（羽鳥・千葉・加藤 1983）

**武蔵野礫層と立川礫層：**黒目川を横断する関越道路沿い断面では、黒目川周辺の台地（M1面）は  
 小原台軽石層を含む下末吉ローム層上部を乗せており、その下に武蔵野礫層が横たわる。そしてこの  
 台地に切り込む黒目川沿いの低位面が立川面で、その礫層は立川礫層相当層であり、当然武蔵野礫層  
 を不整合に切っている（加藤・新堀1973）。ところが上流に行くとも方の礫層の高度がほとんど等し  
 くなり、両礫層の区別が困難となる（Ⅱ－16図）。多聞寺前遺跡はこのような位置にある。

ローム層の堆積の仕方：多聞寺前遺跡では第Ⅱ-16図のように地点A、B、Cの順に同一礫層上に乗るローム層が、下層の層位から欠如して行き、より新しいローム層位が礫層上に直接接するようになる。A地点では武蔵野ローム層の指標であるBCVAが伴っているが、地表面の低下に伴って這い下り、ついに礫層に接して消失する。こうして武蔵野ローム層は次第に薄失して立川ローム層が礫層に直接乗ることになる。東京軽石層についても同様なことが生じていると見られる。しかし礫層は一連の武蔵野礫層である。B、C地点では立川ローム層が礫層上に発達するが、ここでもAの場合と同様で、立川ローム層の指標である第2ブラックバンドやAT層準が地形に沿って這い下り、順次礫層上の粘土層、泥炭層に吸収されていく。C地点の泥炭質層は立川ローム層下半部が水中ないし湿地性環境下に堆積して生じたものである。C地点の場合、泥炭質層の直下にきわめて薄い砂層がある。また、B地点の場合、粘土層の下にある礫層は粘土質であり、厚さも薄い。両者とも武蔵野礫層本体からの再侵食、洗い出し物質とみられる。これらが立川礫層相当層と言えなくもないが、きわめて貧弱であり、一見したところでは武蔵野礫層本体の一部と認められるようなことも有り得る。事実、武蔵野礫層はこれらの薄層の下に厚く横たわっているのであり、“立川面・武蔵野面ともに武蔵野礫層によって構成されている”、あるいは“立川礫層と武蔵野礫層がつながっている”という矛盾めいた現象が成立するように見えるのである。



表Ⅱ-16図 多聞寺前遺跡模式断面図 (1983)

ロームの粘土化：ロームの材料である火山灰は風化作用により粘土化する。とくに堆積後地下水に浸ったり離脱したりを繰り返すような環境では急速に進むとみられる。このような地下水の影響を受けたと思われる例を上げる。

- 例1 地下水面付近にリモナイトによって凝集した風化粒が多い。
- 例2 有色鉱物の外形に溶食形状を示すものが多くなる。
- 例3 とくにかんらん石は風化されやすく、溶失あるいは変質する率が高い。

倉林(1980)は板橋区成増でのローム層中の粘土鉱物研究から、粘土化は下位のローム層ほど進行しているが、地域差があること、つまり、古さだけでなく堆積環境や堆積後の地下水環境などに関係することを述べている。

黒目川流域について以上総合すると、黒目川段丘面はB地点に関してはT c 1面の性格を持ち、C地点に関してはT c 2面に相当するものとなる。そして本地域における黒目川の流水は武蔵野1面の礫層堆積以来、ほとんど下刻することなしに同じレベルを流れたとされるのである。また、黒目川の流路は多摩川の名残川的性格は持つものの、立川期以後は多摩川の河川としての流路になったことは一度もない。流路を流れる水はもっぱら伏流水から生じた湧水によって函養される以外になかった。したがってB、Cにおけるような立川ローム層直下の砂や礫の薄層は、多摩川上流からのものでは有り得ず、武蔵野礫層からの再食礫である。下流部で武蔵野面と段差がついて明確に区別がつくようになった黒目川段丘礫層においても、事情は同一と考えられる。当時の伏流水による湧水量は現在に比べてはるかに多かったはずで、再食礫を下流に運ぶ能力は十分にあったと思われる。黒目川・落合川の上流は地形図でみると小谷分岐が掌指状となり、その谷頭部に現在でも湧水がある(II-14図)。この種の掌指状地形の形成は立川期における豊富な湧水の産物であろう。

## 結 語

多摩川と武蔵野の過去から現在までを総括的に見直してみると、両者についての従来の認識はかなり改めねばならない。まず第一に武蔵野は扇状地とはいっても、単一のものではなく、少なくとも3つの時期の扇状地が重層して形成され、ふつう呼ばれる武蔵野扇状地とは3番目のものを指している。しかし、この最後の扇状地のことを理解するためには各段階にわたる重なりから理解する必要がある、ということである。そしてそれぞれの扇状地形成はその時々が多摩川によって行われた。武蔵野の形成の歴史を知ることすなわち多摩川の歴史を知ることである。さらに、多摩川の歴史を知ることによってそれぞれの時期の武蔵野の形成のディテールが浮かび上がってくる。つまりここでは多摩川と武蔵野を一体のものとして、総合的に捉えてみたわけである。

その結論として、まず多摩川についてみると、始めは多摩川は武蔵野の北部、主として埼玉県に属する地域をを北東に流れていた。第1扇状地の時代が終わったとき、多摩川は狭山丘陵の南側にも流路を分岐させ、その結果切り残されて孤立化丘陵となったのが狭山丘陵である。第2扇状地の時代には多摩川は分岐した2流路を持っていたが、狭山の南を伝う流路は当時あまり南下していない。南下が進んだのは武蔵野面の時代に入ってからであり、立川期以降はいつそう南に寄って現在の多摩川流路の位置になっていった。それとともに多摩川は立川期末期の頃から上流へ向けての下刻が著しく進行して青梅付近は峡谷状となった。このため元来は扇状地的環境にあった武蔵野の水環境は大きく変わった。扇状地的武蔵野の時代に豊富だった伏流水やそれによる湧水とその流れは完新世に入る頃から多くが消滅し、もっぱら地下水湧出は段丘崖や支谷の谷壁に限られるようになった。その支谷の多



くは扇状地的時代において伏流水から湧出した流水の流路そのものから形成された歴史を持っている。伏流水の豊富だった扇状地的時代、それは立川期まで及んでいると思われるが、多摩川の水量は伏流水に多くを取られ、地表を流れる河川の水は雨期に現れて扇状地面を広く掃流し、乾期にはあるいは地表からは消滅するにも近いような状態ではなかったかと想像される。現在のように氾濫原の幅が上流では特に狭くなって峡谷のようになり、そして乾期になっても流水が絶えることのない現多摩川は、長い変遷の歴史の中ではきわめて特異な状態なのかも知れない。それゆえ過去の人類の生活環境を考察するに当たって、その時代ごとの多摩川と武蔵野の状態を知り、復元する必要があると考えるのである。

#### 参考文献

1. 新井正ほか6名 1987 東京の台地における湧水の現状. 地理学評論, 60巻, p.481-484.
2. 今村学郎・矢島仁吉 1936 武蔵野の地質構造. 地質学雑誌, 43巻, p.144-151.
3. 岩屋隆夫 1986 多摩川治水の前史. 多摩川誌, 河川環境管理財団, p.221-240.
4. 貝塚爽平 1957 武蔵野台地の地形変位とその関東造盆地運動における意義. 第四紀研究, 1巻, p.22-30.
5. 貝塚爽平 1976 東京の自然史. 第2版, 紀伊国屋書店, pp.228.
6. 貝塚爽平・戸谷洋 1953 武蔵野台地東部の地形・地質と周辺諸台地のTephrochronology. 地学雑誌, 62巻, p.59-68.
7. 加藤定男・新堀友行 1973 いわゆる武蔵野段丘について. 地球科学, 27巻, p.24-34.
8. 門村 浩 1961 多摩川低地の地形. 地理科学, 1, p.16-26.
9. 関東第四紀研究会 1989 野川中洲北遺跡の地形地質と生成環境. 野川中洲北遺跡—自然科学分析編—, 小金井市遺跡調査会, pp.25.
10. 久保純子 1988 相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形. 地理学評論, 61巻,
11. 倉林三郎 1980 関東ローム層の粘土鉱物. 成増露頭地質調査報告書, 板橋区教育委員会文化財シリーズ, 第2集, p.57-65.
12. Shingo JUEN 1966 A Study of Terrace Topography of the Musashino Upland along the Tama River. Memoirs of the Defense Academy, Vol.6, No.2, p.183-255.
13. 新藤静夫 1969 武蔵野台地の地下地質. 地学雑誌, 78巻, p.449-470.
14. 角田清美 1999 羽村市を自然地理学の立場から調べる. 羽村市郷土博物館紀要14号, p.92-122.
15. 東京港地下地質研究会礫グループ 2000 東京港地下のボーリングコアにおける砂礫層の礫種組成と礫の供給源. 地団研専報, 47号, 東京の地下地質, p.89-97.
16. 東京都 1995 「八王子・藤沢・上野原」 表層地質図・地形分類図. 東京都労働経済局 東京土地分類基本調査.

17. 東京都 1996 「川越・青梅」表層地質図・地形分類図. 東京都労働経済局 東京土地分類基本調査.
18. 東京都 1997 「東京西南部」表層地質図・地形分類図. 東京都労働経済局 東京土地分類基本調査.
19. 東京都 1998 「東京西北部」表層地質図・地形分類図. 東京都労働経済局 東京土地分類基本調査.
20. 東京都 1999 「東京東北部・東京東南部」表層地質図・地形分類図 東京都労働経済局 東京土地分類基本調査.
21. 東京都土木技術研究所 1990 東京都総合地盤図(Ⅱ). 山の手・北多摩地区, pp.428.
22. 東京農地事務局計画部 1962 入間台地地区調査報告書. 昭和36年度畑地帯深層地下水調査, pp.346.
23. 羽鳥謙三 1981 武蔵野扇状地の問題—その予察的研究—. 関東の四紀, 8号, p. 45-52.
24. 羽鳥謙三 1992 「武蔵野扇状地における1991年降雨による地下水溢水現象」関東の四紀17号 p. 49.
25. 羽鳥謙三・向山崇久 1991 稲城の自然「地形と地質」. 稲城市史, p.19-116.
26. 羽鳥謙三ほか4名 1962 東京湾周辺における第四紀末期の諸問題. 第四紀研究, 2巻, p. 69-90.
27. 羽鳥謙三・寿円晋吾 1958 関東盆地西縁部の第四紀地史ⅠⅡ. 地質学雑誌, 64巻, p. 181-194, 232-249.
28. 羽鳥謙三・向山崇久 1990 多摩丘陵における丹沢系巨礫について. 関東の四紀, 16号, p. 29-38.
29. 羽鳥謙三・千葉達朗・加藤定男 1983 多聞寺前遺跡のローム層と地形. 多聞寺前遺跡Ⅱ, p. 645-670.
30. 三谷豊 2000 武蔵野台地—東京湾の中・上部更新統地質断面. 地団研専報47号, 東京港の地下地質, p. 107-119.
31. 向山崇久 1991 稲城の自然「地形と地質」. 稲城市史, p. 97.
32. 吉村信吉 1943 武蔵野台地東部大泉, 保谷付近台地の浅い窪地地形. 地理学評論, 19巻, p. 239-256.

## 第2節 多摩川左岸における立川段丘の凹地地形

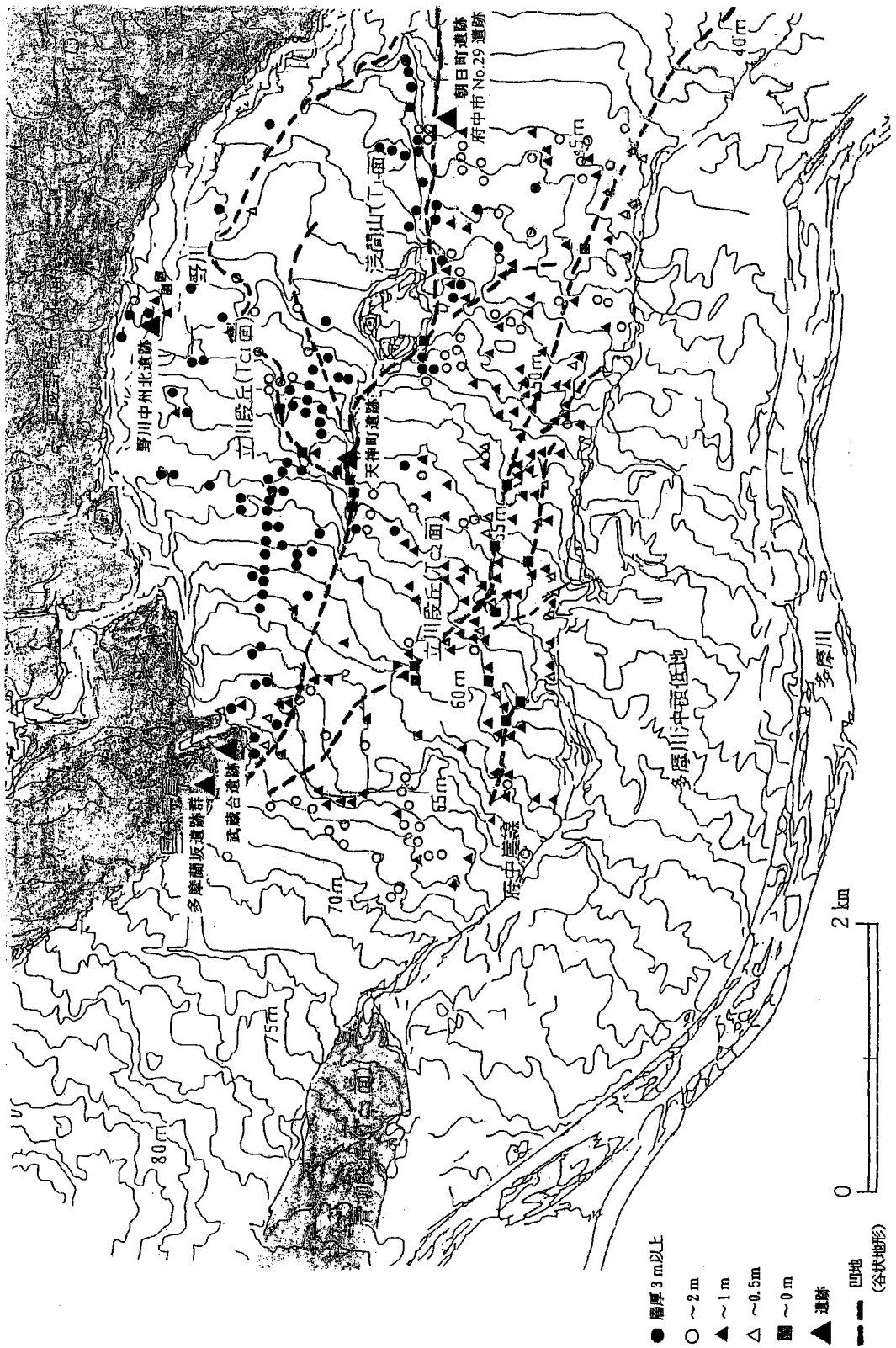
～武蔵野台地南西部を中心として～

松田 隆夫

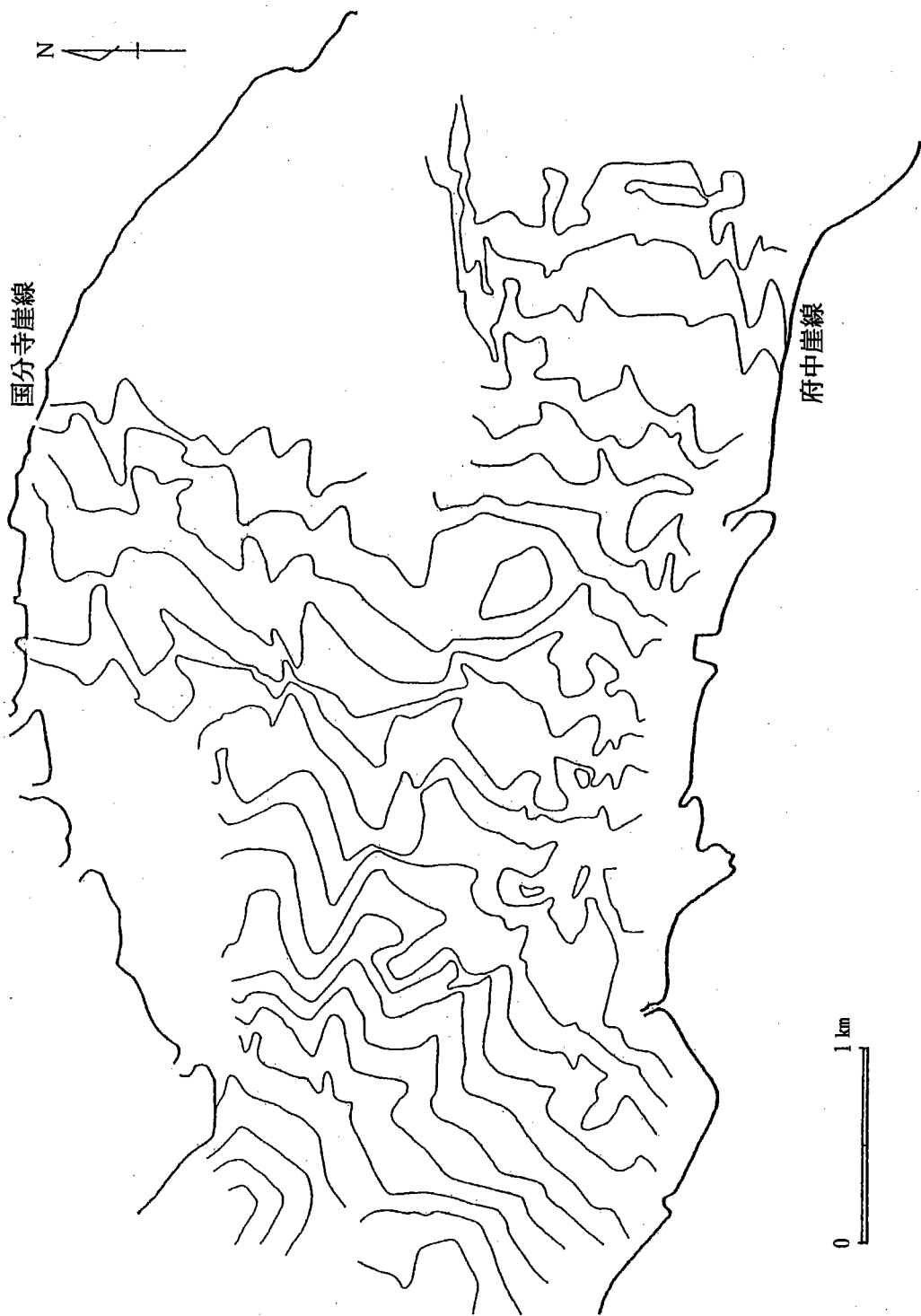
### 1. 多摩川左岸沿いの立川段丘

更新世後期のウルム氷期に形成された立川段丘（Tc面）は、多摩川左岸沿いに位置する国立・府中・小金井・三鷹周辺域では3つの段丘が観察される。立川段丘は野川沿いの国分寺崖線（武蔵野段丘崖）と府中崖線（立川段丘崖）によって地形区分され、さらに、国立市谷保や青柳では、立川ローム層最上部のテフラ（火山灰）が堆積する段丘と崖線が観察される。立川段丘は立川第1段丘であるTc1面、立川第2段丘であるTc2面、青柳段丘であるTc3面に地形面として細区分されている。

- ① 立川第1段丘は、国分寺崖線下の国分寺市・小金井市の野川域から南に広がる地形面であり、その南限は小規模ながら旧石器遺物が出土した府中市・天神町遺跡（府中市遺跡調査会）や府中市・朝日町遺跡（府中市遺跡調査会）、府中市No.29遺跡（東京都埋蔵文化財センター）を通る凹地（第Ⅱ-17図）を境とする。天神町遺跡の凹地の上流方向、約500m（府中市幸町・東京農工大農場）付近から崖線が形成され、天神町遺跡では崖線の比高差が1m、さらに、下流方向に位置する朝日町遺跡、府中市No.29遺跡付近では比高差が3mになる。この崖線は三鷹市大沢の野川流域までであり、立川第1段丘の分布範囲は狭い（第Ⅱ-18図）。立川第1段丘のテフラ層位は、立川ローム層の最下部層（野川遺跡のX層・XI層、以下、立川ローム層の遺跡層序名は野川遺跡の名称による）が累積する。
- ② 多摩川左岸沿いの立川第2段丘は、青梅市から立川市・国立市を経て調布市・狛江市まで広く分布し、狛江市より下流方向で多摩川低地下の埋没段丘となる。埋没段丘は多摩川河口の沖合まで確認され、ウルム氷期の海水面の変動と大きなかわりをもつ。府中市域の立川第2段丘は、天神町遺跡が位置する帯状の凹地南側から府中崖線までである。立川第2段丘のテフラ層位は、天神町遺跡の凹地南側の段丘平坦部で立川ローム層の第2暗色帯（BBⅡ、Ⅶ層・Ⅸ層）以上のテフラが累積し、府中崖線付近の段丘平坦部でハードローム（Ⅳ層）以上のテフラが累積する。
- ③ 立川第3段丘は、拝島市や立川市、国立市などの多摩川左岸で断片的に分布する。立川第3段丘のテフラ層位は、国立市青柳や谷保で青柳ローム（ソフトローム、Ⅲ層）以上のテフラが累積する。第Ⅱ-18図はトレンチによるテフラ断面の観察や建設ボーリング資料によって、立川段丘の立川ローム層の層厚をプロットしたもので、破線で主な凹地の位置を示した。立川第1段丘（Tc1面）は層厚3m以上の立川ローム層が多く分布し、立川第2段丘（Tc2面）は層厚1m～3mまでの立川ローム層が多く分布する。また、帯状の凹地では層厚50cm以下の立川ローム層が分布する地点がみられる。このような立川ローム層の層厚の違いは、新旧の段丘面（Tc1面とTc2面）に累積す



第II-17図 立川段丘の地形と立川ローム層の層厚分布



第II-18図 多摩川左岸の立川面（立川礫層上面）と凹地地形  
 （等高線は1 m単位、国分寺市・府中市・小金井市域）

るテフラ層位の差、あるいは古多摩川の離水期の差を示す。また、帯状の凹地で立川ローム層の層厚が薄くなるのは、古多摩川の離水後に段丘礫層から湧出する湧水の影響を受けたものと思われる。天神町遺跡の凹地はその事例となる。

なお、立川段丘（群）の多摩川下流方向への傾斜は、立川第1段丘<立川第2段丘<青柳段丘の順に傾斜の勾配が大きくなる。

## 2. 立川ローム層のテフラ組成

立川段丘の立川ローム層は各段丘でテフラ層位に差があるほか、立川第2段丘（Tc2面）の立川ローム層でもテフラ層位に差が認められる。このようなテフラ層位の差は、古多摩川の離水期の時期差を示すもので、立川段丘を把握するためには、立川ローム層の層位を野外観察やテフラ分析でその特徴を明らかにする必要がある。また、立川ローム層の特徴は、黒土層（黒ボク土層）とともに立川段丘上の微地形（凹地地形）とも密接に関連する。ただし、立川段丘の立川ローム層は、その最下部で立川礫層直上のテフラが砂質となることから、立川ローム層全層の特徴を得るために、武蔵野段丘の武蔵野ローム層・立川ローム層が累積する地点を選び、府中市武蔵台の武蔵台遺跡・多摩蘭坂遺跡の立川ローム層と比較した。

立川ローム層のテフラ組成（粒径0.25mm~0.125mm、粒数%、以下、黒土層・立川ローム層のテフラ組成の数値は図を含め、この粒径の粒数%で示した）は、始良Tn火山灰（AT）などの火山ガラス濃集層（軽鉱物組成）のほか、いくつかの指標テフラがみられる。武蔵野台地南西部の武蔵野段丘（M2面）に位置する武蔵台遺跡や多摩蘭坂遺跡の立川ローム層は、その最上部の漸移層（Ⅲ層上部）・青柳ローム（Ⅲ層下部）で軽石型ガラスや厚手平板型ガラスの濃集層を形成する。これらの火山ガラスはUG（立川ローム層上部火山ガラス、Tachikawa Upper Classy Ash、山崎1978）と呼ばれ、北関東の浅間山を給源火山とされている。漸移層から青柳ロームにかけては、野外観察で赤色スコリア（火山岩片）が多く点在し（第Ⅱ-19、20図）、青柳ローム最上部で粒径3mm~5mmの赤色スコリアである青柳スコリアが観察される。また、漸移層・青柳ロームの火山岩片組成は赤色ガラス質岩片の濃集層が形成する（第Ⅱ-26図）。青柳スコリアや赤色ガラス質岩片は富士山を給源にすると思われる。

青柳ロームからハードローム（Ⅳ層）・第1暗色帯（BBⅠ、Ⅴ層）最上部の重鉱物組成は、カンラン石が青柳ロームで増加し、ハードロームの下位にむけて減少する。これに対して斜方輝石は青柳ロームからハードロームにかけて増加し、斜方輝石はハードローム最下部あるいは第1暗色帯最上部で濃集層を形成する（第Ⅱ-24、25図）。青柳ローム・ハードロームのカンラン石と斜方輝石は対称的傾向を示し、武蔵野台地南部のテフラ組成で特徴的な傾向を示す（羽鳥1971）。野外で観察されるハードローム・第1暗色帯の火山岩片は、ハードロームで黒色スコリアが多くなり、ハードローム最

下部（IV下層）で粒径5mm～10mmの黒色スコリア（通称「デカスコ」）が目立って点在する。第1暗色帯では赤色スコリアと黒色スコリアの粒数がそれぞれ50%近くになる。野外で観察される立川ローム層のスコリアの分布傾向は、赤色スコリアと黒色スコリアに区分して粒径3mm（武蔵野台地南東部では2mm）以上のスコリアをプロットしたものである。立川ローム層のスコリア分布傾向は武蔵野台地南西部で特徴的な傾向を示す（第II-19、20図）。

AT層準（VI層）ではバブル・ウォール（BW）型ガラスの濃集層が形成され、始良Tn火山灰（AT）に対比される（第II-23図）。立川第1段丘（Tc1面）に位置する府中市天神町・天神町遺跡第2地点は、凹地斜面部から凹地底部にかけてAT層準中に始良Tn火山灰の純層（層厚5cm）が観察された。AT層準の火山岩片組成は、多摩蘭坂遺跡で発泡弱の黒色岩片が濃集層を形成する（第II-27図）。野外で観察される立川ローム層のスコリアはAT層準で最も多くなり、黒色スコリアが卓越する（第II-19、20図）。

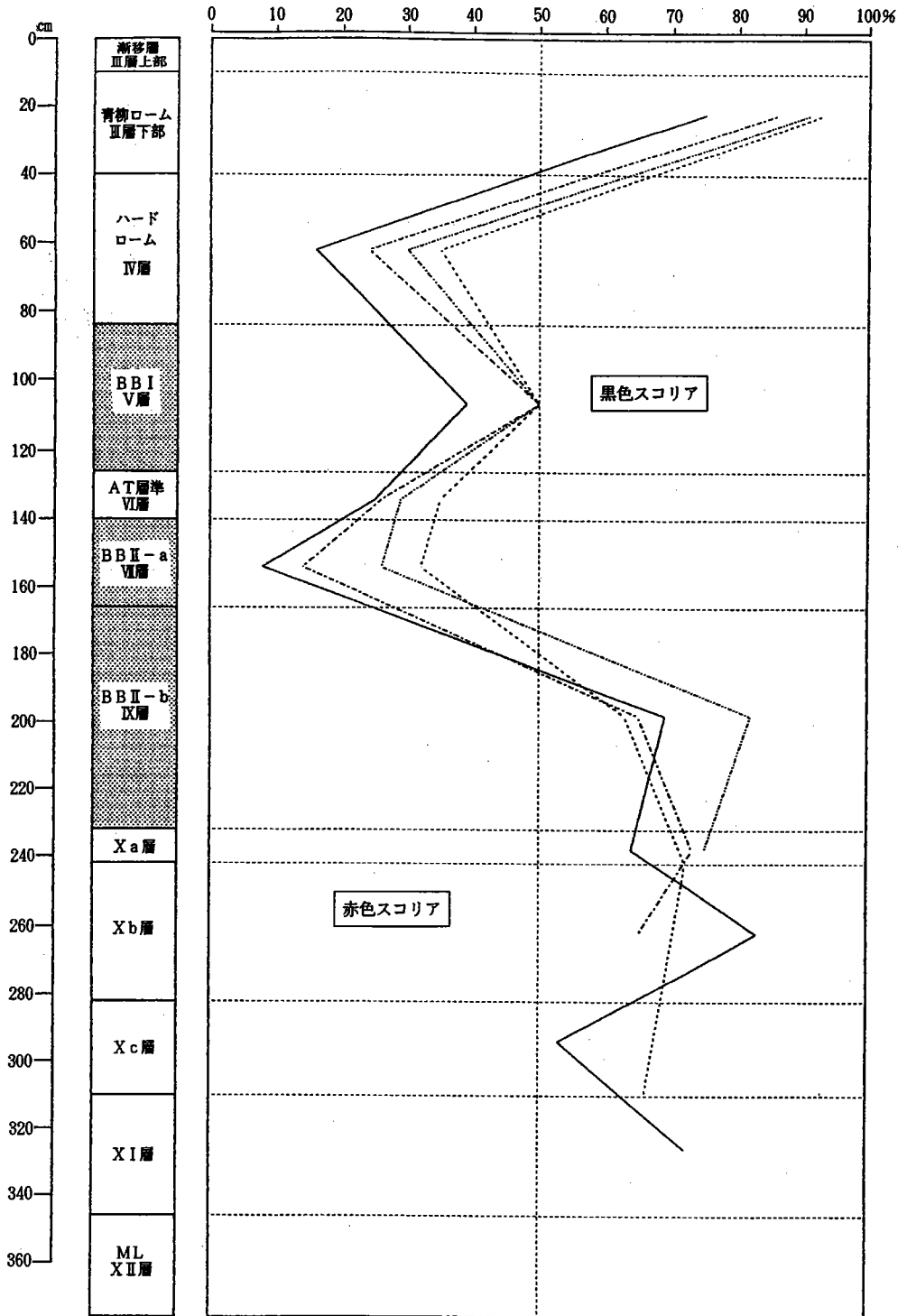
第2暗色帯（BBII-a）から立川ローム層最下部のXI層・X層にかけては、野外観察でXc層・XI層で相模野第2スコリア（S2S）が観察されるほかは、テフラ組成で指標テフラを指摘されることがないと思える。しかし、第2暗色帯からXI層の重鉱物組成や岩片組成は、いくつかの対比できるテフラがみられる（第II-21図）。立川ローム層のXb層は重鉱物組成で単斜輝石が濃集層を形成し（第II-25図）、武蔵野台地南部及び北東部で対比することができる。Xb層は地点によって第3暗色帯（BBIII）を形成する。第2暗色帯からXII層の岩片組成は、BBII-a最下部で発泡強の黒色岩片が濃集層を形成し、武蔵野ローム層最上部のXII層で発泡弱の黒色岩片が濃集層を形成する（第II-27図）。野外で観察されるBBIIからXI層のスコリアは、BBII-a（VII層）で黒色スコリアが卓越し、BBII-b（IX層）からXI層で赤色スコリアが卓越する（第II-19、20図）。また、Xc層・XI層の2層準でスコリアの密集するブロックが観察され、相模野第2スコリア（S2S）に対比される。このスコリアはXc層のスコリア密集層が赤色スコリアと黒色スコリアで構成され、XI層のスコリア密集層が赤色スコリアで構成される特徴をもつ。

立川ローム層最下部のXI層から武蔵野ローム層最上部のXII層にかけては、XII層で軽鉱物（主に長石類）が増加する傾向（第II-22図）がみられ、XII層最上部で火山ガラスが弱い濃集層（武蔵台遺跡C地区）を形成する。XII層は表層風化を受けたと思われ、粘土化が進んで立川ローム層の露頭が放置されると縦状のクラックが発達する。

なお、黒土層・立川ローム層の軽鉱物は、黒土層の黒色帯から漸移層にかけて増加し、漸移層から青柳ロームにかけて急減し、ハードローム下部まで軽鉱物の量比が少ない。軽鉱物は黒土層・立川ローム層で3つの濃集層を形成し、このうち、火山ガラス比（軽鉱物組成）との比較で、AT層準の濃集層はバブル・ウォール（BW）型ガラスが主体であり、黒土層の黒色帯から漸移層及びXI層・XII層の濃集層は長石が主体である（第II-22図）。





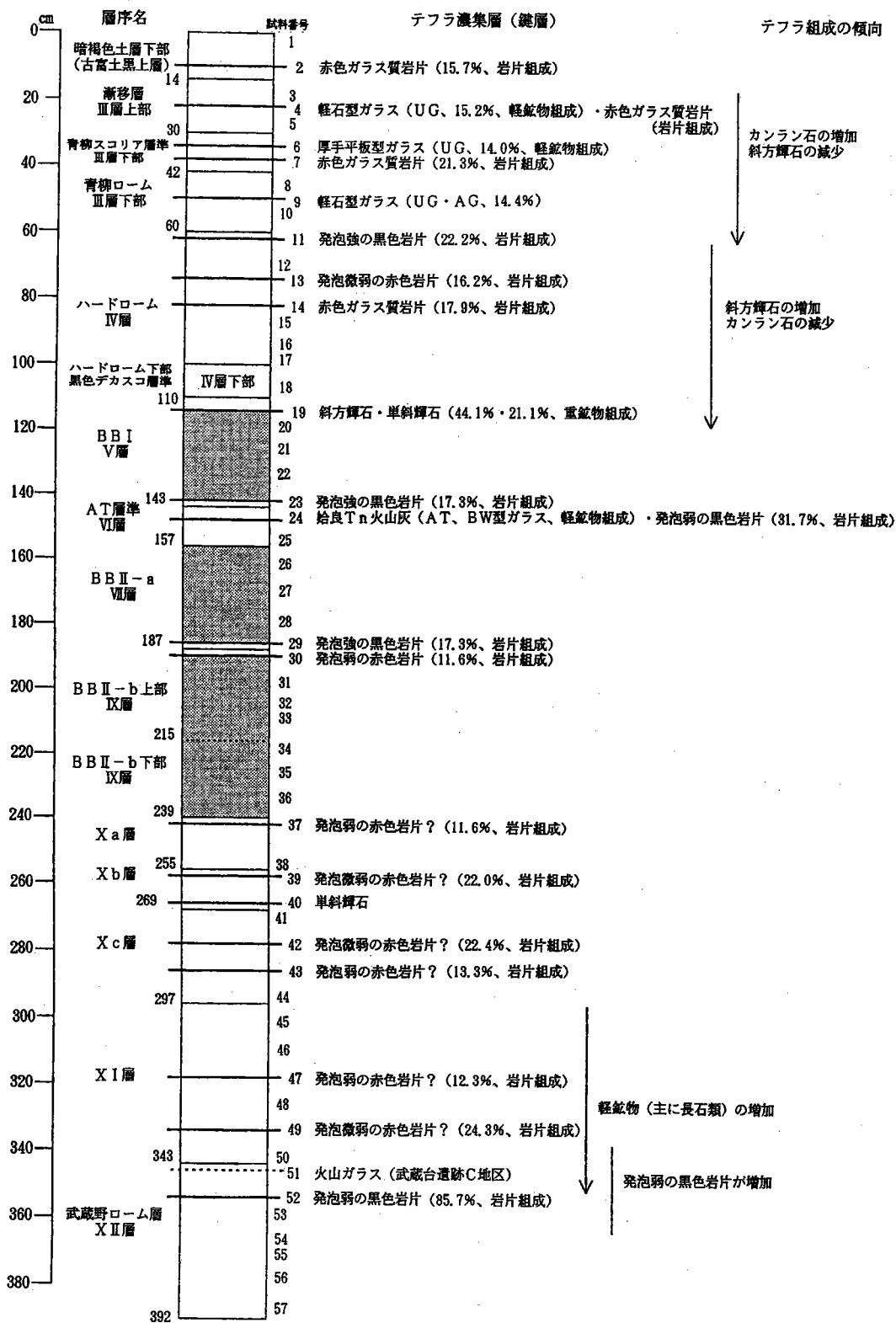


- 府中市武蔵台・武蔵台遺跡C地区 (M2面)
- ..... 小金井市中町・野川中州北遺跡1区 (Tel面)
- 府中市天神町・天神町遺跡第2地点 (Tel面)
- 目黒区大橋・大橋遺跡 (M2面)

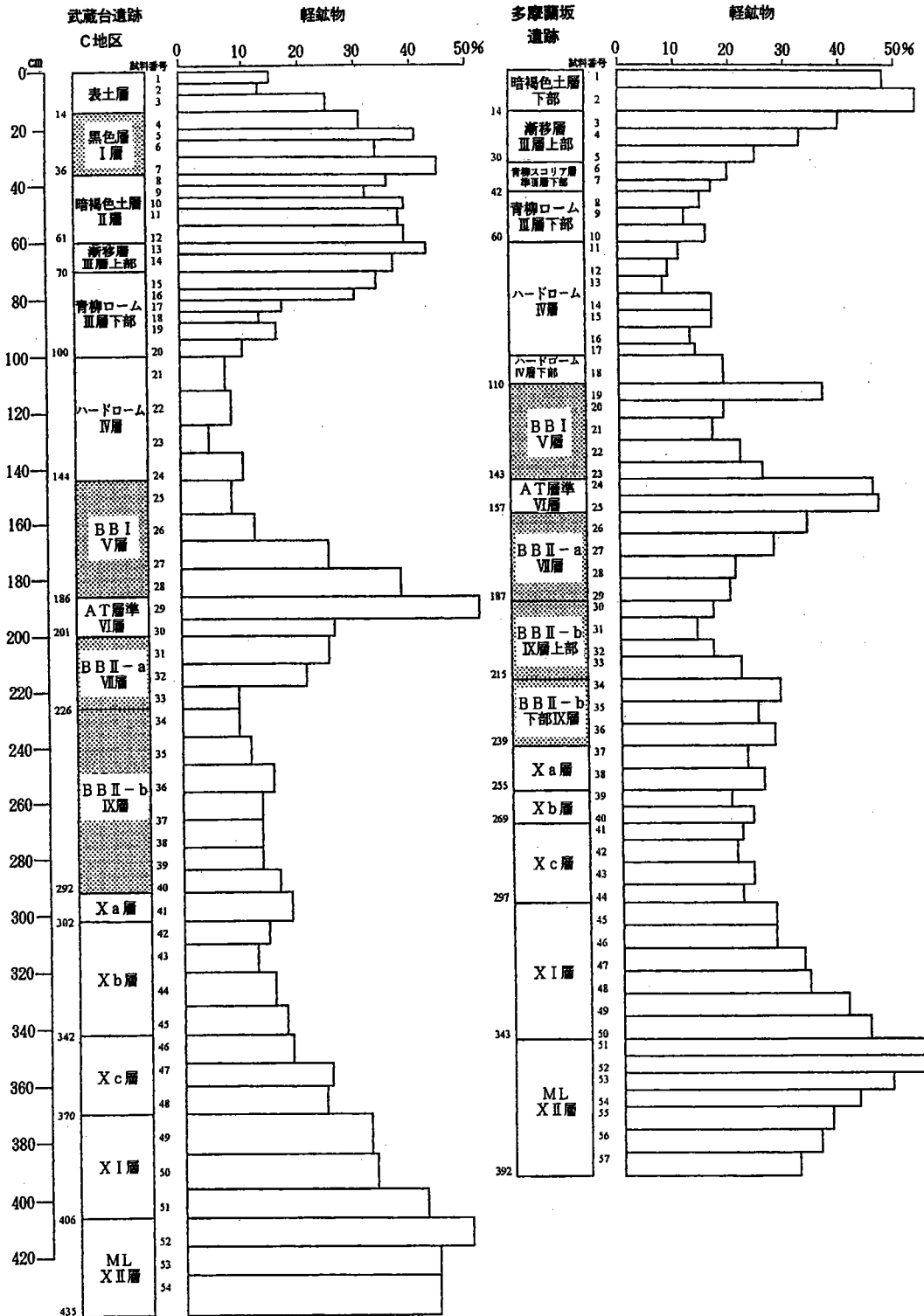
\* スコリアは粒径 3 mm 以上の粒子をプロット。ただし、大橋遺跡は粒径 2 mm 以上

\* ステラ注状図は武蔵台遺跡を使用

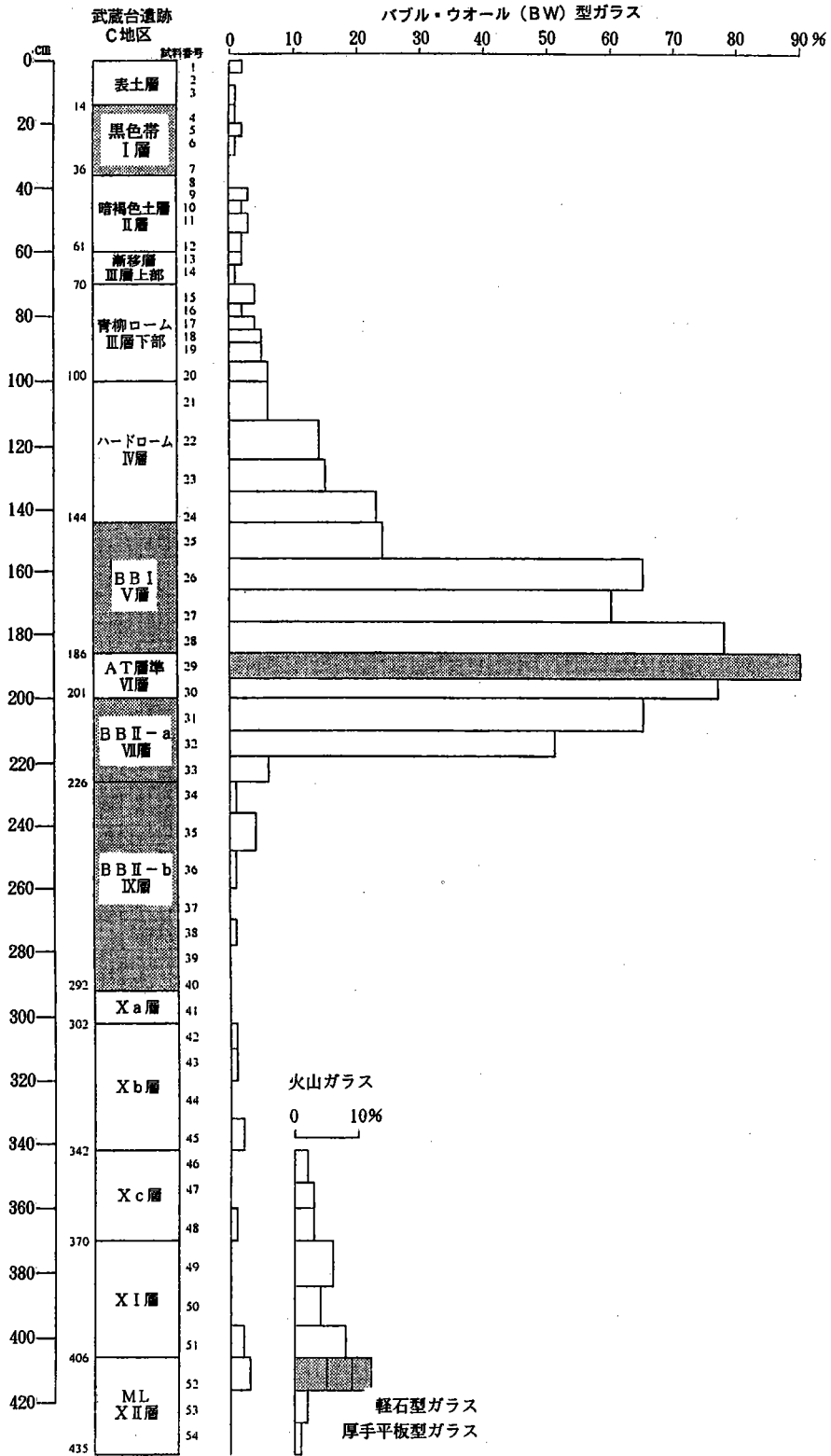
第Ⅱ-20図 武蔵野台地南部の立川ローム層とスコリア分布傾向



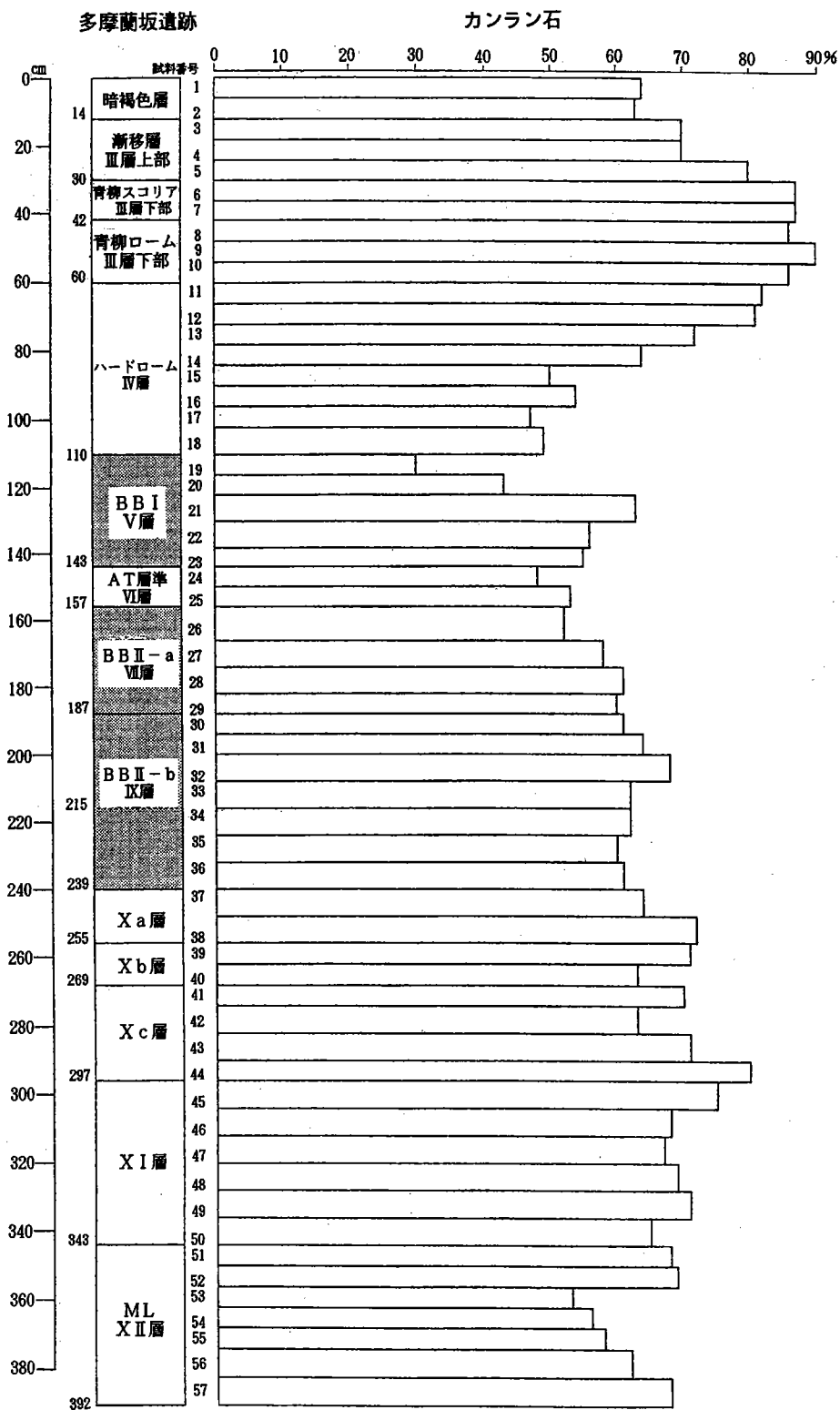
第II-21図 府中市武蔵台・多摩蘭坂遺跡 (段丘平坦部、M2面) のテフラ



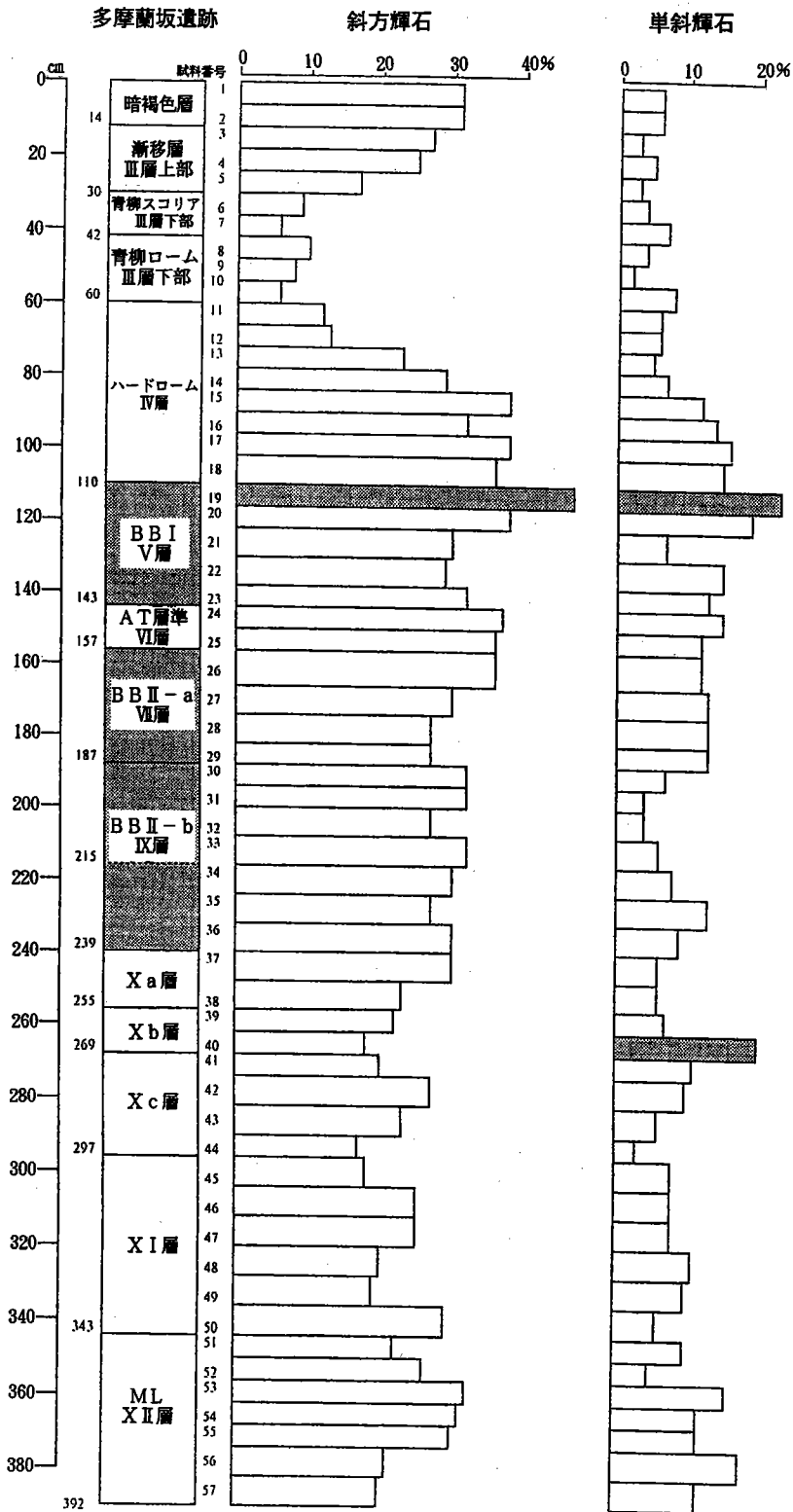
第II-22図 府中市武蔵台・武蔵台遺跡と多摩蘭坂遺跡の軽鉱物 (軽鉱物・重鉱物・岩片組成)



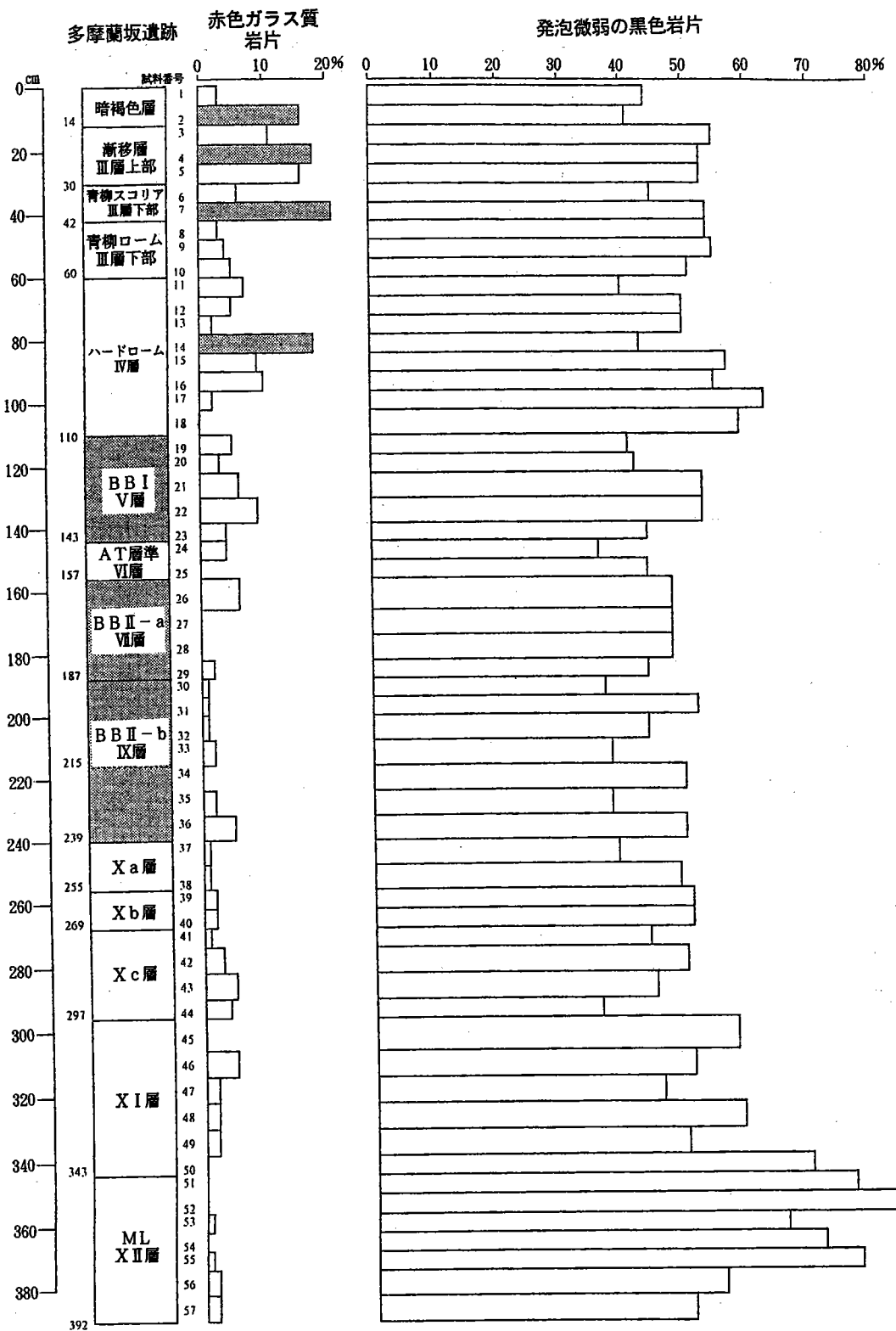
第II-23図 府中市武蔵台・武蔵台遺跡のバブル・ウォール (BW型) 型ガラス



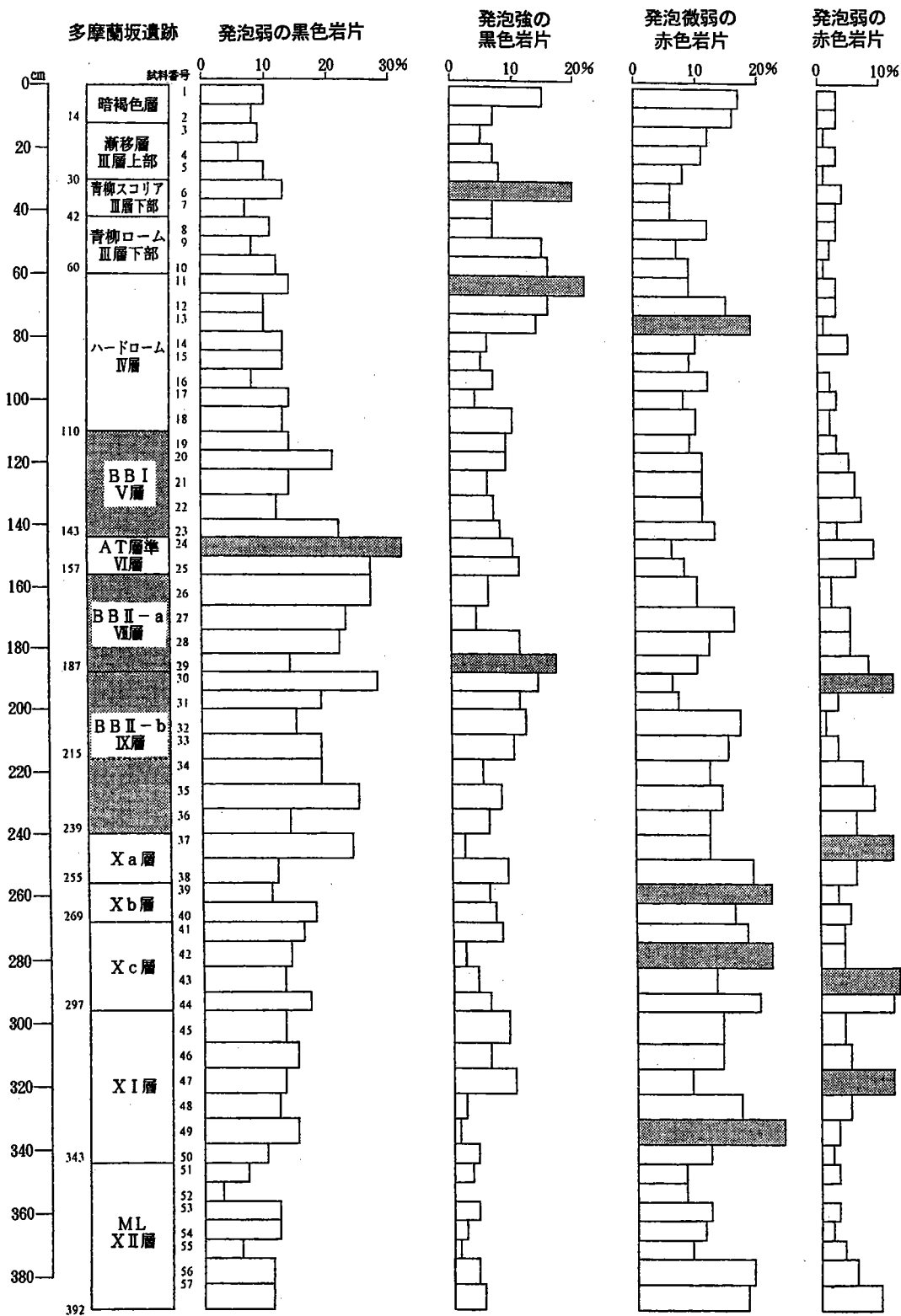
第Ⅱ-24図 府中市武蔵台・多摩蘭坂遺跡カンラン石 (カンラン石・輝石類比)



第Ⅱ-25図 府中市武蔵台・多摩蘭坂遺跡の斜方輝石と単斜輝石(カンラン石・輝石類比)



第II-26図 府中市武蔵台・多摩蘭坂遺跡の岩片組成①



第II-27図 府中市武蔵台・多摩蘭坂遺跡の岩片組成②



### 3. 立川段丘と凹地地形と黒土層

立川段丘上には微地形であるいくつかの凹地地形（浅い谷状の地形・細長い窪地、武蔵野扇状地にみられる楕円形の凹地とは異なる。楕円形の凹地は「ダイダラボッチ」あるいは「天狗の足跡」とも伝承される）を観察することができる。天神町遺跡を通る凹地もそのひとつで、天神町遺跡の凹地は立川第1段丘と立川第2段丘との地形境界付近にあって立川第2段丘に属する。凹地は立川第1・2段丘でも観察され、凹地にはいくつかの地点で小規模の旧石器遺跡が発見されている。

天神町遺跡の凹地は、府中市遺跡調査会によって凹地横断面のトレンチが行われた（第Ⅱ-34図）。凹地底部は立川ローム層が欠如し、立川礫層上に直接、黒土層が累積する。このことは、古多摩川が凹地を離水して流路を南方に移動した後も、凹地には礫層から湧出する湧水が流れていたと思われる。このような現象は府中市・本宿町遺跡（立川第2段丘）の凹地でも観察された。立川段丘上の凹地の形成は、次の過程が考えられる。

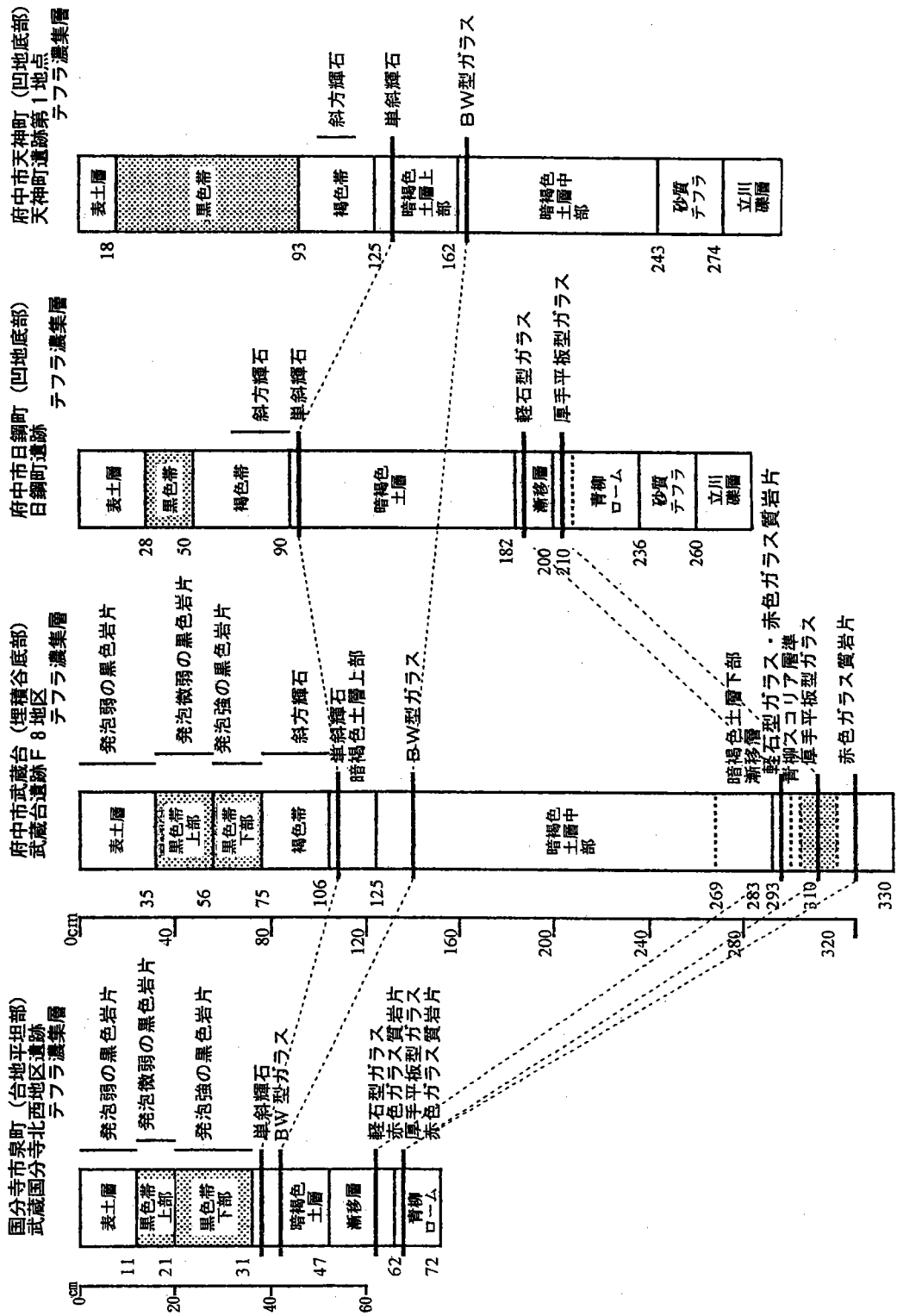
- ① 古多摩川の流れによる凹地（流路）の形成。
- ② 古多摩川の流路の移動後、凹地での礫層から湧出する湧水や野水の流れ。
- ③ 湧水の消滅による凹地内でのテフラの埋積と野水の流れ。

などが検討課題になる。

なお、②・③に関連して、凹地を流れる〈礫層から湧出する湧水〉と豪雨時等の雨水を集めて流れた〈野水〉とを区別した。凹地を流れた野水の状況は明治時代前期の小字名に残され、凹地地形に由来して天神町遺跡周辺では「蛇窪」・「蛇久保台」と、朝日町遺跡や府中市No.29遺跡周辺で「笹目久保」という地名が付けられている。府中市域では下水道が整備された以降、規模の大きい野水の流れは確認されていない。後述するように礫層から湧出する湧水は、テフラを流し去ってしまうが、野水はテフラのすべてを流さず、野外観察によるテフラ層序やテフラ分析によるテフラ組成ではなくテフラの累積性〉が失われていないと思われる。

天神町遺跡の凹地底部は、立川礫層上に砂質テフラと黒土層の堆積が観察される。黒土層の層厚は、天神町遺跡の段丘平坦部の黒土層層厚が約60cmに対して243cmと厚く堆積し、下位の砂質テフラと合わせると274cmになる。このように段丘平坦部の黒土層と比較して凹地底部で黒土層が厚く堆積するのは、礫層から湧出する湧水が消滅した以後に、周辺に降灰したテフラが風雨によって掃き寄せられた結果である。このような現象は、他の凹地や段丘崖を開析した小規模の谷（埋積谷）で観察することができる。

ここでは凹地の黒土層で問題になるのは、凹地に堆積し形成された黒土層が礫層から湧出する湧水消滅後に流れた野水によって攪乱（いわゆる二次堆積）されているかどうかにある。天神町遺跡における凹地の黒土層の観察では層厚の相違があるものの、黒土層の各層位は、武蔵野台地南部の黒土層層位と対比することができる（第Ⅱ-28図）。



第II-28図 武蔵野台地南西部における台地平坦部と埋積谷・凹地底部の黒土層 (黒ボク土層)

武蔵野台地南部の完新世テフラである黒土層は、野外観察やテフラ組成（粒径0.25mm～0.125mm、粒数％）によって上位から①表土層、②黒色帯、③褐色帯、④暗褐色土層の4層に区分することができる。

表土層は耕作や市街地化（畑地や宿場地など）の影響を受けて暗褐色から灰褐色を呈する。テフラ組成で表土層の岩片組成は、発泡弱の黒色岩片が卓越して1707.A.Dに噴火（富士山）した宝永スコリアに対比される（第Ⅱ-30図）。武蔵台遺跡に隣接する武蔵台東遺跡（M2面）で採取した黒色の宝永スコリア層（純層）は、岩片組成で黒色岩片が67.5%であり、そのうち、発泡弱の黒色岩片49.0%>発泡微弱の黒色岩片14.9%となる。火山岩片の発泡度合は宝永スコリアの発泡弱を目安に、それより発泡の弱い岩片、あるいは発泡のない岩片を<発泡微弱>とし、それより発泡が強い岩片を<発泡強>とした。

黒色帯は黒褐色から暗褐色を呈し、テフラの岩片組成で2層に細分することができる。黒色帯上部は発泡微弱の黒色岩片が卓越し、黒色帯下部は発泡強の黒色岩片が卓越する（第Ⅱ-30図）。黒色帯上部は奈良・平安時代、中世、宝永スコリア降灰以前の近世などの考古遺物を包含する。黒色帯下部は弥生時代後期から古墳時代後期までの考古遺物を包含するが、その下限の時期は明ではない。黒色帯は黒土層の中で全炭素含量に富み（大倉・坂上・松田1990）、坂上（1990）によって完新世第1暗褐色帯（H-1BB）とされている。なお、黒色帯は黒土層の中で隙間に最も富み、また、野外で粒径0.5mmの赤色スコリアが多く点在するなどの特徴をもつ。

褐色帯は褐色から暗褐色を呈し、武蔵野台地南部の段丘平坦部で層位を観察することができないが、凹地底部や埋積谷底部に厚く堆積した黒土層で観察することができる。褐色帯の重鉱物組成は斜方輝石が濃集層を形成する（第Ⅱ-31図）。褐色帯は縄文時代後期・晩期の考古遺物を包含し、東京都埋蔵文化財センターは褐色帯を「ⅡY層」と呼ばれている。

暗褐色土層は暗褐色を呈し、野外観察で3層に細分することができる。暗褐色土層上部は粒径0.5mmの赤色スコリアが点在し、やや隙間構造が認められる。暗褐色土層上部の重鉱物組成は単斜輝石が濃集層を形成する（第Ⅱ-31図）。暗褐色土層上部は縄文時代中期の考古遺物を包含する。暗褐色土層中部はその最上部でバブル・ウォール（BW）型ガラスが弱い濃集層を形成する（第Ⅱ-35図）。この火山ガラスは濃集層としてその量比が小さいものの、武蔵野台地だけでなく、千葉県下の下総台地（流山市～市原市）まで対比することができる。暗褐色土層中部は富士黒土層（FB）に対比され、縄文時代早期の考古遺物を包含する。暗褐色土層下部は粒径2～3mmの赤色スコリア（上杉1993のY-131-3に対比される）が目立って点在し、岩片組成は赤色ガラス質岩片が濃集層を形成する（第Ⅱ-26、30図）。暗褐色土層下部は古富士黒土層に対比され、縄文時代草創期の考古遺物を包含する。

以上の黒土層のテフラ組成は、国分寺市泉町（段丘平坦部）・府中市武蔵台・武蔵台遺跡F8地区（埋積谷底部）で示した（第Ⅱ-29～31図）。また、府中市日鋼町・天神町の凹地底部でも黒土層・立

川ローム層上部の各層位と対比することができる。このことは、凹地底部は礫層から湧出する湧水によってテフラが流失されてしまうものの、降雨（豪雨）時に流れる野水ではテフラの累積性を失わせる水量でないことを示す。府中市日鋼町・日鋼町遺跡（立川第2段丘、Tc2面）の凹地底部は青柳ロームから上位のテフラの累積が認められ、天神町遺跡（立川第2段丘、Tc2面）の凹地底部は縄文土層中部（富士黒土層）以上のテフラの累積が認められる。天神町遺跡は、立川礫層上の砂質テフラから縄文土層中部の最下部にかけて縄文時代早期前半の井草式土器が出土しており、この土器が円磨されていることから礫層から湧出する湧水によって流されてきたものと思われる。

なお、野水の出現は、降雨による地表水だけでなく、豪雨による地下水位の上昇によって地下水が地表にあふれて野水になって流れることもある。吉村信吉氏は昭和13年6月28日から7月4日にかけての集中豪雨の影響を受けた武蔵野台地北部の地下水・

野水を調査し、その実態を明らかにしている（吉村1939a 昭和13年に起こった武蔵野臺地—地下水の渇水及び大增水、地理学評論第15巻第3号）。吉村氏は豪雨後の練馬～東大泉～所沢～中富～上富間、及び井荻～田無～所沢～藤沢の地下水（浅井戸）を調べ、練馬区の井戸は豪雨前の6月22日で地下水位は地表から2.2mであり、豪雨後中は地下水位が地上10cmに達して台地上が浸水し、7月6日には地下水位が地表下20cmにあったと報告している。また、吉村氏による練馬～上富間や井荻～藤沢間の豪雨前・豪雨後の地下水状態を示した断面図は、豪雨によって地下水（本水）や宙水（ちゅうみず）から出水した野水を示している。野水は浅い排水の悪い谷頭や地形が平坦な所（段丘平坦部）でも宙水地域に著しかったと指摘している。このような豪雨による地下水位の上昇による地表の湧出は、豪雨時だけに限られることから、湧出による流れがテフラの累積性を失わせるまでには至らないと思われる。

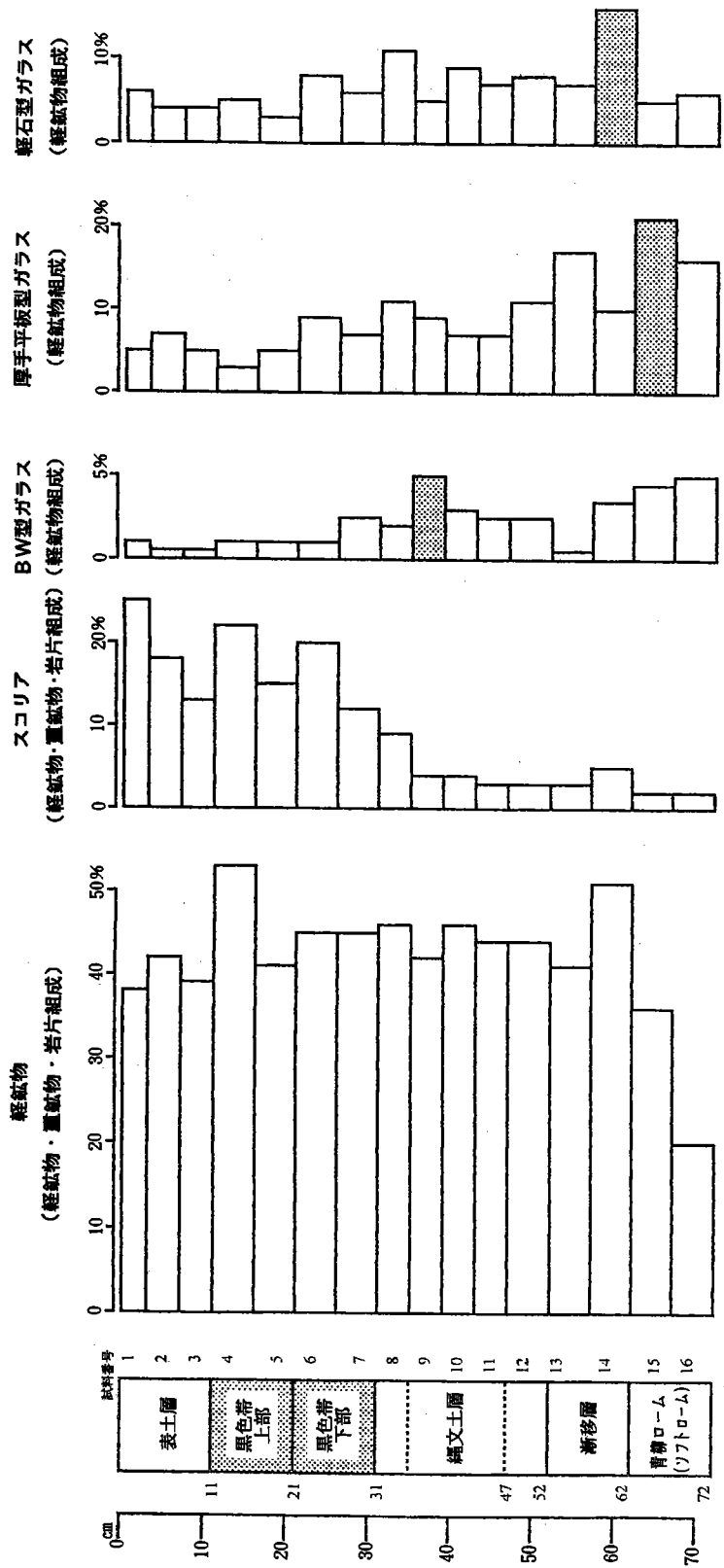
中央気象台編豪雨報告  
（吉村1939aによる）

6月28日	109.0mm	7月1日	1.5mm
6月29日	278.3mm	7月2日	88.0mm
6月30日	39.7mm	7月3日	63.5mm
		7月4日	45.8mm
7日間計		625.8mm	

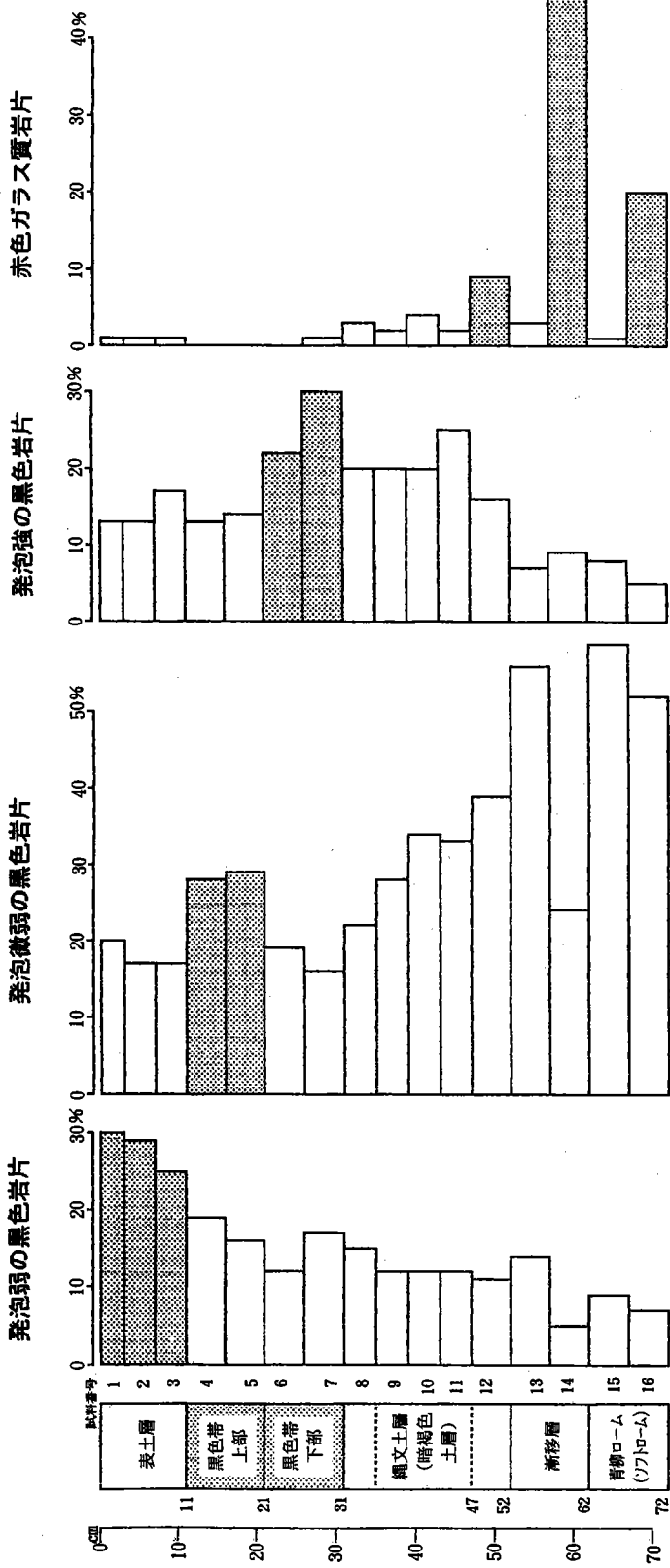
近年、市街地化が進み、下水道が整備されると野水の観察が困難になる中で、ここで引用させていただいた吉村氏の当時の報告は貴重な資料になる。

#### 4. 天神町遺跡の帯状の凹地地形とテフラ・水環境

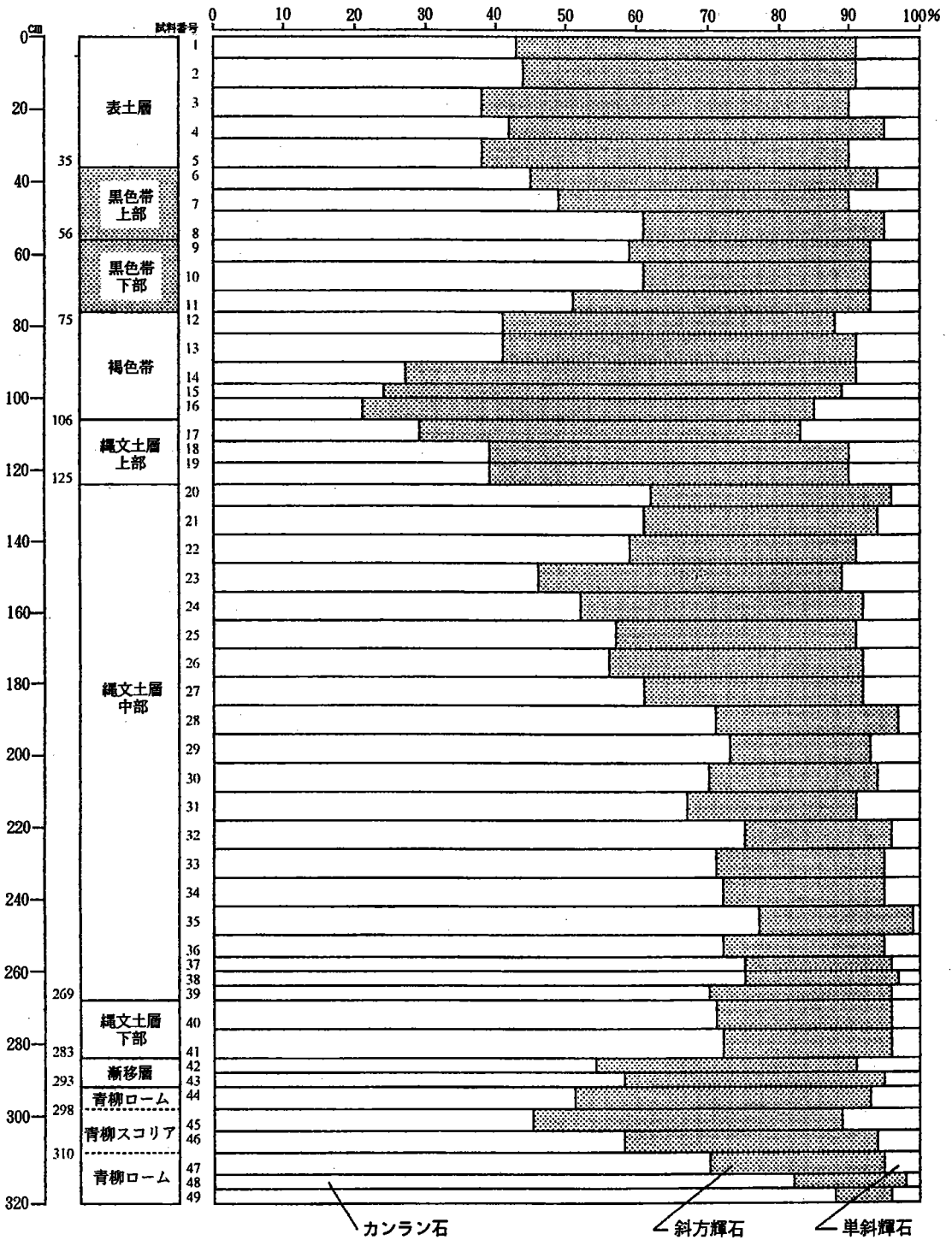
天神町遺跡の凹地地形は、帯状の凹地が東西方向に観察される。黒土層を取り除いた凹地の地形（古地形）は凹地斜面が比高3mほどの急崖を形成し、立川礫層面が観察される凹地底部の横幅は約20mになる（第II-33図）。凹地底部の横断面は、凹地斜面部から凹地底部にかけて立川礫層が緩く掘込まれた状態で観察された。このような微地形は礫層から湧出する湧水が形成したものではなく、古多摩川の浸食によって形成されたものであり、古多摩川の流路跡である。多摩川低地では同様の多



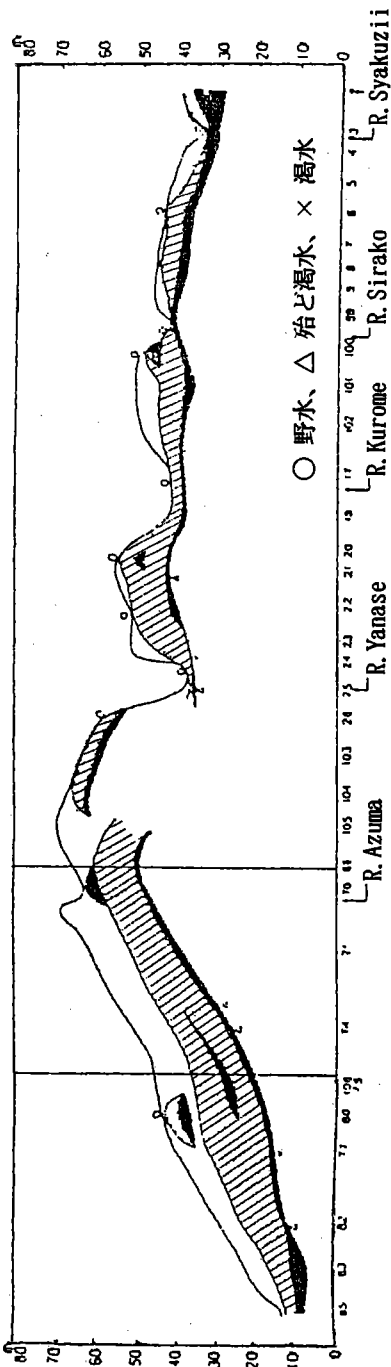
第II-29図 国分寺市京町 (段丘平坦部) の黒土層



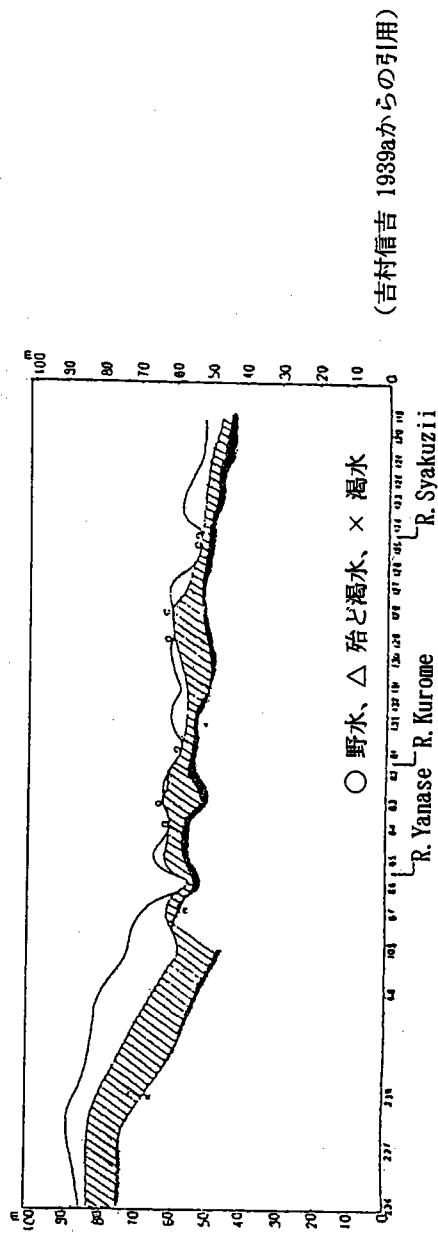
第II-30図 国分寺市泉町(段丘平坦部)の黒土層の火山岩片(岩片組成)



第II-31図 府中市武蔵台・武蔵台遺跡F 8 地区 (埋積谷底部) の黒土層 (カンラン石・輝石類比)



榎馬-東大泉-上清戸-所澤-中富-上富に至る間の豪雨前(黒)、豪雨後(ハッチ)の地下水の状態



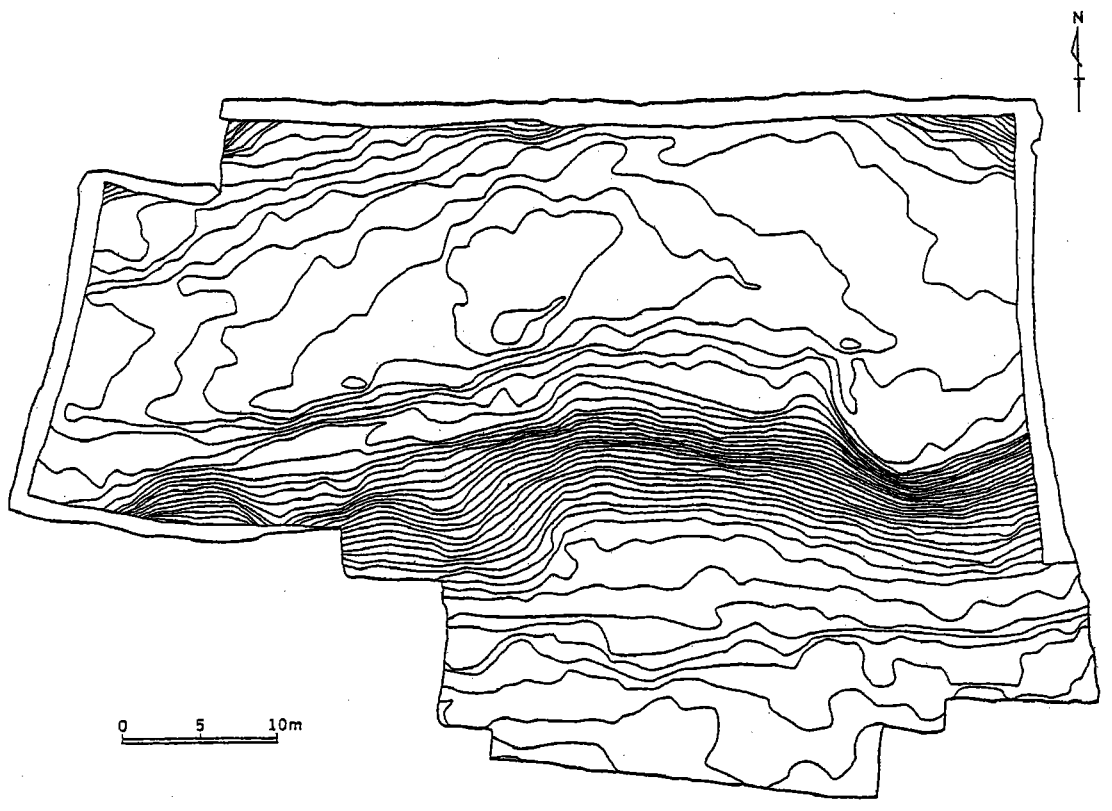
井荻、田無、所澤、藤澤に至る間の豪雨前(黒)、豪雨後(ハッチ)の地下水の状態

(吉村信吉 1989aからの引用)

第II-32図 豪雨前・豪雨後の地下水の状態



摩川流路跡が観察され、昭島市・多摩川低地（水道橋から昭島橋間）左岸側で比高差 2 m 近い帯状の凹地地形が観察された。



第 II - 33 図 府中市天神町・天神町遺跡の凹地の古地形  
 （黒土層を取り除いた地形、等高線は 10cm 単位）

凹地周辺の地形面は十分な資料が得られていないが、凹地北側の段丘平坦部（天神町遺跡第 2 地点）のテフラは、立川礫層上に立川ローム層最下部の X I 層以上のテフラが累積することから、国分寺崖線（武蔵野段丘崖）下の野川沿いから凹地北側の段丘平坦部までの範囲が立川第 1 段丘（Tc 1 面）に対比される。凹地南側の段丘平坦部のテフラは、立川ローム層の第 2 暗色帯（BB II）以上のテフラが累積する（第 II - 17 図）。凹地南側の段丘では、その南限である府中崖線（立川段丘崖）で立川礫層上にハードローム以上のテフラが累積する。立川第 2 段丘（Tc 2 面）の範囲は、天神町遺跡の凹地から南方向の府中崖線までであり、テフラ層位は段丘平坦部で観察された第 2 暗色帯から府中崖線上のハードロームまでである。テフラ層位からみた立川段丘の Tc 1 面と Tc 2 面は、古多摩川による Tc 1 面の形成（立川礫層の形成）で、立川ローム層最下部の X I 層以上のテフラが累積してテフ

ラ層位に大きな差が認められない。これに対して、Tc2面は、第2暗色帯からハードロームまでであり、Tc2面の中でテフラ層位に大きな差が認められる。この点は古多摩川とその当時の自然環境によるものと思われるが明らかでない。また、立川段丘を形成した古多摩川の立川礫層と多摩川の礫層を観察すると、立川段丘の立川礫層の層厚は約4mであるのに対して、多摩川低地の礫層は層厚平均約10mになる。

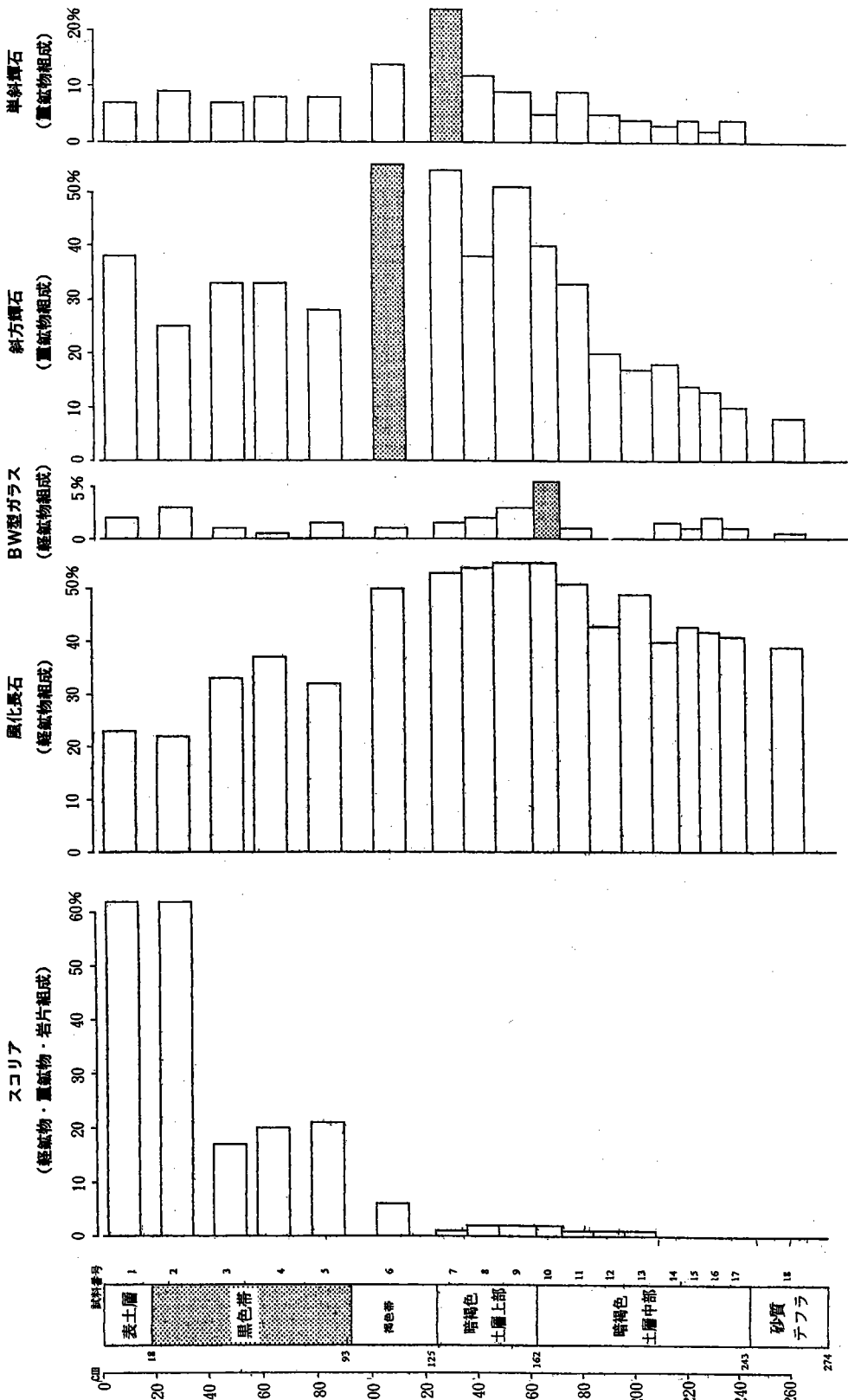
天神町遺跡の凹地底部は、その底部横断面の観察では立川礫層上に二次堆積である砂質テフラと層厚の厚い黒土層が観察される(第II-34図)。黒土層は下位から暗褐色土層中部、褐色帯、黒色帯、表土層が観察され、立川ローム層が欠如する。凹地底部の黒土層のテフラ組成は、褐色帯で斜方輝石の濃集層、暗褐色土層上部で単斜輝石の濃集層、暗褐色土層中部の最上部でバブル・ウォール(BW)型ガラスの弱い濃集層がみられる(第II-35、36図)。考古遺物では円磨された井草式土器が砂質テフラから暗褐色土層中部の最下部で出土する。この円磨された土器形式の年代から、立川ローム層・黒土層の一部(暗褐色土層下部を含む)を流し去った礫層から湧出する湧水は縄文時代早期前半までには消滅したと思われる。

天神町遺跡の凹地を流れた湧水の湧出地点は明らかでないが、立川段丘の地形面や凹地を埋積したテフラ観察、凹地のテフラ組成から天神町遺跡の凹地の上流方向、約1km地点(府中市幸町・東京農工大本部)に湧出地点があったものと推定される。この地点は立川段丘の地表面(第II-17図)で傾斜変換線が北東から南西方向にあり、この傾斜変換線は立川礫層上面(第II-18図)でも同様にみられる。天神町遺跡の凹地の湧水は、傾斜変換線と凹地が交差する地点で立川礫層から湧出したものと思われる。

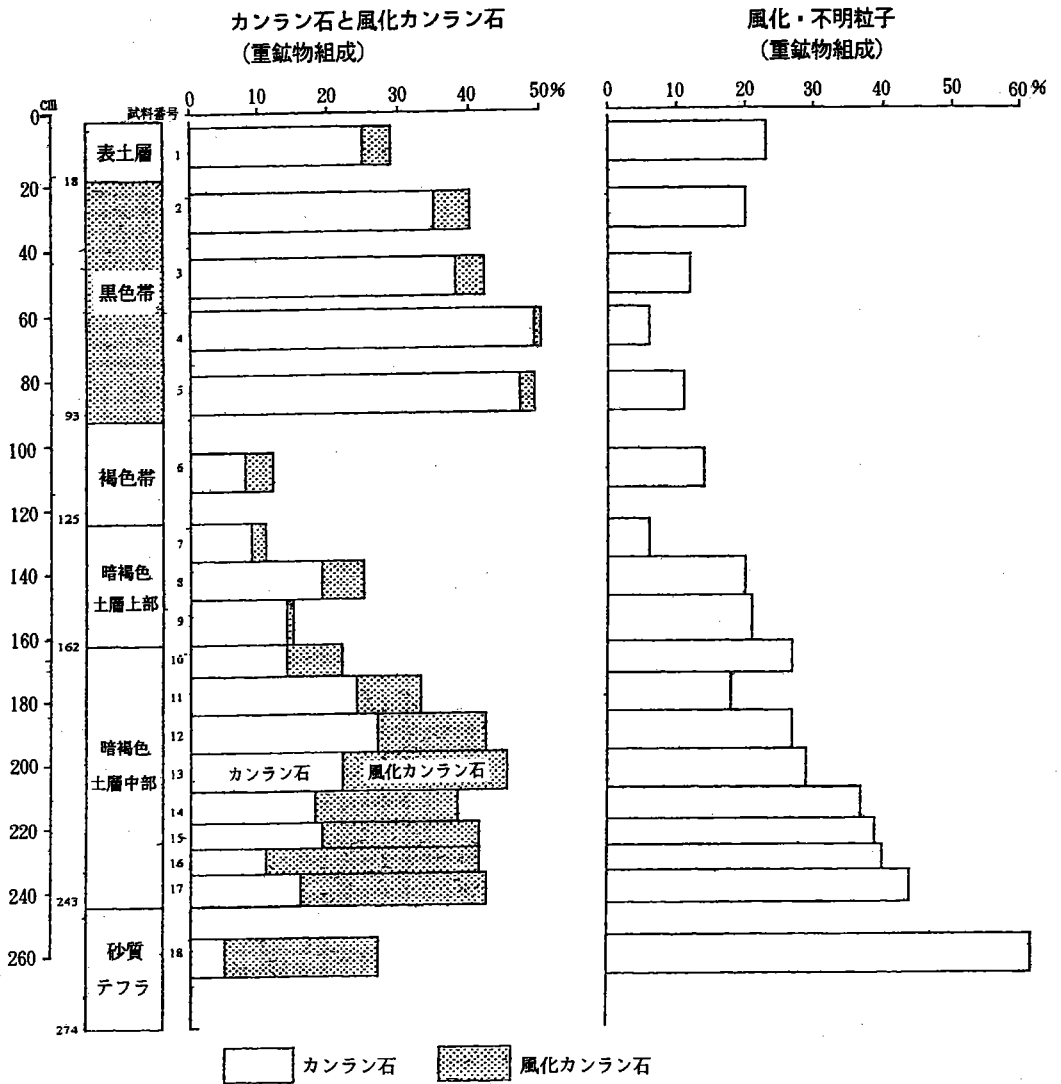
なお、このような当時の湧出地点の所在は、武蔵野台地西部の中で下末吉段丘・武蔵野段丘で野外や地形図からも閉じた楕円形の凹地(窪地)として確認することができる。しかし、下末吉段丘や武蔵野段丘より形成の新しい立川段丘では少数の楕円形の凹地が確認されているが、国立市から府中市、調布市にかけての立川段丘では野外で確認することは困難であり、また、地形図の等高線から判読できない。立川段丘の当時の湧出地点は、遺跡調査によるトレンチによって明らかになると思える。府中都営23遺跡(府中市武蔵台、現在調査整理中)の帯状の凹地は天神町遺跡を通る凹地よりも南側に位置する。この凹地は調査地の南端で南北に分布し、調査地の中央付近で蛇行状を示して北西から南東に分布する。蛇行状を示す凹地の上流方向は凹地の幅が広がった形状を示す。この地点のトレンチ断面の観察は、青柳ローム(ソフトローム)より下位のテフラが二次堆積の様相を示して、数枚の分級化されたスコリア層がレンズ状に堆積するほか、二次堆積のテフラ中に平均粒径10cmの礫層を挟む地点も観察された。府中都営23遺跡は凹地の堆積状況から、当時の湧出地点に近い位置にあると思われる。

天神町遺跡の凹地斜面部は、遺跡地の調査範囲から凹地南側の凹地斜面部が観察された(第II-34図)。凹地斜面部のテフラは、ハードロームが下位の立川ローム層を切る形で斜交関係を示す。こ





第II-35図 府中市天神町・天神町遺跡の凹地底部のテフラ



第Ⅱ-36図 府中市天神町・天神町遺跡の凹地底部のテフラ

の斜交関係は凹地を流れた湧水の量と関連するものと思われ、ハードローム堆積以前の一時期に湧水の量が多くなり、湧水によって側方浸食が行われ、立川ローム層の第2暗色帯から上位の第1暗色帯まで浸食したものと思われる。その後、ハードロームが凹地斜面部を垂れ下がるように堆積(斜交関係)することから、第1暗色帯の堆積以後は湧水の量が少なくなって湧水が消滅するまで、凹地底部の幅の中で礫層から湧出する湧水が流れたものと思える。

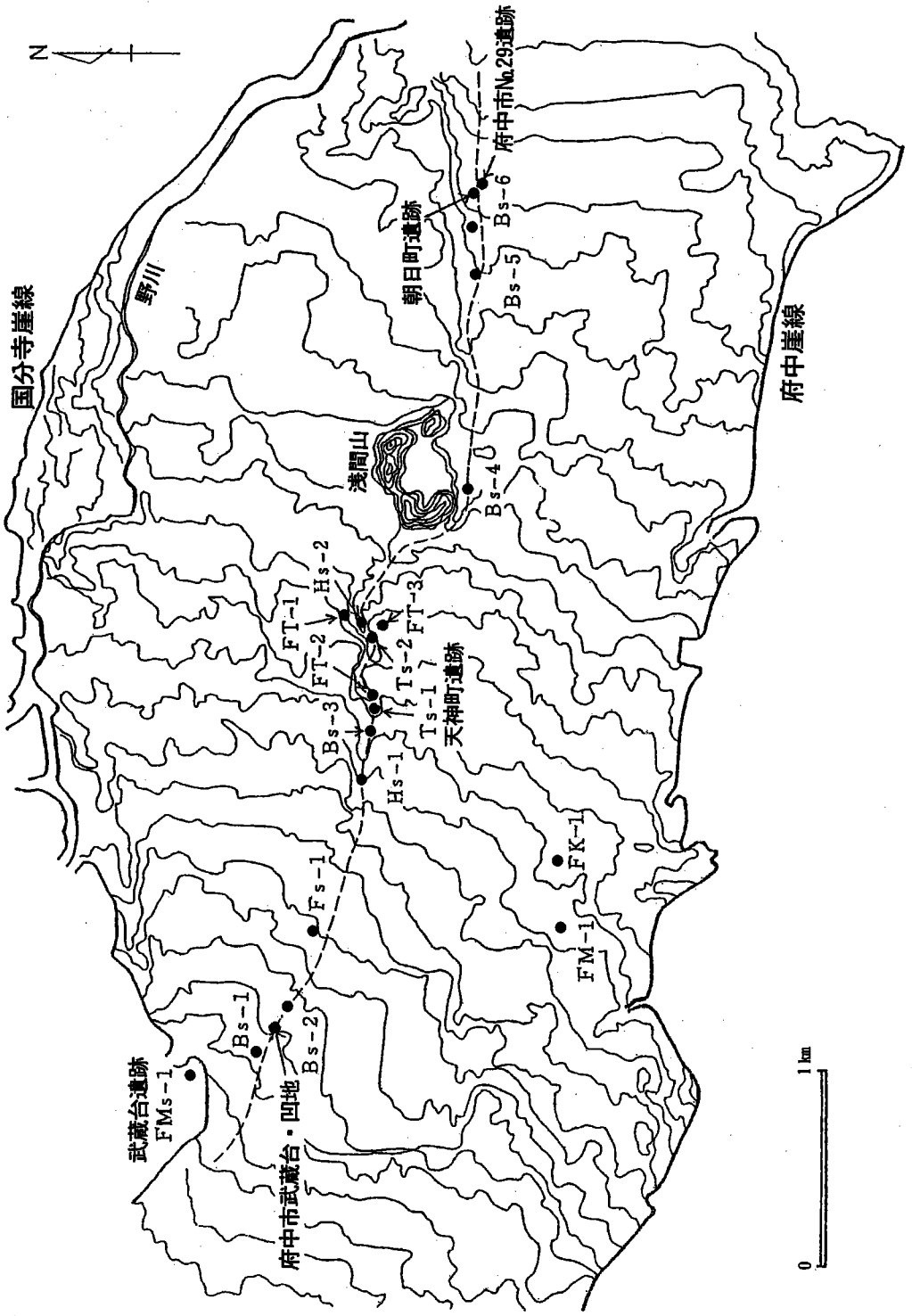
このように天神町遺跡の凹地地形は、①古多摩川の流れ(凹地の形成)、②礫層から湧出する湧水の流れ(湧水量の変化とテフラの流去)、③豪雨による一時的な野水の流れなど、水環境と密接に関

連して変遷してきたことが明らかである。また、それらの時期はテフラ層位から、古多摩川の流れが立川第1段丘(Tc1面)の形成後(立川ローム層のX I層以前)から凹地南側・段丘平坦部のテフラ層位である第2暗色帯の堆積以前までの時期である。礫層から湧出する湧水の流れは、第2暗色帯下位のXa層堆積以後から黒土層の暗褐色土層中部の中でも下部(とくに円磨された縄文時代早期前半の井草式土器の出土層準)が堆積するまでの時期である。野水の流れは、黒土層の堆積以後の時期である。天神町遺跡の凹地にかかわる当時の水環境は、現在では直接観察することができないが、微地形や立川礫層、立川ローム層・黒土層のテフラ、出土考古遺物などから明らかにすることができる。なお、天神町遺跡の凹地上流方向約500m地点の凹地斜面部で、テフラ試料採取の際に数点の旧石器が出土している。

湧出地点の上・下流方向の凹地の縦断面図を得るために、トレンチによる観察地点以外に、ハンドボーリング調査や建設ボーリング資料によって補足した。

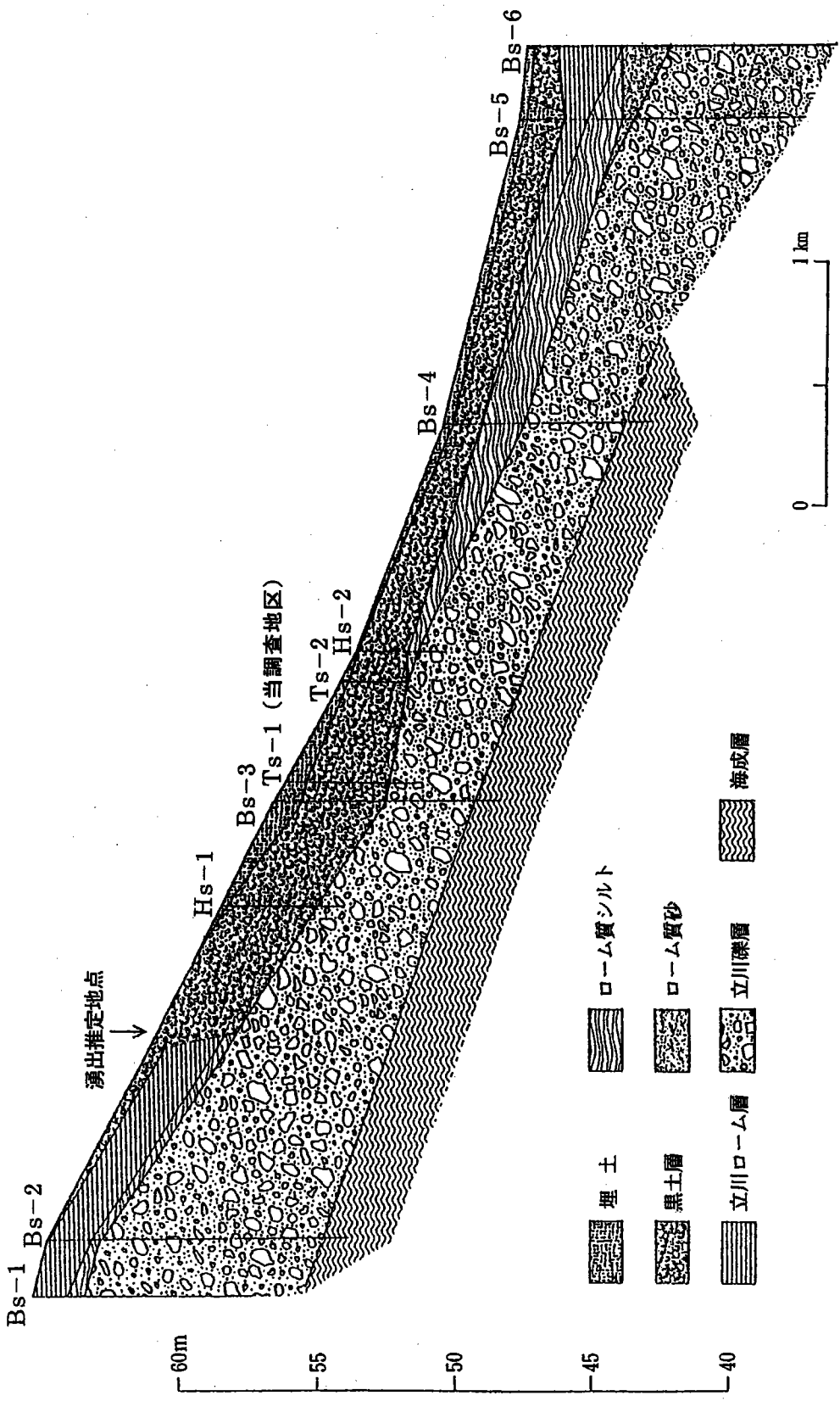
府中市武蔵台に位置する上流方向の凹地(第II-37図)は浅いU状の地形で、トレンチでその断面を観察しないと凹地の位置の確認が困難である。凹地底部のテフラは、立川礫層上にテフラ質細砂、砂質テフラなどが観察され、その上位はハードローム、青柳ローム、漸移層などの立川ローム層が累積する。そのテフラ組成は漸移層から青柳ロームの下位にかけてカンラン石が増加し、ハードロームの下位にかけて斜方輝石や単斜輝石が増加して対称的な傾向を示す。また、軽鉱物(主に長石)は、漸移層から青柳ロームにかけて急減してハードローム下部で増加する。ハードローム下部での軽鉱物の増加は、府中市武蔵台・武蔵台遺跡や多摩蘭坂遺跡の軽鉱物の傾向と比較すると、増加の量比が多くなることから、立川礫層に含まれる長石が混入したものと思われる。凹地底部の軽鉱物はハードローム下部からテフラ質細砂にかけて増加し、風化長石(やや黒ずんだ長石)も増加する(第II-39~41図)。

天神町遺跡の凹地より下流方向の凹地は、府中市朝日町・府中市No.29遺跡及び朝日町遺跡で観察することができた。府中市No.29遺跡は凹地南側斜面に位置し、立川ローム層は第2暗色帯(IX層)まで確認され、第2暗色帯より下位の層位は層厚53cmの砂質テフラ、層厚9cmの細砂であり、その下位は立川礫層となる。また、朝日町遺跡の立川礫層上面は凹地斜面部に位置し、府中市No.29遺跡の立川礫層上面に対して1m近く低下する。朝日町遺跡のトレンチ断面は、立川礫層上に層厚50cm前後の細砂、層厚80cmの灰褐色テフラ、立川ローム層の第2暗色帯が堆積する。府中市No.29遺跡及び朝日町遺跡で確認できる立川ローム層は第2暗色帯までであり、それより下位は水分の強い影響を受けたテフラや厚い細砂層が堆積する。この点は凹地の縦断面図でみるように、天神町遺跡の下流方向の凹地は、礫層から湧出する湧水が立川礫層に伏流して水量が小さくなり、あるいは礫層から湧出する湧水が伏流して消滅し、テフラ(BBII)によって凹地が埋積されたことも考えられる。府中市No.29遺跡や朝日町遺跡の凹地は、凹地底部の位置が未確認であることから、今後、凹地全体の様相を把握する必要がある。



第II-37図 府中市天神町・天神町遺跡を通る凹地の調査地点

(縮尺1/3万、破線は凹地、E・T・Ts地点はトレンチ調査、Hs地点はハンドボーリング調査、Bs地点は建設ボーリング資料)

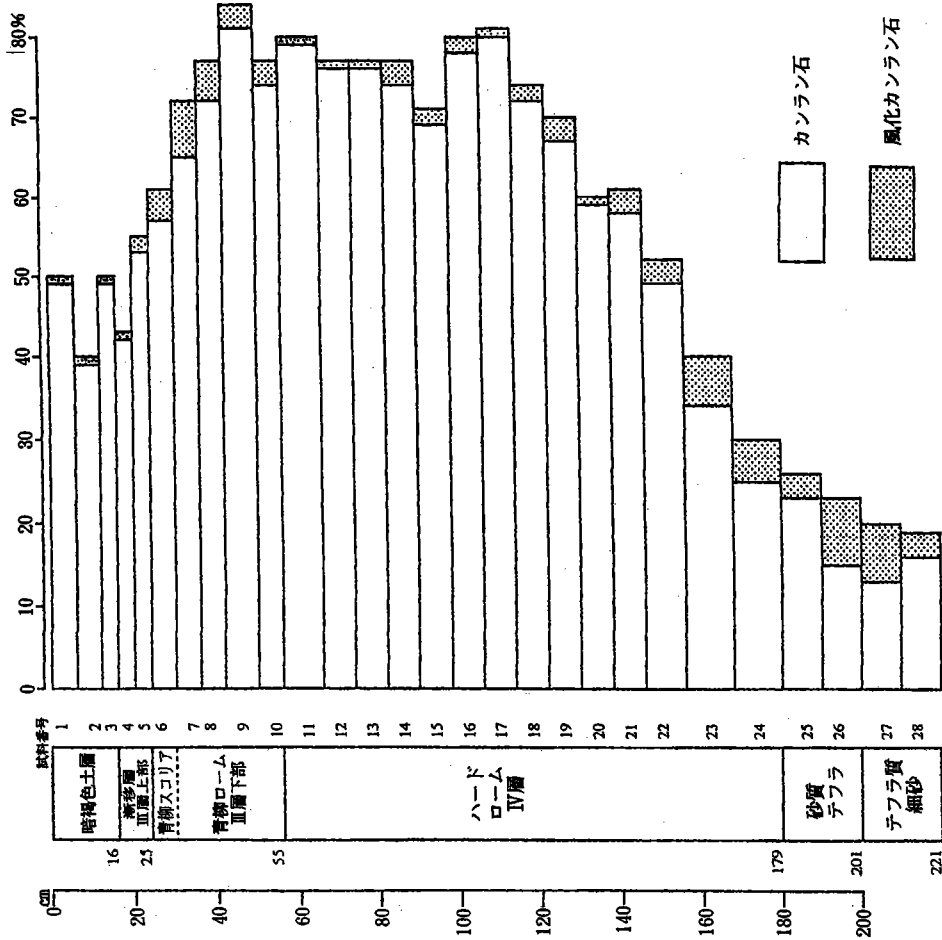


第II-38図 府中市天神町・天神町遺跡と凹地縦断面

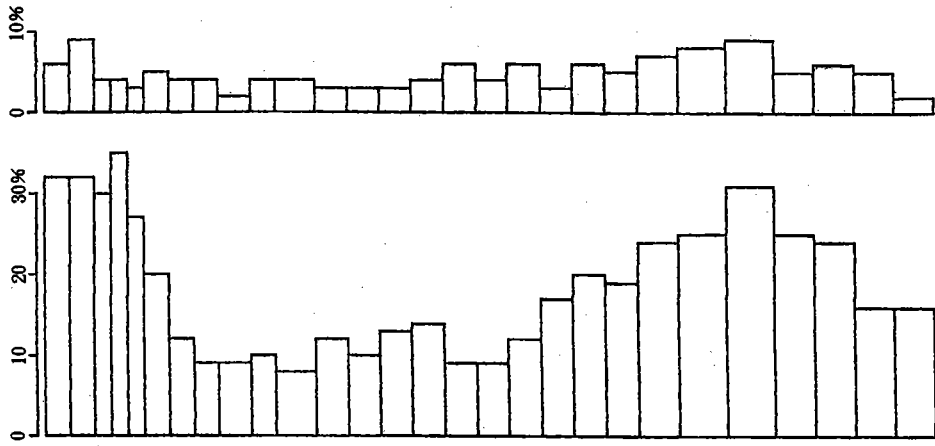




カンラン石と風化カンラン石  
(重鉱物組成)

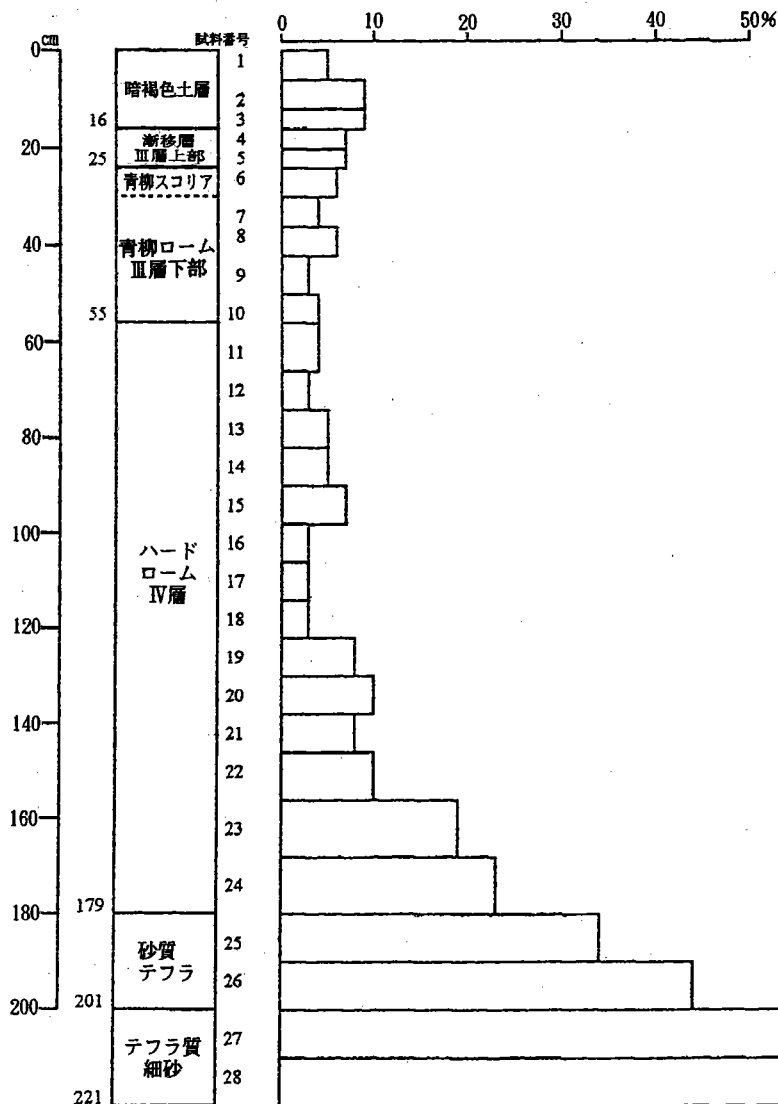


斜方輝石と単斜輝石 (重鉱物組成)



第II-40図 府中市武蔵台・凹地底部 (天神町遺跡凹地上流方向) のテフラ

風化・不明粒子（重鉱物組成）



第II-41図 府中市武蔵台・凹地底部（天神町遺跡凹地上流方向）のテフラ

なお、府中市No.29遺跡や朝日町遺跡は、天神町遺跡と同様に旧石器の遺物が出土し、いずれも「小規模な遺跡」とされている。これまで府中市域の帯状の凹地及びその周辺は、小規模な旧石器遺跡が発見されており、野川沿いの旧石器の大規模な遺跡に比較すると、湧水量等から大規模な遺跡が形成されず、狩猟採集のための前線基地的な役割だったと思われる。府中市府中町（京王線府中駅北東側）の遺跡は、帯状の凹地が東西に分布し、凹地底部は立川礫層上に青柳ローム最上部の青柳スコリア層以上のテフラが累積する。この地点は立川第2段丘に位置し、段丘平坦部はハードローム以上のテフラが累積する。遺跡の石器は完形の尖頭器2点が出土し、出土層準は青柳スコリア層とその上位の漸

移層である。

また、府中市白糸台地先の「白糸台地域下層遺跡」(武蔵国府関連遺跡第1097次調査、坂詰・野田2000)は、立川段丘崖である府中崖線に近接し、府中崖線を開析した埋没谷の北側縁辺部のハードルーム中に出土礫の総数が1575点に及び、礫群の規模は南北5m、東西約4mの範囲に4ヶ所の礫群集中部が存在する。石器はナイフ形石器2点、スクレイパー2点、剥片などが4ヶ所の礫群集中部の中央部に集中して出土する傾向にあると指摘されている。礫群や石器の出土層準は、ハードルーム最下部(IV層下部)に多く点在する「デカスコ」(粒径5~10mmの黒色スコリア)が観察できず、欠如しているものと思われることから、「IV層下部上面」あるいはそれよりやや上位の層準の範囲にあると思われる。遺物の出土層準と関連して地形面とテフラ層位との関係は、大地形から微地形を追求してくると「府中崖線上のテフラ層位はハードルームをのせる」というだけでは説明不足であり、ハードルームのどの層準までのせているのか、離水期のテフラの堆積状況はどうか、より厳密な観察と分析が必要になる。また、地形環境との関連で白糸台地域下層遺跡をみていくと、府中崖線に近接して遺跡が位置しているだけでなく、府中崖線を開析した埋没谷(開析谷)の北側縁辺部に位置することから、小規模な谷の湧水との関係も密接に関連しているものと思われる。開析谷の湧水を利用しているとなれば、府中崖線が形成されはじめた時期にあたり、その時期と離水期あるいは離水後のテフラの累積状態がどうか、開析谷と遺物の水平分布との関係はどうかかなど、遺跡の地形環境を動的に追跡する必要がある。

府中市域の府中崖線を開析した埋没谷は、少なくとも4ヶ所が知られており、この埋没谷の台地平坦部への延長はいずれも帯状の凹地に続いている。白糸台地域下層遺跡もそのひとつであり、今回の旧石器遺跡の発見で同遺跡周辺の今後の調査が期待される。

#### 引用参考文献

- 小林達夫・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男(1971) 野川先土器時代遺跡の研究、第四紀10-4  
p. 231-252、日本第四紀学会
- 上條朝宏(1986) 多摩ニュータウン区域内における基本層序と文化層、「多摩丘陵の歴史と土壌」、  
p. 96-104、ペドロジスト懇談会編
- 坂上寛一(1990) 黒ボク土—火山灰土壌の成熟化と要因一、朝海重夫編「土壌地理学」、  
p. 186-194、古今書院
- 松田隆夫・大倉利明・坂上寛一(1990) 武蔵野台地南西部における立川面の区分と層序、日本第四  
紀学会講演要旨20、p. 114-115、日本第四紀学会
- 松田隆夫・大倉利明・坂上寛一(1996) 武蔵台遺跡の立川ローム層・黒土層の層序と地形環境、  
「武蔵台遺跡Ⅱ—資料編6・付編一」、p. 131-148、都立府中病院内遺跡調査会

- 吉村信吉 (1939 a) 昭和13年に起こった武蔵野台地 — 地下水の渇水及び大增水、地理学評論15巻  
第3号、p. 165-185
- 羽鳥謙三 (1971) 模式地域における立川ローム層の層位について — 野川遺跡を中心にして —、第  
四紀研究 10-4、p. 224-250
- 山崎晴雄 (1978) 立川断層とその第四紀後期の運動、第四紀研究 16、p. 231-246
- 上杉 陽 (1990) 富士火山東方地域のテフラ標準柱状図 — その1: S-25~Y-114 —、関東の  
四紀 16、p. 3-28
- 大倉利明・坂上寛一・松田隆夫 (1990) 武蔵台遺跡C地区トレンチ土壤の炭素、窒素、C/N比と  
武蔵野台地周辺の完新世土壤層位の腐植集積、武蔵野台遺跡II — 資料編6・付編一、都立府中  
病院内遺跡調査会、p. 149-153
- 府中市遺跡調査会・坂詰秀一・野田憲一郎 (2000) 府中市 武蔵国府関連遺跡第1097次調査 (白  
糸台地域下層遺跡)、東京都遺跡調査・研究発表会26発表要旨、p. 4-5、東京都教育委員会

# 第三章 多摩川流域と武蔵野台地の遺跡立地と地形環境

## 第1節 武蔵野台地南西部 ～野川を中心とする多摩川水系の遺跡～

比田井 民子

### 1. 野川流域の後期旧石器時代遺跡

多摩川水系の代表的な河川である野川流域には50箇所以上の遺跡があることがこれまでに明らかになってきた。この数字は武蔵野台地全体の中小河川の流域の遺跡数でも最も遺跡が集中することを示しており、日本列島全体の中でも、これだけの小河川のなかで遺跡が密集する事例はほかにあまり例を見ないものでもある。野川流域を中心とする遺跡密集はどのような背景のもとに生じた現象なのであろうか。また、個々の遺跡が何故そこに残されたのか、遺跡が形成された当時の旧地形、地質条件をふまえて当時の立地環境を復元し、立地の意義について明らかにすることが本研究の課題である。

野川は東京都国分寺市沓ヶ窪に源を発し、東京都世田谷区玉川で多摩川本流と合流する長さ14kmの河川である。武蔵野台地はこの野川を境として約10mの段差をもち、武蔵野段丘面と立川段丘面となる(第Ⅲ-1図)。主に遺跡は野川の北側に沿った武蔵野段丘の崖線である国分寺崖線の上下に立地する一方、野川の南側に沿って、立川段丘面にも立地する。

1969年、三鷹市野水における野川遺跡の発掘調査により、重層する後期旧石器時代の石器文化層が検出された(小林ほか1971)。それにより、旧石器時代の石器群が従来考えられていたよりも複雑に移り変わっていくことが層位的に明らかにされたのである。これをきっかけに、野川流域の旧石器時代を射程においた発掘調査が積重ねられ、源流がある国分寺市から、最下流の世田谷区二子玉川周辺まで旧石器時代遺跡が分布していくことが明らかになったのである。

### 2. 野川をめぐる旧地形と遺跡立地について

野川流域の分布からみた遺跡立地について1999年の日本第四紀学会大会において本研究の成果の一部を紹介している(比田井ほか1999)。そこではまず、野川全体の遺跡分布を把握するために流域の後期旧石器時代遺跡の礫を除いた遺物の出土量により遺跡の大きさを分け、地形図におとし遺跡の分布状態を示した概念図を作成してみた(第Ⅲ-1図)。また、立川ローム層の層序別に遺跡の分布を検討し、時期別の傾向をつかみ、野川とその周辺の地形、地質環境がどのように遺跡立地に関してきたかを明らかにしてみた。出土総量による遺跡の分布状態を見ていくと上流部には比較的大きな遺跡が分布するが中流部には殆ど遺跡がなくなり、下流部になるとまた遺跡は分布するようになるが大きな遺跡は無くなるといったような非常に興味深い傾向を示すことが明らかになった。それらの要因を明らかにするためにここではもう少し詳細に野川流域の遺跡と立地の背景について探ってみることとした。まず、時期別の遺跡立地の傾向を明らかにするために層序別の遺跡分布図をあらわしてみた

(第Ⅲ-2図)。層別の遺跡分布の特徴をみていくと、立川ローム層Ⅲ層に文化層がある遺跡は比較的規模の大きいものが野川の上流に立地し、下流の世田谷周辺になると遺跡規模は小さくなる。Ⅳ層では上流、下流とも規模をとわずともに大規模な遺跡から、小規模な遺跡が武蔵野面、立川面をの全域に広がる。遺跡数もこの段階が最大数を示す。Ⅴ層では遺跡は下流にいくほど少なくなり、上流の武蔵野面を中心に中、小規模遺跡が見られる。また、Ⅴ層以下の層序ごとの遺跡数がⅣ層、Ⅲ層に比べ激減し、遺跡の立地する段丘面も武蔵野面に偏るようになっていく。Ⅵ層も下流の遺跡が殆ど無く、上流も小規模の遺跡のみとなる。Ⅶ層は羽根沢台遺跡(三鷹市教育委員会1996)のような大規模な遺跡もまれにあるが、上流、下流ともに主に小規模な遺跡が少数分布する。Ⅷ層は上流を中心に小規模な遺跡が分布する。Ⅸ層は上流を中心に大規模から、小規模な遺跡が分布し、下流にも少ないながら中規模、小規模の遺跡が分布する。さらに各層の遺物の総数と遺跡数の相関関係を図に表わし(第Ⅲ-3図)、変遷の傾向をみていくとⅣ層が遺跡の数、分布状況を裏付けるように遺構・遺物量が最大の出土量を示す時期であることがわかり、大きな数量差をもってⅢ層がこれに次ぐ。Ⅴ層は石器数はⅣ層に比べ激減するが、礫数ではⅣ層についており、礫群数もこの段階から急激に増加する。全体に立川ローム層下層になると総体的に遺跡数が上層と比べ激減するが、Ⅸ層は遺跡数がやや増加する。Ⅸ層は前後する層序と比較すると遺跡数は大差がないが、遺物出土量ではこの層とⅥ層が最も落ち込む。Ⅸ層は石器数ではⅢ層に次ぐ出土量を示しており、これは上流を中心とする大規模遺跡の存在と上流、下流ともに小規模、中規模遺跡が広がっていくことに比例している。変遷のなかでも極端な変化が認められるのはⅣ層の時期であり、遺跡数では最も少ない時期の約5倍以上にのぼる。それに次いで遺跡が多いのはⅢ層であり、遺跡数のうえでも最も少ない時期の約2倍になる。それより遡ったⅤ層からⅨ層ではどの時期も遺跡数のうえでは大差が無く、13から16遺跡の間で少しずつ変動している。Ⅳ層の遺跡数の急激な増加の傾向については、武蔵野台地のそのほかの地域でも大小の遺跡がこの時期、急激に増えるという傾向があり、南関東地方全体の傾向であるといえる。その原因の一つとして考えられることはⅣ層の時期に著しい人口の拡大があった可能性が高いことである。また、大規模遺跡が増加するとともに、中・小規模遺跡も増加し、従前の拠点となるような規模の遺跡を残しつつ、同時に拠点に次ぐような遺跡と短期滞在型ともいえるような小遺跡が多く出現する。遺跡数の増加と遺物量による様々な規模の遺跡の存在は自然環境の安定や人口の拡大が集団の組織構造に影響を与えた結果と理解してよいであろう。また、この時期は列島全体のなかで遺跡数の増加と、西日本系石器群の東日本への広域的な分布、中部地方・関東地方に広域に広がる尖頭器石器群の存在など人の移動と交流が後期旧石器時代のなかで著しく活発化する時期と理解してよいであろう。一方ではそれ以前のⅤ層からⅨ層の各段階の遺跡数は15遺跡前後の数のなかで大差にない変遷を遂げている。出土遺物数についても、これらの時期のなかで大きな変動は認められない。こうした遺跡数の停滞は、それぞれの時期的な要因はあろうが、野川流域また武蔵野台地全体で、人口自体もⅣ層段階などと比較し、かなり小規模のまま長い間維持されてきたもの理解しても差し支えないであろう。



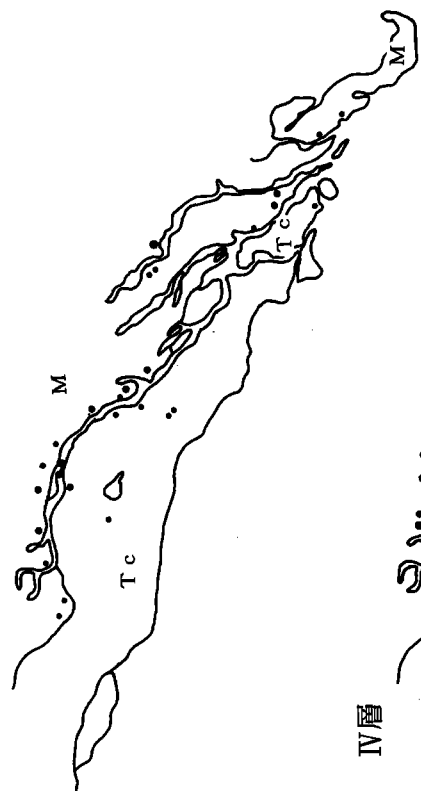


第Ⅲ-1図 武蔵野台地野川流域の後期旧石器時代遺跡の立地（比田井他 1999）

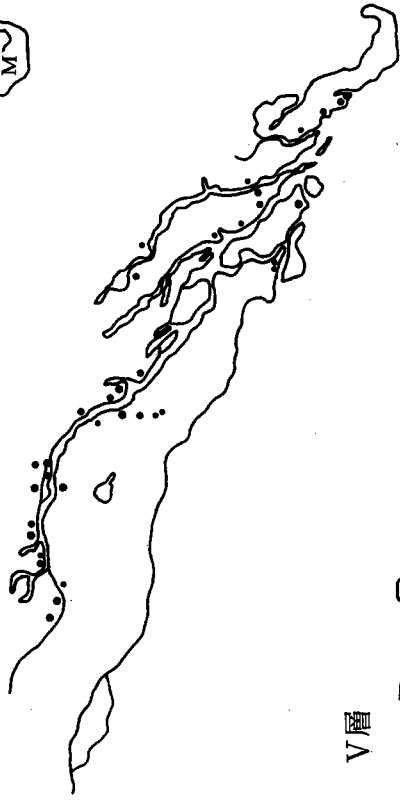
※基盤層の分布は羽鳥原図による。



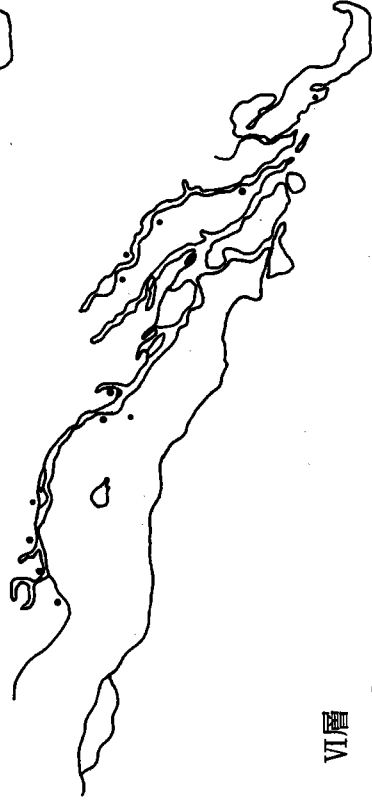
Ⅲ層



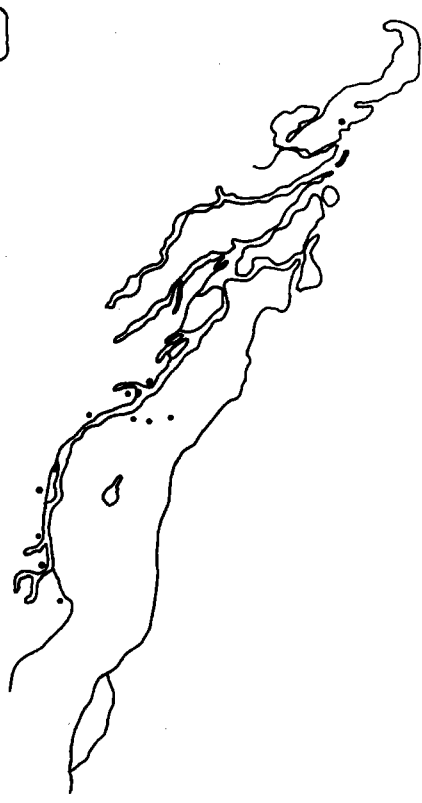
Ⅳ層



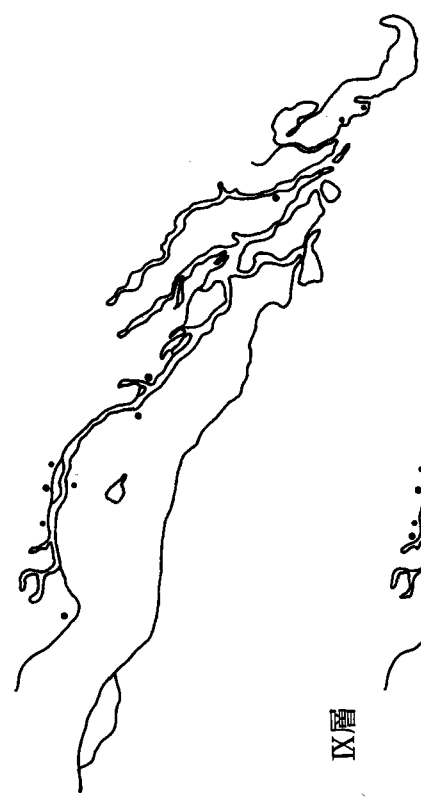
Ⅴ層



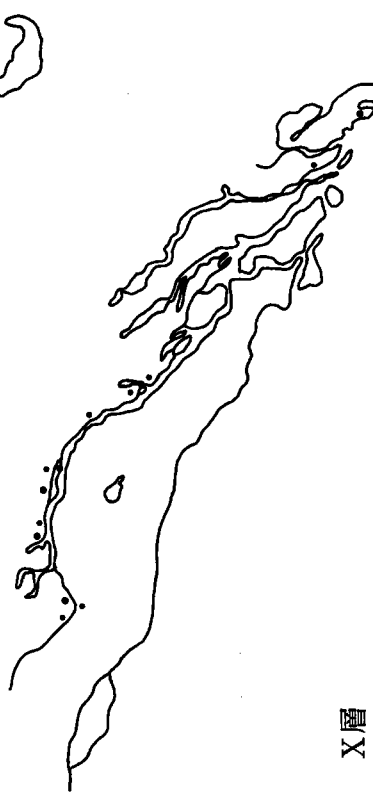
Ⅵ層



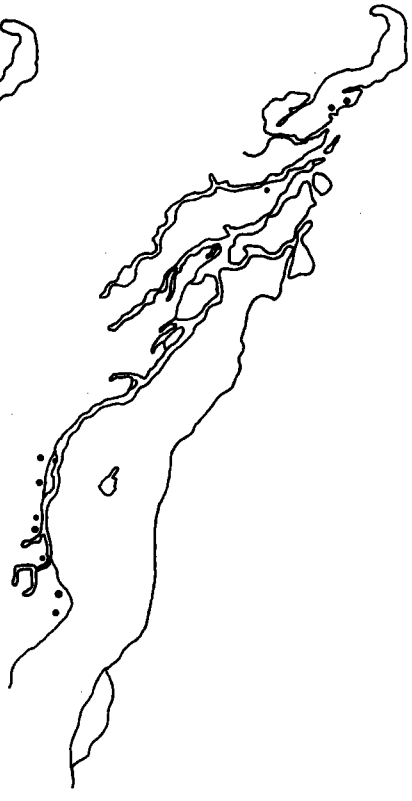
Ⅶ層



Ⅷ層

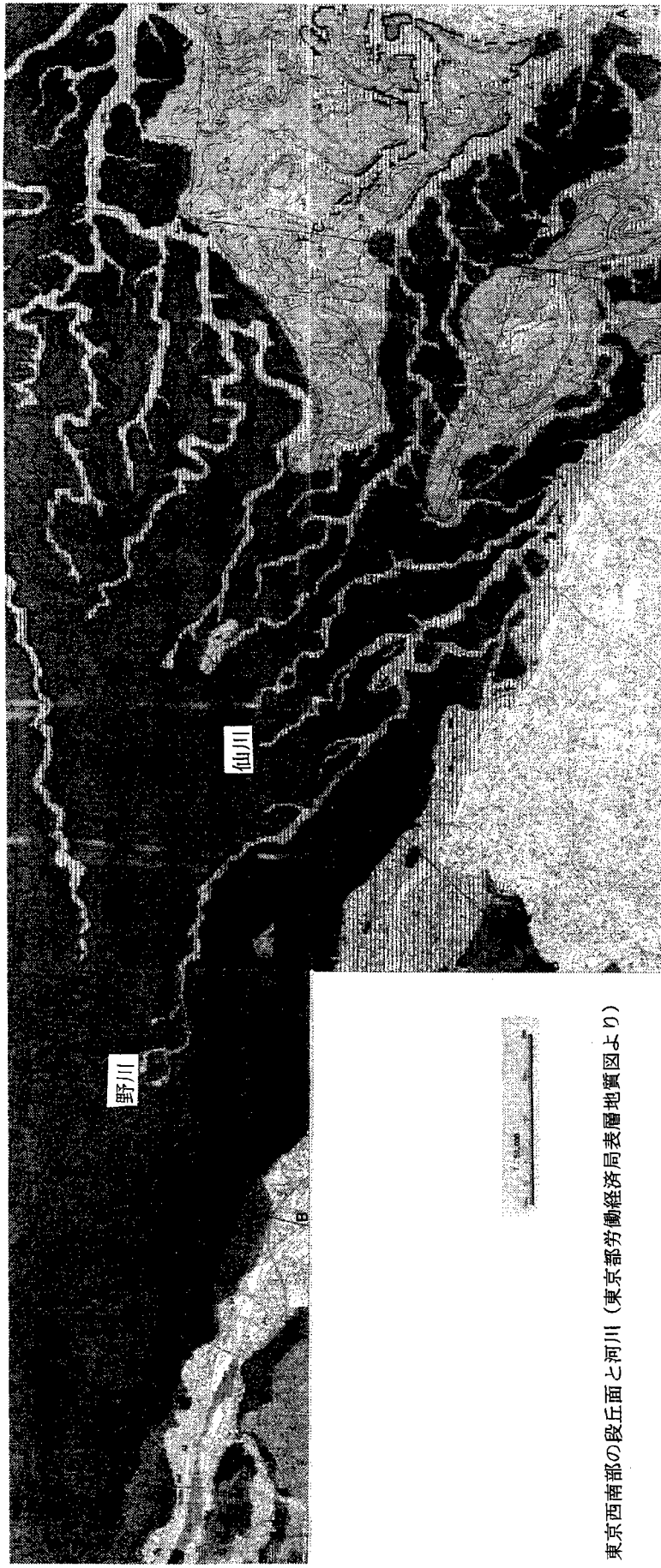


Ⅸ層



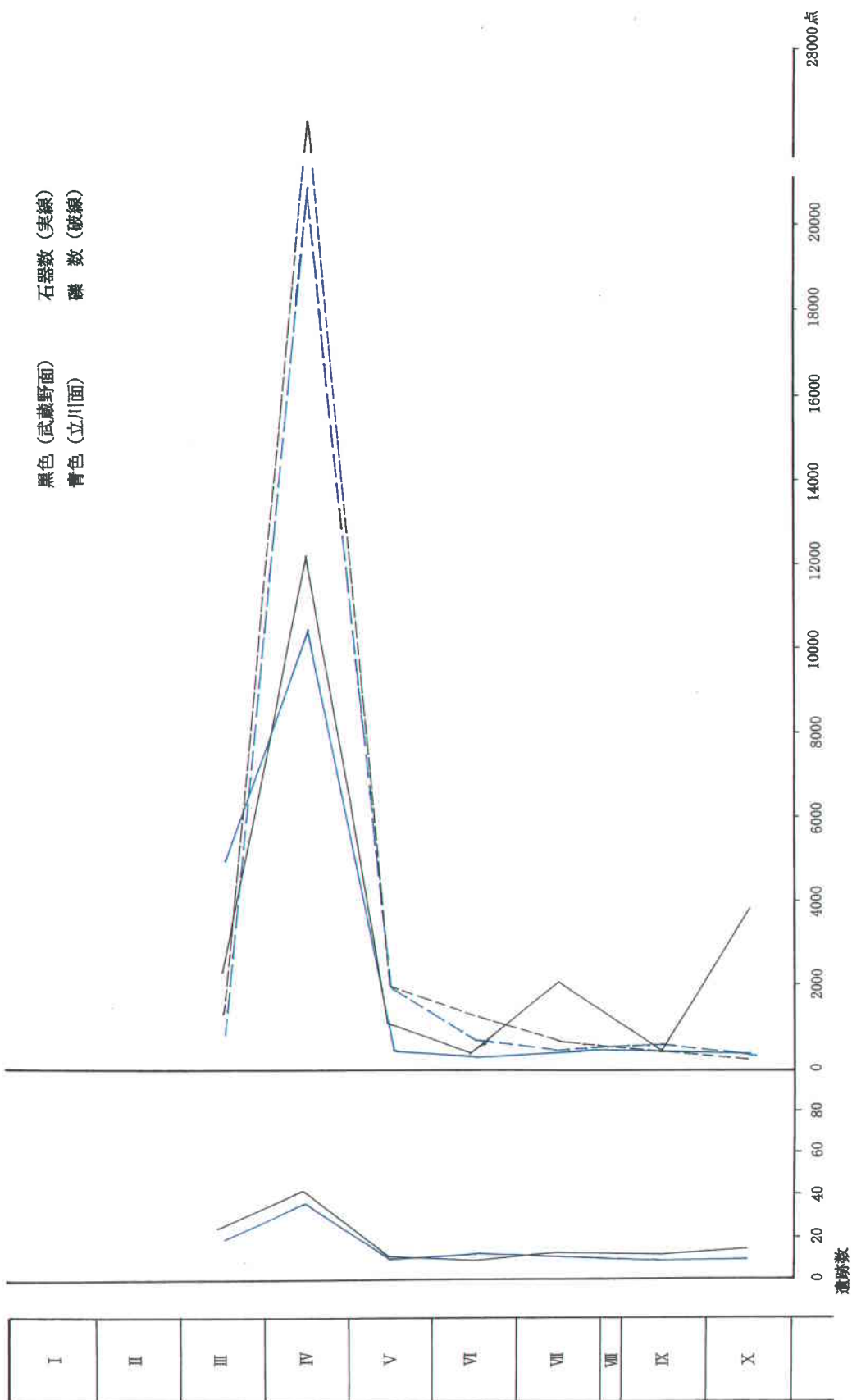
石器出土量	•
1~50	•
51~1000	•
1001以上	•

M: 武蔵野面 Tc: 立川面



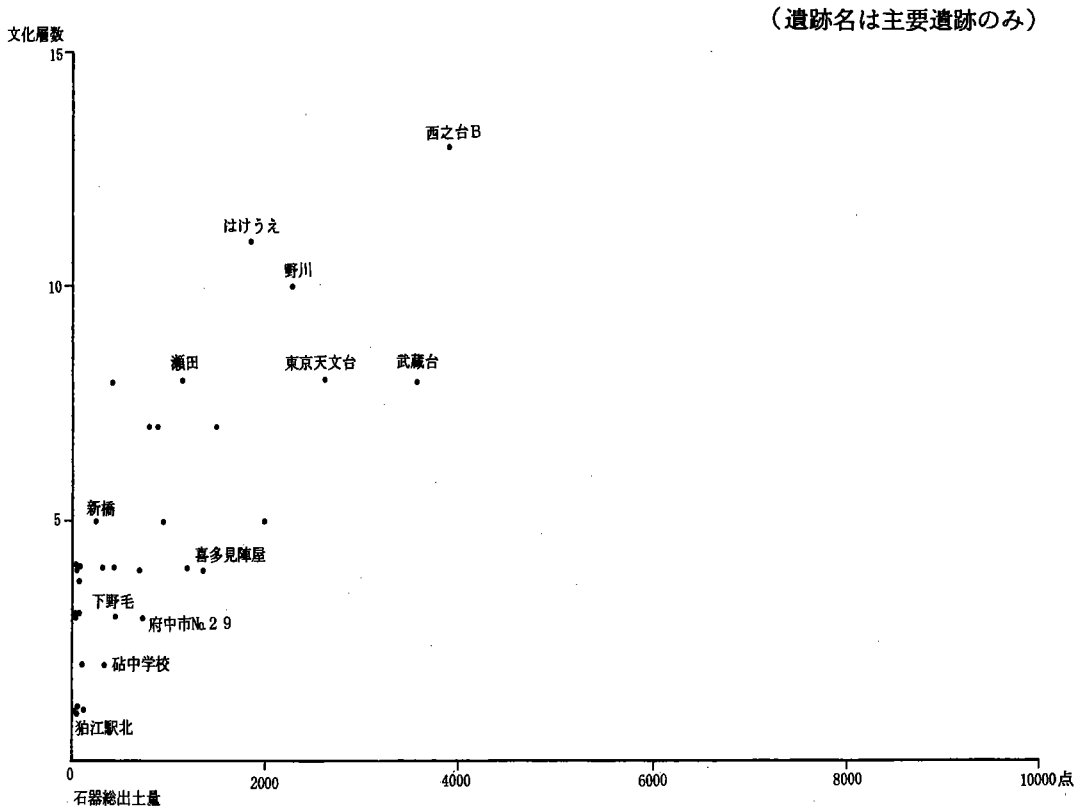
東京西南部の段丘面と河川 (東京都労働経済局表層地質図より)

第Ⅲ-2図 各層毎の遺跡分布



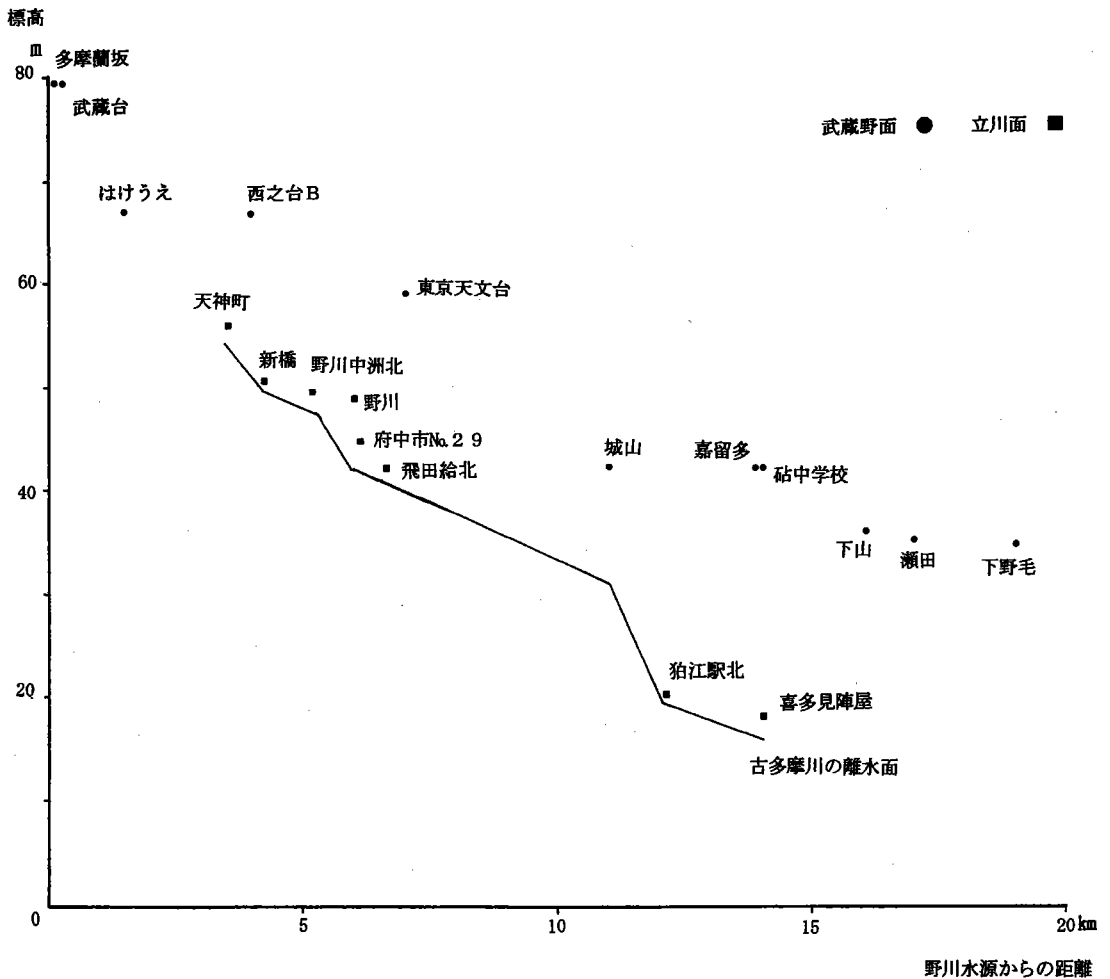
第三一三図 野川流域の遺跡と遺物の変遷

また、重層する石器文化層と遺物量の関係からも遺跡の滞在度を推定することができる。第Ⅲ-4図は遺跡の文化層数に対し、石器の総出土量がどのように変わっていくかを表したものである。野川流域の遺跡をみていくと文化層が重層する遺跡の多くに遺物量にからみて大規模化する時期が重なる傾向があり、それは文化層数が多い遺跡ほどこうした大規模化が著しい。これとは逆に単独の文化層からなる遺跡があるが、遺物量は10点以下のものが殆どである。重層する遺跡は大規模化する時期を除いても遺物量が中規模程度の文化層が連続して残されており、その場所が後期旧石器時代全体を通して、繰り返し選地されてきた場所であったといっても差し支えないであろう。東京天文台構内遺跡（東京天文台構内遺跡調査団1983）、羽根沢台遺跡（三鷹市教育委員会1996）、野川中洲北遺跡（東京都建設局・小金井市遺跡調査会1989）、西之台B遺跡（小田ほか1980）、はけうえ遺跡（小田ほか1982）などの野川上流域の遺跡が特にそうした傾向を強く示す遺跡が分布している。そうした複数の時期に渡り、遺跡が残された場所は当時の立地として優れたものであり、時代を通じて拠点的に利用されてきたと理解される。これに対し、少数の文化層からなる遺跡は遺物量もなく、通過的性格の強い遺跡として考えてよいであろう。



第Ⅲ-4図 文化層と出土遺物量

野川流域の旧石器時代遺跡の規模は南関東地方のなかでも特に大きく、地域により分布の差があることがあきらかになった。さらに遺跡が位置する段丘面によっても分布の差が認められる(第Ⅲ-5図)。遺跡の立地傾向からは野川の武蔵野段丘崖の上下に沿って遺跡は多く、立川段丘面でも野川南岸では遺跡は少なくなる。また、V層より下部の立川ローム層に文化層がある遺跡では武蔵野面に偏って立地しており、同じ時期に立川面に位置する遺跡でも、野川沿いの武蔵野段丘面に近接した位置にあるものが殆どであり、時期による立地の傾向があることも明らかになった。そうした立川面、武蔵野面での遺跡の分布の差があることについては、場所ごとの離水の時相差によるものが大きかったと思われる。大規模遺跡は武蔵野段丘面側に主に立地して、立川面側の遺跡は中小規模の遺跡が主となる。また、遺跡の分布密度にも粗密があり、野川流域ではどの時代でも上流あるいは下流に遺跡の立地は偏っており、上流に大規模遺跡多いが、中流の調布市深大寺から調布市入間付近では遺跡が殆ど



第Ⅲ-5図 古多摩川の離水と遺跡の立地

無くなり、さらに下流では中小規模の遺跡が多くなるといった傾向もある。中流の遺跡が少ない原因の一つとして第四紀学会大会においても既に指摘してきたように、その地域に砂を主体とした稲城層を基盤とする中台面があり、遺跡が形成される時期にそのほかの礫層を基盤とする地域に比べ湧水環境に恵まれていなかったことが地形、地質学的には考えられると言われる（第Ⅲ－1図）。基盤層が砂層である稲城層は水が抜けやすく、そのほかの泥質層を基盤とする地域では湧水を生じやすかったことが地質学的には考えられている。また、野川から離れて立川段丘面の真中で小規模の遺跡が点在しているがそれらに沿って浅い埋没谷地形が存在し、それらの谷地形にいくつかの湧水点の痕跡があることが本報告の第Ⅱ章第2節で指摘されている。

野川流域の地形の変遷に伴う、遺跡立地の変遷から生活領域が時期により異なることがあきらかになった。Ⅴ層を境としてそれより時期を遡ると立川面は古多摩川が流れ、広い氾濫原となっており（本報告第Ⅱ章第1、2節による）、人々の生活の中心は湧水点をもつ国分寺崖線側の武蔵野面に限定されていたと言える。さらに時期を下るとⅣ層の時期には立川面の完全な陸化により、立川面にも湧水点を伴う浅い谷地形が形成されることもあり、遺跡は立川面にも多く立地するようになり、生活領域は拡大していく。

### 3. 仙川流域の後期旧石器時代遺跡

仙川流域の遺跡立地についても検討をおこなったが今のところ旧石器時代の遺跡自体が5遺跡と少なく、一定の傾向をつかむことは難しい。しかし、現在のところ調査報告書の刊行によって明らかにされているところによれば、Ⅳ、Ⅲ層に石器文化層がある遺跡が主体であり、その規模についても小規模のものが中心である。Ⅳ層の遺跡でも仙川遺跡（小田ほか1974）、三鷹五中遺跡（三鷹市教育委員会1983）など新しい段階の尖頭器、細石器がまとまって出土する遺跡が目立っている。地形、地質学的には水系は野川と同じでも、野川とは異なった地形景観が仙川にあったことが近年の島屋敷遺跡の発掘調査に基づいた地質学的研究において指摘されている（三鷹市教育委員会1977）。仙川が形成された経過については久保純子氏の成果（久保1988）にもとづき、起源は武蔵野台地の扇状地形を形成した古多摩川の名残川であるとしている。特に旧石器時代遺跡が残された約6万年～1.5万年前の状況については低位の段丘の形成と旧の流路とその影響があった周辺地域が全体に離水して遺跡の立地する台地が形成され、周辺には仙川の河川作用が及ばない湿地、沼沢地が広がっていたと考えられている。こうした考察に基づき近隣の遺跡の土層を確認していくと島屋敷遺跡の500m下流の同じような台地上に位置する三鷹市立第五中学校遺跡（三鷹市遺跡調査会1983）では立川ローム層Ⅴ層において粘土化が見られる。また、流域の遺跡の石器文化層の多くがⅣ層、Ⅲ層にもとめられるものを主とすることから完全に乾陸化し安定した土層になるのはⅣ層以降の時期であることでほぼ間違いはないであろう。また、仙川流域にはいまのところ立川面の遺跡は知られておらず、立川面が形成されるのはこの後の約1.5～1.2万年前といわれ、野川流域の立川面のⅦ層の離水時期と仙川流域の立川面のロー

ムの土層形成期のずれがある。立川面の形成が旧石器時代末になっているため仙川流域での立川面の遺跡が発見されることが少ないのである。この地域は武蔵野面であるにもかかわらず、野川に連なる立川面のように後期旧石器時代の前半期において渇水した地域である。島屋敷遺跡ではⅦ層の遺物が少量出土しているが、ローム層の下位が粘土化しており、武蔵野段丘面に切り込んだ谷を形成していたにもかかわらず、仙川流域の立川ローム層下位の時代は野川と同様、渇水の影響を大きく受けていたのである。

#### 4. そのほかの多摩川水系の遺跡

多摩川水系には武蔵野台地を代表とする野川、仙川のほかに後期旧石器時代遺跡が立地する河川として砧川、矢沢川がある。特に低位段丘面の遺跡を中心に旧流路と遺跡形成の過程がわかる遺跡が調査されている。

堂ヶ谷戸遺跡（世田谷区教育委員会1988）は砧川の最下流に位置し、出土したものの石器はわずか1点である。

このほか野川流域とは離れ、多摩川上流域遺跡として立川市向郷遺跡（立川市向郷遺跡調査会1992）がある。この遺跡でも離水と遺跡の形成の過程が解る痕跡が残っている。多摩川水系の矢川に面した立川面の府中崖線際に遺跡は立地している。ここでは立川ローム層Ⅲ層に尖頭器を出土した石器文化層がある。遺跡のなかでは石器文化層の直下の立川ローム層Ⅳ層中に河川礫を伴う自然流路のあとが検出された。礫の大きさも拳大で河川中流域にあるものに類似し、発掘区全域には水磨された小さい円礫も検出されており、古多摩川の一部か一時的な氾濫原の跡と考えられている。その後、直上の層中に残された遺跡はかなり水辺に近いところに位置したということになる。こうした、自然流路が石器文化層の直下あるいは、石器文化層と同じ時期に発見された遺跡は武蔵野台地に限らず旧石器時代末から縄文時代草創期の遺跡で散見されている。あきる野市前田耕地遺跡は現在の水田面にあるが青柳段丘面に位置している。羽鳥謙三氏らによる地形、地質学的調査によると青柳段丘面の形成が行われ、陸化した後に遺跡が形成されたとされる（羽鳥1981）。遺物は礫層が高く水が溜まらない水位の低いほうに集中するという。後に拝島段丘面が形成され秋川が氾濫したときは青柳段丘面に土砂を一部残した痕跡も認められている。遺跡内には低いところに湧水による流路跡が認められ、遺物の分布状態からそうした流路に挟まれた微高地で生活が営まれていたとされ、小川のほとりの遺跡であったことがわかる。野川中洲遺跡においても湧水の流路に挟まれた微高地に遺物の集中があり、そうした流路の間をぬって形成された川辺の遺跡であったことがわかっている（羽鳥ほか1989）。地域は異なるが同じような痕跡が遺跡で認められる事例は他にもある。神奈川県田名向原遺跡では住居状遺構を伴う尖頭器を含む石器群が出土した砂質ローム層の直下に富士相模川泥流と古相模川河床礫層が確認された（相模原市教育委員会1998）。出土層は立川ローム層BB1層にあたり、砂質であることからこれも川辺に近い遺跡であったものと思われる。

## 5. 段丘面からみた遺跡立地

本報告の執筆者である松田隆夫氏により立川段丘面の細分が行われ、小金井市野川に沿って断片的に分布するTc 1面、そのなかで広い面積を占めるTc 2面、国立市青柳より上流のTc 3面が分けられた。特にTc 2面の立川ローム層において古多摩川の離水期が認められ、テフラ層位の残り方から同一の段丘面においても離水時期が異なることが指摘されてきた(松田1992)。筆者らが発掘調査を行った府中市Na.29遺跡では、立川ローム層の第Ⅱ暗色帯であるⅨ層にシルト質の細砂層が認められ、離水までこの地域を流れていた古多摩川による堆積物であることが指摘されている(松田1996)。府中市Na.29遺跡の最も古い遺物包含層はⅥ層であり、石器、礫ともに少量の遺物しか出土していない。約1 km離れた飛田給北遺跡でも最も古い遺物包含層はⅥ層でありその直下のⅦ層以下では水成の堆積物であると思われる小礫が混じるようになってくる。また、立川段丘面の多摩川寄りの縁辺部に近い府中市白糸台付近に至ると旧石器時代の遺物包含層であるⅣ層の直下に礫層が見られるような遺跡があることも最近の調査で明らかになってきている。<sup>註)</sup>

このような古多摩川による離水の影響を立川ローム層中に残された遺跡の立地、遺跡数の増減、遺物、遺構などの変遷のなかで考古学的な検討から見取ることができる(第Ⅲ-3、5図)。すでに述べてきたように遺跡の立地からは立川ローム層のⅣ層の形成の段階に立川面、武蔵野面の遺跡が急激に増加し、Ⅲ層の形成の段階がそれに次ぐ。これに対してⅤ層以前の遺跡数は非常に少ない。遺跡の立地は立川面より武蔵野面がどの時期でも中心となっているが、出土遺物数を検討していくと、立川面と武蔵野面に立地する遺跡では時期ごとにその内容に差があることがあきらかである。石器と礫の出土量から立川面、武蔵野面の遺跡を層別にみていくとⅣ層、Ⅲ層では武蔵野、立川両面の遺跡の遺物は量的には立川面のほうが少ないが同じような割合で増減の曲線をたどり、遺跡を個別にみても、上流部や武蔵野面に大規模な遺跡が集まる傾向はあるが、全体にあまり遺跡の規模にかかわらず二つの段丘面に遺跡が散らばっているような状況がある。しかし、Ⅴ層以前になると武蔵野面の遺跡のほうが遺物総量が多く、遺跡別にみても武蔵野面に大規模遺跡が偏るのに対し、立川面の遺跡は遺物量が少なく、遺跡も小規模遺跡ばかりとなる。こうした状況を古多摩川の立川面における離水の時期の問題と照らし合わせていくと(第Ⅲ-5図)、Ⅴ層以前の立川面に残された遺跡の石器文化層は離水面の直上にあるものもあり、古多摩川が離水していく過程で残された平地やそれ以前からあった微高地に立地した遺跡であると考えられる。また、大半の遺跡が少量の遺物や遺構からなるというありかたからも一時的に利用された遺跡である可能性が極めて高いものとしてよいであろう。

古多摩川の離水が完全にどのテフラ時期に完了したかということは地形・地質学、考古学の両面から取り組んでも詳細な部分で難しい課題を残してはいるが、こうした旧石器時代遺跡の武蔵野面、立川面への立地の変遷を見ていくと、立川面が完全に陸化し安定してくるのは、遺跡が増加し、二つの段丘面へ遺跡が広域に分布するようになるⅣ層の時期になるであろう。生活の中心は武蔵野面、立川面と広域に広がる。Ⅴ層より古い時期には生活の中心は水の影響を受けない武蔵野段丘面にあり、

離水前後の古多摩川の影響を受けた立川段丘面では長期の滞在、あるいは繰り返して生活の場として使われたような痕跡を残す遺跡は少ない。以上のように野川流域の遺跡立地はV層を境として立川ローム層の古い段階と新しい段階とでは古多摩川の影響のもとに異なる景観にあったということ明らかになった。

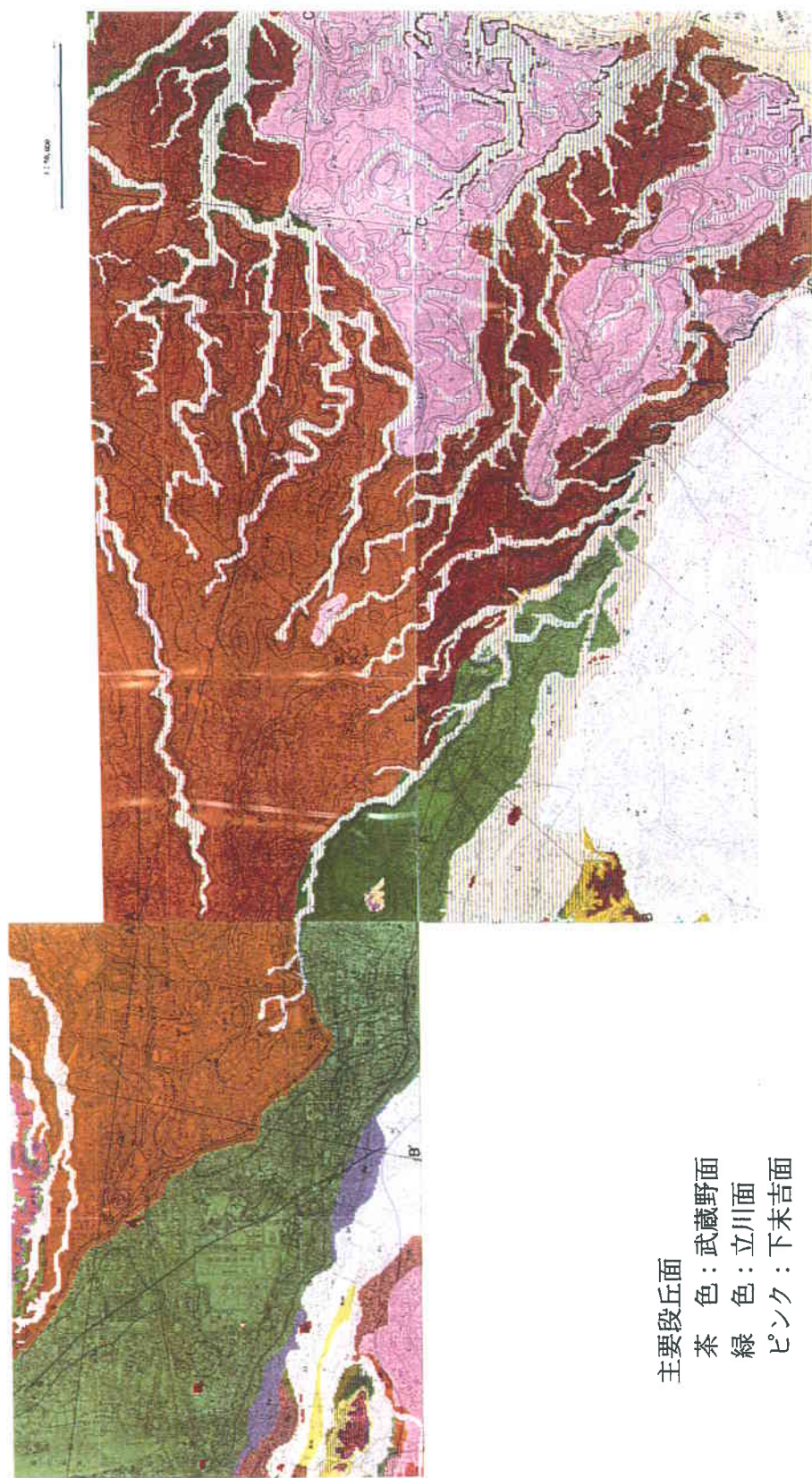
## 6. 湧水環境と遺跡

野川流域の武蔵野段丘には現在も多くの湧水が湧いている。言うまでもなく、旧石器時代の遺跡のみならず縄文時代の遺跡もこの周辺に多く残された。

武蔵野台地を中心とする旧石器時代遺跡は中小河川に沿って残されており、川から離れて立地する遺跡もそうした河川の支流の埋没谷に沿っているものが殆どであり、水があることが遺跡立地の必要不可欠な条件であったことが改めて認識される。本報告第Ⅱ章第1節において羽鳥謙三氏は扇状地である武蔵野台地の西南部にできた武蔵野段丘は従来の扇状地の伏流水が湧水となって、非常に多くの水量を放出するため、良好な湧水点を多く生じていると指摘する。こうして、野川流域は豊かな湧水環境になっていった。

湧水環境と遺跡立地はすでに若干触れてきたようにこの地域では重要な関係にある。野川流域全域の遺跡を対象とした分布状況からは中流域は時期や段丘面に係わらず遺跡分布が疎かである事がわかった。この原因としてこの地域の基盤層にある稲城砂層の発達による湧水量の低下が野川中流域の遺跡の発達を停滞させた可能性があることを中間的な成果のなかで指摘してきた(比田井他1999)。これと対照して野川上流域での大規模な遺跡の立地する周辺を表層地質図で検討していくと(第Ⅲ-6図)、必ず野川から武蔵野段丘面に伸びる小支谷、あるいは等高線から追うことができる埋没谷を控えた台地との位置関係に遺跡はある。現在、野川の水源の谷がある国分寺市泉町、南町周辺、埋没谷がある小金井市本町から中町周辺、武蔵野段丘を深く切り込んだ谷がある三鷹市大沢周辺に野川を代表する西之台B、東京天文台構内、羽根沢台遺跡などの大型遺跡が点在している。最下流の地域でも世田谷区瀬田付近に比較的深い小支谷があり、周辺には下流のなかでも瀬田遺跡(世田谷区教育委員会1997)、下野毛遺跡(世田谷区教育委員会1992)など大きい規模の遺跡が立地している。上流部の湧水については本報告の羽鳥氏らの見解によると武蔵野台地全域を通じて最も豊富な水量に恵まれていると言われ、こうした武蔵野台地を切り込んだ小支谷については当然、豊富な水量の湧水点があったと考えてよいであろう。また、現在は一見何の変哲もない、平坦地である立川段丘面にはじつは複数の埋没谷が存在し、そうした埋没谷に沿って残された遺跡の周辺には湧水点の痕跡が認められことも明らかになった(本報告第Ⅱ章第2節)。野川中洲遺跡のように遺跡のなかに流路があった痕跡も認められている(羽鳥他1989)。単に川の側に遺跡が営まれたのではなく、多くの遺跡が湧水の生じやすい地域や湧水点の傍らに立地していることは重要である。湧水は有機物を除く自然濾過の作用を備えた水であり、おそらく遺跡を残した人々にとってより良質の水の確保が生活条件の一つであったものと思わ





主要段丘面  
 茶色：武蔵野面  
 緑色：立川面  
 ピンク：下末吉面

第Ⅲ-6図 東京西南部の表層地質図（土地分類基本調査 表層地質図より作図）

れる。そうした要因がさらに豊富な水量の湧水点に恵まれた小河川の側での遺跡の立地を促したのであろう。

## 7. まとめ

多摩川流域の武蔵野台地をめぐる旧石器時代遺跡の立地について、考古学、地形・地質学の双方から検討を加えてきた。その成果として、従来あまり注意されることの少なかった遺跡の立地の背景を地域的にあきらかにすることができた。また、これらに遺跡の規模の検討を時期と流域という関係で検討することを加え、当時のひとびとの立地環境の選択と居住領域の把握など社会構造にかかわる端緒の研究を展開することもできた。

野川を中心とする多摩川流域の遺跡の発達は、大きく二つの景観を背景にしてあったものとしてよいであろう。一つは武蔵野段丘を中心として遺跡が形成されていた立川ローム層の下部の時代、もう一つは武蔵野段丘面と立川段丘面に遺跡の形成が広がる立川ローム層の上部の時代である。古多摩川の流れとその氾濫原である広い湿地帯が今の立川段丘面に広がり、ところどころに微高地もでき、豊富な湧水を生じた武蔵野段丘崖の周辺を中心に大小の遺跡が残されていった。遺跡の規模による分布からは活動の中心は大型遺跡のある上流域にあったものと思われ、下流になるにつれ遺跡の規模が小さくなっていく。立川ローム層の上部の時代になると立川面はほぼ完全に離水し、多摩川は府中崖線以北に後退する。そこには平坦な台地ができるとともに湧水点を伴う凹地地形が形成され、いままで国分寺崖線を中心に形成されていた遺跡は野川沿いの立川面やこうした凹地地形の湧水点周辺にも展開していくようになる。特にこの傾向は立川ローム層のIV層の形成段階にピークを迎えるようになっていく。

## 引用参考文献

- 小田静夫・宮崎博・C.T.キーラー 1974 仙川遺跡 東京都埋蔵文化財調査報告 第2集  
小田静夫・阿部祥人・中津由紀子 1982 はけうえ  
小田静夫・C.T.キーラー 1980 西之台遺跡B地点 東京都埋蔵文化財調査報告 第7集  
久保純子 1988 相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形 地理学評論61  
小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男 野川先土器時代遺跡の研究 1974 第四紀研究 第10巻第4号  
相模原市教育委員会 1998 相模原市「田名向原」旧石器時代遺跡の調査  
世田谷区教育委員会ほか 1984 下野毛遺跡  
世田谷区教育委員会・世田谷区遺跡調査会 1988 堂ヶ谷戸遺跡Ⅲ  
世田谷区教育委員会 1997 瀬田遺跡Ⅱ  
立川市向郷遺跡調査会 1992 向郷遺跡

- 東京天文台構内遺跡調査団 1983 東京天文台構内遺跡
- 東京都建設局・小金井市遺跡調査会 1989 野川中洲北遺跡
- 東京都労働経済局 1996 土地分類基本調査 川越・青梅 表層地質図
- 東京都労働経済局 1997 土地分類基本調査 東京西南部 表層地質図
- 東京都労働経済局 1998 土地分類基本調査 東京西北部 表層地質図
- 羽鳥謙三 1981 V地形・土層形成と古環境復元 前田耕地遺跡Ⅲ
- 羽鳥謙三他 1989 野川中洲北遺跡の地形地質と生成環境 野川中洲北遺跡
- 比田井民子・松田隆夫・伊藤健・西井幸雄・向山崇久・羽鳥謙三 1999 立川ロームの遺跡と水環境 日本第四紀学会大会研究発表要旨
- 松田隆夫 1992 府中市朝日町三丁目地先の地形・地質 飛田給北遺跡 東京都埋蔵文化財センター
- 松田隆夫 1996 府中市No.29遺跡のテフラ 府中市No.29遺跡 東京都埋蔵文化財センター調査報告 第29集
- 三鷹市教育委員会ほか 1996 羽根沢台遺跡Ⅱ 三鷹市埋蔵文化財調査報告 第18集
- 三鷹市教育委員会 1997 島屋敷遺跡Ⅰ
- 三鷹市遺跡調査会 1983 三鷹市立第五中学校遺跡 三鷹市埋蔵文化財調査報告 第8集

註) 府中市遺跡調査会より、御教示いただく

## 第2節 武蔵野台地南東部

伊藤 健

### 1. 対象とする地域

本節では、武蔵野台地南東部、東京都心部の後期旧石器時代遺跡の立地について述べる。対象とする地域は、多摩川にも荒川にも注がず直接に東京湾に注入する小河川の流域で、具体的には呑川、内川、立会川、目黒川（蛇崩川・烏山川・北沢川を含む）、渋谷川、神田川（善福寺川・桃園川・妙正寺川・江古田川ほか微小河川を含む）、谷端川、谷田川の流域である。また、大田区内の多摩川下流域も含める（第Ⅲ-7図）。これは、野川・仙川より東側、石神井川より南側ということになり、行政区分では千代田区、港区、新宿区、文京区、台東区、品川区、目黒区、大田区、世田谷区の東半分、渋谷区、中野区、杉並区、練馬区の一部、豊島区の大部分、武蔵野市の一部、三鷹市の一部が該当する。

対象地域は主に武蔵野面と下末吉面から構成される。下末吉面は、狭い範囲の田園調布台、呑川と立会川に挟まれた荏原台、凡そ目黒川と神田川に挟まれた淀橋台である。武蔵野面は、多摩川と荏原台に挟まれた久ヶ原台、荏原台と淀橋台に挟まれた目黒台、そして西部・北部の豊島台・本郷台などの武蔵野面群である。

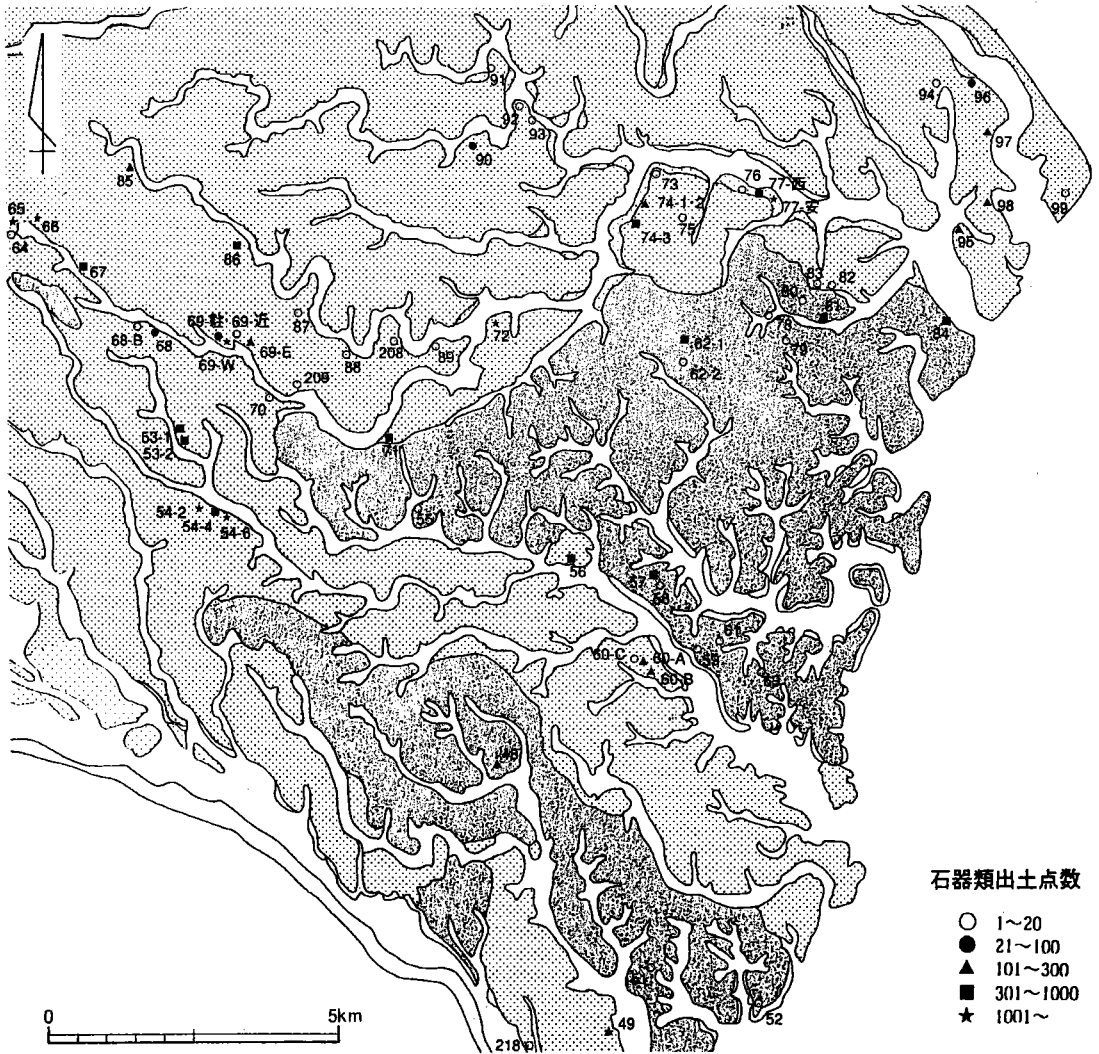
本節の構成として、まず対象地域の遺跡の立地する地域の特徴を概観する。それを受けて、後期旧石器時代遺跡資料の特徴を明らかにし、さらにその立地の特徴、立地と地形の相関関係について言及する。最後に、武蔵野台地南東部の特徴を明らかにするため、他地域との比較を行うこととする。

また本節において、遺跡立地の要因について言及するにあたって次のような条件を設定した。後期旧石器時代人が遺跡（居住地）の立地を考えるに際しては、恐らく様々な要因があったと推察される。社会的関係もその一つであり、自然環境のうち植物相、動物相、そして石材環境もその一つであろう。その中で、地形環境も重要な要因の一つである。そうした本書の趣旨に則り、遺跡立地と地形環境の関係を明らかにするため、地形以外の諸環境の要因を取り敢えず捨象して論を進める。さらに、中間報告で明らかにしたように、遺跡立地は湧水環境と関係している可能性がある（比田井・松田他1999）。後期旧石器時代人は遺跡の占地するに当たり、湧水のある環境を好む。そうした仮説立てに沿って、本論を展開していくこととする<sup>9)</sup>。そのため、羽鳥氏らによる「第二章第1節5.3) 武蔵野台地の湧水環境」に依拠している点が多いことを予め断っておきたい。

### 2. 地形の特徴

その地形的特徴は第二章で羽鳥謙三氏・加藤定男氏・向山崇久氏・松田隆夫氏によって概観されている。それを基礎とした上で、本地域に関わる部分の特徴を述べていきたい。地形学の専門家ではな





第三 - 8 図 南東部遺跡分布図

a. 多摩川下流域

多摩川の、多摩川・野川合流点より下流は、久ヶ原台（武蔵野面）及び田園調布台（下末吉面）に相当する。多摩川に向け南流する小河川が並ぶ。これらの小河川の特徴は、全長が0.5~1.5km前後と短い点である。久ヶ原台、田園調布台の北面には呑川が位置する。これら小河川は呑川と水流の争奪に敗れたため短いとの説がある（久保1988b）。

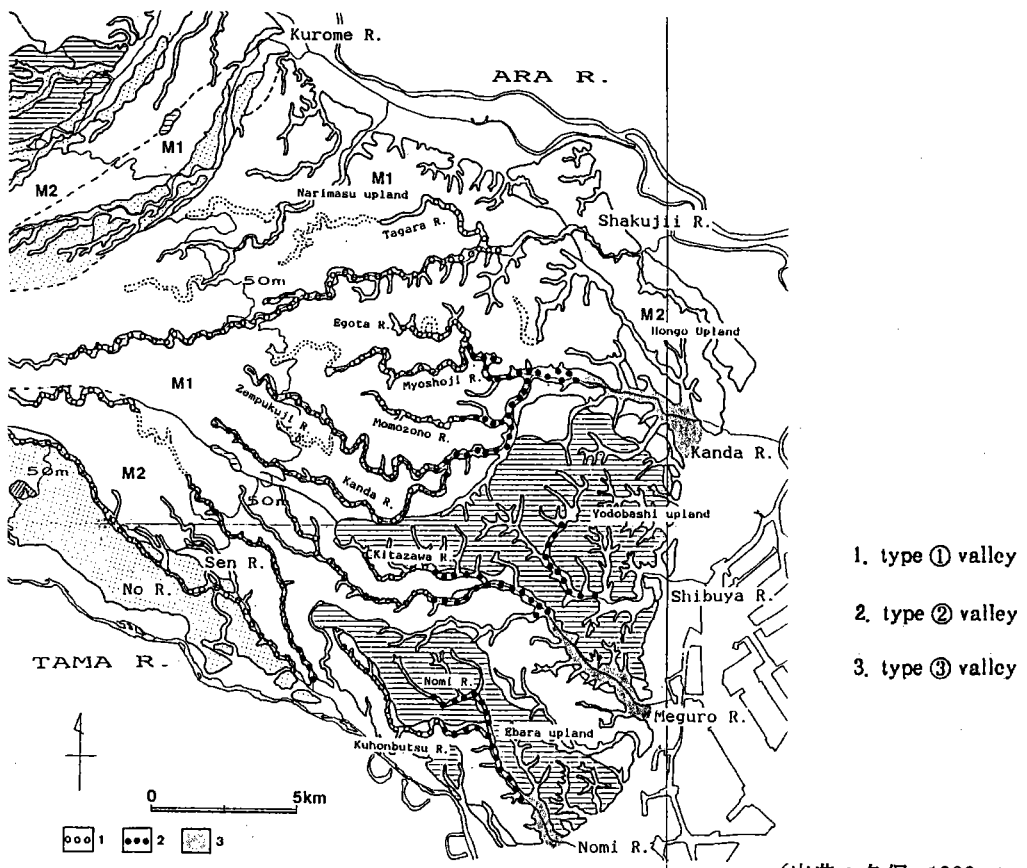
b. 東 部

荏原台、目黒台、淀橋台、本郷台では、南より呑川、内川、立会川、目黒川（蛇崩川・烏山川・北沢川を含む）、渋谷川（古川）、汐留川、神田川、谷端川、谷田川の小河川が流れる。それらの河川で

は樹枝状の小支谷が発達しており、それにより起伏の激しい地形を形成している。現在、千代田区、港区などに坂が多く、平坦な土地が少ないのはこのためである。

各河川において、上流ではその河床が武蔵野礫層の上面に載って概ね地形勾配に従っていたものが、中流域では武蔵野礫層を削って下り急勾配となる。これは最終氷期最寒冷期の海水準降下に伴う下刻である（久保1988b）。神田川では、台地上から河底までの比高差が、上流の杉並区内で5m前後であるものが下流の新宿区内で20m前後に達する。更に下流では、沖積層が堆積して勾配が緩やかになる。しかし、最寒冷期においては、沖積層は堆積していないので中流よりも急激な下刻が進行していた（第三-9図/久保1988a）。これに関連して、呑川、目黒川、渋谷川、神田川では下流においては谷幅が広がっている。

この地域の河川の特徴として、谷の断面形状が非対称であることを挙げる事ができる。神田川では、南向き斜面が急で北向き（右岸）が緩斜面となっている。これは凍結融解作用が要因であるとする説がある。緩斜面となる右岸、特にその中流域（新宿区）では、低位段丘（立川面）が形成されている。呑川、立会川、目黒川では、右岸と左岸が下末吉面と武蔵野面の異なるいずれかになっている



（出典：久保 1988a による）

第三-9図 武蔵野台地南東部の谷の縦断面による分類







第Ⅲ-1表 追加遺跡一覧

遺跡番号	遺跡名	地点・地区	出土層位	住所	河川	立地面	集中	石器点数	礎群	礎数
65b	御殿山	第2地区H地点	Ⅳ・Ⅴ層	武蔵野市御殿山	神田川	武蔵野面		?	3	212
65b	御殿山	第2地区H地点	Ⅲ層?	武蔵野市御殿山	神田川	武蔵野面		○		
65c	御殿山	第2地区K地点	Ⅳ下～Ⅴ上層	武蔵野市御殿山1-5-5	神田川	武蔵野面		19	2	393
66a	吉祥寺南町1丁目	C地点	Ⅲ下～Ⅳ層	武蔵野市吉祥寺南町1-12-12	神田川	武蔵野面	2?	約70?	1	559
66d	吉祥寺南町1丁目	G地点	Ⅳ層	武蔵野市吉祥寺南町1-21	神田川	武蔵野面	1	184	4	763
66d	吉祥寺南町1丁目	G地点	Ⅵ・Ⅶ層	武蔵野市吉祥寺南町1-21	神田川	武蔵野面	1	19		
66d	吉祥寺南町1丁目	G地点	Ⅸ・Ⅹ層	武蔵野市吉祥寺南町1-21	神田川	武蔵野面	1	25		
66f	吉祥寺南町1丁目	D地点	Ⅳ下～Ⅴ上層	武蔵野市吉祥寺南町1-22	神田川	武蔵野面		2	1	137
66g	吉祥寺南町1丁目	A地点	Ⅲ層	武蔵野市吉祥寺南町1-21	神田川	武蔵野面	0	20?	2	135

参考資料（井の頭池周辺）

遺跡番号	遺跡名	地点・地区	出土層位	住所	河川	立地面	集中	石器点数	礎群	礎数
64	井の頭遺跡群	A地点	Ⅲ～Ⅳ上層	三鷹市井の頭4-26-10	神田川	武蔵野面		7		2
65a	御殿山	第1地区D地点	Ⅲ中層	武蔵野市御殿山1-18	神田川	武蔵野面	4	6148	3	349
65a	御殿山	第1地区D地点	Ⅳ上層	武蔵野市御殿山1-18	神田川	武蔵野面	1	1669	2	3004
65a	御殿山	第1地区D地点	Ⅴ上層	武蔵野市御殿山1-18	神田川	武蔵野面	3	146	3	1053
65a	御殿山	第1地区D地点	Ⅶ層	武蔵野市御殿山1-18	神田川	武蔵野面	0	3	0	40
65d	御殿山	第2地区J地点	Ⅲ中層	武蔵野市御殿山1-2	神田川	武蔵野面	1	32	1	77
65d	御殿山	第2地区J地点	Ⅳ層	武蔵野市御殿山1-2	神田川	武蔵野面	0	0	0	5
66b	吉祥寺南町1丁目	J地点	Ⅲ・Ⅳ上層	武蔵野市吉祥寺南町1-14-2	神田川	武蔵野面	0	23	0	28
66b	吉祥寺南町1丁目	J地点	Ⅸ層	武蔵野市吉祥寺南町1-14-2	神田川	武蔵野面	0	1	0	0
66c	吉祥寺南町1丁目	H地点	Ⅲ・Ⅳ層	武蔵野市吉祥寺南町1-21-1	神田川	武蔵野面			1	85
66c	吉祥寺南町1丁目	H地点	Ⅵ層	武蔵野市吉祥寺南町1-21-1	神田川	武蔵野面			2	90
66c	吉祥寺南町1丁目	H地点	Ⅸ層	武蔵野市吉祥寺南町1-21-1	神田川	武蔵野面			1	126
66e	吉祥寺南町1丁目	E地点	Ⅳ上層	武蔵野市吉祥寺南町1-20	神田川	武蔵野面		3730	5	1895
66e	吉祥寺南町1丁目	E地点	Ⅳ下層	武蔵野市吉祥寺南町1-20	神田川	武蔵野面		149	5	1554
66e	吉祥寺南町1丁目	E地点	Ⅶ層	武蔵野市吉祥寺南町1-20	神田川	武蔵野面	0	3	0	0
66e	吉祥寺南町1丁目	E地点	Ⅸ層	武蔵野市吉祥寺南町1-20	神田川	武蔵野面		8	0	0
67	吉祥寺南町3丁目	B地点	Ⅲ・Ⅳ層	武蔵野市吉祥寺南町3-18	神田川	武蔵野面	5	646	12	1043

第Ⅲ-2表 現地調査を行った範囲の湧水量（1985～1986年）

流域・地域名	地点数	湧出量 (m <sup>3</sup> ・day <sup>-1</sup> )		注
		1985秋	1985～86冬	
目黒川	21	561	302	
渋谷川	7	691	0	
神田川	7	-	-	a
善福寺川	4	17,986	6,653	b
妙正寺川	5	259	173	a
江古田川	9	64	19	
板橋区の崖線	7	-	92	
北区の崖線	3	-	13	
白子川	26	4,759	1,234	a
落合川, 黒目川	23	9,950	3,618	a
柳瀬川	10	167	146	
丸子川, 谷沢川	8	-	472	
仙川, 入間川	3	324	155	
野川	56	41,786	6,635	
秋留台地	53	10,412	5,036	
矢川	5	2,661	34	
合計	247	89,620	24,582	

a : 河床からの湧水が多いが、測定不可能のため含まない。  
 b : 河床からの湧水が多い、湧水区間下流の河川流量。

(出典：新井他 1987 による)

### c. 西部

西部の淀橋面においては、目黒川と神田川の支流が流入している。目黒川においては、世田谷区内に源流を発する烏山川と北沢川が、目黒面に入った世田谷区池尻付近で合流し目黒川となる。仙川と神田川に挟まりその流域面積は小さい。

神田川水系は、神田川とその支流の善福寺川、桃園川、妙正寺川、江古田川から構成される。神田川はまずその北の善福寺川と合流、次いでさらに北の桃園川、妙正寺川と合流する。江古田川は妙正寺川の支流である。神田川が妙正寺川と合流する地点より上流がここで述べる西部の範囲である。このうち、桃園川と江古田川は短い。神田川水系はいずれも河谷の蛇行が著しい。いずれも大きなS字を描いている。谷幅は、下流と比較して概ね小さい。

烏山川・北沢川、神田川水系いずれの河床も、武蔵野礫層の上面に載っている。台地上から河底までの比高差は概ね小さく、谷壁も左右対称形をなしている。

この地域の水環境については次の通りである。武蔵野礫層上を河床が載っており河川は地下水により涵養されている。神田川上流においては、かつては多くの湧水が谷壁下部に認められた。また、善福寺川においては、その上流部北側に井荻天沼地下水堆あるため、地下水水面が河床より高くなっている。湧水点こそ少ないものの、河床にいたるところに湧水がみられたと言う（新井他1987）。

烏山川・北沢川の湧水点については、第Ⅱ-14図によるとほとんどそれを見ることはできず、第Ⅲ-10図においても認められない。その湧水量は、善福寺川に多いほかは、いずれの河川も少量である（第Ⅲ-2表）。

羽鳥氏による武蔵野台地段丘堆積層下の基盤構成層の分布は、この地域の特徴を示している（第Ⅱ-14図）。神田川水系においては、滞水性の性質を有している。一方、烏山川と北沢川においては透水性の性質を有する部分が多くを占めている。それが烏山川、北沢川と神田川水系における違いとなっている。

### d. 源頭部

武蔵野台地の標高50m付近には、河川の源頭、または上流にあたる池が並んでいる。仙川における丸池、神田川における井の頭池、善福寺川における善福寺池、桃園川における弁天池（杉並区天沼）、妙正寺川における妙正寺池、江古田川における江古田池、石神井川における富士見池、三宝寺池、石神井池、白子川大泉比丘尼橋付近の低地がそれにあたる。このうち石神井池のみは川を堰き止めてできた人工池であるが、それ以外は自然に形成されたものである。

本地域において該当するのは井の頭池、善福寺池、弁天池、妙正寺池、江古田池であるが、弁天池と江古田池はすでに消滅している。井の頭池は近年までは源頭に1ヵ所のみ湧水点（お茶の水）を持っていた。ただし、現在では枯渇しており、ポンプで地下水をくみ上げている。池の南北に湧水点はなく、池の三方は約5mの比高差を持つ急激な谷壁に囲まれている。善福寺池も、井の頭池と同様の特

徴を有している。ヒョウタン型の池で、大きい上の池と小さい下の池からなる。源頭に1ヵ所の湧水点（遅野井）があったが、こちらもすでに枯渇し地下水を汲み上げている。

### 3. 該当する遺跡とその特徴

対象とする遺跡は、第I章第2節に述べたとおり報告書・概報が刊行済みで、データが明らかになっている遺跡に限られる。また、立川ローム層中から遺物が出土した遺跡のみを対象とし、明らかに後期旧石器時代のものと考えられる遺物でも後世の遺構から出土したものは除いた。

以上の条件で、該当した遺跡・地点は第I章第2節第I-1表のデータに示したとおりである。ただし、同表を作成した後に新たに資料を補足したものがある。それは井の頭池周辺の6遺跡・地点のデータである（第III-1表）。その結果の遺跡・地点は77件、文化層は155件である。その総計の石器集中地点は約260件、石器類出土点数約31,600点、礫群約260件、礫出土点数は約37,900点である。

この地域の遺跡の特徴として、石器類をわずかししか出土しない遺跡が多数を占めることをあげることができる。石器類出土点数が10点以下の遺跡・地点は25件、50点以下の遺跡・地点は38件であった。また、石器類出土点数が1,000点以上の遺跡・地点は7件であった。これは、小規模遺跡が多く、大規模遺跡が少ないことを示すもので、野川・仙川流域遺跡・地点51件中で、石器類出土点数10点以下が8件、50点以下が10件、1,000点以上が14件であることと比較してもその傾向を裏付けるものとなろう。ただし、対象地域ではローム層の試掘を行いわずかししか出土しなかったため、本調査を行わなかった例が多く、そのために出土点数の少ない遺跡が多いこととなった可能性は考えられる<sup>2)</sup>。

また、立川ロームを上層下層に分けた場合には、上層（武蔵野台地標準層序V層以上）に多く下層（VI層以下）に少ない傾向にある。上層の文化層が104件、石器類出土点数約27,400点、下層の文化層が45件、石器類出土点数約3,700点である。さらに細かく石器群編年の段階別に検討すると次のとおりである。上層では、III層段階（細石刃期・槍先形尖頭器期）が約11,800点、IV層中部・IV層上部段階が約8,400点、V層・IV層下部段階が約7,200点である。また下層では、VI層段階が約900点、VII層段階が約500点、IX層段階が約1,500点、X層段階が約800点である。各遺跡・文化層の段階分けにあたっては厳密な検討を行っていないため概略の値を示すばかりであるが、下層段階から上層にいくにしたがい次第に石器類出土点数が増加していくことがわかるものとなろう。

これを武蔵野台地全般との比較を通して詳細に見ていくと、次のような傾向が看取される。まず、上層に石器類出土点数が多いのは台地全般に一般的な傾向であるが、該当地域は上層での出土点数は台地の中でも比較的多い傾向にある。ただし突出するほどではない。その中で、該当地域のIII層段階の出土点数の多さは目をみはるものがある。III層段階では台地全般で約29,000点の出土点数をみるが、該当地域の出土点数はその約40%を占めるところとなる。全層序の出土点数では台地全般に対し該当地域が約25%に相当するので、その多さが卓越したものであることがわかる。一方その反対にV層・IV層下部段階においては、台地全般で約41,000点であるのに対して、該当地域の出土点数が7,200点

で20%未満となり、その少なさが際立っている。武蔵野台地ではV層・IV層下部段階に出土点数が最大を示し、その後減少傾向に転じるという、従来から言われていた傾向と全く反するものであることが理解できる。また、下層においては出土点数が少ないのであまり過大評価はできないが、VI層、IX層、X層段階で多い傾向にあり、VII層段階で少ない傾向にある。

こうした傾向が表われる要因がどのように考えられるかは後述するところである。ただいずれにしても、該当地域は武蔵野台地全体の中では遺跡数、石器類出土点数ともに必ずしもきわめて少ないというわけではないものの、隣接する野川流域と比較した場合にその少なさは顕著なものとなろう。

#### 4. 各地域における遺跡立地の特徴

河川流域を区分して概観すると、比較的遺跡が集中する流域とそうでない流域が認められる。概ね、目黒川下流域、目黒川の上流の烏山川流域、神田川流域に多く認められ、呑川、立会川、渋谷川、谷端川などでは遺跡は少数に止まっている。

##### a. 多摩川下流域

多摩川下流域、田園調布台、久ヶ原台付近の遺跡の分布は環8光明寺地区遺跡(218)のみである。一方、同じ多摩川下流域でも少し上流、多摩川と野川の合流点から下流約2kmの範囲までは遺跡が集中する(本章第1節)。これは野川流域と同じ流域遺跡群として把握することができようか。

環8光明寺地区遺跡は多摩川に面しているというより、多摩川に注ぐ小さな谷に向かっている。また、一般的傾向として多摩川に限らず大河川に面した地域は遺跡が少ない傾向にある。それは相模川・相模原台地、荒川・大宮台地等においても首肯されるところである。

##### b. 東 部

東部の下末吉面と武蔵野面から構成される地域は、概ね遺跡数は少ない傾向にあり、39遺跡・地点である。この東部が、対象地域(武蔵野台地南東部)の面積の半分以上を占めることを考えると南東部の中でも遺跡数は少ないと言える。

南部の呑川・内川流域の遺跡・地点は4件である。呑川流域の2件は石器類出土点数が200点を超える重層遺跡であるが、内川流域の2件はごく少数しか出土しなかった。久原小学校内遺跡(49)以外の3遺跡は、荏原台(下末吉面)に位置する。

内川の支谷のように随時水流があったとも言えない樹枝状に伸びかつその奥行きのない谷は武蔵野台地南東部には多いが、そのほとんどで遺跡が検出されていない。この地域は遺跡が少ないのであまり注目されることはなかったが、こうした樹枝状谷に囲まれ平坦地の面積が狭い上に、湧水点があったとしても湧水量の少ない地域において遺跡が少ないと言う特徴は、地形と遺跡の関係を考える上で重要な事例となるものであろう。

目黒川および渋谷川流域の遺跡・地点は10件である。このうち1件は北沢川に属し比較的上流に位置するが（根津山遺跡群（55））、それ以外は東京低地から2～5km上流に集中する。最も出土点数の多いのは、目黒台（武蔵野面）に位置する中目黒遺跡（60）と大橋遺跡（56）である。中目黒遺跡は、礫群が多く出土している点の特徴である。中目黒遺跡と大橋遺跡のある目黒川中流の地点は、第Ⅱ-14図によると段丘堆積層下はシルト質となっており、また第Ⅲ-10図において湧水点が確認されるなど、周辺のうちではでは湧水環境に良好の条件を見出すものになっている。目黒、駒場の湧水点は、中目黒遺跡、大橋遺跡の近くである。そういった点で、この地域にわずかながら遺跡が集中する点が理解できよう。

一方、淀橋台（下末吉面）側の目黒川と渋谷川に挟まれた地域では、小規模の遺跡がほとんどである。恵比寿遺跡旧サッポロビール工場地区（61）は、広い面積を調査したにも関わらず石器類の出土はわずかであった。目黒川と渋谷川の間中に位置する小規模遺跡は、詳細に観察すると小河川に注ぐ小支谷の奥に位置している。

渋谷川以北、紅葉川（外堀）以南の淀橋台の遺跡・地点はわずか4件である。この地域は都心部であるため遺跡調査件数こそ少ないが、都心の大規模再開発事業による大規模調査が多い。しかし、そのほとんどの遺跡で旧石器時代石器群が検出されなかったのである。千駄ヶ谷五丁目遺跡（62）はそうした遺跡の中で、出土した数少ない例である。出土点数こそそれなりに多いが、面積が広いので密度が高いとは言えない。この遺跡は、淀橋台奥部に位置する唯一の遺跡でもある。

武蔵野礫層をもたない下末吉面であること、湧水点をほとんどもたないことは、この地域の湧水環境の不良さを表している。内川流域と共通した特徴である。

神田川中・下流域およびその支流である紅葉川（外堀）の左岸の遺跡は、12件である。東部地域では比較的多く遺跡が集中していると言えよう。

紅葉川左岸では、尾張藩上屋敷跡遺跡（81）を除き小規模遺跡である。神田川中・下流域においては、右岸のみに遺跡が分布している。新宿区北新宿から西早稲田までの中流域に遺跡は偏り、早稲田以東の下流域には遺跡は認められない。中流域右岸に位置する下戸塚遺跡（77）は礫出土点数の多い大規模遺跡である。同遺跡は、神田川右岸に展開する低位段丘（立川面）に位置する。また、百人町三丁目西遺跡（74）も、武蔵野面ではあるが低位段丘（立川面）に近接した位置にある（久保1988a）。先述した通り、こうした低位段丘は神田川中流域右岸に見られる特徴である。遺跡の立地と、武蔵野面に囲まれ部分的に認められる立川面の関係が検討される必要がある。

また、遺跡の集中する神田川中流域及び紅葉川流域は、基盤構成層がシルト層であり、湧水環境の好条件と関連付けられものである。

本郷面（武蔵野面）においては、谷端川（小石川）と谷田川が谷を形成している。谷端川流域では、下流において真砂遺跡（95）、支流において駕籠町遺跡科研製薬跡地地区（94）が検出されている以外は、遺跡が認められない。谷田川流域では4件の遺跡・地点が検出されている。これらでは、真砂

遺跡を除いて、概ね中・小規模である。

谷端川の兩岸は、武蔵野台地南東部には珍しく比較的起伏が緩く低平な台地面が続く。しかし、遺跡が全く認められない。

以上の通り東部においては、遺跡分布は少ないものの、主に目黒川中流域（渋谷川流域含）と神田川中流域右岸に遺跡が集中し、他は概ね散漫であった。これはこの地域での最も大きくかつ湧水点を持つ神田川や目黒川に遺跡が集中し、流量が少なく湧水点をもたないその他の小河川流域には遺跡は少ないという傾向を示すものと言えよう。特に、荏原台、淀橋台の下末吉面の内部においては遺跡は特に少なかった。

### c. 西部

西部の豊島面－武蔵野面群（烏山川・北沢川及び神田川水系流域）の地域では、遺跡の集積が認められ、遺跡・地点は24件を数える。これは東部よりも高密度ではあるが、南側の野川・仙川流域、北側の石神井川流域と比較すると、散漫の感が否めない。

烏山川、北沢川流域においては、5遺跡・地点－廻沢北遺跡（54）、烏山南原遺跡（53）のみである。いずれも、烏山川流域で、北沢川流域では東部に属する下流の1遺跡のみである。

廻沢北遺跡、烏山南原遺跡とも大きな面積の遺跡で、複数地点を調査している。いずれも大規模で重層的な出土をなすが、特に廻沢北遺跡に顕著で13文化層、30ブロックが検出されている。こうした重層的な出土傾向は、武蔵野台地南東部地域の東部には見られず隣接する野川流域の見られるものである。

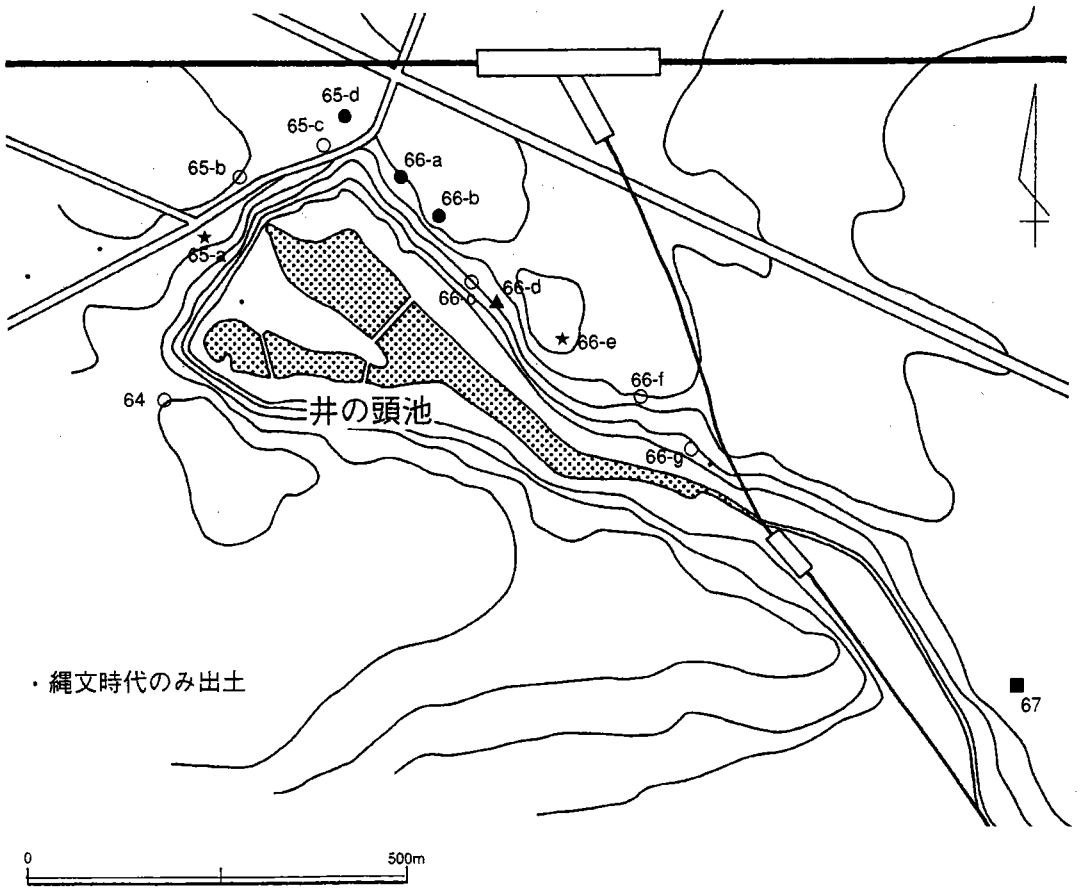
神田川水系上流（神田川・善福寺川・桃園川・妙正寺川・江古田川／源頭部を除く）流域の遺跡・地点は19件である。神田川流域では9件で、左岸・右岸とも認められる。高井戸東遺跡（69）は4地点に分かれ、約1,700点の石器群が出土している。それ以外の遺跡は概ね小規模である。善福寺川流域では6件である。いずれも右岸である。小規模遺跡と中規模遺跡がある。桃園川流域には遺跡は認められない。妙正寺川・江古田川流域では4件である。新井三丁目遺跡以外は小規模である。

これら神田川水系上流においては、湧水点を少なからず有し湧水環境は概ね良好である。その点で、地域東部と比較して遺跡がやや密であることと関連付けられる。しかし、野川流域、石神井川流域と比較して小規模遺跡が多い感が否めない。

### d. 源頭部

神田川水系源頭部の井の頭池、善福寺池、弁天池、妙正寺池、江古田池の周辺においては、井の頭池にのみ遺跡が分布しており、他の池の周辺には遺跡は認められていない。

井の頭池周辺には、遺跡群（井の頭池遺跡群（64）、御殿山遺跡（65）、吉祥寺南1丁目遺跡（66）、吉祥寺南3丁目遺跡（67））が、池を取り囲むように分布している。そのうちの多くの遺跡で後期旧



第Ⅲ-11図 井の頭池周辺の遺跡分布

石器時代石器群が検出されている。

遺跡一覧表（第1表）においては、7遺跡・地点を数えるところであるが、詳細な情報はわからなくても概数が把握されている遺跡・地点が13件ある（第Ⅲ-1表）。多くは、上層出土の石器群で占められているが、下層の遺跡も認められる。小規模の発掘面積のものが多いため小点数の遺跡が多いが、大規模遺跡もあり、あわせて10,000点を越える石器が出土している。

遺跡分布を検討すると次のことが言える。井の頭池は二等辺三角形の形を呈しており、西側が底辺にあたる源頭である。池の南側は調査事例が少ないこともあるが、池の北側と西側で遺跡が密である。池と周辺の台地の間には、比高差5mの谷壁があり、遺跡はそのほとんどが谷壁上の台地面に位置する。そのため、遺跡と池は100m前後離れている。縄文時代の遺跡は谷壁上とともに谷壁下の池に近接している個所でも認められるので、それと対称的である。

ちなみに、谷壁の上に遺跡が立地するところは、石神井川富士見池と同じである。ただし、富士見池は井の頭池よりはるかに小さく、池から遺跡までの距離は短い。

井の頭池の湧水点は池奥に1ヵ所のみである。しかし、遺跡はその現在の湧水点に接してあるわけではなく、池に向かって小さな谷に近接しているように分布している。

井の頭池をめぐるように密に遺跡群が形成されることは、池という良好な水環境の立地と関連付けられることは確実である。石神井川富士見池、三宝寺池、白子川比丘尼橋付近でも池をとりまくように遺跡群が形成されているので、池と遺跡の関係をひとつの傾向として理解することができよう（本章第3節参照）。

そうした中、その一方で遺跡が検出されない池があることを検討することも必要である。桃園川弁天池のようにかなり小さい池の周囲に遺跡群がないのは理解できるとして、善福寺池の周辺に認められない理由は今後の課題である。

#### e. その他の遺跡立地の特徴

遺跡立地の特徴は、湧水環境と関連付けられるとする当初の想定と合致するところである。しかし、個別にみると必ずしも理解できない特徴も見られる。

というのは、いずれの地域においても、遺跡を比較的多く有する河川流域と、ほとんどない河川流域が同じ流系に認められることである。前者は目黒川水系－烏山川、神田川水系－神田川上流・善福寺川、谷田川であり、後者は目黒川水系－蛇崩川・北沢川、神田川水系－桃園川、谷端川である。各々の微細な状況と関わることであろうが、こうした傾向の意味するところも解明する必要がある。

### 5. 武蔵野台地南東部の特徴

#### a. 他地域との比較

対象地域は、遺跡数こそ少なくはないものの、密度が薄く石器類出土点数も少ないという傾向がある。これは1遺跡における出土点数が少ないということでもあり、さらに1遺跡における文化層数が少ないということでもある。言うなれば、重層遺跡が少ないのである。それは、武蔵野台地の他地域と比較することで、より一層理解できる。

第Ⅲ－3表は、対象地域を二分し①多摩川下流域+東部と②西部+源頭部の、1遺跡・地点における文化層の数を累計したものである。あわせて、野川・仙川流域（本章第1節）のそれも表示した。一見して、下流域・東部では文化層が少なく、野川・仙川流域に多いことが分かる。西部+源頭部はその中間である。

重層遺跡の形成に地域差が認められる点は、地域の特徴を如実に表しているといえる。重層遺跡とは、長い期間にわたり数度となくその土地が利用されたことを示すものである。そう言った点で、野川・仙川流域は占地・土地利用が繰り返された地域であり、多摩川下流域+東部は偶発的な、一回限りの占地に終始した地域であるということができよう<sup>9)</sup>。このことは、単に遺跡規模の差異を超えた地域差を示している。



第Ⅲ－3表 遺跡における石器集中件数の累計

石器集中	多摩川下流域・東部	西部・源頭部	野川・仙川流域	計
1	26	14	12	52
2	7	10	5	22
3	2	4	7	13
4	4	6	11	21
5	1	1	4	6
6	0	1	1	2
7	0	1	3	4
8	0	0	5	5
9	0	0	0	0
10以上	0	0	3	3
計	40	37	51	128

**b. 遺跡分布の間隔**

このことと多少関連するが、対象地域の遺跡分布を検討すると興味深い特徴を見出すことができる。石器類出土点数が300点以上の比較的大規模の遺跡は、概ね3～5kmの間隔をあけて分布している(第Ⅲ－8図)。それは、河川単位、台地面単位にある傾向をもって大規模遺跡が出現するというのではなく、それとは関係なく一定の間隔を持ちながら分布するのである。これは勿論同時に存在したわけではないので可能性の域を出ないが、拠点的に遺跡を形成することが本地域の環境に適応する方策であったと考えさせるものである。河川流域に集中して大規模遺跡が展開する野川・仙川流域、石神井川流域とは異なった、全体に疎である武蔵野台地南東部こその特徴である。

**c. 時間的変遷と武蔵野台地南東部**

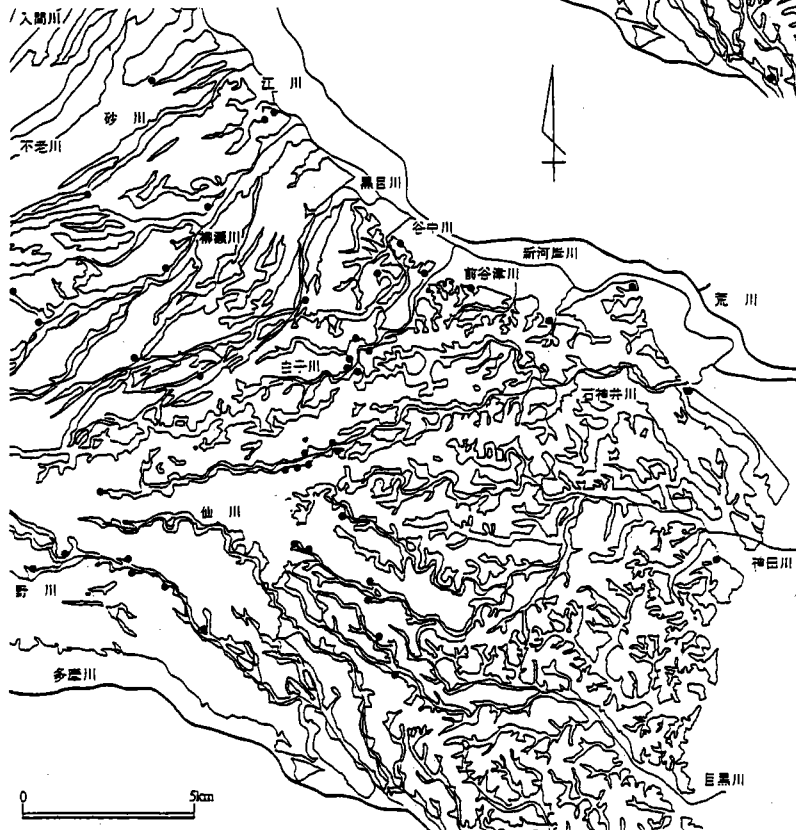
最後に、後期旧石器時代遺跡立地の時期変遷の特徴に触れたい。第Ⅲ－12図は、武蔵野台地における、南関東編年Ⅵ層段階とⅣ層中部段階(砂川期)の遺跡分布について触れたものである(伊藤1999a・1999b)<sup>16)</sup>。それによると、Ⅵ層段階では武蔵野台地全体に満遍なく分布し、特に南東部や北西部の台地の縁に分布が目立つ。この傾向は、Ⅶ層段階にも共通している。一方、Ⅳ層中部段階は台地の全体に分布するのではなく、台地中央の主に標高50m付近の小河川源頭部と野川流域に集中している。

この差異をどのように理解できるか明確な回答を持ち得ないが、地形環境、水環境の変化と関連付けることが可能かどうか検討する必要がある。Ⅳ層中部段階では、遺跡の性格から武蔵野台地に2つもしくは3つの集団領域を設定できるが、その中のある領域は湧水環境の良好な台地中央部(源頭部と野川流域)を意識して設けられている可能性がある(伊藤・三瓶2000)。この時期は最寒冷期にあ

VI層の遺跡



VI層中部の遺跡



第三-12図 遺跡分布の時期的変化

たり、最寒冷期ゆえの地形環境、湧水環境が表れる要素を検討することによって、それと遺跡立地、集団領域の関係をさぐることができる。というのも、Ⅶ層段階・Ⅵ層段階では台地中央部に集中しない遺跡分布を見ることができ、遺跡立地の時間的変遷とその背景を考えさせるデータが蓄積されているからである。それについては何ら予見を持たないので、本節ではこれ以上言及することはできないが、今後の課題として興味深いテーマである。

## 6. おわりに

武蔵野台地南東部は遺跡の密度が比較的薄く、武蔵野台地の中心的な地域ではない。しかし、そうした地域の特徴を明らかにすることによって、武蔵野台地全体の様相、ひいては後期旧石器遺跡と地形環境の一般的な関係を考察するのが本研究の目的である。また、これによって野川流域、北東部・北西部の理解のにも役立つところであろう。

### 註

- (1) 地形環境等を明らかにするための記載のある部分は、対象とする時代である後記旧石器時代のものではなく、現代のものであることを断っておかなければならない。湧水地点などの湧水環境に関係するものと、現在の地形を表現したものがそれに相当する。現代のことに関するデータが、後期旧石器時代の状況と近似したものであるかも検討していない。武蔵野台地の地形的特徴は、2万年程度の時間差では近年の劇的な変化を除けば、それほど変化してはいないようにも見えるが、実際には把握できていない。その点で、本節での論証が後記旧石器時代と現代のそれが近似しているという仮定のもとでしか成立しないことを明記しておく。
- (2) 遺跡データの精度には差があり、把握できない遺跡・地点である。そのため、ここで示す数量は概数である。
- (3) このことは実際には遺跡への回帰性、繰り返された土地利用そのものを説明しない。このデータは2~3万年続く長期間の傾向を示しており、回帰的移動によって占地が繰り返されたかは、同一時期における石器群の詳細な分析からのみ分かるものである。しかし、その傾向を推測できるものとしてここでの提示は有効であると考えられる。
- (4) 本図における遺跡件数などは、石器群の時期区分によって抽出したものである。単純な出土層序により区分した本報告の他の図表とは基準が異なるものとなり、整合はしない。
- (5) 第Ⅲ-7・8図は東京都 表層地質図（東京西南部・東京西北部）1997羽鳥謙三・細野義純他 作成を基に作成した。第8図の石器類出土点数は一遺跡・地点における全文化層の総計の点数である。第9図は（久保1988a）に拠った。第10図・第2表は（新井他1987）に拠った。第11図は（吉祥寺南町遺跡調査団1999）を基に作成した。第12図は（伊藤1999b）に拠った。

引用参考文献

- 新井 正・藤原寿和他 1987 「東京の台地部における湧水の現状」『地理学評論』60(Ser.-A)-7
- 伊藤 健 1999a 「後期旧石器時代遺跡研究のための低位モデル」『東京考古』18
- 伊藤 健 1999b 「話題提供 武蔵野台地／後期旧石器時代遺跡の立地とその変化」『石器文化研究会第141回例会発表資料』
- 伊藤 健・三瓶裕司 2000 「石器組成とブロックの規模からみた「砂川」－石器経済活動の空間的組織－」『石器文化研究』9
- 吉祥寺南町遺跡調査団 1999 『東京都井の頭池遺跡群吉祥寺南町1丁目遺跡J地点』 武蔵野市教育委員会
- 久保純子 1988a 「早稲田大学周辺の地形」『早稲田大学教育学部学術研究（地理学・歴史学・社会科学編）』37
- 久保純子 1988b 「相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形」『地理学評論』61 (Ser.-A)-1
- 寿円晋吾 1952 「神田川上流の地形と地下水」『地理学評論』25-4
- 比田井民子・松田隆夫他 1999 「野川流域の遺跡と水環境」『日本第四紀学会講演要旨集』29

### 第3節 武蔵野台地北東部 ～遺跡と古地形・水環境～

国武 貞克

#### 1. はじめに

武蔵野台地には、これまでの発掘調査によって、後期旧石器時代に多くの遺跡が残されたことが判明している。これらの遺跡は、更新世末期において、人類集団が営んだ狩猟、採集生活の軌跡と考えられるのであるが、その生活は如何なる原理によって支配されていたのであろうか。

これまでの旧石器時代研究では、当地域の遺跡から出土する唯一の資料である石器を分析することによって、当時の狩猟装備をパターン化し、その変遷を明らかにしてきた。また石器の原料の入手や消費過程を分析して、当時の移動生活の在り方を描き出そうという試みもある。しかしながら、これらの分析が対象としている石器は、狩猟、採集の対象となった動植物資源に対して備えられたものであるから、当時の移動生活がこれらの動植物資源の分布に、最も影響を受けたことは明白である。

ところが、当時の利用可能な動植物資源の分布といっても、各遺跡における石器製作活動をめぐる個別的な行動に対して、具体的な解釈を引き出せるほどには、詳細に復元できないのが現状である。それゆえに、当時の移動生活やその時代的な変遷を考える上で、それらの要素はややもすれば固定的に、いわば定数として扱われてきたといえる。これに対して、該期は大幅な気温の変動や、海水面の変動などが指摘されており、後期旧石器時代を通じて当時の動植物相や地形に、大幅な変化があったことが推定される。したがって人類の移動生活は石器製作をめぐる行動の変数の他に、自然環境の変数をも考慮する必要がある。小稿では、そのための準備として、従来の研究とは逆に、まず仮に人類の行動の上での問題を定数にして、自然環境の変数を考察する。すなわち人類はより湧水環境のよい場所に居住したと仮定して、それではその地域が後期旧石器時代を通じて如何に変遷したかを概観し、その理由を武蔵野台地の地形形成の如何なる理由によって解釈できるかを考察していくことにする。後述するように、地域によって遺跡の規模や時期に偏りのある武蔵野台地北東部は、この問題を設定する上で好適なフィールドである。

#### 2. 対象とする地域

荒川に面した崖線、黒目川の流域の遺跡である。荒川に面した崖線の遺跡は、出井川、蓮根川、前谷津川、谷中川が開析する谷に面しており、それらの谷は南から、出井川谷、中台町東谷、中台町中ノ谷、西台東谷、徳丸谷、赤塚東谷、出口谷と呼称されている（板橋区1995）。したがって荒川水系の小河川に立地した遺跡を扱うことになる。行政区分では小平市、田無市、保谷市、練馬区、板橋区、北区、武蔵村山市、東村山市、東久留米市、朝霞市、和光市の遺跡が該当する。

### 3. 武蔵野台地北東部の地形

本節では武蔵野台地北東部の遺跡の立地と地形の関係について検討する。具体的には、石神井川、白子川、武蔵野台地の東部から北東部に該当する当地域の地形は、西から東へ緩やかに傾斜している。この地域を石神井川や白子川、黒目川という比較的大きな河川と、出井川、蓮根川、前谷津川、谷中川という全長2 km程の短い河川が開析している（第Ⅱ-7図）。このうち最も南を東流する石神井川は、小平市御幸町付近の谷頭を源頭として全長約25 kmを測る。中流の練馬区内で富士見池や三宝寺池などの湧水を集めて、水量を増していき、板橋区内で田柄川と合流する。そして、北区に入ると、音無溪谷と呼ばれるように、台地との高度差が増し、その後武蔵野台地の東端に達すると、飛鳥山に面する谷から東京低地へ流れていく。次に、石神井川以北で白子川以南の荒川沿いの崖線には、出井川、蓮根川、前谷津川といった2 km足らずの河川が、樹枝状の谷を形成している。この地域は、多数の支谷によって起伏の多い複雑な地形が発達している。この地域の北側を白子川が南西から北東方向に流れている。白子川の源頭部は田無市に位置する東京大学農学部田無農場に位置するとされるが、源頭部から上流部には地表流水はきわめて少ない。源頭部付近から東に向かって2本の谷が伸びていて、これが保谷市内において合流している。中流域より屈曲率の大きな蛇行を繰り返しながら、やや北東部に向かって流路を変更し、荒川に注いでおり、全長約10 kmである。白子川以北で黒目川以南の地域の荒川沿いの崖線の地域には、全長800 mの越戸川とその支流の谷中川が北東方向に流れている。崖線より500 mの範囲には低地との比高差が20 mを測る谷を形成している。最後に、当地域の北限を画する黒目川は小平市の東端に位置する小平霊園を源頭とし、北東方向に流れて荒川に注ぐ全長約17 kmの河川である。上流部は、出水川、揚柳川、落合川、立野川と数多くの湧水から派生する支流を集めている。この地域は、谷の侵食が弱く、長狭で緩やかな起伏に富む地形が認められるが、中流域以降は急峻な崖線が認められる。これまで見てきたように、当地域の河川は下流域で急峻な谷地形を示すのであるが、これは後述するように海面低下期における河川の下刻作用が下流域ほど強く働いたためである。

当地域の地形面は、大雑把に捉えるならば3つに区分される（貝塚1979）。まず第一には、成増台に代表される武蔵野1面で、これは当地域の大部分を占める。次は赤羽台（本郷台）に代表される武蔵野2面で、これは当地域では石神井川下流のうちおよそ北区の範囲に該当する。そして、最後が黒目川段丘の内部の武蔵野2面から立川面である。しかしながら、加藤定男らによる研究によると、当地域のこのような台地面区分では、不十分であり、実際にはかなり複雑であることが明らかにされている（加藤、新堀1973、加藤1993）。

また当地域の台地内小河川は川幅が広く、したがって河谷内に、武蔵野2面から立川面にかけての新しい段丘が形成されることが注意される。とりわけ黒目川流域は、黒目川段丘によって南北の武蔵野1面と画されており、武蔵野2面から立川面が広く形成されている。このような河谷内の立川面段丘形成は当地域の遺跡立地の問題に直接かかわる問題であり、後でみるように遺跡の形成時期と密接

なかかわりをもっている。

他には武蔵野礫層と立川礫層の勾配の違いである。武蔵野礫層は古多摩川による扇状地堆積物として形成されたが、当地域の立川礫層は小河川による堆積である。立川ローム堆積期は海面降下期であり、したがって河川の下刻作用が強く、武蔵野礫層よりもやや勾配が強い。そのために、立川面は、河川の下刻作用が強く働いた下流域ほど傾きが大きくなり、完新世以降の沖積地に埋没していることである。これは、当地域では下流域の立川面に立地した旧石器時代の遺跡は検出できないことを意味する。同様なことは、荒川に面した段丘にもいえて、ある程度の面積をもつ立川面が、白子川、黒目川、柳瀬川、荒川低地の各沖積地の下に埋没段丘となっている（安藤、渡辺1996）。このことは遺跡の分布を論じる際に考慮に入れる必要がある。

#### 4. 時期別の遺跡立地

当地域で対象となる遺跡は、66遺跡、166文化層であり、石器総数は43097点で、礫総数は74506点である。これらの遺跡について時期別に立地の傾向をみていきたい。その時期の区分は、(1) AT下位（立川ロームX層からVI層）の遺跡、(2) IV層下部V層上部の遺跡、(3) IV層中部から上部（いわゆる砂川期）の遺跡、(4) III層下部（ナイフ形石器終末期）以降の遺跡の4区分とする。

##### (1) AT下位（立川ロームX層からVI層）の遺跡（第Ⅲ-13図）

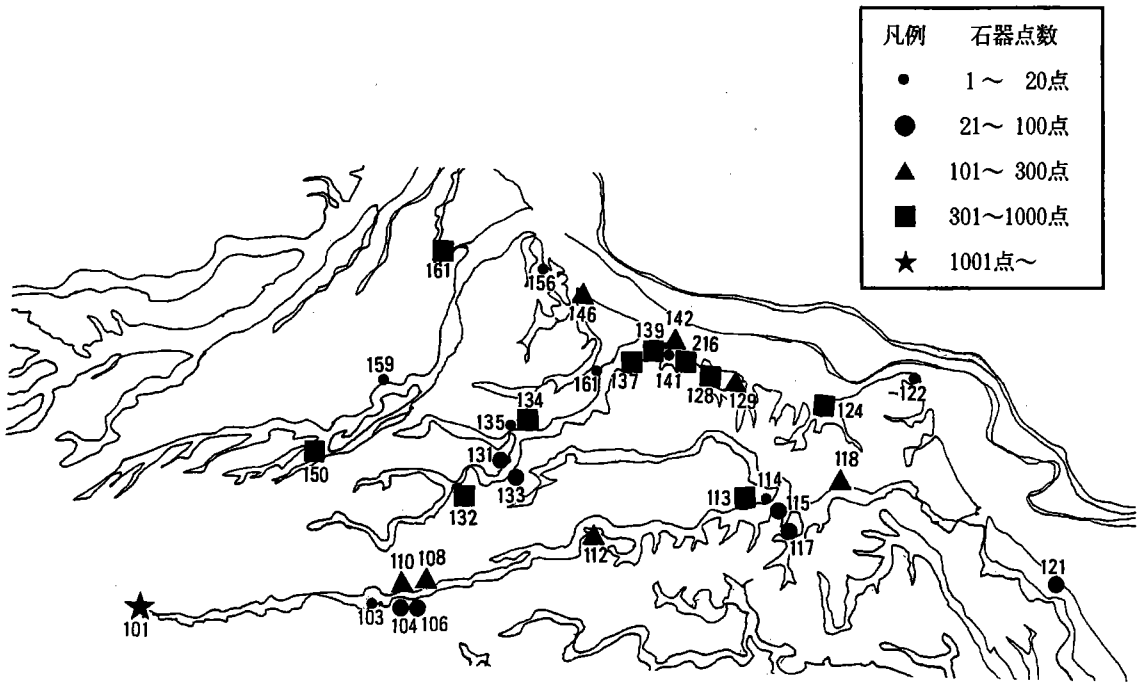
まず石神井川では源流部に大規模な鈴木遺跡があり、中流には小規模な遺跡がわずかに認められるが、とりわけ多いのは板橋区の範囲の下流域である。下流域では大規模な遺跡として東早淵遺跡が認められるが、しかしその多くは小規模、中規模な遺跡である。石神井川流域のこれらの遺跡は従来の台地面区分ではすべて武蔵野2面に属する。

次に顕著なのは荒川に面した段丘沿いの遺跡である。これらの遺跡は荒川に流入する短い河川すなわち、出井川、蓮根川、前谷津川が樹枝状に開析する谷に面している。大規模な遺跡としては本郷台に位置する志村城山遺跡が認められるが、その多くは中規模遺跡である。このように、この地域の遺跡は、先の石神井川下流域の遺跡と同様に、大規模な遺跡は少ないが中規模な遺跡が数多く分布する点で特徴的である。次にこれらの遺跡が立地する台地面について見てみる。従来武蔵野1面とされていた成増面に立地する遺跡は、それほど多くなく、大門遺跡（129）と氷川神社北方遺跡（142）が挙げられるのみである。他の多くは武蔵野2面に立地している。次に白子川を見てみる、まず大規模な遺跡として、中流域に外山遺跡、もみじ山遺跡、下流域に成増との山遺跡がみとめられる。そして遺跡数がより多く分布しているのは、大きく北へ蛇行している練馬区大泉町付近の中流域と、荒川低地へ流入する板橋区域の下流域である。前者は北岸に、後者は南岸によく分布している。立地する台地面については、成増面に立地する遺跡はもみじ山遺跡のVII層文化層の一部のみで、他は全て武蔵野2面に立地する。ここでは、これまで検討してきた地域と同様に、成増面に立地する遺跡は少ないこ

とが指摘される。

最後に黒目川についてみる。黒目川には該期の遺跡はきわめて少なく、上流部の落合川に立地する多聞寺前遺跡と、下流域に立地する泉水山遺跡が大規模である。多聞寺前遺跡は立川面に属する黒目川段丘の内部に立地し、武蔵野ローム上半部をのせる武蔵野面に囲まれる。泉水山遺跡は武蔵野1面に立地する。

以上をまとめると、該期の遺跡は、中規模以上の遺跡が石神井川と白子川の下流や、とりわけ荒川に面した段丘沿いの地域に多く分布していることが理解できる。下流域に偏って分布する傾向は、後の時代と比べて対照的な傾向である。



第Ⅲ-13図 AT下位(立川ロームX層からVI層)の遺跡

(2) IV層下部V層上部の遺跡(第Ⅲ-14図)

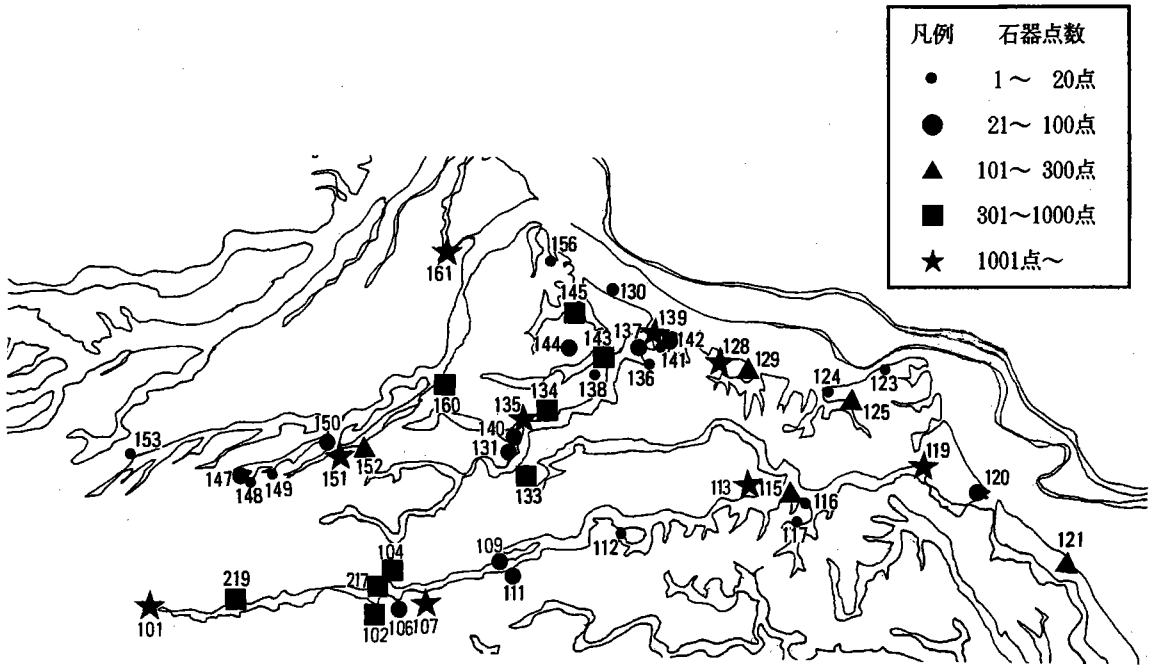
まず石神井川では、源流部の鈴木遺跡(101)が最大規模の遺跡として認められる。中流域には、前段階と比べて遺跡数も増え、規模もはるかに大型化している。葛原遺跡(107)などがその例である。下流域は、前段階と比べて明らかに遺跡数は減少している。ただし、加賀一丁目遺跡(119)が大規模である。前段階と比べて注目すべきは赤羽台に遺跡数が増えていることである。その他の荒川沿いの崖線沿いには前段階と比べると明らかに遺跡数は減少している。白子川は前段階と同様に、中流域と下流域に遺跡がまとまっている。とりわけ中流域には丸山東遺跡(135)やもみじ山遺跡(134)、比丘尼橋遺跡(133)など大規模遺跡が密集している。黒目川流域は前段階と比べて明らかに増加している。



自由学園南遺跡(151)や泉水山遺跡(161)など最大規模の遺跡も認められるが、多くは中規模、小規模遺跡である。

立地する台地面は多くは前段階と同様の武蔵野2面である。ただし、荒川沿いの地域や白子川下流の遺跡は減少しており、いわゆる武蔵野1面に立地する遺跡は減少しているといえる。

該期の遺跡の分布の特徴としては、当地域の全体に比較的偏りなく分布することを挙げることができる。そして前段階との違いとしては、下流域に遺跡が集中する傾向が認められなくなる点である。

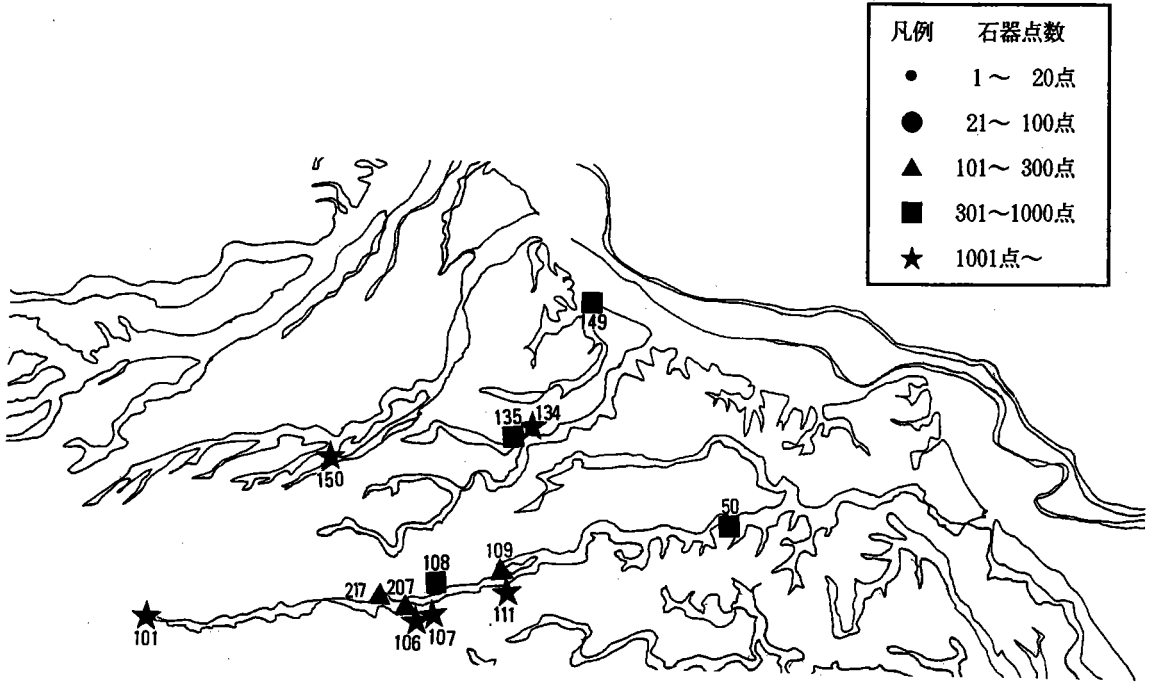


第三-14図 立川ロームIV層下部V層上部の遺跡

(3) IV層中部から上部(いわゆる砂川期)の遺跡(第三-15図)

砂川期になると遺跡の分布は厳しく限られるようになる。それは石神井川上流部と中流部、白子川中流部、黒目川上流部である。遺跡数も激減している。しかしながら、各々の遺跡の規模が大きくなり、最大規模の遺跡や大規模の遺跡がそのほとんどを占めるようになる。石神井川中流域では天祖神社東遺跡(106)や葛原遺跡(107)や白子川中流域のもみじ山遺跡(134)、そして黒目川では多聞寺前遺跡(150)が最大規模の遺跡である。すなわち、該期になると遺跡の規模が大規模化する代わりに、分布や数が限られるようになる。分布が限られ、遺跡数が減少する点は(2)でみたIV層下部V層上部の遺跡の傾向と対照的である。とりわけ、石神井川や白子川の下流域や荒川沿いの崖線沿いの地域にはまったく遺跡がみられなくなる点は、(1)でみた、AT下位の遺跡の分布と較べるとまったく対照的である。

立地する台地面は武蔵野2面が多く、下流域の武蔵野1面には遺跡は立地しない。白子川中流域でも、該期の遺跡は成増面には分布せず、武蔵野2面に立地する。ただし、同じ遺跡の中でも、IV層下部V層上部の文化層と該期の文化層では、立地する位置が異なっている。たとえば、石神井川中流の下柳沢遺跡(217)では、IV層下部の文化層(第2文化層)とIV上の該期の文化層(第3文化層)では、川岸からみて後者の方がより内陸に分布している。同様な傾向は、例えば黒目川上流の多聞寺前遺跡など、他の河川でも認められ、当地域に限らず該期の遺跡立地の特徴なのかもしれない。

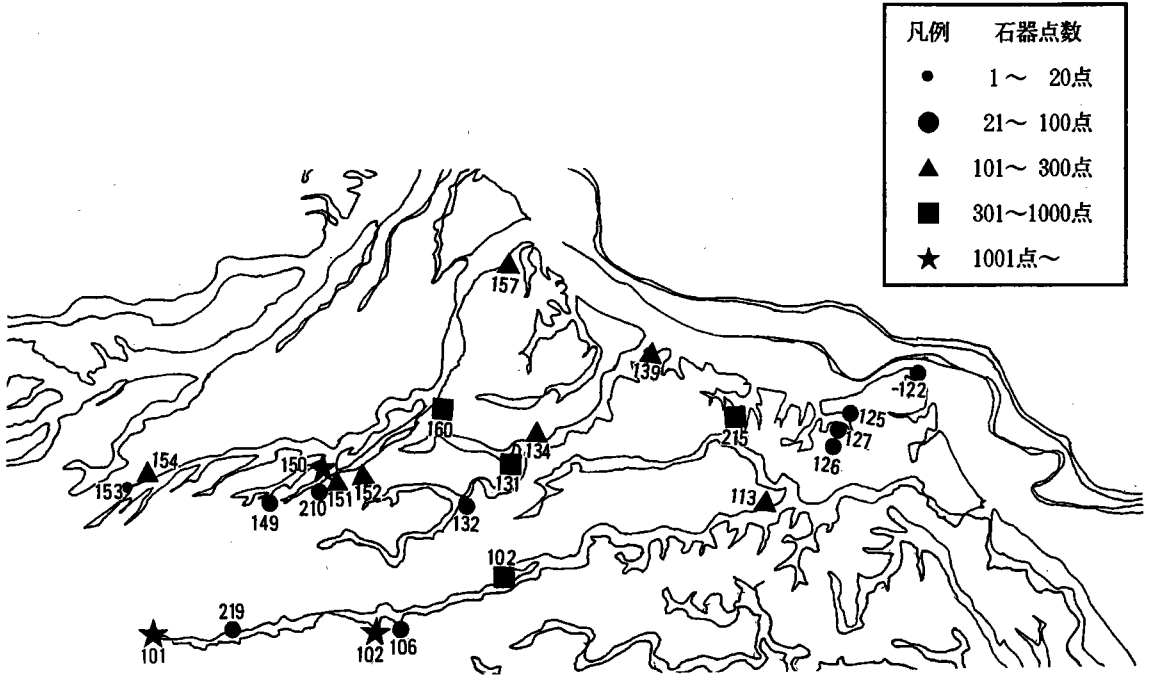


第Ⅲ-15図 立川ロームIV層中部から上部(いわゆる砂川期)の遺跡

#### (4) Ⅲ層下部(ナイフ形石器終末期)以降の遺跡(第Ⅲ-16図)

この時期になると、前段階よりは遺跡数は増加し、分布も広がるが、大きく見ると同様の傾向を示す。石神井川上流と中流、白子川中流に大規模な遺跡が認められるがあまり遺跡数は多くはない。石神井川においては遺跡数が大幅に減少している。大規模な遺跡は石神井川に坂下遺跡(102)、黒目川上流に多聞寺前遺跡(150)などがあるが、多くは小規模、中規模な遺跡である。前段階と異なるのは、黒目川上流域に、小規模、中規模な遺跡が分布する点である。これらの遺跡は、たとえば西下里遺跡(153)や六仙遺跡(149)など従来遺跡が立地しなかったような上流部に小規模な遺跡が立地するようになる。この傾向は台地北部にも連続して認められる。また、荒川沿いの崖線に面した地域にも小規模

な遺跡がややまとまっているように見える。しかし(1)でみたようなAT下位の遺跡と比べると、前段階と同様に分布は薄いと見える。立地する台地面は武蔵野2面が多い。とりわけ小規模、中規模の遺跡が多く立地している黒目川上流域は、武蔵野2面から立川面が比較的広く形成されている。逆に、遺跡の少ない石神井川、白子川下流域や荒川沿いの崖線沿いの地域は下末吉面である。また旧石器時代終末期になると、狭山B遺跡(163)のように立川面に、それも低地に接して立地する遺跡も認められる。



第Ⅲ-16図 立川ロームⅢ層下部(ナイフ形石器終末期)以降の遺跡

### 5. 遺跡立地の特徴

以上を通して見るならば、当地域の遺跡立地の傾向として次のようなことを指摘できる。まず第1には、各時期を通じて遺跡の分布しない地域が認められることである。これは白子川上流域と石神井川上流域である。後者には田無南町遺跡が例外的にあるが、この遺跡は武蔵野2面と考えられる段丘の端において、武蔵野ローム堆積期に石神井川の流路になった後、立川ロームが堆積していく過程で、低地の中の微高地上に形成されたものである。このような例外があるものの、この2河川の上流域には遺跡が認められない。逆に、この2河川の中流域はともに、各時期を通して比較的大型の遺跡が形成されている点も指摘できる。

第2に、石神井川や白子川の下流域や、荒川に面した段丘沿いの地域の遺跡の動向についてである。この地域には、(I)でみたAT下位の時期には非常に多くの遺跡が分布し、むしろその時期の中心的

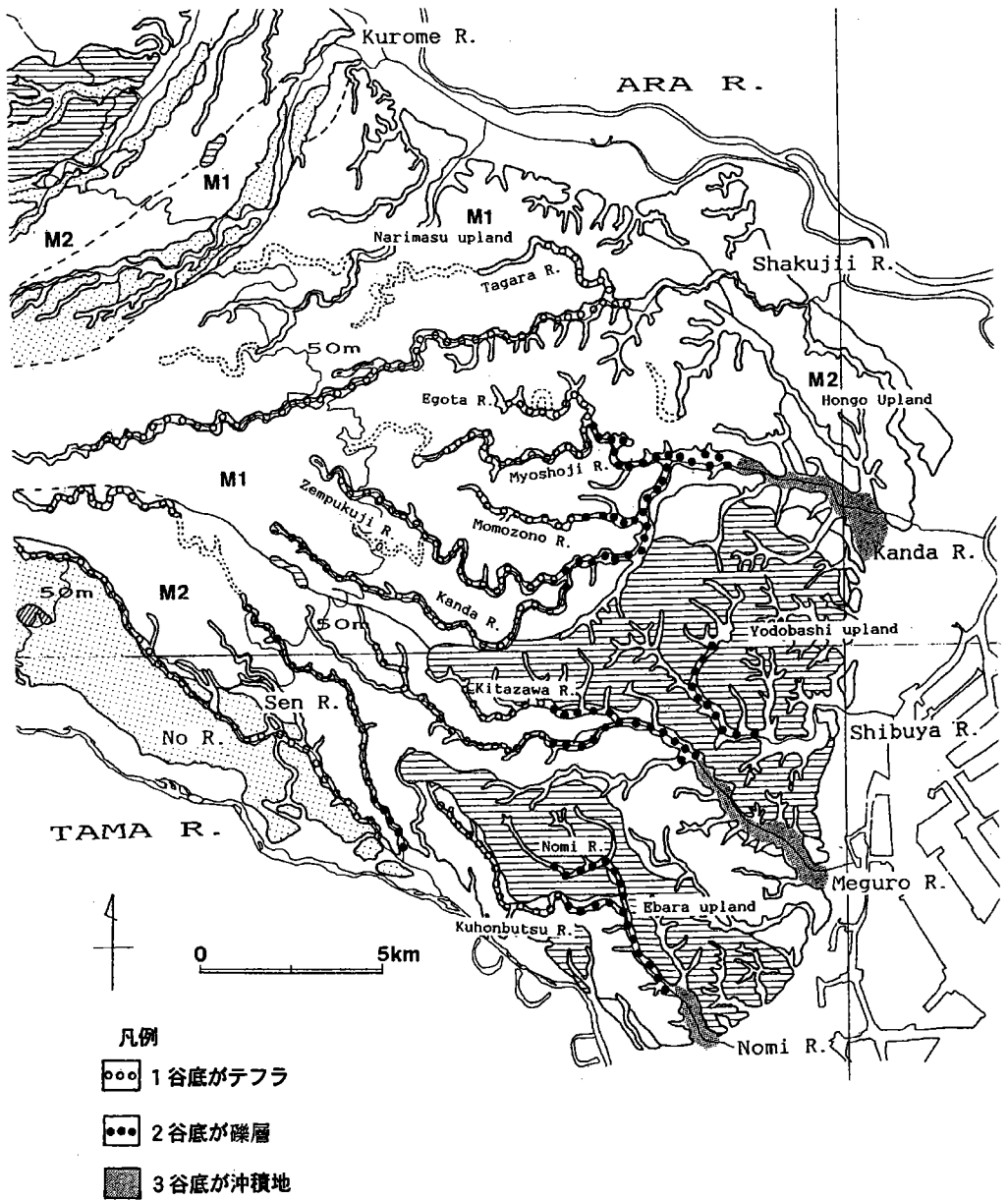
な遺跡の分布地域である。この時期の他の地域と比べても、遺跡密度は高いといえる。ところが、(2)のIV層下部V層上部の時期になるとやや減少し、台地内陸部の石神井川や白子川の中流に分布の中心が移っていき、(2)の砂川期や(1)のナイフ形石器終末期以降の時期になると、遺跡はほとんど分布しなくなる。もっとも、先述したようにこの地域の立川礫層は武蔵野礫層よりも、傾斜しているため、その上にある立川面は沖積地の下に埋没している。そのため、埋没した立川段丘上に立地していた後半段階の遺跡が検出されないために、見かけ上、後半段階の遺跡が分布しないようにみえるという解釈も可能である。しかし、ある程度はそのような遺跡もあるだろうが、先に指摘したように後半段階の遺跡の立地は主に武蔵野2面であり、立川面が埋没していない地域においても、立川面に立地する遺跡は少ない。ただし、荒川低地に埋没した立川面については、同様な条件の国分寺崖線と多摩川に挟まれた立川面の動向を参考にすれば、立川面を開析する小河川に沿って遺跡が立地していた可能性があり、その点については見かけ上の空白には注意する必要がある。そのような注意も必要であるが、とりあえずは石神井川、白子川下流や荒川沿いの崖線沿いの地域についてみると、主に立川ローム堆積期の前半段階が遺跡立地の中心となる時期である。これにはどのような理由が考えられるのであろうか。

第3に、黒目川上流の地域の動向である。この地域は、先の下流域の動向とは対照的であり、AT下位の時期には多聞寺前遺跡(150)の他に目立った遺跡はなく、ほとんど遺跡は分布しない。しかし、(2)のIV層下部V層上部を境に、小規模ながら遺跡数は増加し、(3)の砂川期の遺跡数の減少を挟んで、(1)のナイフ形石器終末期以降になると、小規模な遺跡が増加するようになる。このように上流域においては、立川ローム堆積期において時期が新しくなるにつれて、小規模ながらも遺跡数が増加する傾向を指摘することができる。

## 6. 遺跡と古地形・水環境

それでは、当地域のこのような遺跡の動向は、古地形の変遷や湧水環境からみるならばどのように考えられるのであろうか。前章で指摘されたそれぞれの特徴について考察してみることにする。

まず第一に、石神井川と白子川の上流域で遺跡が分布しない点であるが、これについては各河川の河床が、どのような地質によって構成されているかが参考になると思われる。もちろん湧水の生じる原因は、その他にも様々な理由が考えられるであろうし、単一の原因では説明がつかないであろうが、湧水が生じやすいか、もしくは生じにくいという予測は立つと考えられる。第Ⅲ-17図で石神井川の河床の地質をみると、上流から下流にかけて全て河床はテフラに覆われていることが理解できる。これは河谷に流水がありながらも、河床に降下テフラが堆積し続けるような環境を示しており(久保1988)、段丘崖に礫層が削り出されにくい状況が推定される。従って、石神井川沿いの段丘崖の下底には豊富な湧水が期待できず、このことが石神井川流域では大型湧水池の周囲以外に遺跡が立地しにくい理由になるのではないかと考えられる。また、とりわけ富士見池以西の上流部では、流水の涵養



第三-17図 武蔵野台地南東部の谷野縦断形による分類 (久保1988)

源が主に源頭部の湧水に限られていたために、流水が乏しかったと考えられる。そのため中、下流域ほどには段丘が発達せず、それゆえに崖線下の湧水があまり得られず、結果として遺跡が立地しなかった可能性が考えられるのではないだろうか。

同様な現象は、白子川においても認められる。白子川上流においても河床にロームが堆積している(加藤・新堀 1973)。加藤氏の考察によると、石神井川と同様に、河谷に流水がありながらも、河床に降下テフラが堆積し続けるような状態が想定されている。このような場合もやはり、段丘崖の下底

においては武蔵野礫層が露出しないので、湧水は得にくいと考えられる。これが、白子川上流において、遺跡が立地しない原因であろう。ところで、加藤氏の考察によると、白子川の河床は、中流域の、大きく北へ蛇行している練馬区大泉町付近において、武蔵野礫層にぶつかることが指摘されている。この地域は大型の湧水点为数多く確認されている。もちろん、この地点で湧水が豊富なのは、他の様々な条件、例えば地下水面の高度や傾きと河床の高度の関係や、この地域全体の地下水の流れ、あるいは礫層下の地質などが複合した結果であろう。しかし、少なくともその1つの原因として、この地点で白子川が地下水の滞水層である武蔵野礫層を切っていることを考慮しても良いのではないだろうか。その結果としてこの地点に立地する丸山東遺跡やもみじ山遺跡、愛宕下遺跡などの遺跡は、遺物点数や文化層数などからみた遺跡規模が大変に大きいのではないだろうか。

以上が、石神井川と白子川の上流部で遺跡が立地せず、白子川中流域で大規模遺跡が立地する原因と考えられる。ところで、武蔵野台地においては、野川流域を除くと、石神井川や白子川だけでなく、一般的に台地内小河川の上流部には遺跡が立地しにくい、あるいは新しい時期にならないと密に遺跡が分布しない傾向を読みとることができる。例えば、神田川の上流域、すなわち源頭部の井の頭池より下流で各支流との合流点より上流の地域の遺跡の動向は、高井戸東遺跡を除くと、ほとんどが本章でいう(4)のナイフ形石器終末期以降の時期の遺跡である。すなわち、この時期に至るまであまり大規模な居住の痕跡が残されていないのである。これは、当地域の黒目川上流域と同様の傾向である。他には台地北部の砂川や東川などについても同様なことがいえる。また、神田川の上流であり、支流でもある桃園川や善福寺川、妙正寺川には源頭部を除くとほとんど遺跡が分布しない。これは、当地域の石神井川や白子川上流域と同様の傾向である。このような傾向は、先に指摘した河川の上流部の河床にロームが堆積していて、武蔵野礫層を開析しないために崖線下底において湧水が得られにくいという説明を一般的に当てはめることができるのかもしれない。実際に第Ⅲ-17図を見てみると、神田川上流域の河床はテフラで構成されている。

しかしながら、このような河川上流部の遺跡立地の動向に対して、段丘発達の遅れという観点からさらに視野を広げて、武蔵野台地の段丘発達史の観点に立つならば、既に指摘した各河川の下流域や荒川沿いの地域がこれら上流部とは対照的な傾向を示す現象とともに、統一的に理解できるのではないかと考えられる。すなわち、立川ローム堆積期の前半段階には下流域に遺跡が多く残され、後半段階になると中流域や上流域に分布の中心が移動する現象を、武蔵野台地の段丘化の過程から解釈する見方である。

第1節第4項において羽鳥氏は、武蔵野台地の形成過程を、多摩ローム堆積期から武蔵野ローム堆積期にかけては多摩川の扇状地としての性格が強かったが、その過程において一貫して多摩川の流路が徐々に狭まっていった結果、立川ローム堆積期以降は多摩川の段丘としての性格が強くなっていったという見解を表明している。

それでは、この武蔵野台地の形成過程の考え方によって、上述したような遺跡立地の変容はどのよ

うに理解され得るのであろうか。立川ローム堆積期は、海面低下期でもあり、それに伴って武蔵野台地を流れる小河川は下刻作用が強くなっていく（第Ⅱ章第2節第6項）。とりわけ上流域よりも下流域ほど下刻は強いいため、下流域では河床は武蔵野礫層を削り込み、崖線下底に礫層が露出し、地下水が滞水し易い地域では湧水は生じやすかったと考えられる。白子川下流域や谷中川流域では武蔵野礫層下の地質が泥質であるため（加藤1973）、この時期に湧水が生じる条件は整っていた可能性が高い。これが下流域において、この時期に遺跡が多く立地した原因であると考えられる。

しかしながら、この時期には多摩川が現在の立川面を流路としたために、国分寺崖線が成立しており、そのために国分寺崖線下で武蔵野礫層が削り出され、多量の地下水が湧水となって国分寺崖線から多摩川へ流出したと考えられる。これが野川流域においてこの時期以降遺跡が多く立地した理由であるが、その結果として、羽鳥氏の考察にあるように、この時期から武蔵野台地全体の地下水位が低下し始める。

立川ローム堆積期に、海退から海進に転じても、多摩川は上流に向かって下刻作用が進み、多摩川上流部の段丘比高が増した。その結果として武蔵野台地全体の地下水位の低下は加速する（第2章第2節第6項参照）。海面低下に伴う台地内小河川下流部の下刻作用は海面上昇とともに停止したと考えられる。小河川上流部、中流部では、多摩川ほどではないが、前半期と比べると段丘化が進んでいくため、前半期よりは地下水が湧出しやすくなり、結果として上流域が下流域と比べて、相対的に湧水環境が向上したと思われる。これが、立川ローム堆積期の後半期において、中流域や上流域に遺跡の分布の中心が移行した原因のひとつであると考えられる。

もちろん段丘化の進展の違いによって、河川ごとに遺跡の分布は異なる。現在源頭部に大型の湧水池を残さない白子川や石神井川の上流域や、桃園川、妙正寺川では、地表流水がそれほど多く涵養されなかったためか、湧水が生じるほどには段丘化が進まず、後半期になっても遺跡があまり分布しなかった可能性がある。逆に源頭部の湧水点が多い黒目川や大型湧水池を源流にもつ神田川では、地表流水がよく涵養され上流部の段丘化が進み、湧水が以前よりは生じやすくなり、ようやく本章でいう4.4のナイフ形石器終末期以降の時期になって、小規模な遺跡が数多く立地するようになったと考えられる。

## 7. まとめ

これまでみてきたように、武蔵野台地北東部の遺跡の動向を概観することによって、武蔵野台地全体の遺跡立地の動向をある程度一般化してきた。そして、その原因を、とりあえずは人間の行動の上での問題を定数にすることによって、武蔵野台地の形成過程に起因する湧水環境の変化から推定することができた。しかしながら、湧水環境の変化といっても、各地域の湧水環境はそれぞれに特殊な理由や原因が複合して説明されるべきものであるから、本稿に示した議論では不十分であり、一つの可能性の提示にすぎない。また、はじめにも述べたように、該期の遺跡の中にみられる人類の様々な活

動の痕跡は、単に自然環境の中の一つの条件である湧水環境のみに起因するはずはなく、社会的な条件や技術的な条件との関わり合いのなかで発現されていたはずである。したがって今後の問題設定としては、たとえば石器製作をめぐる行動の上で何らかの規則性が認められた場合、それが本研究で究明してきた湧水環境の様々な変化を下敷きにして考えた時に、それが、各時期の人類が採った如何なる社会的、技術的な適応手段の現れであったのかを具体的に究明する視点が有効となるであろう。

#### 引用参考文献

- 安藤一男、渡辺満久 1996 「武蔵野台地北部の開析谷沿いにおける埋没地形面群」『第四紀研究』  
35-4. pp. 281-292
- 板橋区史編さん委員会 1995 『板橋区史 資料編 I 考古』
- 貝塚爽平 1979 『東京の自然史 増補第二版』紀伊国屋書店
- 加藤定男、新堀友行 1973 「いわゆる武蔵野段丘について」『地球科学』27-1 pp. 24-34
- 加藤定男 1993 「東京外郭環状道路に沿う武蔵野台地の関東ローム層について」『関東の四紀』18  
pp. 3-12
- 久保純子 1988 「相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形—風成テフラを供給された名残川の谷  
地形—」『地理学評論』61 pp. 25-48
- 高村弘毅 1985 『多摩川における湧水の涵養機構の研究 — 野川の場合 —』とうきゅう環境浄化  
財団研究



## 第4節 武蔵野台地北西部

西井 幸雄

### はじめに

武蔵野台地は、現在の行政区分で多くが東京都であるが、北西部は埼玉県となっている。本節の殆どは埼玉県に含まれる。本地域は、学史的に著名な市場坂遺跡と砂川遺跡を除くと、先土器時代の本格的調査が開始されたのは遅く、現在までの資料的蓄積は少ない。また、ローム層の堆積が薄いため石器の出土層位が不明確であったり、石器集中や石器・礫点数が明記していない報告書があるので、統計的検討が難しいのが現状である。また、狭山丘陵を挟んで南側と北側で地形的景観が大きく異なっており、特に北側のいわゆる川越台地（堀口他 1997）は、武蔵野台地の多くの遺跡が小河川に沿って台地の中央部まで分布するのに対し、新河岸川崖線から約2kmの範囲と狭山丘陵周辺の2つのグループに明確にわかれ、中流域に遺跡分布の空白地域がみられる。本節は遺跡の概要と分布状況を検討し、地形との関わりについて考えてみたい。

### 1. 対象範囲

本項の対象地域は武蔵野台地の北西部、柳瀬川流域とその北側である。現在の行政区分だと柳瀬川の上流域の一部を除くと埼玉県に含まれる。埼玉県では県内の武蔵野台地を柳瀬川の谷を境に北側を川越台地、南側を野火止台地と呼んでいる（堀口他 1997）。

#### 1) 柳瀬川流域

柳瀬川は狭山丘陵の狭山湖を水源とし、同じ狭山丘陵の多摩湖を水源とする宅部川、東川を支流として集め、志木市内で新河岸川に合流している。流長は約25kmである。

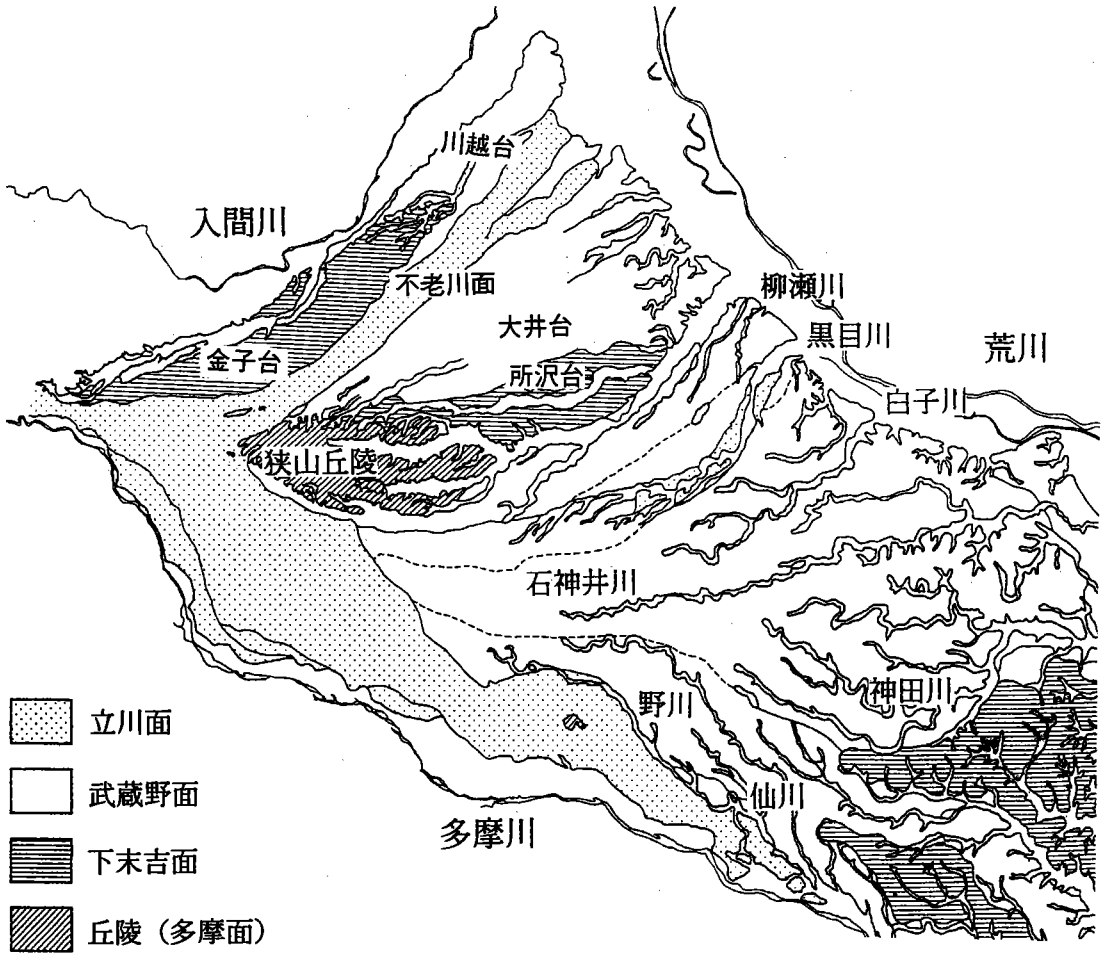
#### 2) 川越台地（柳瀬川の北側）

川越台地は、柳瀬川の北側に広がる青梅を扇頂とする扇状地で、武蔵野台地扇状地地形を良く残している地域である。北東方向に約17.5km、最も標高が高いのは狭山丘陵付近で約130mを測り、扇状地の先端の新河岸川に面する崖線では標高約10mとなっている。行政区画では所沢市、入間市、狭山市、川越市、富士見市、三芳町、上福岡市、大井町が含まれる。

川越台地（堀口他 1997）の地形面は、金子台・所沢台・川越台・大井台・不老川面の5つに区分されている。所沢台は狭山丘陵から東側に舌状に伸びた台地で、南側を東川、北側を砂川によって画されている。地形面は下末吉面に対比されている。大井台は所沢台の北側に砂川を挟んで広がっている。地形面は武蔵野面に対比される。青梅を扇頂とする扇状地で、川越台地の平坦部分の殆どを占めている。

金子台は霞川を挟んで加治丘陵の南側に北東に伸びる台地で、地形面は下末吉面に対比されている。川越台は金子台の北東方面に続く台地で、地形面は武蔵野面に対比されている。

不老川面は不老川流域に沿って幅約2kmの範囲に立川面が帯状に伸びており、大井台と金子台、川越台を画している。(第Ⅲ-18図)



第Ⅲ-18図 武蔵野台地北西部の地形面 (堀口他 1997年原図に基づく)

大井台には新河岸川に面する崖線に沿って唐沢堀、富士見江川、権平川、砂川堀、さかい川、福岡江川、川越江川が並び、複雑な地形を呈している。これら小河川の殆どは崖線から約2km、標高約20~30mの等高線上に水源がみられ、扇状地の奥まで達していない。僅かに、現在の砂川堀が狭山丘陵付近を水源として大井町、富士見市を流れる用水であるが、元来の砂川は中流域で伏流水となってしまう、大雨の時にしか地表にあらわれなかったようである。

不老川は多摩川の名残川 (久保 1988) とされている。青梅市東部を水源とし、流長は約17kmである。

谷川と久保川を支流とし新河岸川に合流している。冬季に渇水し流水が年を越えて流れないため、新編武蔵風土記には‘年不取川’、郡村誌には‘年不越川’（としこさずがわ）とも記されている。

入間川は入間郡と秩父郡の境にある妻坂峠付近を水源とし、東流する荒川最大の支流である。流長は約51kmで霞川等多くの支流を有している。武蔵野台地と入間台地を画す河川である。

大井台の扇状地の中央部、砂川中流域は中世の新田開拓で有名な三富新田がある。三富新田の開拓は、柳沢吉保が川越城主の1964年から1704年の時に着手された。この開発で最も苦労したのは水の確保で、全域に11箇所の深井戸（約22m）が掘られ共同使用されたが、日照りのときは井戸が枯れて、柳瀬川まで水を汲みに行かなければならなかった。

## 2. 対象地域の遺跡分布

### 1) 柳瀬川流域

柳瀬川流域は、発掘調査で検出された遺跡は8遺跡である。A T降灰以前の遺跡は栗谷ツ遺跡のみで、他は全てA T降灰以降のである。

遺跡の規模は全体に小さく100点以上出土した遺跡は、甲館出遺跡の797点、大堀山館遺跡の227点、栗谷ツ遺跡の152点が挙げられる。また、和田遺跡は発掘調査が複数回実施され第9次調査で559点、第20次調査で512点検出され、遺跡の全貌が明らかになれば、柳瀬川流域で最大規模の遺跡となる可能性が高い。石器集中は甲館出遺跡と和田遺跡を除くと1~3箇所である。礫群は本郷東上遺跡と北通遺跡から検出されているが、礫点数等は不明である。

### 2) 川越台地

川越台地の遺跡は、不老川を境に南側に狭山丘陵、所沢台、大井台があり、北側に金子台、川越台が位置している。狭山丘陵から所沢台は砂川上流域にあたり、お伊勢山遺跡、宮林遺跡、砂川遺跡、日向遺跡、白旗塚遺跡、中砂遺跡、清橋遺跡（大井台）と遺跡が密集している。

大井台の中央部、砂川中流域は砂川が伏流水となる地域で、今まで先土器時代から古代までの遺跡が分布しない空白地域と思われていたが、森野氏による砂川流域の分布調査で駿河台遺跡をはじめとし15遺跡が確認された。遺跡群の内容は、発掘調査が実施されているのが、駿河台遺跡のみであるため詳細は不明であるが、全般に小規模遺跡であると思われる（森野 1993、1997）。

砂川下流域及び富士見江川、砂川、さかい川、福岡江川等の小河川が並ぶ大井台の新河岸川崖線付近は、貝塚山遺跡、打越遺跡、唐沢遺跡、三芳唐沢遺跡、新開遺跡、藤久保遺跡群等が各河川によって開析された崖線に沿って分布し、特に谷頭部に密集する傾向がみられる。

入間川・霞川流域の金子台には西武蔵野遺跡、坂東山遺跡が分布し、他に小規模又は石器が単独で見つかる遺跡が分布している。

### 3. 石器の変遷

武蔵野台地北部は、ロームの堆積が薄くなり自然層位による石器群の編年的把握は難しくなる。特に、遺跡数が増加するV層以上の石器群は、第2黒色帯の上部からソフトローム層にかけて検出され、遺跡間の層位的対比が困難な場合が多い。その為、石器群の編年作業は、良好な武蔵野台地南部の石器群の出土状況と比較と、石器型式論的検討によって組み立てられている。本地域の編年は、加藤秀之が1995年と1997年に提示している(加藤1997)。ここでは加藤の編年に準拠するが遺跡群の動態の把握が目的なため、遺跡数の少ない加藤のⅠ期とⅡ期を統合し第Ⅰ期した。また、加藤の第Ⅴ期を細石器石器群と尖頭器石器群に分けて扱うのは同じである。

第Ⅰ期：Ⅹ層からⅦ層 当該期は石器群の分析から細分が進められているが、該地域の遺跡数が少ないため一括した。石器群の特徴は、石斧(局部磨製石斧・打製石斧)と大形の縦長剥片及びそれを素材としたナイフ形石器、台形様石器が主な石器である。石器石材は頁岩系と安山岩(黒色ガラス質安山岩)が多く用いられている。

代表的な遺跡はお伊勢山遺跡、藤久保東遺跡群、打越遺跡、谷津遺跡、三芳唐沢遺跡等である。

第Ⅱ期：Ⅵ層 石器群の特徴は、縦長剥片を素材とし2側縁加工の整ったナイフ形石器を主体とする時期である。石器石材は黒耀石と頁岩系が多く用いられている。主な遺跡は栗谷ツ遺跡、貝塚山遺跡である。

第Ⅲ期：Ⅴ層からⅣ層下部 この時期になると、各地域とも遺跡数が増加する。石器集中と共に隣群が伴い、場合によっては隣群のみが目につく遺跡も多い。石器群の特徴は、横広剥片を素材としたナイフ形石器、切出形石器、角錐状石器が主体をなし、特徴的な搔器などがみられる。石器石材はチャートが多く用いられ、その他多様な石材が用いられている。主な遺跡は、中砂遺跡、和田遺跡、打越遺跡、山室遺跡、新開遺跡等である。

第Ⅳ期：Ⅳ層上部 該期は砂川遺跡の石器群をもって設定された砂川期と、それに後続する月見野期の石器群を含む。ナイフ形石器最盛期から終末期にかけての石器群で、ナイフ形石器の調整加工は緻密で形状は流麗なものが多くみられる。砂川期の特徴として2側縁加工のナイフ形石器と端部加工のナイフ形石器がセットになる。石器石材は、砂川期はチャートが多く用いられ、月見野期になると黒耀石が目立つようになる。主な遺跡は砂川遺跡、宮林遺跡、中砂遺跡、打越遺跡、甲館出遺跡等がある。

第Ⅴ期：Ⅲ層 層位的には区分できないが、尖頭器を主体とする石器群と細石器を主体とする石器群の2つの石器群がある。前者(a)を尖頭器石器群、後者(b)を細石器石器群とする。

尖頭器石器群は第Ⅳ期との編年的問題はあるが、西武蔵野遺跡は該期として捉える。他に尖頭器石器群がまとまっているのは、お伊勢山遺跡と中砂遺跡を含め砂川流域分布調査によって、何地点か確認されている。

細石器石器群は、清橋遺跡、中砂遺跡で石器集中が検出されており、他にお伊勢山遺跡でまとまった資料が出土している。尖頭器石器群同様、砂川流域分布調査で何地点か遺跡が確認されている。

石器石材は、尖頭器石器群は黒耀石、チャート等多様な石材が用いられている。細石器は黒耀石を主に用いられている。

## 4. 主要遺跡の概要

### 1) 柳瀬川流域

柳瀬川流域の遺跡分布は、中流域に和田遺跡、東川との合流部に甲館出遺跡があり、その対岸に新座新開遺跡が所在するが、遺跡分布はそれほど密ではない。規模の大きな遺跡は、和田遺跡と甲館出遺跡だけでその他は小規模又は単独出土・表採資料である。

栗谷ツ遺跡：栗谷ツ遺跡、西松原遺跡、北別所遺跡はそれぞれの小字名を冠し、別遺跡として報告してきたが、現状では栗谷ツ遺跡として統合している（加藤 1997）。

栗谷ツ遺跡第15・16地点は、VI層段階の石器群が出土している。ナイフ形石器は1点と台形石器3点と少ないが、珪岩・安山岩製縦長剥片の良好な接合資料がある。一方、西松原遺跡からは、黒耀石を主体とするVI層段階の石器群が検出されている。

和田遺跡：和田遺跡は調査が20回を超えるため、遺跡全貌の把握できないが、9次調査と20次調査でそれぞれ500点を上回る数の石器がIV層中より出土している。柳瀬川流域で第大規模の遺跡になるものと考えられる。

甲館出遺跡：東川が柳瀬川に合流する地点に位置する。石器は黒耀石が多く用いられ石器編年では砂川期直後段階（国武 1999）に対比できる。

### 2) 川越台地（富士見江川、砂川、さかい川、福岡江川）

川越台地の主要な遺跡を概観する。本地域は狭山丘陵に近い上流域と扇状地の中央で砂川の中流域、新河岸川崖線に近い下流域の3地域に区分できる。

上流域から中流域かけて1991年から1994年の3次にわたり砂川流域旧石器時代遺跡分布調査が実施され、多数の遺跡が確認され、その詳細なデータが1997年に『砂川旧石器時代遺跡』としてまとめられている。

#### a) 狭山丘陵と砂川上流域

上流域は狭山丘陵から所沢台、一部大井台が含まれる。標高約108～98m付近の台地部は、先石器時代の遺跡が密集する地域である。また、この一帯は湧水が多く確認されており「小手指ヶ原湧水群」（森野・野口 1997）と呼ばれている。

お伊勢山遺跡：狭山丘陵の発掘調査である。狭山丘陵は武蔵野台地の中に残丘状に孤立した丘陵で、侵食作用による深い谷が形成されている。遺物は広範囲から複数時期の石器が採取されている。石器集中が確認されたのは台地東部北半部で、A T降灰以前の石器集中21箇所が検出されている。細石器石器群は調査区の西側の斜面から細石核及び細石刃が比較的まとまり良くみつまっている。尖頭器は縄文草創期のものも含めると、谷に面する斜面に広範囲から多数検出されている。

砂川遺跡：学史的に著名な遺跡である。遺跡は砂川の一支流の最奥部に位置する。現在はこの支流は流水しておらず、比高差約2mの溝状の窪地となっている。近くで湧水が何地点か確認されている。遺跡の標高は約110mである。

中砂遺跡：砂川上流域遺跡群の中では、発掘調査された遺跡では東端に位置する。分布調査で砂川を挟んで対峙する大井台上に砂川台遺跡、東側に橋戸遺跡が確認されている。この3遺跡が上流域遺跡群の東端にあたり、約3kmの分布の空白をもって、中流域遺跡の稲荷前遺跡と駿河台遺跡が分布している。

地形面は、狭山丘陵から砂川と東川に挟まれ舌状にのびる所沢台（下末吉面）上に位置する。所沢台は東川側が急傾斜で立ち上がり崖線が明らかであるが、砂川に向かって緩やかに傾斜しており、明確な段丘面をもたず砂川に達している。多くの遺跡は、砂川に向かう緩斜面に分布している。中砂遺跡は標高92～91mで、標高の高い部分は武蔵野台地の標準層位に対比できるが、遺物が集中する最も低い部分で現在の砂川堀との比高差は殆どなく、ローム層の堆積はソフトローム層が厚くその下層はハードローム層、第2黒色帯となり、直下が礫層となっている。

遺跡の時期は、第Ⅲ期～第Ⅴ期の細石器石器群と尖頭器石器群の複数期がみられたが、層位による区分は不可能であった。石器集中は24箇所と礫群39基が検出された。上流域で最も礫群の密集する遺跡である。

清橋遺跡：中砂遺跡の西側約300mで砂川の左岸に位置する。遺跡の多くが砂川の右岸の所沢台上に分布しており、左岸の大井台上の遺跡は発掘調査が実施されているのは本遺跡のみである。調査区は台地部から砂川の低地にかかり、比高差は少ないが崖線がみられる。石器集中は砂川の氾濫原の低地部から検出された。低地部の堆積状況は、黒色土が3層にわかれて漸移層、暗黄褐色土、明黄褐色土、砂層となっている。パリノ・サーヴェイ社による鉍物分析によると、暗黄褐色土上面がU Gの降灰層準と考えられ、明黄褐色土から砂層にA T降灰層準が検出されている。石器は漸移層から細石器石器群と尖頭器が検出されている。

## b) 砂川中流域

砂川中流域は扇状地地形の中央部で、所沢台に沿って流れていた砂川が大井台の中央部を流れてい

る。標高は約70～40mを測り、上流域との間に約3kmの分布の空白がみられる。また、下流域とは地図上では遺跡分布の空白がみられないが、遺跡立地が中流域は扇状地地形、下流域は段丘地形と明らかな違いみられる。

本地域は遺跡の空白地域として認識されていたが、砂川流域分布調査の結果、複数の遺跡が確認されている。しかし、現在までに発掘調査が実施されているのは駿河台遺跡のみで、遺跡群の詳細なデータは得られていないのが現状であるが、全般に小規模遺跡と思われる。

駿河台遺跡：砂川中流域の遺跡である。森野氏による分布調査によって遺跡の所在が確認され報告がまとめられている。氏によると、他にも小規模な遺跡が幾つかあるようだが、遺跡の内容が把握できるのは駿河台遺跡のみである。遺跡の標高は約60～55mで北東方向に旧砂川の河道よる谷が形成されている。本地域は今まで先土器時代はもとより、縄文時代から古代までの遺跡がまったく確認されておらず1993年の森野氏による表採資料の分析は、川越台地の遺跡分布を検討する際に重要な意味をもつものと考えられる。駿河台遺跡はその後、1997年に所沢市教育委員会、2000年に埼玉県埋蔵文化財調査事業団によって発掘調査が実施され、中流域遺跡の実態が徐々に明らかにされつつあるが、いずれも報告書が刊行されていないので詳細は不明である。遺跡の様相は森野氏の分析から、遺物が分布するのは東西約400m、南北約100mの広範囲に及んでいる。石器の時期はA T降灰以降、砂川期より少し新しい段階が主体となりそうである。所沢市教育委員会と埼玉県埋蔵文化財調査事業団の発掘調査では、石器集中と礫群が検出されている。

### c) 砂川下流域と富士見江川、砂川、さかい川、福岡江川流域

大井台の新河岸川崖線に、南東から北西に富士見江川、砂川、さかい川、福岡江川と小河川が並び複雑な地形を呈している。本地域を砂川下流域とする。小河川は新河岸川崖線から約2km、標高は約20～30mの等高線に沿って小河川が発生し段丘を形成している。遺跡はそれら小河川の谷頭を中心に段丘に沿って、それぞれの遺跡は小規模であるが、密集している。

藤久保東遺跡群：藤久保東遺跡群は藤久保東遺跡、藤久保東第二遺跡、藤久保東第三遺跡、俣埜遺跡の総称である。遺跡群は富士見江川流域の最上流部、谷頭付近に広がっている。標高は約27mで低地との比高差は約5mである。

遺物は第I期が主体を占めている。その内訳は、X層が石器集中1箇所、IX層が石器集中10箇所、VII層が石器集中2箇所、VI層が5箇所である。第III期の遺物は、IV下層から石器集中2箇所と礫群10基が検出されている。

打越遺跡：富士見江川の小支谷上に位置し、標高は約20mを測り、低地との比高差は約10mである。石器集中は台地縁辺に沿って11箇所の調査区から検出された。遺物は第I期～第V期の細石器石器群までが検出されている。

主な遺物は、第Ⅰ期はⅩ層から石器集中2箇所が検出され打製石斧、ナイフ形石器、台形石器等が出土している。第Ⅶ層からは、4つの調査区から石器集中4箇所と配石1基が検出された。大形のナイフ形石器と縦長剥片が小範囲にまとまり、その特徴的なナイフ形石器の形態から「打越型ナイフ形石器」と呼ばれている。

第Ⅲ期はⅤ～Ⅳ下層段階を中心に石器集中6箇所と礫群、配石1基が検出され、遺跡の主体を占めている。第Ⅳ期、いわゆる砂川期の石器は、石器集中2箇所が検出されている。第Ⅴ期は細石器石器群と尖頭器石器群が検出されているが、単独出土である。

貝塚山遺跡：砂川下流域の遺跡である。標高は約18mを測り、低地との比高差は約10mである。遺物は第Ⅱ期のⅥ層と、第Ⅲ期のⅣ層が主体を占めている。Ⅵ層は黒耀石を主体とする石器群で、石器集中3箇所検出されている。Ⅳ層は石器集中5箇所と礫群を多数伴っており、報告書では砂川期以降とされているが、大宮台地の新屋敷遺跡等の事例から砂川直前に位置付けられる可能性が高いと思われる。

新開遺跡：唐沢堀の最上流部の左岸に所在し、標高は約26mで低地との比高差は約6mである。遺物の主体はⅤ～Ⅳ下層段階の石器群で石器集中39箇所と礫群45基、炭化物集中域が28箇所検出された。石器点数は1112点で最大規模の遺跡になる。石器点数のみで比較すると西武蔵野遺跡から1753点検出されているが、殆どが尖頭器作成段階の剥片と碎片であり、新開遺跡の点数の意味とは異なってくる。

#### d) 金子台（不老川の北側、霞川流域）

不老川から霞川の地域は、金子台（下末吉面）と川越台（武蔵野面）が位置している。本地域は遺跡があまり確認されておらず、発掘調査で検出された遺跡は限られる。

西武蔵野遺跡：霞川と不老川の間位置し、両崖線までの距離はともに1.5kmは測る。遺跡は北東に緩く傾斜する扇状地に位置し、標高は約160mである。現状では周辺に河川は無く、湧水等は確認できないが、北東約600mに大きな窪地があり、遺跡と何らかの関連があるのかもしれない。

遺物は槌状剥離を有する尖頭器を主体とする尖頭器石器群で、石器集中8箇所と礫群11基が環状に分布している。石器石材の殆どが黒耀石である。黒耀石の産地推定を熱中性子放射化分析によっておこなった結果、長野県八ヶ岳とされた。遺跡の所在する地点は武蔵野台地の扇頂部に近く、使用石材の産地からも信州地域との交通関係を重視して検討する必要がある。

坂東山遺跡：坂東山遺跡は、霞川が入間川に合流点から約300m南西側で、霞川の左岸に位置している。丸山遺跡と霞川を挟んで対峙し、標高は約115mを測る。石器集中は1箇所しかないが、砂川遺跡の石器群と非常に似ており、第Ⅳ期、砂川期の良好な石器群といえる。砂川期の遺跡群を形成する重要な遺跡である。



## 5. 概要

本項の担当地区、武蔵野台地北東部を柳瀬川流域と川越台地にわけて検討してき、特徴を整理する。

### 【柳瀬川流域】

柳瀬川流域の遺跡は、栗谷ツ遺跡のVI層の資料を除くと第三期以降の遺跡に限られる。柳瀬川流域は分布調査も実施されており、遺跡の分布密度はそれほど高くない地域といえる。

### 【川越台地】

青梅付近を扇頂とする古い武蔵野扇状地が広がる川越台地の遺跡の分布は、狭山丘陵付近の上流域（特に所沢台上）と、河岸川に面する小河川に沿って分布する下流域（大井台の先端部）に大別される。また、近年、砂川中流域（大井台の扇状地中央部）から遺跡が発見されており3地域に区分し整理できる。

A T降灰を境に前半（第一期と第二期）と後半（第三期～第五期）に別けて検討する。

前半（第一期・第二期）X層～VI層段階は、上流域では狭山丘陵のお伊勢山遺跡から第一期（VII層）のまとまった資料と大形の局部磨製石斧が検出されている以外は、当該期の遺跡の調査資料はない。一方、下流域は第一期（X層～IX層段階）の遺跡は、藤久保遺跡群から局部磨製石斧を主体とするX層段階の良好な石器群検出されており、打越遺跡からはIX層段階の斧形石器、台形石器、ナイフ形石器等が出土し、三芳唐沢遺跡からはIX層段階の大形の台形様石器等が出土し、谷津遺跡からX層段階の縦長剥片が小範囲からまとまって出土している。それぞれの遺跡は小規模であるが、遺跡の密集度は高いといえる。

VII層段階になると、打越遺跡から大形の2側縁加工のナイフ形石器が小範囲からまとまって検出され、打越型ナイフ形石器とも呼ばれている。本村遺跡からはVII層段階の大形の縦長剥片を素材に基部加工と2側縁加工を施したナイフ形石器等が出土し、打越遺跡と近似している。

第二期（VI層段階）になると、貝塚山遺跡から黒耀石製の2側縁加工のナイフ形石器を主体に、寺尾遺跡にみられるような面取りをした磨石が相伴している。栗谷ツ遺跡（柳瀬川流域）は、旧西松原遺跡第1地点から石器集中1箇所、栗谷ツ遺跡第15地点と第16地点からそれぞれ1箇所の合計石器集中3箇所が検出されている。西松原第1地点は黒耀石を主石材として、ナイフ形石器等が製作されている。一方、栗谷ツ第15・16地点は珪岩と安山岩が主石材に用いられている。ナイフ形石器は整った2側縁加工のもので、台形石器を伴っており、縦長剥片の良好な接合資料が得られている。貝塚山遺跡の石器群と様相が異なり、VI層段階における若干の時期差が想定できるかもしれない。

次に、後半（第三期～第五期）の遺跡を検討すると、第三期（V層～IV下層段階）の石器群は、本地域で最も多くみられる。この傾向は上流域、下流域ともにそれほど差は無いと思われる。上流域では、中砂遺跡の主体を占める石器群であるが層位による区分は明確にしえなかった。しかし、複数の石器集中と礫群が当該期の所産であることは間違いない。既に報告されている中では当該期の遺跡は決して多くないが、所沢市教育委員会が発掘調査された遺跡の中に多く含まれており、今後整理が

進めば遺跡数が増加すると思われる。下流域の様相は、新開遺跡で石器集中39箇所、礫群45基が検出され、石器点数は1000点を越える規模である。その他に、打越遺跡、山室遺跡、本村遺跡等から当該期の石器群が検出されている。

IV層中の砂川期石器群は、所沢市の砂川遺跡の資料を基準に設定されている。上流域は砂川遺跡を中心に、宮林遺跡、坂東山遺跡、中砂遺跡等からまとまった資料が検出されている。また、入間川を挟む入間台地側に西久保遺跡、屋淵遺跡など良好な遺跡が約5km範囲にまとまっている。一方、中流域から下流域では、打越遺跡に僅かに見られるが、非常に少なく上流域とは対照的な在り方を示している。

第Va期（細石器石器群）は、上流域に清橋遺跡、中砂遺跡等から石器集中が検出され、細石核と細石刃がまとまって出土している。また、お伊勢山遺跡では谷の面した緩斜面から細石核、細石刃等が比較的まとまってみつまっている。表採資料では中砂遺跡の周辺の何箇所かから細石器が採取されており、武蔵野台地の中では比較的遺跡が密集している地域といえる。一方、下流域は新開遺跡と打越遺跡から細石核と細石刃が検出しているが、明確な石器集中をなさず単独出土に近く、上流域の在り方と対照的である。

第Vb期（尖頭器石器群）は、金子台の西武蔵野遺跡で槌状剥離を有する尖頭器の良好な資料が検出されている。砂川上流域では、砂川遺跡第4次調査でまとまった資料が検出されている。お伊勢山遺跡は広範囲から先土器時代から縄文草創期までの尖頭器が多数みつまっているが、石器集中等の在り方を示していない。清橋遺跡では細石器との共伴関係等難しい問題をはらんでいる。他には中砂遺跡からまとまった資料が出土している。また、砂川流域の分布調査で多くの資料が採取され報告されている。

下流域は打越遺跡から槌状剥離を有する尖頭器が砂川期石器群と共伴していると報告されているが、出土状況等をみる限り疑問もある。新開遺跡はⅢ層上部から小規模な石器集中が1箇所検出され、尖頭器、細石核等の石器群が検出されている。

## 6. 整理

上記で3地域の様相を石器の変遷に沿って概観したが、再度整理しておく（第Ⅲ-4表）。

○第Ⅰ期（X層～Ⅶ層段階）上流域は、お伊勢山遺跡からⅦ層の良好な資料がみつまっているが、他の遺跡はみられない。一方、下流部は藤久保東遺跡群、打越遺跡、三芳唐沢遺跡、本村遺跡、谷津遺跡等でX層からⅦ層の石器群が検出されており、個々の遺跡の規模は小さいが、武蔵野台地の他地域と比較しても密集度は高いといえる。

○第Ⅰ期（Ⅵ層段階）上流域では当該期の遺跡は調査されていない。下流域では貝塚山遺跡、栗谷ツ遺跡から良好な資料が検出されている。

第Ⅲ－4表 川越台地の遺跡表

	第Ⅰ期	第Ⅱ期	第Ⅲ期	第Ⅳ期	第Ⅴa期	第Ⅴb期	
お伊勢山	●		○	○	○	○	上流域
宮林				●			
白旗塚			・	・	・	・	
砂川				●			
中砂			●	○	○	○	
清橋					●		
駿河台				・			中流域
松ノ木				●			下流域
唐沢				●			
本目			○				
打越	●		●	○	○		
氷川前							
谷津	●	○	○				
山室			●				
貝塚山		●	●				
外記塚			○				
新開			●				
三芳唐沢	●						
俣埜			○				
藤久保東遺跡群	●						
西ノ原			●				
本村	●	○	○				

● 主体の文化層

○ 点数は少ないが石器集中等が検出されている

・ 単独、表採、詳細不明

○第Ⅲ期（Ⅴ～Ⅳ下層段階）本段階は上流域、下流域共に遺跡数が増える。しかし、特に下流域では礫群の発達に比べ石器の点するの少ない勝瀬原遺跡群等が目につく。

○第Ⅳ期（Ⅳ層：砂川期）上流域では、砂川遺跡、宮林遺跡、中砂遺跡、坂東山遺跡等、多数の遺跡から良好な資料が検出されている、入間台地の遺跡を含め約5km範囲の小地域を形成している。一方、下流域では打越遺跡に僅かにあるが、後は殆どみることができない。

○第Ⅴa期（細石器石器群）上流域は清橋遺跡、中砂遺跡、お伊勢山遺跡等の発掘調査と表採によって、複数の遺跡が確認されている。砂川期同様に入間台地でも細石器石器群の遺跡が複数発掘調査されており、武蔵野台地の中で最も資料的に充実した地域といえる。

上流域の細石器石器群が検出されている遺跡の立地は、清橋遺跡を代表に低位面にみられる。窪田氏が砂川期の遺跡が白子川流域では、武蔵野2面～立川面の低位面に分布し、Ⅴ層～Ⅳ下層段階の遺跡の分布より一段低い面に多く分布することを指摘している（窪田 2000）。当該地域の細石器

石器群及び尖頭器石器群にも同じ傾向が読み取れる。

○第Ⅴb期(尖頭器石器群) 尖頭器石器群は金子台に位置する西武蔵野遺跡を除くと、プライマリーな検出例は少ない。上流域のお伊勢山遺跡では、点数は多いが広範囲からの検出でまとまりに乏しい。下流域では打越遺跡で槌状剥離を有する尖頭器が出土しているが、何れも小規模なものである。

以上の整理から、第Ⅰ期・第Ⅱ期の遺跡は下流域に多く、第Ⅲ期を挟んで上層の遺跡は上流域に多くなる傾向が捉えられた。両地域で一方の遺跡が増大すると、一方が縮小するように見えるが、今後、両地域を結ぶ砂川中流域の遺跡の解明が急がれる。

#### 引用参考文献

- 「角川日本地名大辞典」編纂委員会編集 1980『角川日本地名大辞典 11 埼玉県』 角川書店
- 堀口萬吉 他 1987「第1章 荒川流域の自然環境 第1節 荒川流域の地形」『荒川 自然』 荒川総合調査報告書1 pp.67-82
- 久保純子 1988「相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形—風成テフラを供給された名残川の谷地形—」『地理学評論』 pp.25-48
- 長崎潤一 他 1991『お伊勢山遺跡の調査 第2部 旧石器時代』 早稲田大学
- 森野 譲 1993「埼玉県駿河台遺跡の発見について」『明日への文化財 33号』文化財保存全国協議会 pp.71-78
- 西井幸雄 他 1994『清橋遺跡』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告 第142集
- 加藤秀之 1995「武蔵野台地の様相」『第3回 石器文化研究交流会—発表要旨—』石器文化研究会 他 p.81
- 小倉 均 他編集 1997『埼玉考古 別冊第5号—特集号 埼玉の旧石器時代—』 埼玉考古学会
- 加藤秀之 1997「武蔵野台地北東縁部と入間台地の概要」『埼玉考古 別冊第5号—特集号 埼玉の旧石器時代—』 埼玉考古学会 pp.14-21
- 砂川遺跡調査団編 1997『埼玉県所沢市砂川旧石器時代遺跡—範囲確認調査および砂川流域旧石器時代遺跡群分布調査報告書—』 所沢市教育委員会
- 国武貞克 1999「石材消費と石器製作、廃棄による遺跡類別—行動論的理解に向けた分析法の試み—」『考古学研究』第46巻第3号 pp.35-55
- 久保純子・谷川尚哉・内藤ふみ 2000「巡検案内 所沢周辺の「環境」を考える」『日本地理学会発表用紙集57』日本地理学会 pp.500-527
- 窪田恵一 2000「武蔵野台地における「砂川期」の様相」『石器文化研究9』 pp.263-270

註：報告書は本文中で引用したもの以外は省略した。

## 第5節 ま と め

比田井 民子

本研究は1998年から2年余りを費やし、考古学、地形・地質学の二つの分野から武蔵野台地の旧石器時代遺跡の形成の背景について研究を実施してきた成果である。おそらく日本を代表する武蔵野台地のような良好な旧石器時代遺跡の集まる地域を対象として、密度の高い学際的研究が実施されたのはあまり例のないことと思われる。地形・地質学の方面からは、武蔵野台地の遺跡が形成された当時の景観をふまえた地形環境、水環境について新たな研究成果が提示できたのではないかと考える。特に古多摩川の変遷とそれに係わる台地の形成や武蔵野台地の湧水環境が遺跡立地との関係で具体的に明らかにされたことは今後の旧石器時代研究に新しい進展を導くことになるであろう。事実、考古学に携わる私達にとってもあたりまえのように考えていたことが覆り認識を新たにするばかりの2年間であった。こうした地形・地質学からの武蔵野台地の地形環境の復元を踏まえて、考古学では台地を多摩川流域の南西部、荒川と多摩川に挟まれた内側である武蔵野台南東部、荒川流域の武蔵野台北東部、武蔵野台北西部の地域に分け、旧石器時代遺跡の分布と立地について当時の景観を意識したうえで検討を重ねてきた。その結果、武蔵野台地一つでも地域による遺跡の立地は時間的、空間的にそれぞれ異なるものであり、決して均一な状態で遺跡が形成されているのではなく、地形・地質、湧水環境などの制約を多く受けることが多かったのではないかという共通の認識に立つことができた。まず、武蔵野台南西部は武蔵野台地のほかの地域とは比較にならないほどの遺跡の最密集地域であり、その要因としては豊富な湧水と多摩川に面した広い段丘面の形成が深く関わっている可能性がある。南東部になると遺跡は小規模化し、重層する石器文化層を持つ遺跡なども少なくなる。この地域は古い段丘面が発達し、河床の関係からも水量が豊富ではなく湧水点を生ずるところも少ない地域であることが指摘され、その因果関係が注目される。武蔵野台北東部では河川流域の遺跡の分布が特徴的に分かれることが指摘され、さらに白子川流域の地質環境から湧水点の豊富な地域と大型遺跡分布が密接な関係にある可能性が指摘された。さらに武蔵野台北西部にはいると武蔵野台地のほかの地域と比較して、さらに遺跡の小規模化と遺跡数の減少傾向が顕著な地域となり、湧水点もあまり確認されておらず、その関係について他地域と比べ興味深い地域である。時期別の検討からも、遺跡の分布特徴からは新しい遺跡がそれまでの遺跡の立地とは一段下がった面に立地する特徴があることが指摘された。

以上のように武蔵野台地では地域により遺跡立地分布が異なることを明らかにすることができた。特に台地面の問題と湧水環境はいずれの地域においても遺跡立地と深い関係にあることが明らかにされた。無論、地形、地質の影響のみが遺跡の形成を左右するものではなく、集団のもつ社会状況なども多く反映されていると考える。しかし、これらの成果からみても、当時の人々は周辺環境を踏まえ

た立地に対して常に選択し適応していたことがあきらかであり、各地域の遺跡の規模や数からみても集団の動向にも大きな影響を与えていた可能性が大きかったことが指摘される。

考古学においてはそこに遺跡があることから出発するのではなく、何故そこに遺跡が残されたかから出発することも重要である。遺跡の本来の歴史を明らかにするためには遺物、遺構から出発して歴史を考えるばかりではなく、遺跡の形成過程を明らかにすることによってこそ考古学が歴史学として有効性を発揮していくのではないのであろうか。本研究の目的は何故そこに遺跡が立地するに至ったか、遺跡の形成過程を地形・地質学の視点をふまえて当時の景観を意識しながら明らかにしていくことを目的とした。

しかし、まだ研究は入口部分に至ったばかりである。遺跡の形成過程、遺跡立地の必然性を明らかにしその要因を明らかにするまえに、多くの課題があることを再認識することに重点が置かれるという結果になってしまっている。何故ならば考古学の狭い分野にいるものにとってその世界のなかだけでは当たり前と考えられていたような事柄も突き詰めていけば、簡単なその要因を説明できるようなものではなく、さらに地形・地質学的な検討を加えることで、仮説とは異なる姿が浮かび上がったリと言うようなことの繰り返しであったためである。一方そうしたリスクにたいして新たな成果も大きく、この研究の意義についても再認識することができた。

---

---

た まがわりゅういき たんきゅうけいせい こう こがくてま い せき りつ ちかんきょう  
「多摩川流域の段丘形成と考古学的遺跡の立地環境」

(研究助成・一般研究VOL. 22-No.125)

編 者 比田井 良子  
発行日 2001年3月31日  
発 行 財団法人 とうきゅう環境浄化財団  
〒150-0002  
渋谷区渋谷1-16-14 (渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)3400-9142  
FAX (03)3400-9141

---

---